宮城県文化財調査報告書第78集

長 者 原 貝 塚
上 新 田 遺 跡

昭 和 56 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

宮城県内には、私達の祖先がのこした数多い遺跡があります。これらの文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し，育んできたものであり、これを愛護し、活用するとともに後世に伝えていくことが現代の私達の重要な責任であると考えます。

近年、地域の開発事業が進展するに伴ない、埋蔵文化財の保護が県政のなかで重要視されてきているのもその線に沿ったものであります。

本報告書は、県教委がこれまで発掘調査を実施した遺跡のうち、年次計画に従って整理した「長者原貝塚・上新田遺跡」について、成果をとりまとめたものであります。

ここに、本書を刊行するに当たりまして、関係された方々のご協力に深甚なる敬意を表しますとともに、本書が遺跡に対するご理解の一助となり、さらに学術上にも大きく役立つことを切に願ってやまない次第であります。

昭和 56 年 3 月

宮城県教育委員会教育長　北　村　　潮

目　　次

(1)　長者原貝塚 1

(2)　上新田遺跡 37

●昭和 55 年度発掘届一覧 187

●宮城県文化財調査報告書一覧 193

例　　言

1.　本書は宮城県教育委員会が主体、もしくはおもに主体となって調査を行った遺跡の調査報告を集録したものである。

2.　本書に収録した遺跡は次の通りである。

南方町所在　長者原貝塚（昭和46・47年度実施）

色麻町所在　上新田遺跡（昭和54年度実施）

また別に、昭和55年度発掘届一覧、宮城県文化財調査報告書一覧を掲載した。

3.　各遺跡の報告をまとめるに際し、次の方々および機関から多くの御指導・助言等をいただいた。（順不同）

早坂　正治氏（宮城県宮城町在住　陶芸家）

藤沼　邦彦氏（東北歴史資料館考古研究科長）

平川　　南氏（東北歴史資料館企画科長）

東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所

また、本書に掲載した石器、石製品の石質鑑定は東北大学理学部蟹沢聡史助教授による。

4.　各遺跡の執筆は、調査時における調査員および現宮城県教育庁文化財保護課員の協議を得て、下記の文化財保護課職員が担当した。

「長者原貝塚」　　土岐山　　武

「上新田遺跡」　　小井川　和夫

5.　各遺跡の調査に関するすべての資料（出土遺物、諸記録等）は宮城県教育委員会において保管している。

(1)　長者原貝塚

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 3
Ⅱ．長者原貝塚の位置と周辺の遺跡 5
Ⅲ．調査の方法と経過 5
Ⅳ．発見された遺構と遺物 8
1．土壙とその出土遺物 9
2．ピットとその出土遺物 13
3．溝とその出土遺物 15
4．遺構以外からの出土遺物 15
イ．縄文土器 15
ロ、石器 22
Ⅴ．考　　察 26
Ⅵ．ま　と　め ..... エラー! ブックマークが定義されていません。

Ⅰ．調査に経過

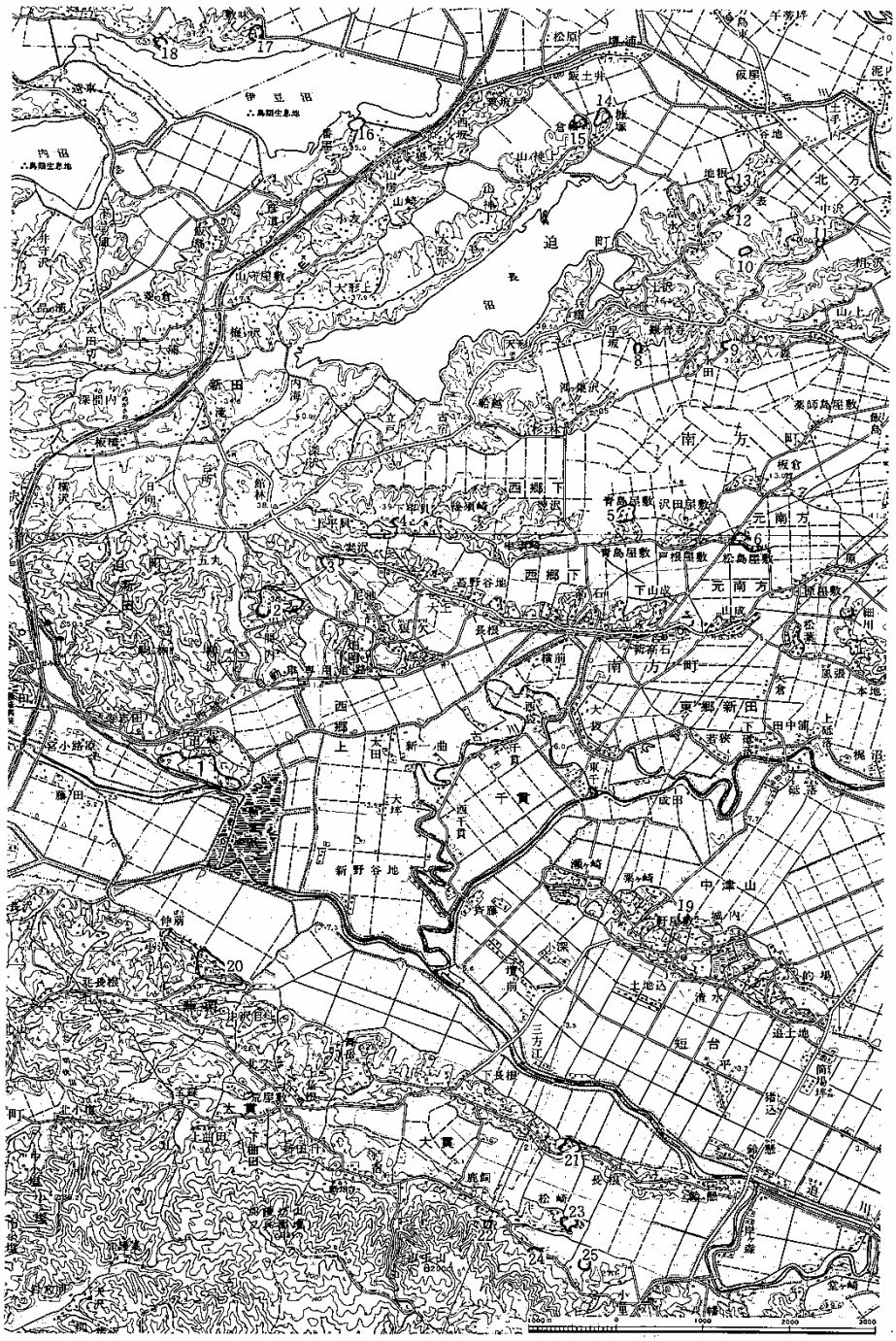
長者原貝塚は、登米郡南方町大字西郷上字長者原、沼崎、大坪地内にある遺跡で、迫川流域貝塚群の１つとして知られている。その広がりは東西約１㎞、南北約0.３㎞にもおよぶが、この広大な面積内には各時期の人々が場所をかえて生活したあとが方々に遺っている。その年代は縄文時代前期から平安時代の長い期間にわたる。

昭和45年４月、この遺跡の北東部の一角、南方町西郷上字大坪329番地に住む佐藤正氏宅で開田のため、所有地である本遺跡の削平作業を行ない、一部ロームまで削ったところ、開田の現場の南端に土器片を含む竪穴遺構上のプランが検出された。このことについて佐藤氏より南方教育委員会に連絡があり、町教育委員会では直ちに現場確認をして工事の延期を要請する一方、遺跡の取扱い上の指導を宮城県教育委員会に依頼してきた。

そこで、教育庁社会教育課が現場調査を行なったところ、すでに、開田予定地はほとんどローム面まで削られ、西部をのぞく周辺一帯は完全に開田され、もとの状況はわからない状態になっていた。現場には表面に貝はみられなかったが縄文土器が散布していた。これらから開田予定地は、長者原貝塚の範囲の一部に含まれていることがわかり、この遺跡の取扱いについて、何回かの協議を関係者の間で行なった。最終的に、南方町および宮城県教育委員会は、現場の状況を勘案して事前調査による記録保存の線を固め、発掘調査の計画を立案した。
発掘担当を当時東北大学文学部教授、県文化財保護委員である伊東信雄先生に要請し、教育庁社会教育課の職員が調査にあたった。調査は昭和45年５月１日から行なわれた。

調査の要項は下記の通りである。

遺　跡　名　長者原貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号：58010）
遺 跡 記 号　ＴＨ
所　在　地　宮城県登米郡南方町大字西郷字長者原、沼崎、大坪
調査対象面積　約60㎡　（発掘面積　60㎡）
調 査 主 体 者　宮城県教育委員会
調 査 担 当 者　伊東信雄、東北大文学部教授
　　宮城県教育庁文化財保護課
　　藤沼　邦彦
調 査 協 力 者　東北大学文学部考古学研究室
調 査 期 間　昭和45年５月１日～５月７日



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡　（国土地理院発行1/5地形図「若柳」「浦谷」）

Ⅱ．長者原貝塚の位置と周辺の遺跡

長者原貝塚は登米郡南方町大字西郷上字長者原、沼崎、大埣に所在し、東西方向に長い丘陵の上に立地するもので、南側斜面を中心として数ヵ所の貝塚や遺物包含地を含み、東西１㎞、南北 300mほどの規模をもっている。調査地点は、東北本線瀬峰駅から南東約 2.5 ㎞に位置している。宮城県北部の地形は西部に奥羽山脈が縦走し、これから東側に築館丘陵（標高約 50m）が延び、また東部には北上山地が南北に横たわっており、この二つの山地にはさまれた所は広大な平野部になっている。この低地帯は築館丘陵間を流れる迫川と、南流する北上川とによって形成されたもので、流域一帯はしばしば洪水に襲われた形跡があり、各所に大小の湖沼、自然堤防、広大な後背湿地等が複雑に作り出されている。

本貝塚は築館丘陵から東側に舌状に張り出す小丘陵上に位置しているが、南面にはやはり自然の遊水地である蕪栗沼が広がっている。蕪栗沼は現在は干拓によってせばめられているものの、かつては広大な面積を保っていたことが土地の人々の記憶や、古地図によって知られており、縄文時代においても重要な生活の舞台であったことがうかがわれ、そのことは周辺にいくつかの縄文時代の貝塚が所在することからも裏付けられる。本貝塚付近の標高は 10～25mである。現状は一部が畑、宅地となっているほか、その大部分が水田化されている。

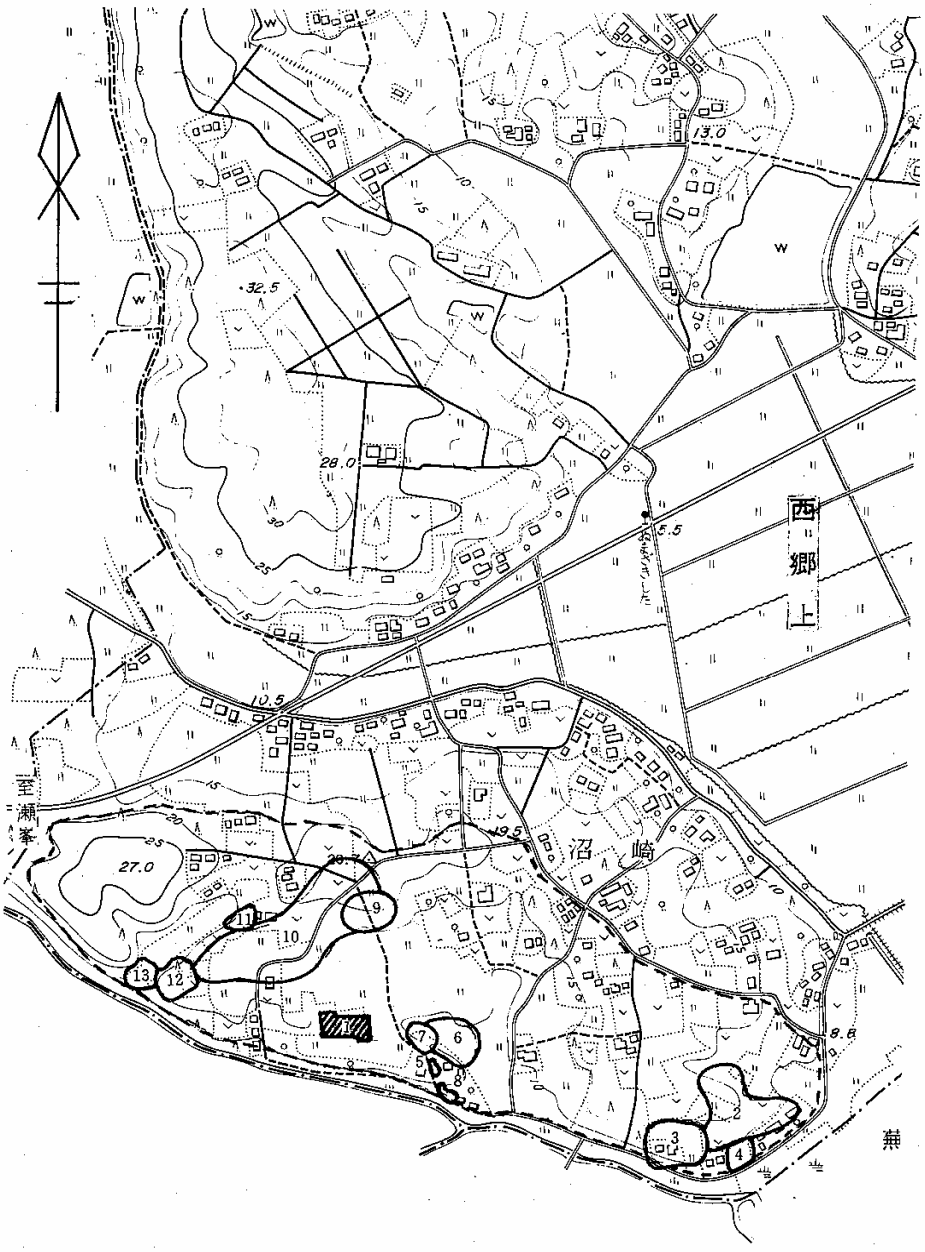
この周辺の貝塚はいうまでもなく淡水産貝塚で、伊豆沼、長沼周辺に分布する貝塚とともに、迫川流域貝塚群として全国的にも著名なものである。南方町内でも本貝塚の他に平貝貝塚（縄文晩期）や、大量の人骨を出土して我国の考古・人類学史上に名高い青島貝塚（縄文中期～後期）などが知られている。

Ⅲ．調査方法と経過

調査は開田によって削平が行なわれた佐藤正氏所有地 60 ㎡を対象として 5 月 1 目からはじめられた。調査は開田作業のためローム面に露出した竪穴住居状の落ちこみがはたして遺構がどうかの確認、包含層や遺構の有無、および、その性格の把握を目的として行なわれた。

地区設定にあたっては竪穴住居状の遺構が存在すると思われる地点を中心に東西 4m×南北 8mを一単位とし、三トレンチ（西側からⅠ～Ⅲトレンチ）設定した。なお、Ⅱ、Ⅲトレンチ

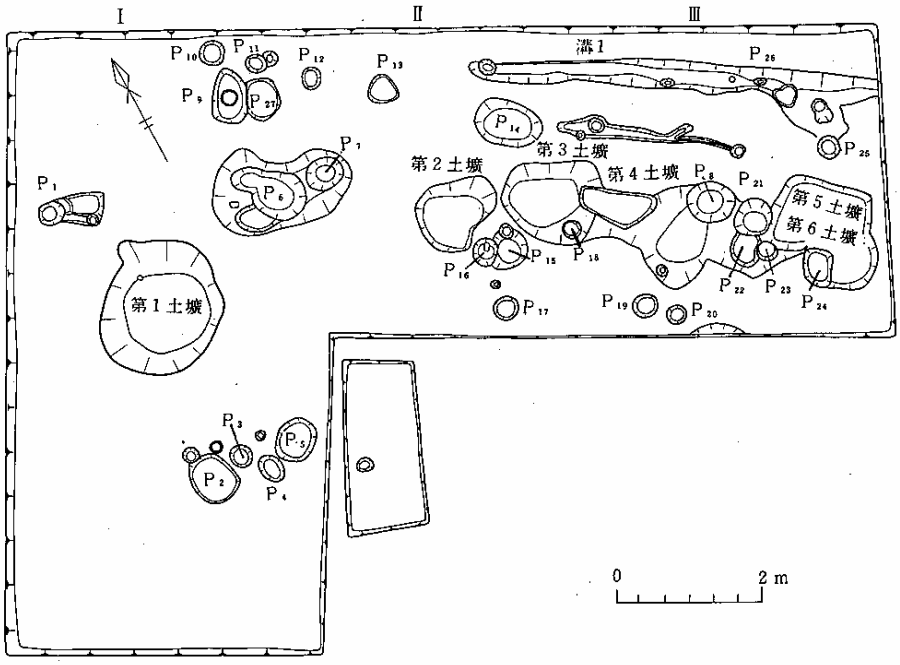
1：長者原貝塚　2：七ヶ館跡　3：十三塚　4：平貝貝塚　5：青島貝塚　6：松島館跡　7：下館跡
8：観音寺貝塚　9：八ツ森貝塚　10：大多古貝塚　11：川戸沼貝塚　12：堤花貝塚　13：地粮貝塚　14：糠塚貝塚
15：倉崎貝塚　16：唐木崎遺跡　17：敷味貝塚　18：原貝塚　19：網場貝塚　20：中沢目貝塚群　21：長根貝塚
22：小里山王沢貝塚　23：小里松崎貝塚　24：大平囲ツナギの沢貝塚　25：小里道祖神貝塚



1：昭和45年度調査地点　2：大木９．10　3：後期末～晩（C_2、A）　4：大木８ａ（昭和52年度調査地点）　5：大木５ｂ　6：大木６、7：大木５ｂ　8：大木６　9：後期初頭　10中期末　11：晩期　12：福浦島下層　13：須恵器

100m 50 0 100 500

第2図　遺跡の範囲



第３図　遺構、グリッド配置図

は北側のみ調査を行なった。

調査は最初に竪穴住居状の落ちこみの輪郭検出作業とローム面までの削平をまぬがれた場所の掘り下げ作業からはじめた。

竪穴住居状遺構には所々に焼土の分布がみられたが、さらに落ちこみの輪郭の調査を続けると東西の長さが10mを越え、しかも南北の輪郭が不明瞭であった。このことからこの線は北から南に傾斜していた層が、削平されたためにあらわれた層離面であり、遺構ではないことが判明した。ローム面までの削平をまぬがれた場所も掘り進めると、上部の層はしまりがなく、遺物も含んでおらず旧表土とその下部の層が一部削りとられた後に置き土としておかれた開田時の再堆積層であることがわかった。なお、調査によってわかった基本的な層位は次の通りである。（第４図）

第Ⅰ層、Ⅱ層：再堆積層である。

第Ⅲ層：灰褐色土層である。炭化物、遺物を多く含み、堅い。この層の一部は開田の際削りとられている。

第Ⅳ層：焼土層である。厚い所で3〜5 cmある。トレンチ内の所々に見い出される。

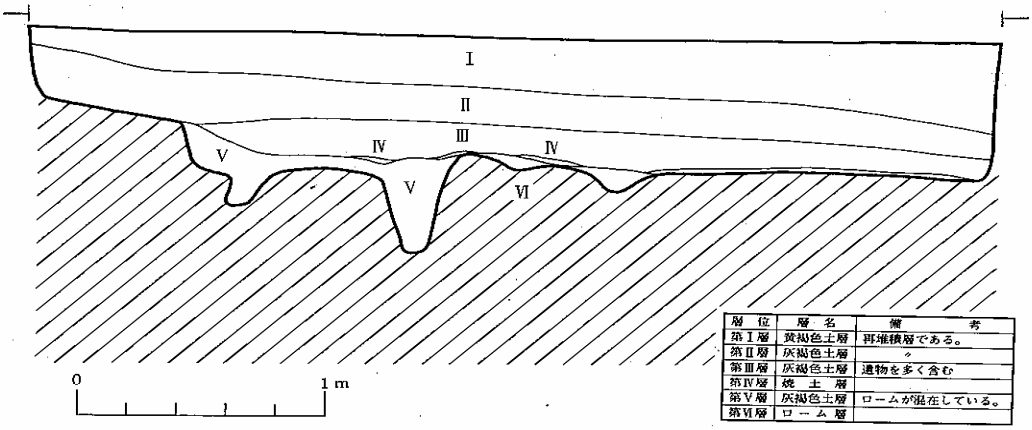
第Ⅴ層：灰褐色土層である。ロームと灰褐色土が混在している。

第Ⅵ層：ローム層である。多くのピットはこの面で確認された。

調査の結果、土壙６基、ピット多数、溝１などの遺構が第Ⅵ層上面で確認された。これらからは縄文土器片が出土している。

遺構以外からは、縄文土器のほか、石鏃、石匙、石箆、不定形石器、磨製石斧、形態不明の磨製石器、石棒、石皿、磨石、剥片などの石製品が出土した。特に縄文土器はⅡ、Ⅲトレンチの第Ⅲ層からの出土がほとんどで、その他の層などからはあまり出土していない。

調査は５月７日に終了した。



層位	層名	備考
第Ⅰ層	黄褐色土層	再堆積層である。
第Ⅱ層	灰褐色土層	〃
第Ⅲ層	灰褐色土層	遺物を多く含む
第Ⅳ層	焼土層	
第Ⅴ層	灰褐色土層	ロームが混在している。
第Ⅵ層	ローム層	

第４図　基本層位

Ⅳ．発見された遺構と遺物

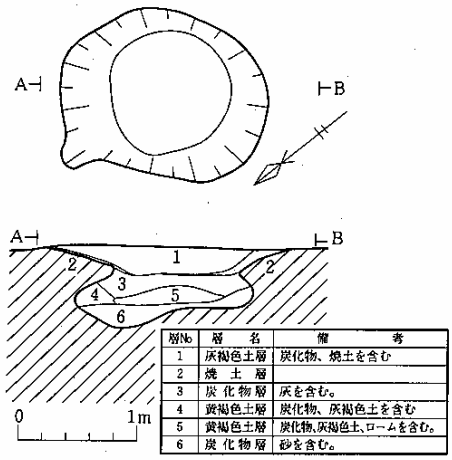
発見された遺構には土壙、ピット、溝とがある。遺構内からは縄文土器および若干の石器等が出土した。しかし、それらはいずれも堆積土中から出土したもので、遺構と直接関わるものはない。また、縄文土器は磨滅が著しく、さらに地文のみの小破片のため所属時期を特定できないものが大半であることに加えて、同一遺構内から数型式に及ぶと考えられるものが混在して出土している。このため、土器については口縁部形態や文様（口縁部、体部）の比較的明らかなものについて、同時代の土器の出土が知られている宮城県涌谷町長根貝塚(伊東他:1969)、七ヶ浜町大木囲貝塚（小笠原：1968）、気仙沼市大島磯草貝塚（高倉：1968）、南方町青島貝塚（加藤・後藤他：1975）、福島県浦尻貝塚（日下部他：1971）、八景腰巻遺跡（阿部他：1975）、神奈川県五領ヶ台遺跡（江坂：1949）の研究成果を参考として記載を行ない、他のものは破片集計表として巻末に一括した。このことは以下同じである。なお、記述に当たっては口縁部形態の判明する土器については、主として口縁部形態と口縁部文様を中心として、口縁部形態の不明な土器について

は、体部文様を中心として行なった。

1．土壙とその出土遺物

土壙

土壙は 6 基検出された。以下第 1～6 土壙について記す。



層No	層　名	備　　考
1	灰褐色土層	炭化物、焼土を含む
2	焼　土　層	
3	炭 化 物 層	灰を含む。
4	黄褐色土層	炭化物、灰褐色土を含む
5	黄褐色土層	炭化物、灰褐色土、ロームを含む。
6	炭 化 物 層	砂を含む。

第５図　第１土壙

第１土壙（第５図）

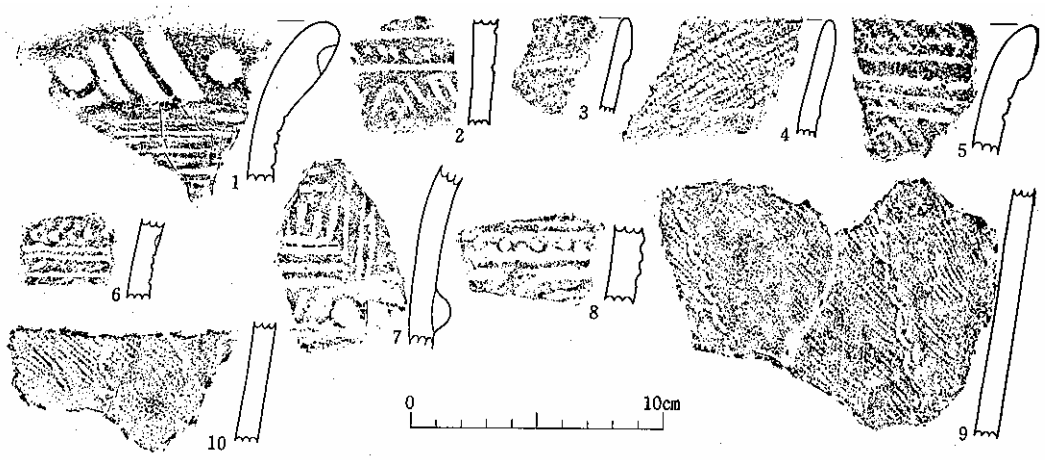
平面形はほぼ楕円形で、規模は約 1.2×1.9 で深さは 50～70 ㎝である。断面形は袋状である。底面は平坦ではなく、北東側に傾斜している。堆積土は 6 層認められ、堆積土Ⅱ層には焼土が、その他の堆積土中には炭化物がみられる。

〔出土遺物〕

堆積土第 1・3 層からは縄文土器が、第 1 層からは風化して粉状になった骨片が出土している。

縄文土器（第 6 図 1～10）

すべて深鉢形土器である。1・2 は口縁部が肥厚して、外反するものである。1 は波状口縁で、口縁部に縦位に数本の太い沈線とその左右に円形の刺突文が、頚部に半截竹管による二本を一単位とする平行沈線が数条施文されている。2 は平縁と思われる。口縁部に平行沈線が引かれ、その間に刺突文が、沈線下に縦位の弧状文がそれぞれ連続して施文されている。このような土器は長根貝塚に類例があり前期末葉大木 6 式に位置づけられているものである。なお、2 のように口縁部に縦位の弧状文が施文されている土器は、長根貝塚では第二群土器に比定され大木 6 式の中では新しい様相をもつ土器群であろうと推定されている。3～5 は折返し口縁になっているもので、口縁部は外傾または外反する。平縁である。折返し口縁部には縄文が施文されており、5 はさらに口縁部に横位の撚糸圧痕文（L）が、頚部には二条の沈線がひかれ、体部は羽状縄文となっている。このような土器は浦尻貝塚に類例があり、3・4 については大木 7 a 式に、5 については大木 7 b 式に位置づけられているものである。6～10 は体部破片である。6・7 は数条の平行沈線が横位に施文され、沈線間に刺突や縦位のギザミ目が連続して施文されたり、刺突の施された棒状隆帯が貼付されるものである。このような土器は長根貝塚に類例があり、大木 7 a 式に位置づけられている。8 は横位の隆帯に交互刺突文が施されているものでこのような土器は五領ヶ台遺跡に類例があり、五領ヶ台式に位置づけられているもの



第６図　第１土壙出土遺物

である。9・10 は縦位の綾絡文がみられるもので、時期は特定できないが前期末葉～中期初頭の頃と思われる。

第２土壙（第７図）

平面形はゆがみの著しい楕円形で、規模は約 1×1. 1m、深さは約 55 ㎝である。壁はやや急で底面はほぼ平坦である。土壙内の堆積土は１層だけで、炭化物、ロームの小粒を多く含んでいる。

〔出土遺物〕

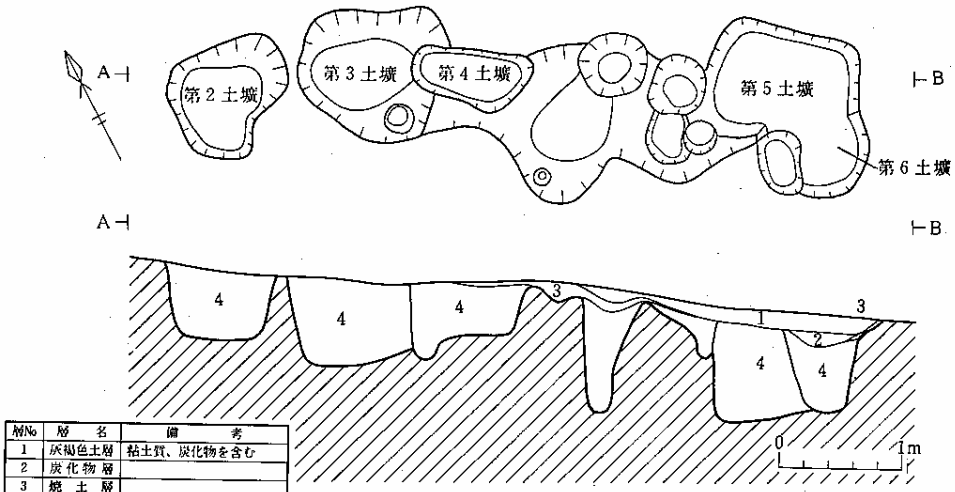
土壙堆積土中から縄文土器が出土している。

縄文土器（第８図 11～14）

すべて深鉢形土器である。11・12 は折返し口縁になっているもので、口縁は外傾またはわずかに内弯する。平縁である。11 の体部には横位に刺突文が連続し、12 の口縁部と体部には横位に綾絡文がみられる。第１土壙出土３・4 と特徴が類似しており、大木７a 式に位置づけられているものである。13・14 は体部破片である。13 は口縁部にボタン状小突起や、横位に爪形文が施文されているもので、このような土器は磯草貝塚に類例があり大木６式に位置づけれているものである。14 は第１土壙出土６～7 と特徴が類似しており大木７a 式に位置づけられているものである。

第３土壙（第７図）

第４土壙と重複しており、第４土壙によって東側が切られている。平面形はゆがみの著しい楕円形で、規模は約 1×1. 2m、深さは約 70 ㎝である。壁はやや急で底面はほぼ平坦である。土



層No	層名	備考
1	灰褐色土層	粘土質、炭化物を含む
2	炭化物層	
3	焼土層	
4	灰褐色土層	砂粒、炭化物、ロームを含む

第7図　第2～6土壙

壙内の堆積土は1層だけで、炭化物、ロームの小粒を多く含んでいる。

〔出土遺物〕

土壙堆積土中から縄文土器が出土している。

縄文土器（第8図15～28）

深鉢形土器（15～26）と浅鉢形土器（27、28）とがある。15は口縁部が肥厚して、わずかに外反するものである。第1土壙出土2と特徴が類似しており、大木6式の中でも新しい方に位置づけられているものである。16～21は折返し口縁になっているもので、口縁部外反または外傾する。特徴が16～19は第1土壙出土3・4と、20～21は同土壙出土5と類似しており、16～19については大木7a式に、20～21は大木7b式に位置づけられているものである。22～26は体部破片である。22は弧状に撚糸圧痕文が施文されているもので、このような特徴の土器は浦尻貝塚に類例があり、大木7bに位置づけられるものである。23は二本の横位隆帯に交互刺突文が施文されているもので、五領ヶ台式に位置づけられている。24は第1土壙出土6・7と特徴が類似しており、大木7a式に位置づけられているものである。25、26は第1土壙出土9、10と特徴が類似しており、時期は特定できないが、前期末葉～中期初頭の頃と思われる。27・28は浅鉢形土器である。口縁内側に段を有するもので、口縁部が強く屈曲し外反する。平縁である。口縁部無文で体部には縄文（LR）が横位に施文されている。このような土器は青島貝塚に類例があり、大木8a式に位置づけられているものである。

第4土壙（第7図）

土壙3と重複しており、第4土壙が第3土壙を切っている。平面形はゆがんだ方形で、規模

は約 40×100 ㎝、深さは約 45 ㎝である。壁は急である。底面はほぼ平坦だが、北西側が一部窪んでいる。土壙内の堆積土は 2 層認められる。上部に焼土が下部には炭化物やロームの小粒が多くみられる。遺物は発見されなかった。

第 5 土壙（第 7 図）

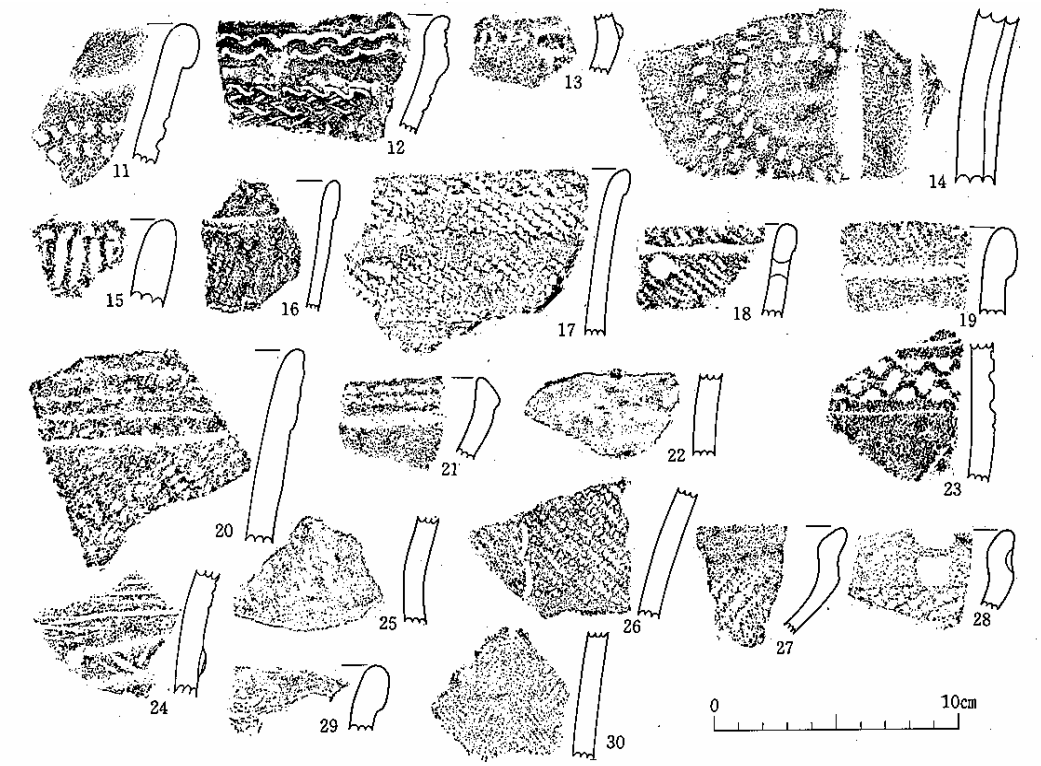
第 6 土壙と重複しており、第 6 土壙により南側が切られている。規模は約 90×130 ㎝、深さは約 90 ㎝である。壁はほぼ垂直に近い。底面は北西側に傾斜している。土壙内の堆積土は 2 層認められいずれも炭化物、ロームの小粒を多く含んでいる。遺物は発見されなかった。

第 6 土壙（第 7 図）

第 5 土壙と重複しており、第 5 土壙の南側を切っている。平面形は円形で、規模は直径約 80 ㎝で、深さは約 60 ㎝である。壁はやや急で底面はほぼ平坦である。土壙内の堆積土は 4 層認められる。上部には焼土が、下部には木炭がみられる。

〔出土遺物〕

土壙堆積土中から縄文土器が出土している。



第８図　第２・３・６土壙出土遺物

縄文土器（第８図29、30）

深鉢土器である。29 は折返し口縁になっているもので、口縁部外反する。第１土壙出土３、４と特徴が類似しており、大木７ａ式に位置づけられているものである。30 は体部破片である。二種類の原体による羽状縄文（ＲＬ、ＬＲ）が縦位に施文されている。時期は特定できず不明である。

2. ピットとその出土遺物

ピット

Ⅰ～Ⅲトレンチ第５層ローム面で大小のピットが多数確認された。ピットの平面形は円形、楕円形などであり、大きさは16～66㎝、深さは36～88㎝で平面形、規模とも多様である。ピットの埋土中には焼土、炭化物が含まれているものもある。主なピットについて、詳しくは表の通りである。

	形態	長さ	深さ	備考		形態	長さ	深さ	備考
ピット１	円形	20×20	37	堆積土中より土器片出土	ピット15	楕円形	30×34	58	堆積土中より土器片出土
〃 2	楕円形	36×42	77		〃 16	楕円形	20×24	?	
〃 3	円形	20×20	36		〃 17	円形	20×20	35	
〃 4	楕円形	18×26	?		〃 18	円形	16×16	65	
〃 5	楕円形	32×38	88		〃 19	円形	20×20	30	
〃 6	楕円形	40×66	74	堆積土中より土器片出土	〃 20	円形	16×16	26	
〃 7	楕円形	26×32	67		〃 21	楕円形	28×32	59	
〃 8	楕円形	35×40	?	堆積土中に焼土を含む	〃 22	楕円形	24×30	14	
〃 9	ゆがんだ楕円形	28×48	82		〃 23	円形	16×16	38	
〃 10	円形	20×20	62		〃 24	ゆがんだ方形	22×32	58	
〃 11	円形	16×18	46		〃 25	円形	20×20	36	
〃 12	楕円形	16×20	42		〃 26	ゆがんだ円形	20×20	26	
〃 13	ゆがんだ楕円形	24×26	49		〃 27	楕円形	30×36	81	
〃 14	楕円形	38×56	?	堆積土中より土器片出土					

第１表　ピット一覧表　（単位 cm）

〔出土遺物〕

ピット２、３、６、14、15 の堆積土中から縄文土器片が出土している。

〈ピット２出土遺物〉

縄文土器（第９図31）

深鉢形土器の体部破片である。第１土壙出土６、７に特徴が類似しており、大木７ａ式に位置づけられているものである。

〈ピット 3 出土遺物〉

縄文土器（第 9 図 32～36）

すべて深鉢形土器である。32 は口縁部が肥厚して外反するものである。平縁である。肥厚下部に鋸歯状切込みが連続して施文されており、体部には縄文（ＬＲ）が施文されている。このような土器は大木囲貝塚に類例があり前期後葉大木 5 式に位置づけられているものである。33 は折返し口縁になっているもので、口縁部外傾する。第 1 土壙出土 3､4 と特徴が類似しており、大木 7 a 式に位置づけられているものである。34 は口縁部が肥厚しないもので、わずかに内弯する。平縁で、口縁部に綾絡文（ＬＲ）が横位にみられる。時期は特定できないが前期末葉～中期初頭の頃と思われる。35、36、は体部破片である。35 は第 1 土壙出土 6、7 に特徴が類似しており、大木 7 a 式に位置づけられているものである。36 は地文の撚糸（Ｌ）が調整の加えられた縦、横方向の数条の沈線によって区画されているもので、このような土器は青島貝塚に類例があり、後期初頭に位置づけられているものである。

〈ピット 6 出土遺物〉

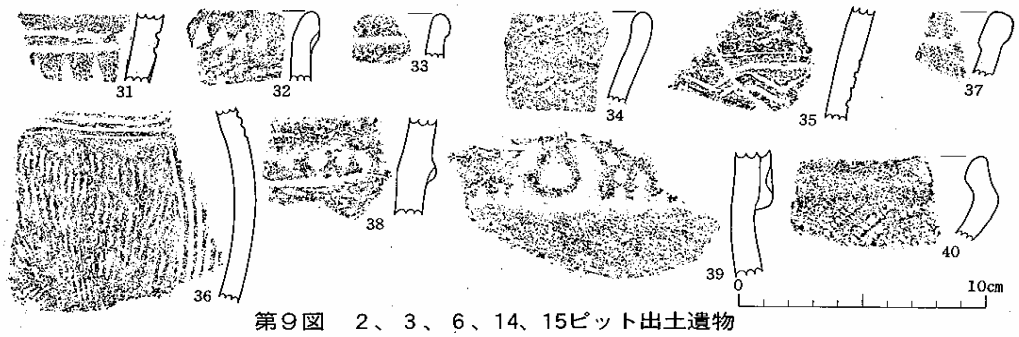
縄文土器（第 9 図 37）

深鉢形土器である。折返し口縁になっているもので、口縁部は外傾する。第 1 土壙出土 3、4 と特徴が類似しており大木 7 a 式に位置づけられるものである。

〈ピット 14 出土遺物〉

縄文土器（第 9 図 38）

深鉢形土器の体部破片である。第 1 土壙出土 6、7 と特徴が類似しており、大木 7 a 式に位置



第９図　２、３、６、14、15ピット出土遺物

づけられるものである。

〈ピット 15 出土遺物〉

縄文土器（第 9 図 39、40）

深鉢形土器（39）と浅鉢形土器（40）とがある。39 は体部破片である。第 1 土壙出土 6、7

と特徴が類似しており、7ａ式に位置づけられているものである。40 は口縁内側に段を有するもので、口縁部が強く屈曲して外反する。第４土壙出土 27、28 と特徴が類似しており、大木８ａ式に位置づけられているものである。

3．溝とその出土遺物

溝１

第Ⅱ、Ⅲトレンチ北壁近く、第Ⅵ層上面で確認された。東西に細長くのびている。確認長約 5m、幅約 40 ㎝、深さ 30～50 ㎝である。

〔出土遺物〕

溝堆積土中から縄文土器が１片出土している。

縄文土器

深鉢形土器である。折返し口縁になっているもので口縁部外傾する。第 1 土壙出土 3、4 と特徴が類似しており、大木７ａ式に位置づけられているものである。

4．遺構以外からの出土遺物

遺物は各トレンチⅢ～Ⅴ層中から多数の土器片と石鏃２点、石匙２点、石箆２点、不定形石器３点、磨製石斧２点、形態不明の磨製石器１点、石棒１点、石皿１点、磨石３点、剥片２点などの石製品が出土している。

イ．縄文土器

土器は 2200 点近く出土しており、大部分が第Ⅲ層からの出土である。深鉢形土器と浅鉢形土器とがある。

41～49 は口縁部が肥厚するもので、深鉢形土器である。41～43 は縁部が外反または内弯し、口縁部に鋸歯状の刺突文が横方向に連続して施文されている。このような土器は興野義一氏が提唱された大木 5ｂ式（興野：1970）と類似が認められるが、あまり出土例がなく時期については不明である。44～46 は第１土壙出土１と特徴が類似しており大木６式に、47 は第１土壙出土２と特徴が類似しており大木６式の新しい方に、48 は第４土壙出土 22 に特徴が類似しており大木７ｂ式に位置づけられているものである。49 はピット３出土 34 に特徴が類似しており、時期は特定できないが、前期末葉～中期初頭の頃と思われる。50～66 は折返し口縁になっているもので、深鉢形土器である。口縁部に縦位、横位の粘土紐が貼付され、その上に指頭圧痕が加えられたものや、ボタン状貼付が施されたものや、体部に縦位の綾絡文がみられるものなどもある。第１土壙出土３、４と特徴が類似しており、大木７ａ式に位置づけられているものであ

る。

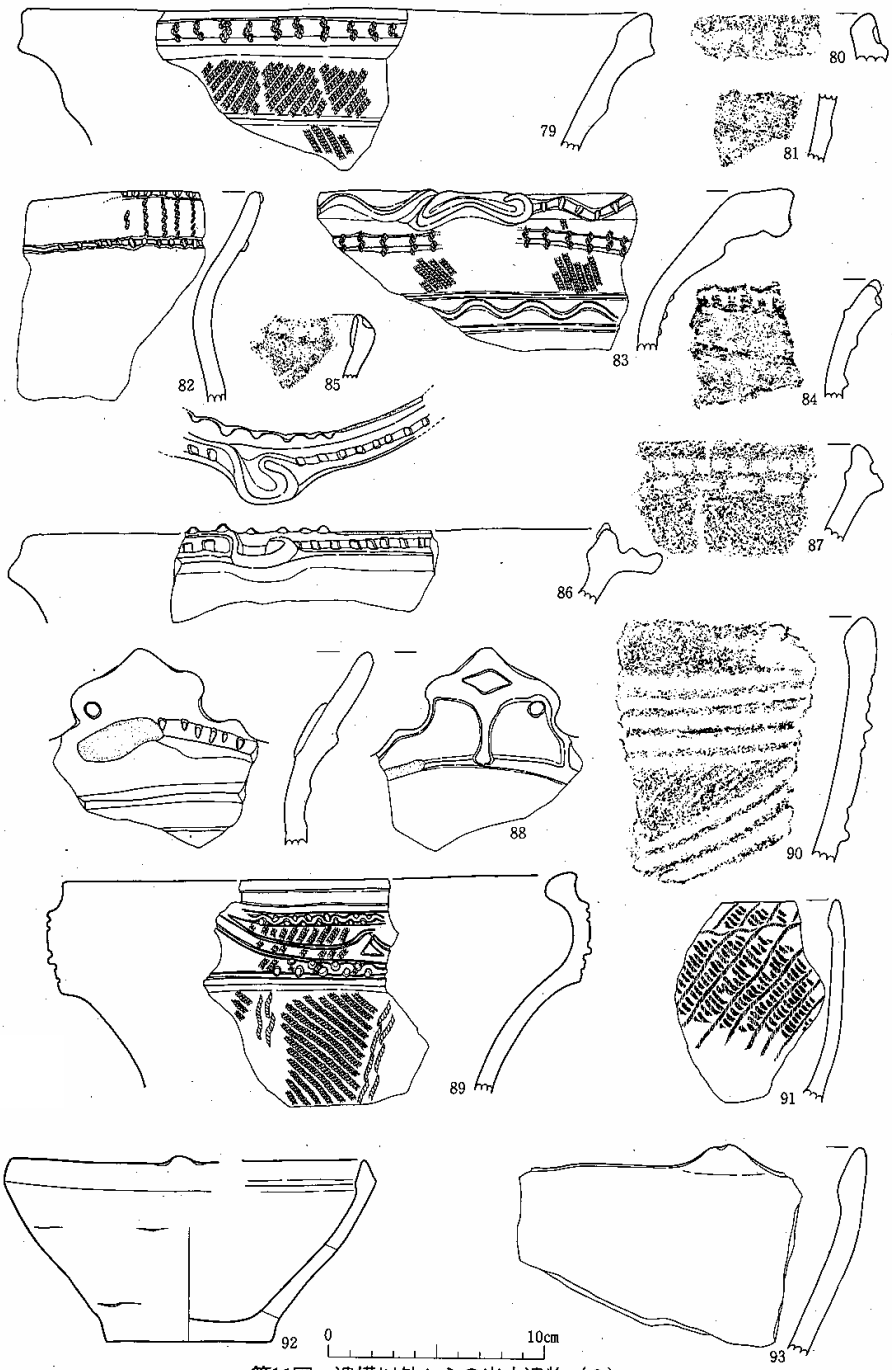
67～98 は口縁部内側に段を有するもので、深鉢形土器と浅鉢形土器とがある。まず、深鉢形土器についてみると、67 は第 1 土壙出土 6、7 と特徴が類似しており、大木 7 a 式に位置づけられているものである。68 は口縁部が外傾し、波状縁にそって撚糸圧痕文が施文されているもので、大木 7 b 式に位置づけられているものである。69～74 は口縁部わずかに内弯し、平縁で、口縁部には横位隆帯に交互刺突文が施文されているもので、五領ヶ台式に位置づけられているものである。75～88 は口縁部外反または外傾する。口縁部に細粘土紐の貼付による横方向の隆起線がみられ、その間に縦位の撚糸文や角押文が施文されている。89 はキャリパー型で、90 はわずかに内弯する。いずれも細粘土紐の貼付による隆起線がみられる。このような特徴の土器は青島貝塚に類例があり、大木 8 a 式に位置づけられているものである。91 は内弯し、附加縄文が施文されているもので、時期は特定できず不明である。

次に浅鉢形土器についてみると、92～95 は口縁部が直立または外傾する。大波状を呈し、波状部先端に突起を有するものと、平縁で口縁部に小突起を有するものとがある。無文である。時期は特定できないが中期初頭の頃と思われる。96～98 は頚部で強く屈曲し、口縁部外反する。第 4 土壙出土 27、28 と特徴が類似しており大木 8 a 式に位置づけられているものである。

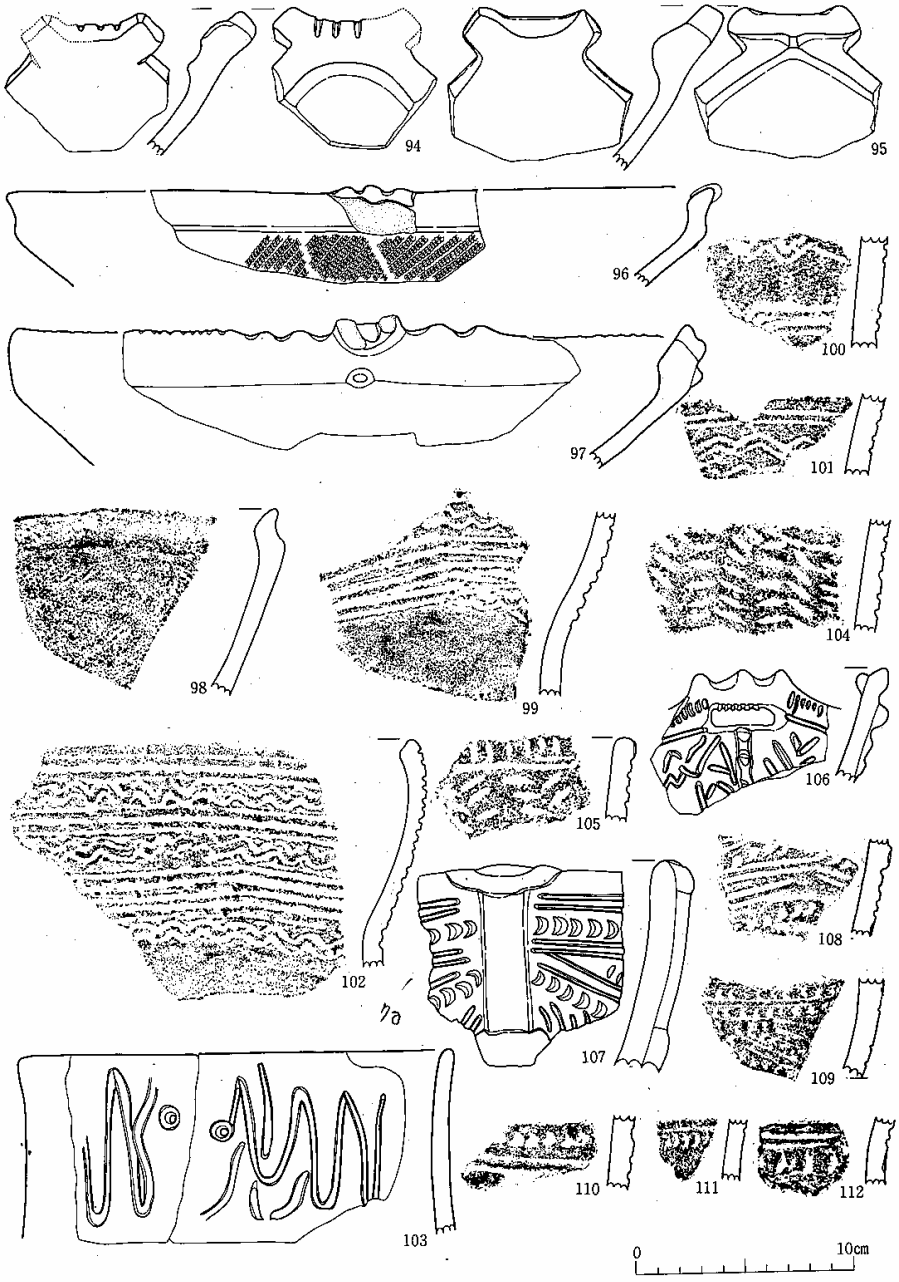
99～134 は口縁部が肥厚しないもので、深鉢形土器である。99～112 は口縁部内弯または外傾する。口縁部に数条の平行沈線が引かれ、波形、山形の沈線文、八の字形文などが連続して施文されているものもあるが、第 1 土壙出土 6、7 と特徴が類似しており、大木 7 a 式に位置づけられているものである。113～118 は口縁部がやや内弯ぎみに外傾する。4 つの大波状口縁を呈し、波状部先端に三角形の突起を有するものもある。口縁部は無文である。口縁部に棒状隆帯が貼付されたり、刺突文の施されているものなどもある。このような特徴の土器は八景腰巻遺跡に類例があり大木 7 b 式に位置づけられているものである。119～126 は口縁部が内弯または外反し、撚糸圧痕文が施文されているもので、大木 7 b 式に位置づけられているものである。127～129 はピット 3 出土 34 と特徴が類似しており、時期は特定できないが、前期末葉～中期中葉の頃と思われる。130～131 は口縁部がわずかに内弯または外傾する。下垂する沈線により文様が描かれている。このような土器は青島貝塚に類例があり後期初頭に位置づけられているものである。132～134 は口縁部が内弯または外傾する。附加縄文、羽状縄文、撚糸文が施文されているもので、時期は特定できず、不明である。

135～187 は深鉢形土器の体部破片である。135～146 は体部いっぱいに竹管による沈線文が施文されており、ボタン状貼付のみられるものもある。地文の縄文は薄く撫で消されている。このような土器は長根貝塚に類例があり大木 6 式に位置づけられているものである。147～164 は刺突文が施されたり、棒状隆帯が貼付されているものである。時期は特定できないが、中期初

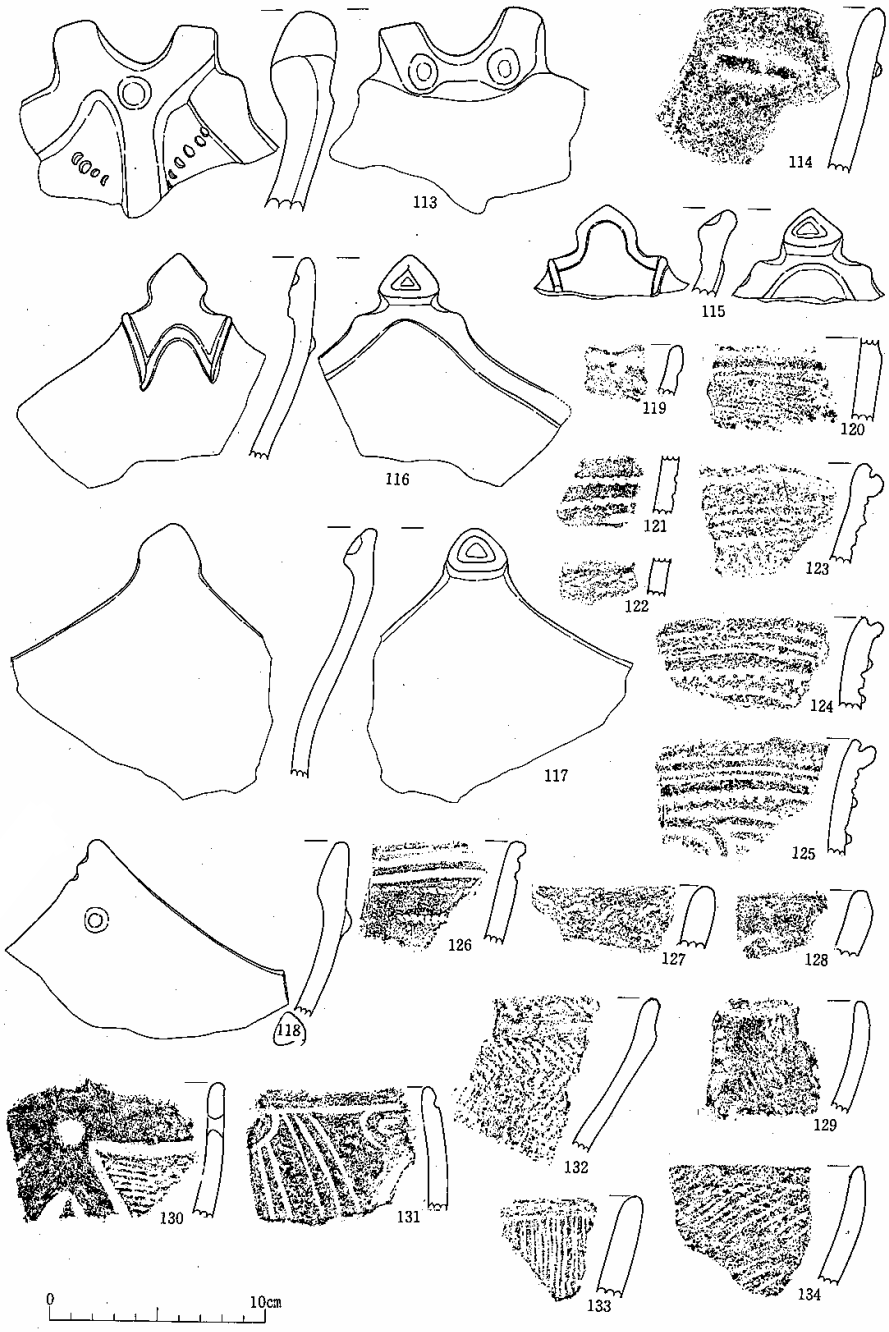
第10図　遺構遺物からの出土遺物（1）



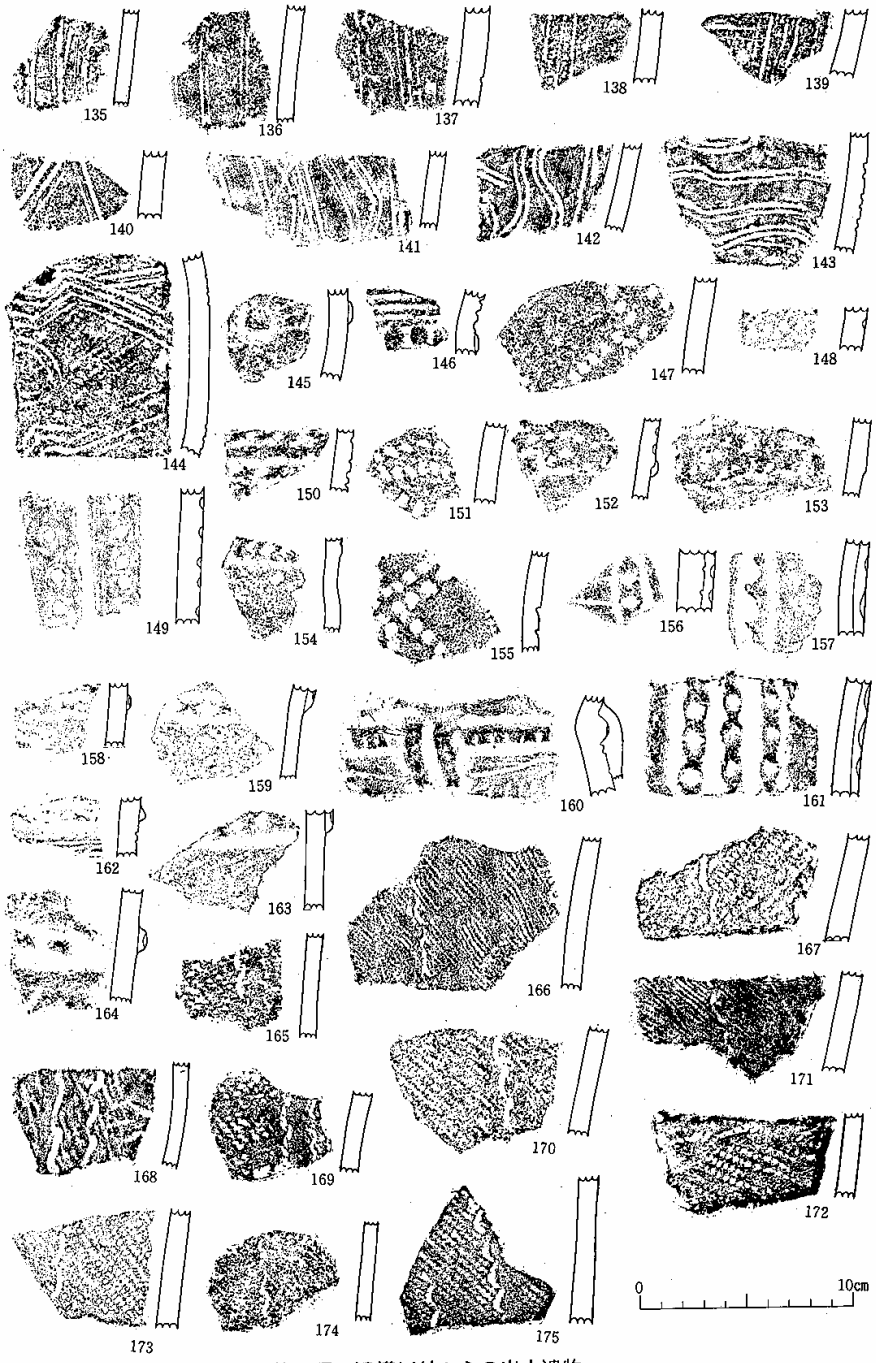
第11図　遺構以外からの出土遺物（2）



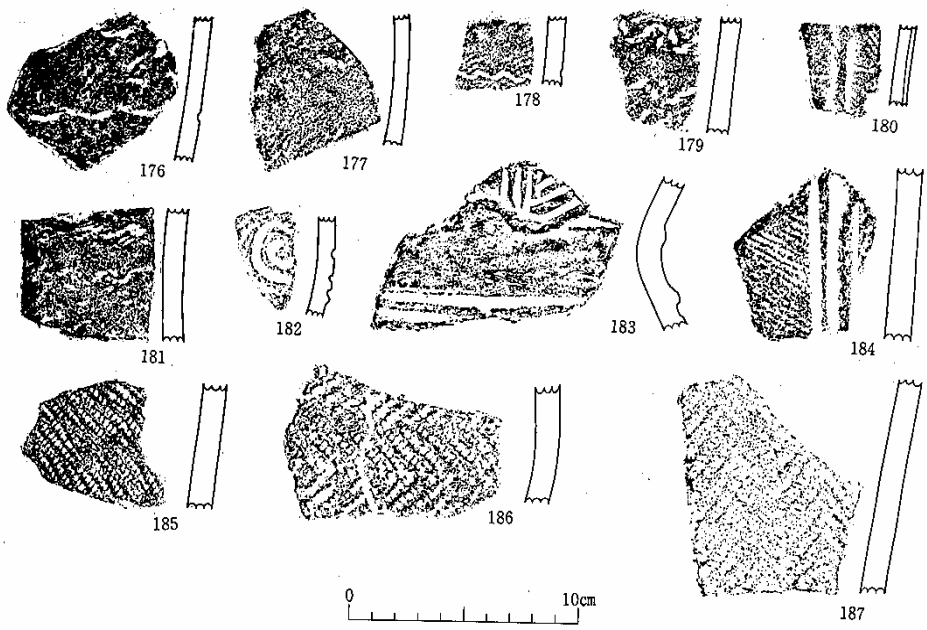
第12図　遺構以外からの出土遺物（3）



第13図　遺構以外からの出土遺物（4）



第14図　遺構以外からの出土遺物



第15図　遺構以外からの出土遺物（６）

頭の頃と思われる。165～181 は第１土壙出土９、10 と特徴が類似しており、時期は特定できないが、前期末葉～中期初頭の頃と思われる。182～184 は調整の加えられた沈線が施文されている。渦状のものもある。このような土器は青島貝塚に類例があり中期中葉に位置づけられているものである。185 は斜行縄文（ＲＬ）が、186、187 は羽状縄文が施文されているもので、時期は特定できず不明である。

ロ、石器

〔**石鏃**〕（第 16 図 1、2）

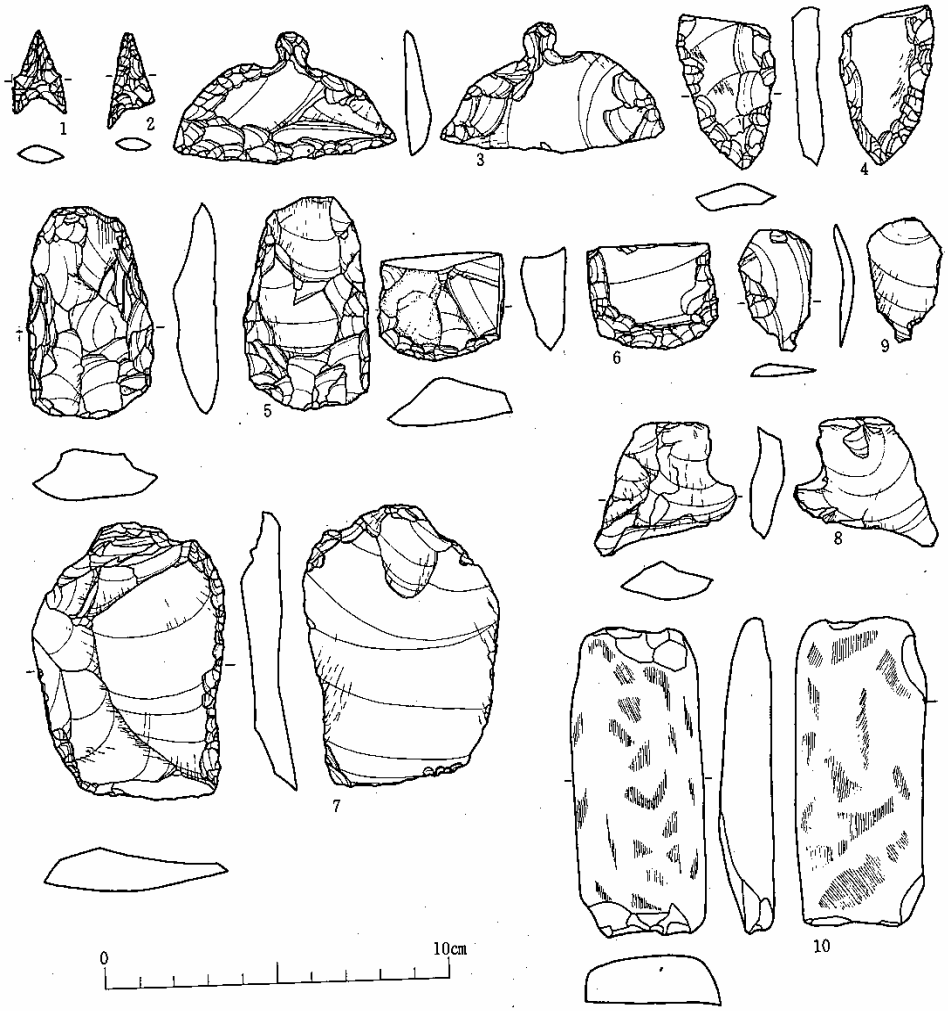
二点採集されている。第 16 図 1 は完形品で、無茎のもので基部は凹状である。第 16 図 2 は基部が一部欠損しているが無茎のもので基部は凹状である。尖頭部側縁がほぼ平坦である。

〔**石匙**〕（第 16 図 3、4）

二点採集されている。第 16 図 3 は完形品で、横形石匙で、3 つの縁辺に刃部がみられる。第 16 図 4 はあげ土内から出土している。つまみ部の方が欠損した半欠品である。形態より縦形石匙と考えられる。2 つの縁辺に刃部がみられる。

〔**石篦**〕（第 16 図 5、6）

二点採集されている。第 16 図 5 は完形品で、先端部は薄くなり鋭くなっている。刃部は 4 つ



第16図　遺構以外からの出土遺物（7）

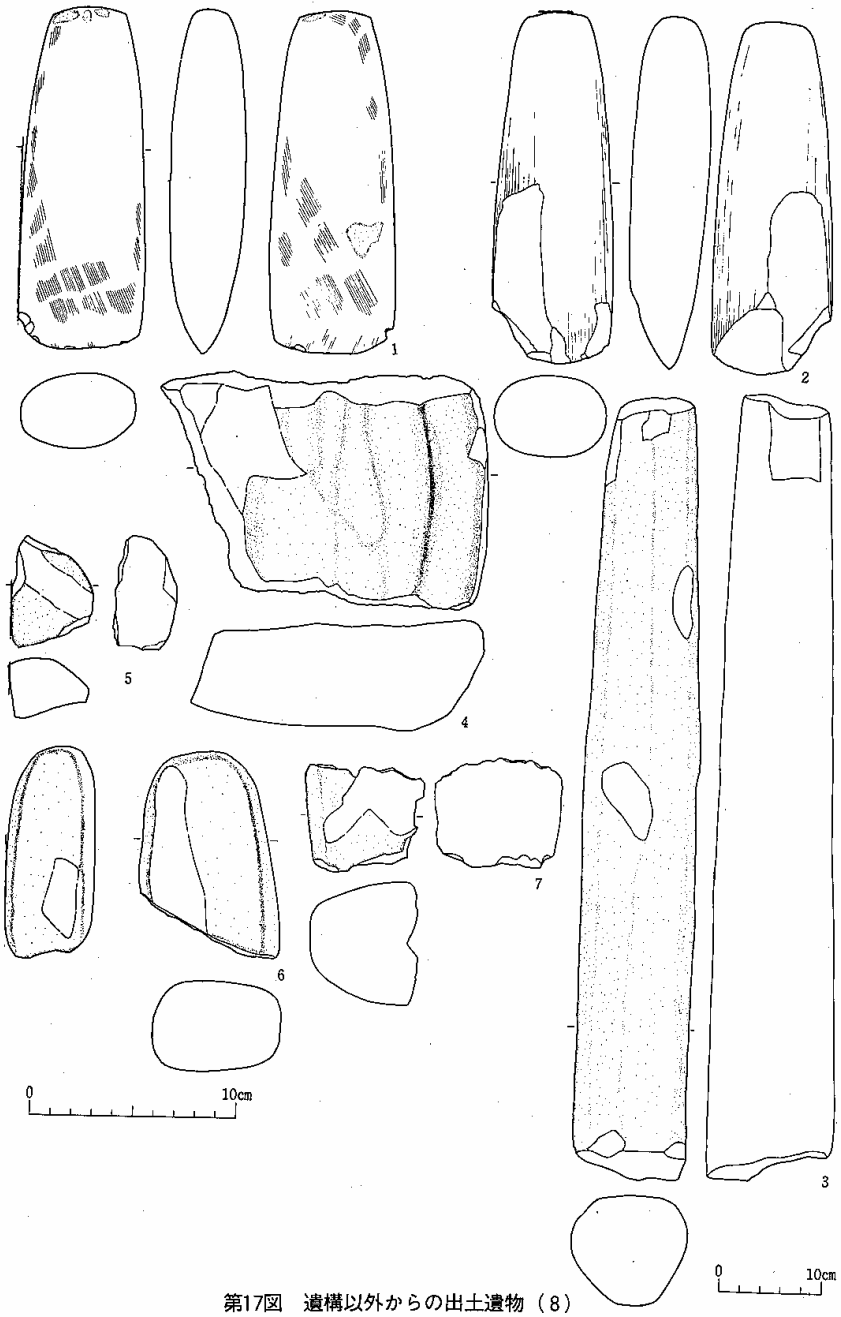
の縁辺から構成されている。調整は側辺が両面調整されている。第16図6は半欠品である。側辺にはあまりふくらみがみられない。横断面は中央がふくらみ、先端部は薄くなり鋭くなっている。調整は側辺の一変が片面調整され、他は両面調整である。

〔**不定形石器**〕（第16図7～9）

第16図7は背面を二辺調整しており、腹面も一部調整が行なわれている。縦長であり、平面形は長方形に近い。

〔**磨製石斧**〕（第17図1、2）

二点採集されている。二点とも完形品である。第17図2は胴部側縁下半の幅が大きいバチ型



第17図　遺構以外からの出土遺物（8）

の平面形を呈する。頭部は平坦で刃部はやや丸みを有している。横断面はふくらみをもった長楕円形であり、両側面との稜線が不明瞭である。縦断面形は胴部がわずかにふくらみ中心線が刃縁を通らない。使用痕が認められ、刃部が大きく破損している。第17図1も第17図2と平面形と横断面形が似ており、縦断面形は胴部がややふくらみ中心線は刃縁近くを通る。使用痕が認められ、刃部がわずかに欠損している。

〔形態不明の磨製石器〕（第16図10）

一点採集されている。両端と片側の面が欠損している。三面調整が認められる。形態から石剣の可能性がある。

〔石棒〕（第17図3）

一部欠損品である。大形の石棒である。表面全面にわたって研磨が行なわれており、断面形はほぼ円形である。

〔石皿〕（第17図4）

欠損品で、板状に近く縁部がわずかにみられる。凹部の一部に研磨痕がみられる。

〔磨石〕（第17図5、6、7）

三点採集されている。いずれも欠損品であるが、平面形は楕円形、長楕円形に近いものと思われる。一面が研磨されている。一方の先端部に敲打痕がみとめられ、敲石としても使用されたものと思われる。

〔剥片〕

剥片が2点出土している。

第2表　石器計測表

（単位 mm）

	出土層位	種　別	最大長	最大巾	最大厚	石　材	備　考
第16図1	不　明	石　鏃	24	14.6	5.2		完　形
第16図2	〃	〃	28	(16)	3.5		基部欠損
第16図3	〃	石　匙	65	28	7.0		横形石匙完形
第16図4	Ⅰ　層	〃	(45)	27	6.1	珪質頁岩	縦位石匙、つまみ部欠損
第16図5	不　明	石　篦	60.5	36.2	15		完　形
第16図6	〃	〃	(30)	37.2	13.1		欠　損
第16図7	〃	剥　片	80.5	56.5	13.6		
第16図8	〃	〃	37.5	42	11		
第16図9	〃	〃	(35.5)	21.5	3.6		
第17図1	〃	磨製石斧	171	58	39.1		完　形
第17図2	Ⅰ　層	〃	166.5	59.5	36.5	ひん(玢)岩	完　形
第16図10	不　明	形態不明の磨製石器	(89)	37.5	(14)	頁　岩	欠　損
第17図3	〃	石　棒				石英斑岩	欠　損
第17図4	〃	石　皿				安山岩	欠　損
第17図5	Ⅰ　層	磨　石	(102.5)	66	43.5	砂　岩	欠　損
第17図6	Ⅱトレ、Ⅰ層	〃	(52)	(57.5)	60	石英斑岩	欠　損
第17図7	不　明	〃	(55)	(37.5)	(29.5)	砂　岩	欠　損

V．考　　察

1．土器

前章で出土土器の編年的位置づけを行なったが、本遺跡出土土器には前期末葉、中期中葉、後期初頭のものがある。しかし、前期末葉、後期初頭のものは量的に少ない。したがって、ここでは比較的多く出土した中期初頭の深鉢形土器について述べることにする。

東北南半の中期初頭の土器は大木７ａ、７ｂ式（山内：1937）の型式名があたえられているが、本遺跡で同型式に位置づけた土器の口縁部形態、文様等についてまとめ考察を加えてみると次の様になる。

〈大木７ａ式〉

口縁部形態により大きく二つに分けることができる。一つは折返し口縁になっており、口縁部ほぼ外傾するものである。平縁である。折返し部の幅は 0.8～3.5 ㎝であるが、1～2 ㎝のものが多い。折返し部に縄文を施文したものと無文のものとがある。綾絡文が折返し部や体部は横位に、体部は縦位にみられるものが比較的多い。他に、数は少ないが折返し部と体部の境にボタン状貼付や折返し部に指頭圧痕の施された棒状隆帯が縦位に施文されているものなどがある。もう一つは折返し口縁になっておらず内弯または外傾する土器である。平縁または波状口縁で、口縁部に数条の平行沈線が引かれ、その間に波形、山形の沈線文、八の字形文、刺突文が連続して施文されたり、指頭圧痕の施された棒状隆帯が貼付されているものと、隆帯上に交互刺突文が施文されているものとがある。

最初に述べた口縁部に 1～2 センチの折返しがみられる土器は綾絡文が縦や横に配される特徴を有していることから、しばしば大木 7ａ式と並行する関東の下小野式との関係が指摘されるものである。また、折返し口縁になっておらず、数条の平行沈線間に沈線文や刺突文などがみられる土器は、いわゆる糠塚式として、小笠原氏によって大木 7ａ式に先行するものとして中期初頭に位置づけられたものである（小笠原：1968）。類似した土器は長根貝塚でも出土しているが、同貝塚の概報ではこのような土器を現在のところ「大木６式とも糠塚式とも称することができない。」とし、「大木 7ａ式と同一型式である可能性があるかもしれない。」（伊東:1969）としている。ここでは長根貝塚の成果に基づきこのような土器を大木 7ａ式に位置づけられるものとしておきたい。同じく折返し口縁になっておらず、隆帯上に交互刺突文が施文されている土器はしばしば五領ヶ台系土器と称されるものである。長根貝塚では前述の土器と同一層から、本貝塚出土のものと若干様相を違にし、三角形の切込み文を特徴としているが、五領ヶ台系土器と称されるものが出土している。そして、長根貝塚ではこれらを含めた上記のものすべてが大木７ａ式として捉えられている。なお、本遺跡と同じ交互刺突文を特徴とする土

器を出土する遺跡としては他に宮城県築館町嘉倉貝塚（佐藤：1973）、大衡村上深沢遺跡（宮城県教委：1978）、福島県浦尻貝塚などが知られている。

〈大木７ｂ式〉

大きく二つに分けることができる。一つは口縁部肥厚せず外傾または外傾する。平縁と波状口縁とがある。口縁部に横位、または弧状に撚糸圧痕文が施文されている。波状口縁にそって施文されているものもある。なお、口縁部が肥厚し撚糸圧痕文が口縁部に横位に施文された土器もわずか１点であるが出土している。もう一つは口縁部が肥厚せずやや内弯ぎみに外傾する。四波状口縁を呈する。波状部先端に三角形の突起を有するものもある。口縁部は無文のものが多く、口縁部に棒状隆帯が縦位に貼付されているものもある。前者における撚糸圧痕文もほとんどが横位に施文されたもので撚糸圧痕文のバラエティは少ない。後者は器種の組み合わせが少なく、不明な点が多い。

以上が本貝塚で中期初頭に位置づけられる土器の概要であるが、前章で述べたように、小破片のため全体の器形は不明であり、また数型式に及ぶ土器が混在して出土していることなどから本貝塚における中期初頭の土器のあり方について十分な考察を加えるまでには至らなかった。

県内においても、この時期の内容についてはまだまだ不明な点が多く、今後の資料の増加がまたれる所である。

2．遺構の年代と性格について

土壙

出土遺物の検討により、土壙堆積土出土土器の時期は土壙１出土土器が大木６～７ｂ、土壙２出土土器が大木６～７ａ、土壙３出土土器が大木６～８ａ、土壙６出土土器が大木７ａ、ということになる。なお、土壙４、５よりは土器は出土していない。土壙の年代であるが、出土遺物が小破片で出土点数が少ないこと、出土土器がすべて堆積土中よりの出土であることより、正確な年代については不明な点が多い。また、第３～６土壙については第３・４土壙と第５・６土壙とが重複していることより、少なくても第3→第４土壙、第5→第６土壙の時間的な差が考えられる。しかし堆積土中の土器がすべて縄文土器（前期末葉～中期中葉）であることから、年代については、縄文中期に近い年代があたえられるものと思われる。

次に土壙の性格について若干考察を加えてみる。

土壙は平面形が楕円形、方形、円形とがあるが、楕円形のものはゆがみが著しいものが多く、平面形は一定していない。規模は長軸が０.８～1.９ｍで、1ｍ前後のものが多い。深さは55～90㎝である。壁は直立ぎみのものが多いが、土壙１だけが袋状を呈する。堆積土は１～６層認められた。どの土壙の堆積土中にも炭化物が含まれており、土壙２以外には焼土層がみられた。

しかし土壙の壁などは焼けておらず、これらの土壙が作製時において、火熱を受けた可能性は少ない。

さて、これらの土壙についての用途であるが、第1土壙のような断面が袋状を呈する土壙については目黒吉明氏の説がある。それによると、目黒氏は塩沢上原A遺跡において、その利用目的について、①貯蔵穴②墓穴などの説をあげている。そして、その考察の中では、氏は袋状ピットの形態、規模、内部の土層、伴出物、住居との関連、時期などの特徴を調べることにより、死者を埋葬した墓壙の可能性を指摘している。しかし本遺跡の第1土壙の場合，形態、規模、時期などに類似点は認められるものの、堆積土にロームが多量に混入していないことや堆積土の堆積状況が、掘り上げた土を直ちに埋戻したものと考えにくいことより、墓壙の可能性は極めて薄いものと考えられる。また、貯蔵と関連のある遺物、使用による崩壊や貯蔵物を取り出すため、2 次的掘り込みの痕跡などもみられないことより、貯蔵穴と積極的に論ずることもできない。以上のことより、第1土壙の性格については不明である。第2〜6土壙についても形態などが一定しておらず、性格については不明な点が多い。

ピット

出土遺物の検討により、ピット堆積土出土土器の時期はピット2出土土器が大木7a、ピット3出土土器が大木5、7a、8b、ピット14出土土器が大木7a、8a、ピット15揚土土器が大木7、8aということになる。なお他については土器が出土しておらず、不明である。ピットの年代であるが、出土遺物が少なく、小破片であり、すべて堆積土中よりの出土であることより不明点が多い。但し、出土状況が土壙の場合と同じなので、これらの時期に近い年代が与えられるものと思われる。他にもピットは多数出土しているが、平面形、規模とも多様であり、性格については不明な点が多い。

溝

堆積土中よりの出土遺物が縄文土器（大木 7a式）1 点だけであり、その年代性格については不明である。

VI. ま　と　め

今回の調査の成果を要約すると、次のようになる。

1. 本遺跡は迫川流域貝塚群の南西端に位置する貝塚で、小丘陵上に立地し、その範囲は東西1㎞、南北0.3㎞と広大なもので、その時期も縄文時代前期〜晩期、奈良、平安時代と長

期間にわたっている。

2. 今回の調査で発見された遺構には土壙、ピット、溝がある。これらの遺構の堆積土中からは縄文時代前期末～中期中葉の土器が出土している。遺構の年代については不明な点も多いが縄文時代中期中葉に近い年代があたえられるものと思われる。

3. 遺構以外からの出土遺物には縄文土器などの土製品と、石鏃、石匙、石篦、不定形石器、磨製石斧、形態不明の磨製石器、石棒、石皿、磨石、剥片などの石製品とがある。縄文土器は大部分は、Ⅱ、Ⅲトレンチの Ⅲ層より出土している。時期的には大木 7ａ、7ｂ式期のものがほとんどであるが、前期末～中期中葉、後期初頭の土器も混在しており、また土器片も小破片で磨消が激しいということなどより再堆積層の可能性がある。

〈引用・参考文献〉

阿部　正光　他（1975）：「八景腰巻遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第 47 集、福島県教育委員会、日本道路公団

伊東　信雄　他（1969）：「埋蔵文化財急発掘調査概報－長根貝塚－」『宮城県文化財調査報告書』第 19 集 宮城県教育委員会

今　村　啓爾他（1972）：「宮の原貝塚」武蔵野美術大学考古学研究会

小笠原　好　彦（1968）：「東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器－昭和 38 年発掘宮城県大木囲貝塚出土土器の内容と糠塚貝塚出土土器の占める位置－」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会編

加藤・後藤　他（1975）：「登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史資料編』南方町

興　野　義　一（1968）：「長者原貝塚」『日本考古学年報 16－昭和 38 年度－』日本考古学協会

興　野　義　一（1970）：「大木 5ｂ式土器の提唱－宮城県長者原遺跡出土資料による－」『古代文化』第 22 巻 4 号

興　野　義　一（1970）：「大木式土器理解のために（Ⅵ）」『考古学ジャーナル』48

日下部　善己他（1971）：「浦尻貝塚」『福島大学考古学研究会発掘調査報告書』第 1 冊福島大学考古学研究会

佐　藤　信　行（1973）：「築館町嘉倉貝塚調査概報－宮城県下に於ける最奥部の貝塚－」築館町文化財保護委員会

高　倉　　淳（1968）：「宮城県気仙沼市大島磯草貝塚出土の土器について」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会編

宮 城 県 教 委（1978）：「上深沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 52 集宮城県教育委員会

山　内　清　男（1937）：「縄文式土器細別と大別」『先史古考学第 1 巻第 1 号』

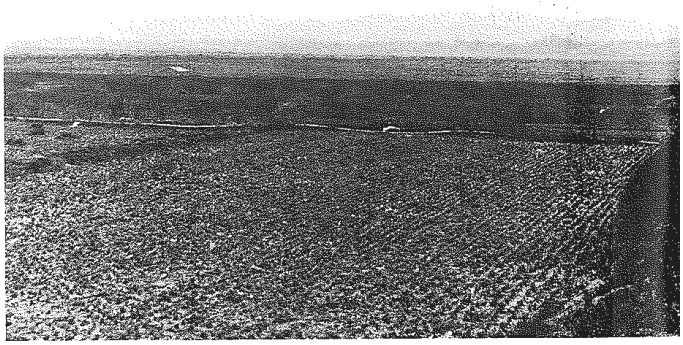
山　内　清　男（1979）：「日本先史土器の縄文」先史考古学会

第3表　出土土器破片集計表

				施文部位	土壙 1	土壙 2	土壙 3	土壙 6	ピット 2	ピット 3	ピット 6	ピット 15	遺構以外 Ⅲ層	遺構以外 その他	不明	計
口縁部	縄文	斜行縄文	L　横位	体									11			11
			縦位	体									2	2		4
			L R 横位	口縁									8	2	2	12
				体	1	1	3	1			4		51	17	2	80
			縦位	口縁			2						3	2	1	8
				体	1	1	2						49	22	4	79
			R L 横位	体								1	7	5		13
			縦位	口縁												
		撚糸文(L)		体									3	5		8
		網代状撚糸文		体										1	3	4
		附加縄文		口縁											2	2
		綾絡文＋縄文(L)縦位		体									2	2		4
		＋縄文(L R)横位		口縁		1							3			4
				体			2	1					6	3		12
		＋縄文(L R)縦位		体			3						13	11		27
		＋縄文(R L)横位		体									1	2		3
		縦位		体												
		＋縄文(羽状)														
		羽状(R L＋L R)		体			1						6	2		9
体部		原体不明		口縁			4						16	6	2	28
				体		6	46	12			2	3	234	132	20	455
	無文	雑なミガキ		口縁		2							2	4	2	10
				体	2	2	9	2				1	39	25	9	89
	有文	竹管文＋縄文		口縁									1			1
				体				1					1	2	3	7
		沈線文＋縄文		口縁									9	2	1	12
				体	1	2	8	2	1			3	58	26	2	103
		調整隆起線文＋縄文		口縁									4			4
				体			1						3	11		15
		隆沈文＋縄文		口縁				2					3	1	1	7
				体		1	1						9	7	1	19
		無調整隆起線文＋縄文		体									2	1		3
		綾絡文＋沈線文		体									1			1
		刺突文		口縁									4	2		6
				体									7	4	1	12
	磨滅のため不明			口縁			5	1					16	10	3	35
				体	9	34	99	29	1	1	7	18	681	330	42	1251
底部	平底	無文			1		1	1			1		12	8		24
		網代						1					6	5	1	13
		木葉											4			4
		不明			2	1	10	3					35	26	2	79
	計				17	51	197	56	2	1	14	26	1312	678	104	2458

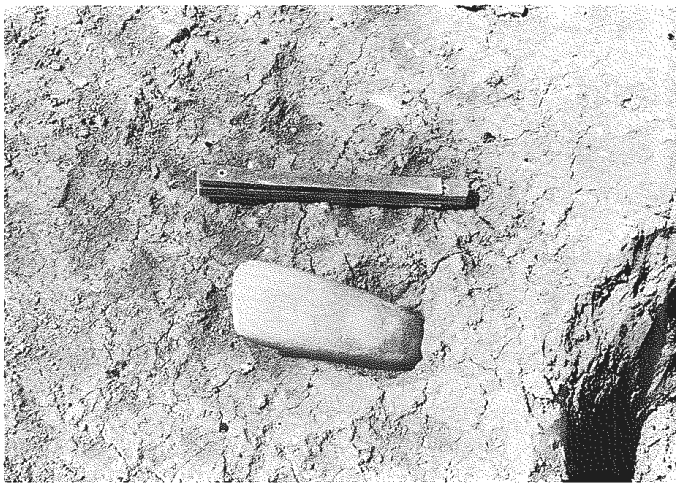
(図示遺物は除く)

遺跡近景

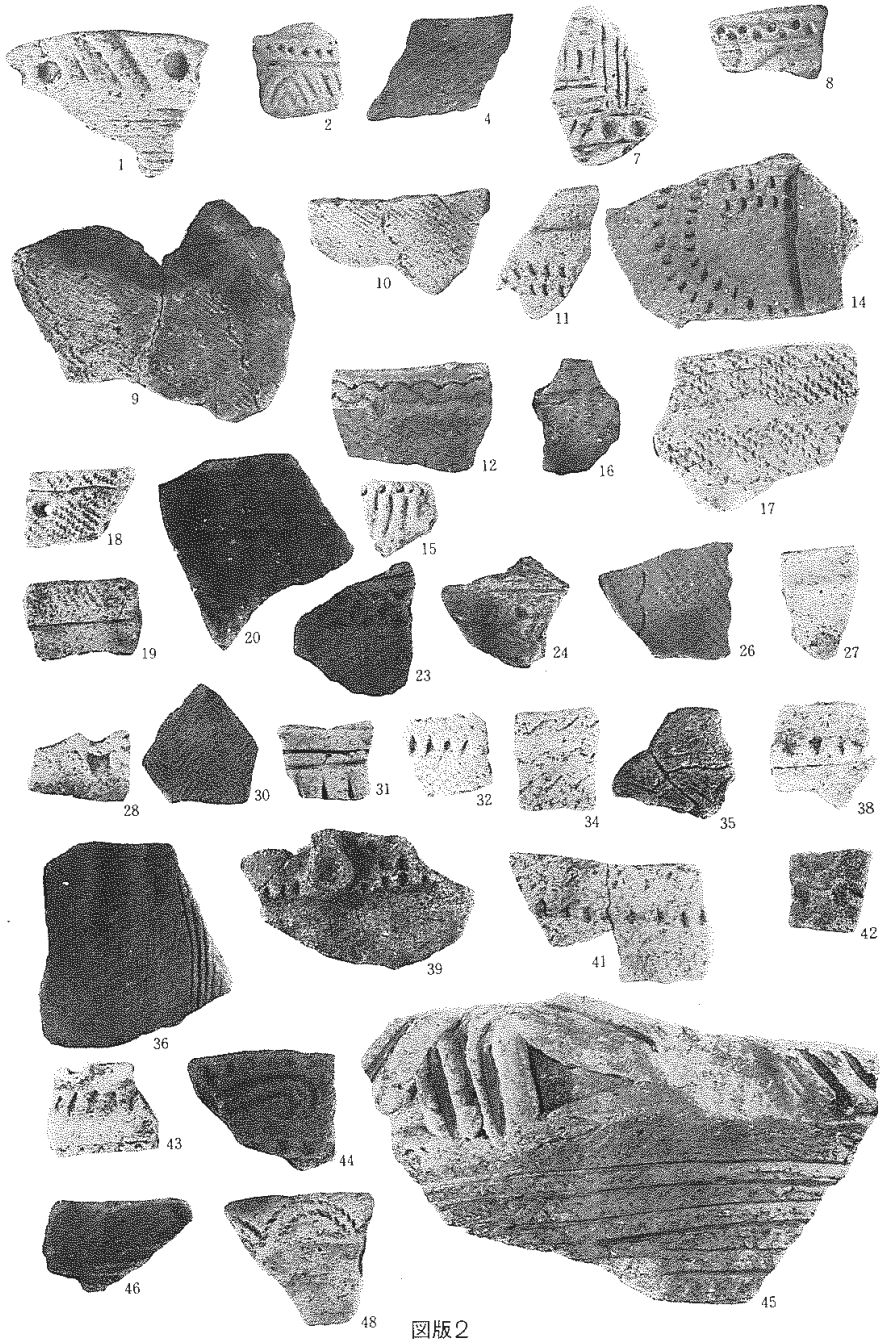


トレンチの状況

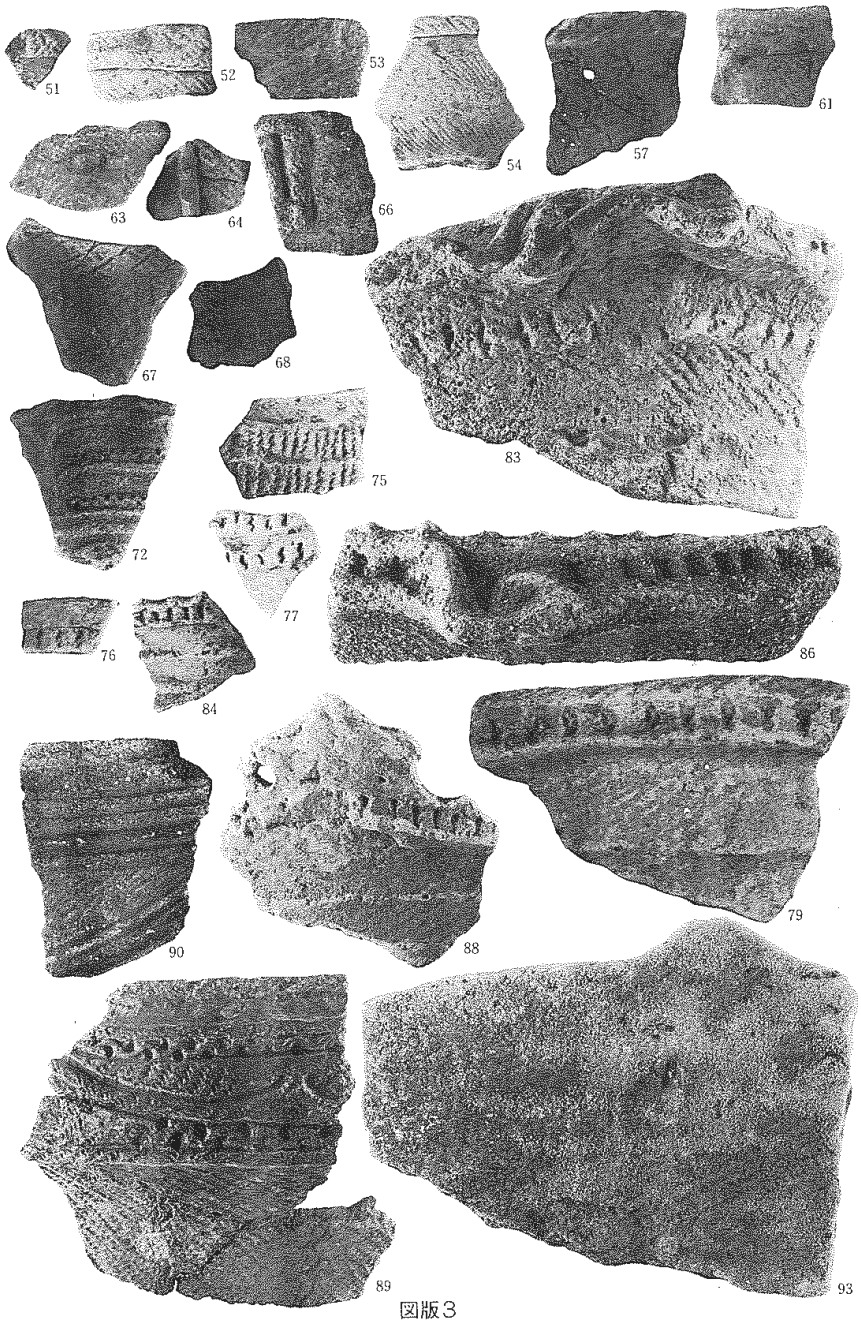
石斧出土状況



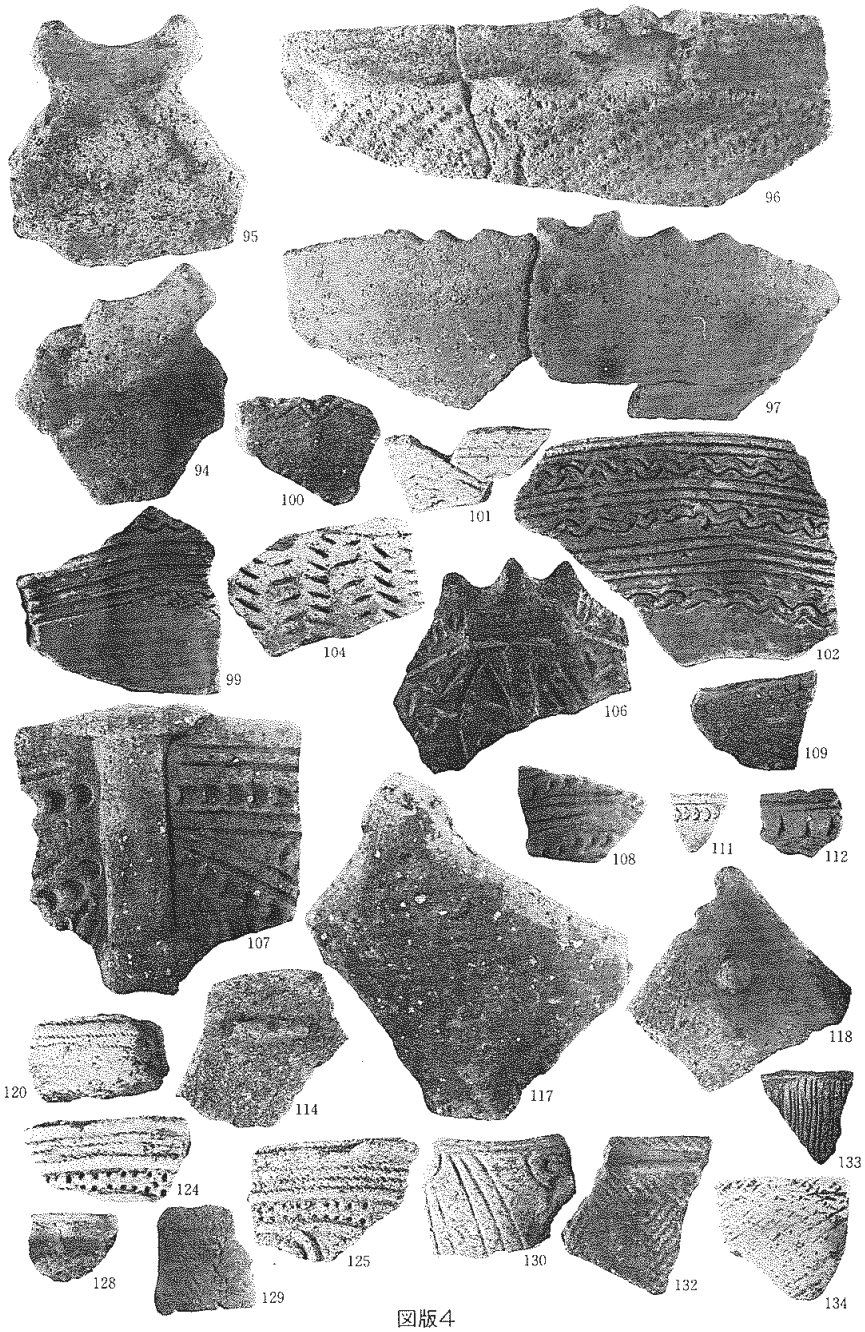
図版 1


1
2
4
7
8
9
10
11
14
12
16
17
18
15
20
19
23
24
26
27
28
30
31
32
34
35
38
36
39
41
42
43
44
45
46
48

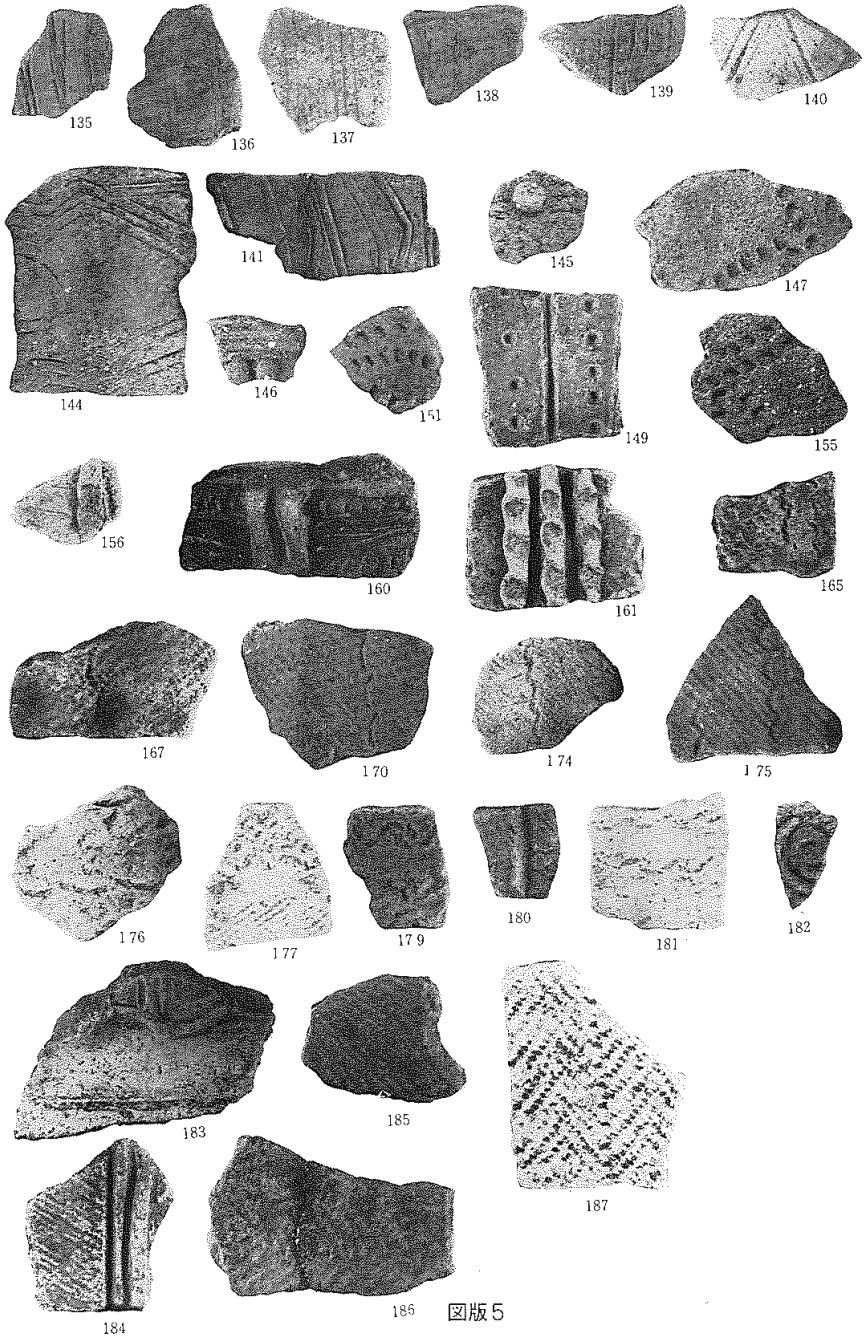
図版2



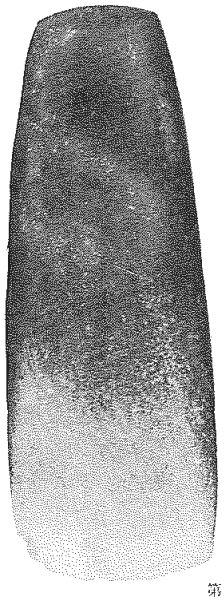
図版3


95
96
97
94
100
101
102
99
104
106
109
108
111
112
107
117
118
120
114
133
124
125
130
132
128
129
134

図版4

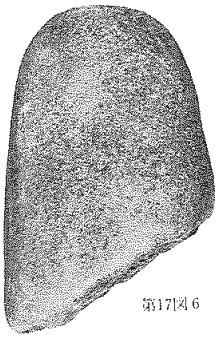

135
136
137
138
139
140
141
144
145
146
147
149
151
155
156
160
161
165
167
170
174
175
176
177
179
180
181
182
183
184
185
186
187

図版5

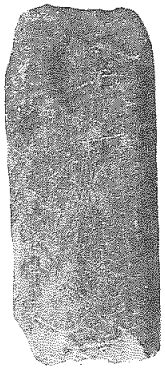


第17図 1

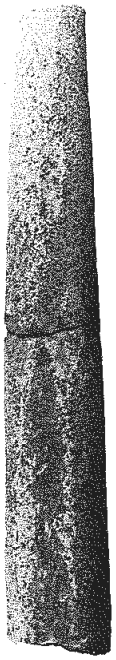
第16図 4



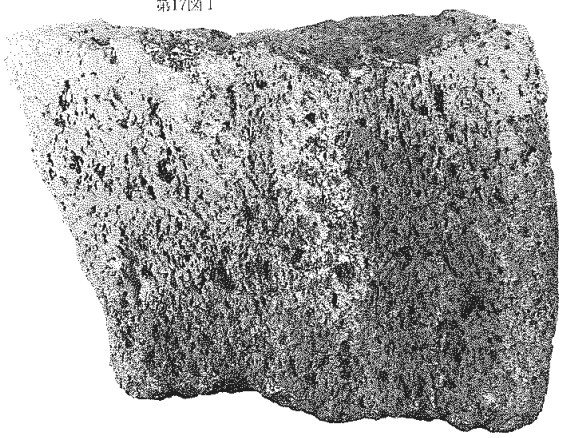
第17図 6



第16図10



第17図 3



第17図 4

図版6

(2)　上新田遺跡（かみしんでん）

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 39
Ⅱ．位置と環境 40
Ⅲ．調査の方法と経過 42
Ⅳ．発見された遺構と遺物 44
竪穴住居跡とその出土遺物 44
土壙とその出土遺物 98
表土および出土地点不明の遺物 131
Ⅴ．考　　察 135
出土土器の種類と器形 135
住居跡における土器組成とその年代 141
土壙群の性格とその出土土器 146
遺跡の性格 155

Ⅰ．調査にいたる経過

本遺跡は昭和 48 年 9 月末、県営圃場整備事業施工に伴い付近一帯をブルドーザーで整地していた際、焼土や土器片が発見されたことによって新たに確認された遺跡である。

連絡を受けた色麻村教育委員会、県教育委員会が現地調査を行ったところ、削平された水田部分の約 600 ㎡の地山面上において数軒の住居跡と考えられる遺構や、多量の土師器・須恵器片を確認し、奈良・平安時代の集落跡であることが推定された。そこで遺跡名称を小字名によって「上新田遺跡」と命名し、直ちに県・村教育委員会・県農政部等関係各機関によって本遺跡の保存についての協議が開始された。

しかし、当該地の圃場整備事業の工程は、具体的な整地作業の実施は遺跡周辺のわずかな区域の整地作業を残すのみという終末段階を迎えており、遺跡を現状のまま保存することは困難な時点に至っていた。

このため、止むを得ず工事に先立って記録保存のための発掘調査を実施することとした。調査対象面積は遺構の確認された部分を中心とする約 5,000 ㎡である。

調査の要項は下記の通りである。

遺　跡　名	上新田遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：31042）
所　在　地	宮城県加美郡色麻村（現色麻町）四釜字塚合、上新田
遺跡略号	ＤＣ
調査主体	宮城県教育委員会・宮城県農政部
調査担当	宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員	志間泰治・佐々木茂楨・斉藤吉弘・小井川和央・加藤道男・田中則和・熊谷幹男
調査補助員	佐藤正人・清水毅・橋本博幸・門間敦子・田中礼子・佐藤房枝・伴野幸子（以上東北学院大学学生）、笹原百合子（東北大学学生）
調査協力者	遊佐五郎（色麻小学教諭） 色麻村教育委員会、宮城県古川土地改良事務所、色麻土地改良区、浅田建設株式会社

Ⅱ．位置と環境（第１図）

上新田遺跡は、色麻町四釜字上新田に所在し四釜の町並から南西約 2 ㎞の地点に位置する。遺跡は、町の北・東限を画して東流する鳴瀬川の支流である花川の右岸にある。花川は町北東部で鳴瀬川と合流するもので、四釜の町並を経て南西へ遡り、その流域にはいわゆる王城寺扇状地が形成されている。遺跡はこの扇状地のほぼ中央部にあたり、標高は約 50m で川から約 100 m離れている。現状は水田および山林のためその範囲を明確にとらえることはできなかったが、のちに述べるような調査の結果その範囲はさらに花川右岸沿いに北西方向へ拡大するものと考えられた。調査対象区域は水田部分約 5,000 ㎡である。

さて、遺跡の立地する扇状地上および周辺の段丘上には旧石器時代以降、各時代の遺跡が存在している。それは古墳時代以降において顕著である。

四釜の町並の南端・花川橋たもとの伊達神社境内にある御山古墳は、主軸長 50m の円墳（前方後円墳とする説もある）で、まだ発掘調査は行なわれていないが円筒埴輪等の出土があり、中期古墳として知られている。また、花川流域の色麻古墳群、その北の保野川流域の大塚古墳蝦夷塚古墳群、町南東部丘陵地帯の東原古墳群などは後期群集墳として知られている。

特に色麻古墳群は、花川北岸の上郷地区、南岸の高野地区の東西 1.5、南北 1 ㎞の広い範囲に群集するもので、昭和 25 年の調査（伊東：1955）では、上郷地区 149 基、高野地区 91 基の計 240 基の存在が認められている。上新田遺跡は高野地区の南西端に接しており、調査区北東側の山林中にも円墳が散在している。また、調査区の開田工事[註1)] の際、石室状の石組がみつかったという地元の人々の記憶もあり、本遺跡は古墳群域の内に含まれていると考えられる。

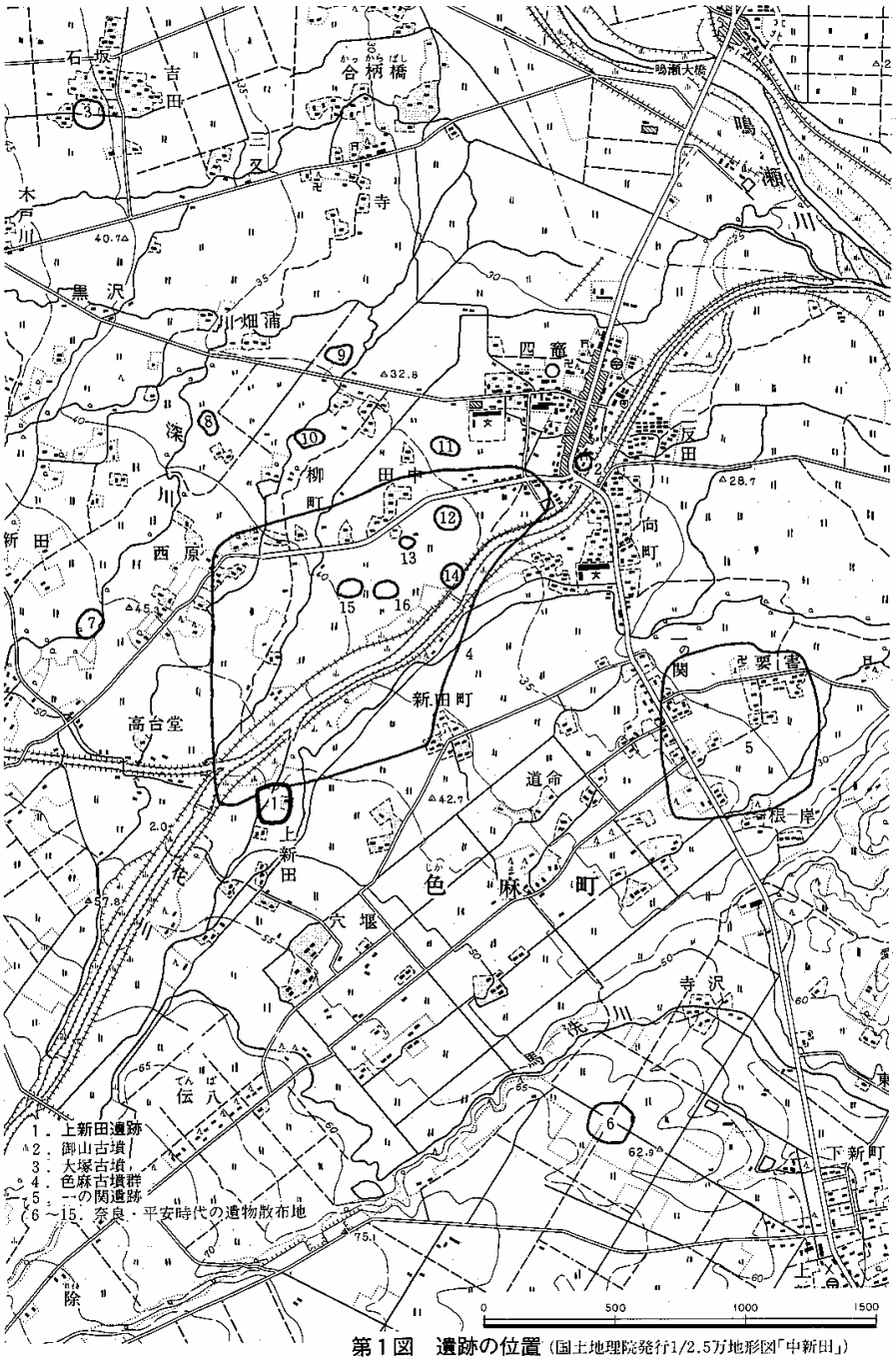
しかし、古墳群の中には開田工事によって破壊されたものも多く、昭和 53 年に実施された上郷地区の分布調査では古墳及びその痕跡と思われるものが 103 ヶ所確認されているにすぎない（阿部：1979）。ただし、群域内およびその周辺から集落跡と考えられる多くの遺物散布地が新たに発見された。それらには古墳と時代を同じくするものと思われるものも多く、古墳群成立の背景として重要な関連をもつと考えられるものを含んでいる。

高野地区の分布調査は行われてはいないが、本遺跡もまた、古墳群と立地を同じくし、その域内に含まれる可能性があるという点で興味深い。

現在までの調査では、古墳群は古墳時代後半～奈良時代の年代が得られており、本遺跡とは年代的な連がりはないが、本遺跡成立の前史としてのその背景を無視することはできないであろう。

また、色麻の地は古代史上重要な地域でもある。

「続日本紀」天平九（737）年四月十四日条[註2)] には、いわゆる天平五柵の一つとしての色麻柵の



第1図　遺跡の位置（国土地理院発行1/2.5万地形図「中新田」）

名がみえ鎮守将軍大野東人が出羽進駐の拠点としたことが記載されている。

さらに「延喜式」[註3)] には、東山道陸奥国駅馬の中に「色麻」の名がみえる。

色麻柵・色麻駅とも、その他はまだ明確に特定されてはいない。しかし、昭和 51 年には本遺跡の東約 2 kmの一の関遺跡の発掘調査が行なわれ、建物基壇跡・掘立柱建物跡等の遺構や、奈良・平安期にわたる土器・瓦等が発掘されて、「一の関遺跡は未だ不明の点は多いが、古代の寺院跡ないし城柵跡（色麻柵）・官衙跡（色麻郡衙・色麻駅舎）とみるのが妥当であろう。」と報告された（宮城県教委：1977）。

このように、この地が陸奥開拓の一拠点として重くおかれていたことは明らかであり、各種の官衙等が存在し、周辺にはそれに直接・間接にかかわる集落が存在していたことが想定される。古墳群との関連同様、本遺跡はこのような歴史的背景をもあわせもっているのである。

註１）調査対象区は土地の人々の記憶によると大正７・８年頃と昭和33年の少なくとも２回にわたって開田工事が実施されている。

註２）「……。廿五日ニ。将軍東人従ニリ多賀ノ柵ニ発。三月一日。師ニ并テ使下ノ判官従七位紀ノ朝臣武良士等及ヒ所レノ委スル騎兵一百九十六人。鎮兵四百九十九人。當国兵五千人。帰服ノ狄俘二百卅九人ヲ。従ニリ部内色麻ノ柵ニ発シ。即日ニ到ニ出羽ノ国大室驛ニ。」（吉川弘文館「国史大系」による）

註３）延喜式巻二十八（吉川弘文館「国史大系」による。）

Ⅲ．調査の方法と経過（第２図）

調査は昭和 48 年 10 月 15 日から開始した。調査対象区域は、西部が高く南東側へ向ってわずかに傾斜している。そしてすでに述べたように、調査開始時点において一部地山面まで削平されていくつかの遺構が露呈していた。遺構が露呈しているのは高い部分であり、低い部分には整地によって生じた移動土が盛られていた。

このため、初めに対象区全域の遺構確認を行なうこととした。確認作業にあたっては地形の傾斜にあわせて任意の基準線を設け、それによって 3×3mを最小単位とするグリッドを設定したのち、3〜6 グリッドを連結させたトレンチ調査によって遺構の探索を行った。その範囲は東西約 110m、南北約 50mである。（なお南北基準線は磁北より 55°東に偏している。）

その結果、対象区内北東部の 75×30mの範囲に遺構の分布が確認された。他の部分では明確な遺構はなく、それに加えて南東側では、圃場整備事業による新水田面も盛土によって造成されるため、より以上の調査は行なわなかった。

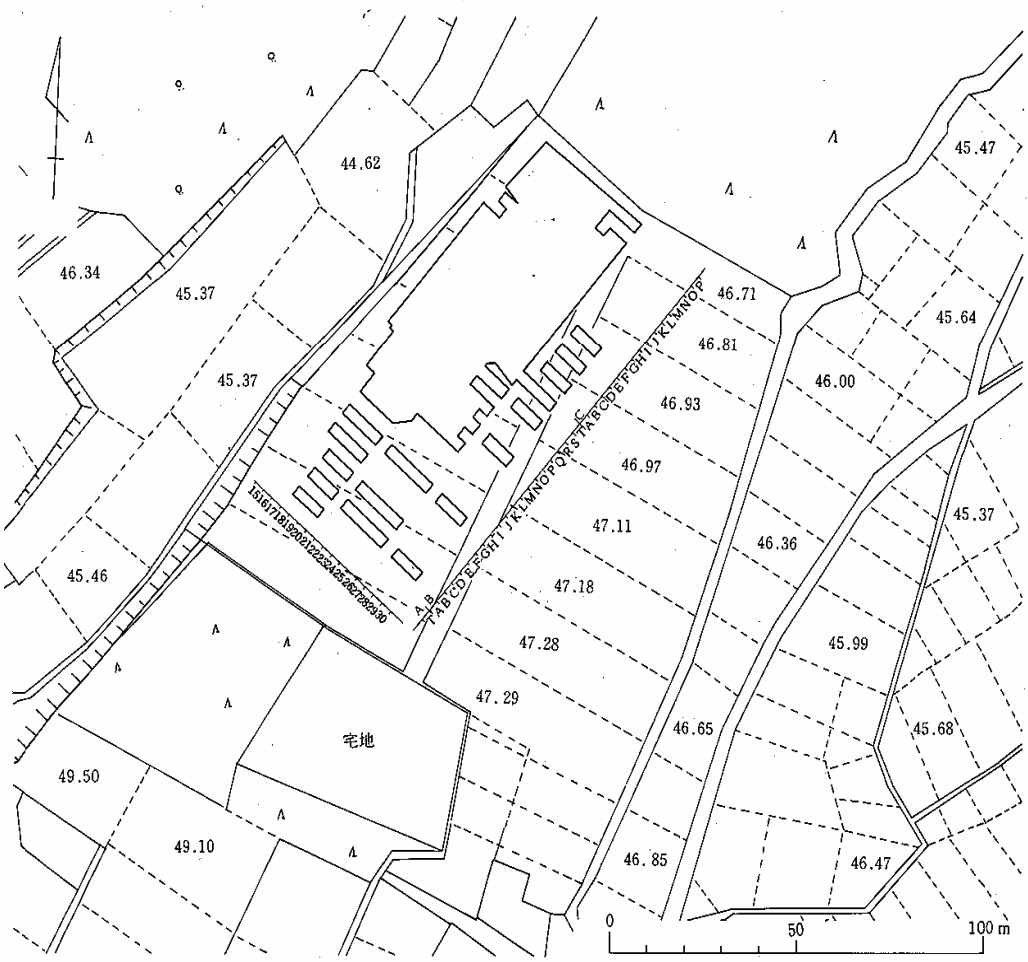
また、南側部分（ＡＴ列）では近世期の墓壙が多数確認されたが、その帰属が明らかな墓であるためこれも調査対象から除外した。

このような確認作業終了後、遺構検出区域を拡張した結果、住居跡9、土壙50余基等の遺構が明らかとなった。

10月26日から、これらの遺構の精査を開始し、その作業が終了したのは12月11日である。

なお、精査継続中の11月17日には地域住民を対象とする現地説明会を開催した。

最終的な実発掘面積は約3060㎡である。



第2図　調査区の設定

Ⅳ．発見された遺構と遺物（第３図）

発見された遺構は、住居跡９、土壙60余、掘立柱建物跡１、およびピット群等である。それらはすべて地山面で確認された。これは調査対象区の大部分の地域で上部をおおっていた覆土が削りとられ、すでに地山面が露呈していたことにもよる。ただし、その後の調査の結果、かなり以前の段階の開田造成によって大規模な削平が行なわれており、今回の圃場整備事業前にも地山上には耕作土（表土）のみがのっている状態であったことが明らかとなった。

遺物は、各遺構内から出土したものの他に、重機によって移動攪拌された土砂の中に含まれていたもの、および造成の部分の表土から出土したものがある。移動された土砂中に含まれたものは、本来は遺構の堆積土（場合によっては底面）に属するものと、出土グリッドの表土の遺物を含んでいる。それらのうちの一部については、遺構内出土の遺物との接合関係によってその出土地点を明瞭になし得たものもあるが、帰属遺構の不明なものが大半である。

したがって、以下の遺物の取り扱いについては、遺構内の出土遺物は各遺構の頃において、その他のものは地点不明の遺物として一括してのべる。

竪穴住居跡とその出土遺物

竪穴住居跡は９軒ある。それらの遺構番号は確認順に付したが、確認段階で第６号住居跡としたものは、その後土壙（土壙23）であることが明らかになったため欠番とした。

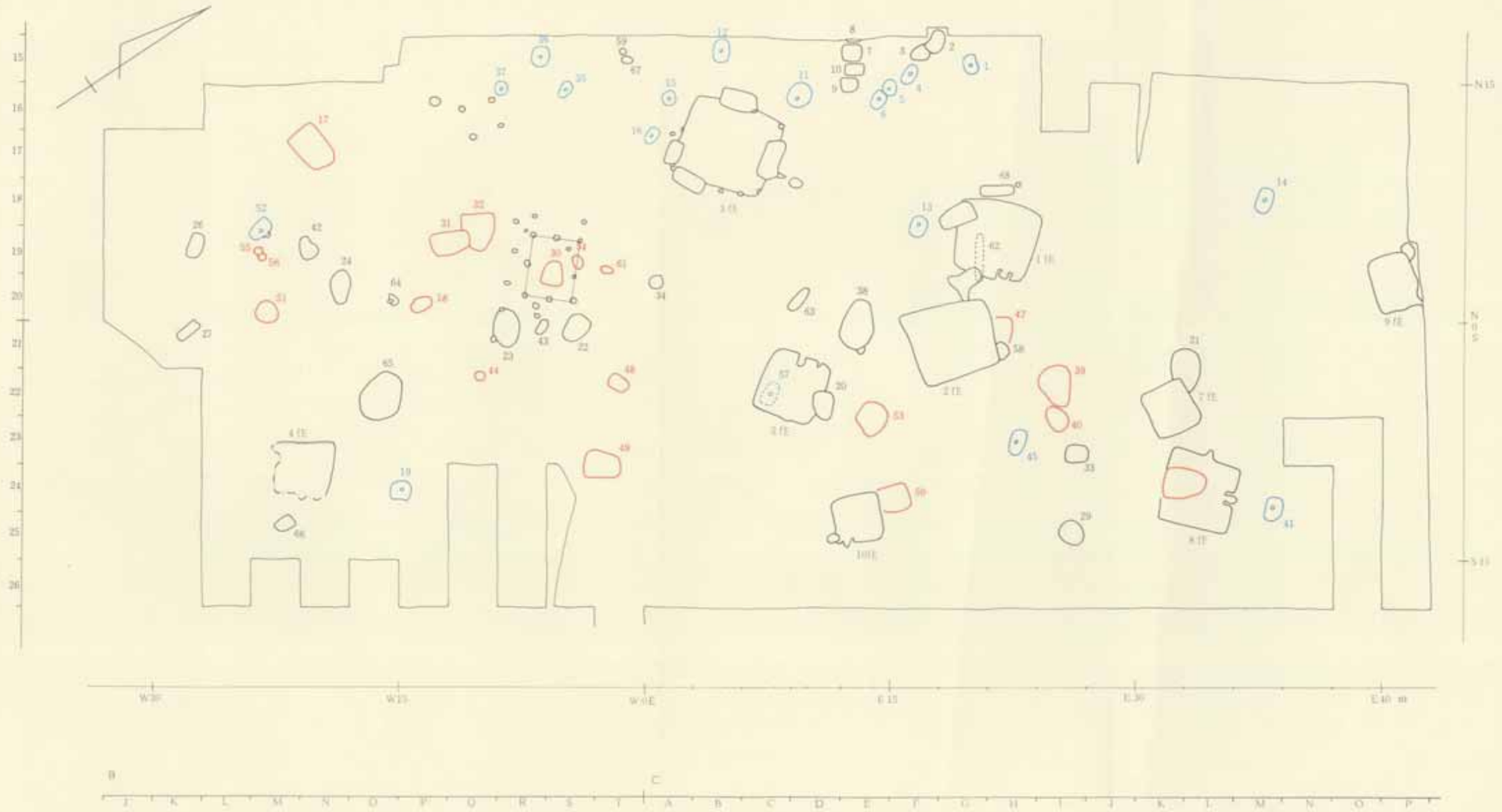
住居跡自体に拡張・改築が行なわれているものはあるが、相互の重複関係はない。ただし、近接しており上部構造を考慮すると同時に存在したとは思われなものもある。しかし、後にのべるように、全体的には、ある一定の年代幅に含まれるもので、大きな時間的隔たりはないものと考えられる。

第１号住居跡（第４図）

〔重複〕　３個の土壙（１号住ピット１．２．３）と重複している。ピット２．３はそれぞれ住居壁部分に、ピット１は住居内にある。いずれのピットも住居埋没後に掘りこまれたものである。また、床面下から溝状土壙（土壙62）が検出された。それは住居より旧いものである。

〔平面形・規模〕　平面形は方形を基調とするものであるが四辺の中央部は若干膨らんでいる。また、南辺が短く相対する北辺が長いためにわずかに台形状を呈する。

〔堆積土〕　カマド付近など住居跡内の地点の違いによってやや様相を異にする部分もあるが、大きく壁沿いまたは壁から床面上にかけて分布する層と、その上部に堆積して住居を埋めているものとの二者がある。ただし、いずれもその堆積状況からみて自然流入によるものと考え



第3図　遺構配置図

られる。
〔壁〕　地山を壁としている。壁はほぼ垂直に立ち上がっており残存壁高は約20㎝ある。
〔床面の状況〕　床面はほぼ平坦であるが南西隅に向って若干傾斜しており、最も高い北辺東部と最も低い南西隅との差は約10㎝ある。大部分の範囲で住居掘方埋土の上面を床面としている。地山面を床としているのは西壁付近などのわずかな部分である。
南西隅の床面上には、西壁から幅約 1m、南壁から長さ約 3mの範囲で白色粘土が分布しており、またその内や周囲に径30〜40m、高さ8〜20㎝の白色粘土の塊が4ヶ所に認められた。
床面上において確認された遺構は、北部に対になるような形でならぶピット2ヶである。いずれも長径50㎝ほどのだ円形を呈するもので床面からの深さは25〜30㎝であり、さらに両者とも底面中央部に径10㎝、深さ10㎝ほどの小ピットがある。
なお、柱穴と考えられるピットは検出されなかった。
〔周溝〕　各辺に巡っている。ただし、北辺中央部では約 1mにわたって途切れまた北西隅でも切れている。底面幅5〜10㎝、床面からの深さ3〜6㎝の小規模なものである。
〔カマド〕　南辺東部に付設されている。削平のため天井部は失われているが側壁が残存している。側壁は粘土によって築かれたもので現存高は約20㎝ある。壁側縁や前端には土師器甕の破片が貼りついており、土師器甕を芯またはオサエとして使用していたとも思われるが、土器はいずれも破片でありその確証は得られなかった。破片のみを補強材として利用した可能性もある。燃焼部の規模は60×40㎝ほどで底面は皿状に凹んでおり、床面より約3㎝低い。またカマド前面には広い範囲で焼面が認められた。ただしその範囲は、燃焼部前端から約 1mにも達し、カマドに伴うものとしては広すぎるものであり、現存するカマドに伴う使用面とは考えにくい。
カマドと考えられる遺構は北辺東部にも認められた。住居壁がわずかに焼け、その内側に焼土を含む層が堆積している。また住居壁から約 1m外側には焼土・木炭を含む煙出しと考えられるピットも存在していることから、この部分はより旧い段階のカマドの痕跡と考えられる。なお、焼土を含む堆積層は、本遺構がカマドであったとすればカマド内堆積層にあたるものであり、カマド改築の際何らかの理由で取り払われなかったのであろう。
〔床面下の状況〕　床面下には住居掘り方が認められた。掘方は住居壁際や中央部において特に顕著で、最も深いところで床面から約40㎝ある。しかし底面の状況は極めて不規則であり、ピットないし土壙状を呈する部分も所々に認められる。なお掘方底面においても柱穴と考えられるピットは検出されなかった。
〔出土遺物〕　遺物には土師器・須恵器等の他に鉄製品（刀子断片）がある。特に土器は出土量が多く作図可能なものは50個体ある。またそれらのうち、床面上・カマド内及び床面上ピッ

ト内等から出土し確実に住居に伴うと考えられるものは41個体に達する(掘方出土の3個体を含む)。その内訳は、土師甕18（長胴形7、中又は小形9、内黒甕2)、小形鉢1、須恵器鉢1、壺2、蓋2、坏11、高坏1、高台付坏1、高台付皿1、赤褐色を呈する土器坏3、である。また、住居内堆積土中から9個体出土している。それらの出土地点は表中に示した。以下は図示遺物を中心に記載を行う。（このことは以下の各項においても同様である)。

土師器　製作に際しロクロを使用したものと、使用しないものとがあるが、後者は小形鉢1点のみであり、ロクロを使用したものが圧倒的である。

甕（第5〜8図)

内面がヘラミガキ・黒色化されたものとそうでないものとがある。

前者（5図1、2）は、器高よりも口径が大きく、また胴部最大径が上端に位置しており、鉢とした方がよいと思われるものである。胴部はやや丸味をもって大きな底部へ移行する。胴部外面はロクロ調整ののち、そのかなりの部分および底面にはヘラケズリによる整形が行なわれている。

後者は器形的にみて大、中、小の別がある。いずれも頭部で「く」字状に屈曲して外傾する口縁部を有するもので、口縁端部はせまい縁帯状を呈するものが多い。また縁帯状となるのにともなって口縁上端はわずかに上方に立つ。

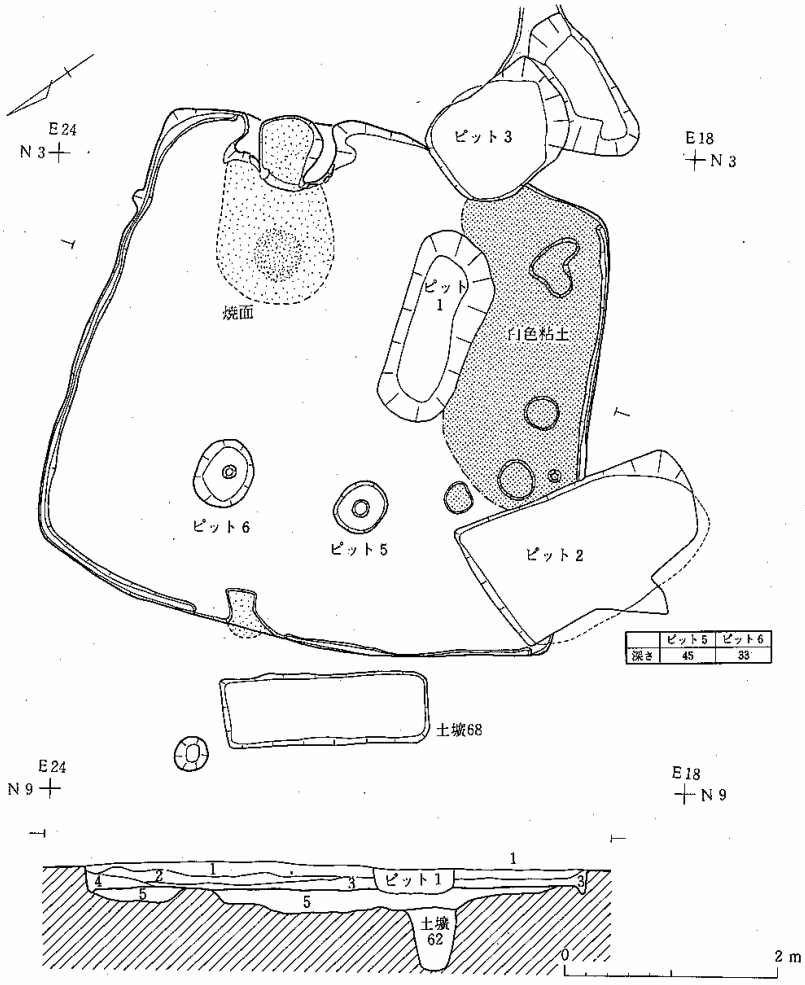
大形のもの（5図3〜5、6図、7図1・2）はいわゆる長胴形のものである。胴部外面の調整は最終的にはヘラケズリであり、それは下半部に施されるものが多い。上半部については、ヘラケズリの前段階としてロクロ回転を利用した刷毛目（回転刷毛目）の施されるものがかなりあり、またそれ以前に平行タタキの痕跡が認められるものも多い。回転刷毛目が施されないものはヘラケズリが胴上部まで及んでおり、7図2のように胴部のほぼ全面に施されているものもある。内面調整は回転刷毛目もしくはナデである。

中・小形のもの（7図3〜5、8図1〜6）もヘラケズリを最終調整としている。ただし前段階として回転刷毛目が施されるものは7図3の1例のみであり、大形のものとでは対照的である。7図3は、胴部上半に回転刷毛目を施し、下端部分は広い範囲を回転ヘラケズリ技法によって整形しており底面には回転糸切痕が観察されるものである。他のものはロクロ調整ののちヘラケズリによって整形されている。ヘラケズリの位置は下半部である場合が多く、特に小形のもの（8図6）では下端部のみである。

底面は、ヘラケズリの施されるもの、回転糸切痕を残すものなどもあるがその量は少なく、全般に雑なナデ調整のものや特に調整の痕跡の認められないものが大半である。

小形鉢（第8図7)

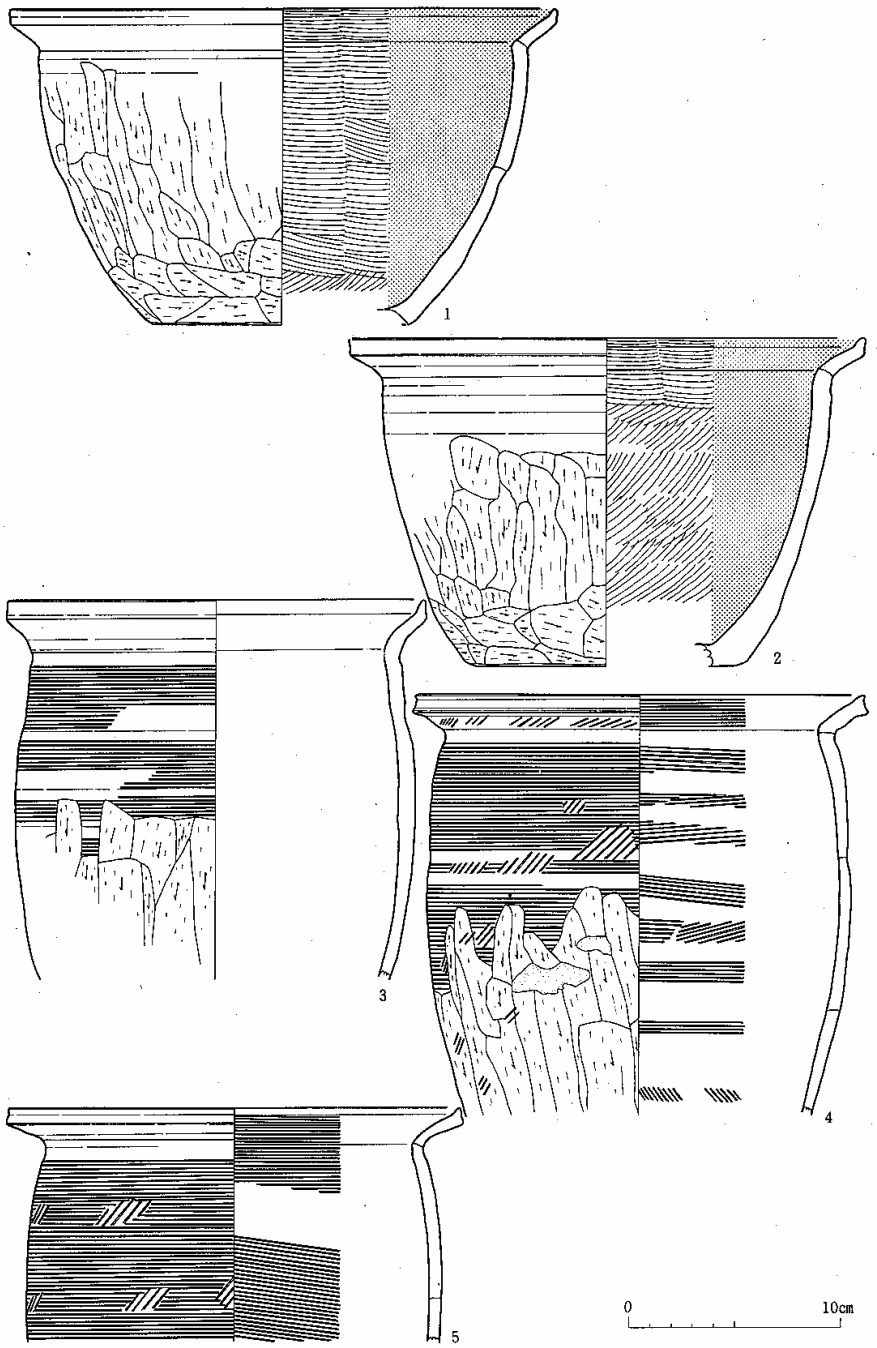
製作に際しロクロ使用痕跡は認められない。頭部でわずかにくびれて口縁部は外傾する。頸



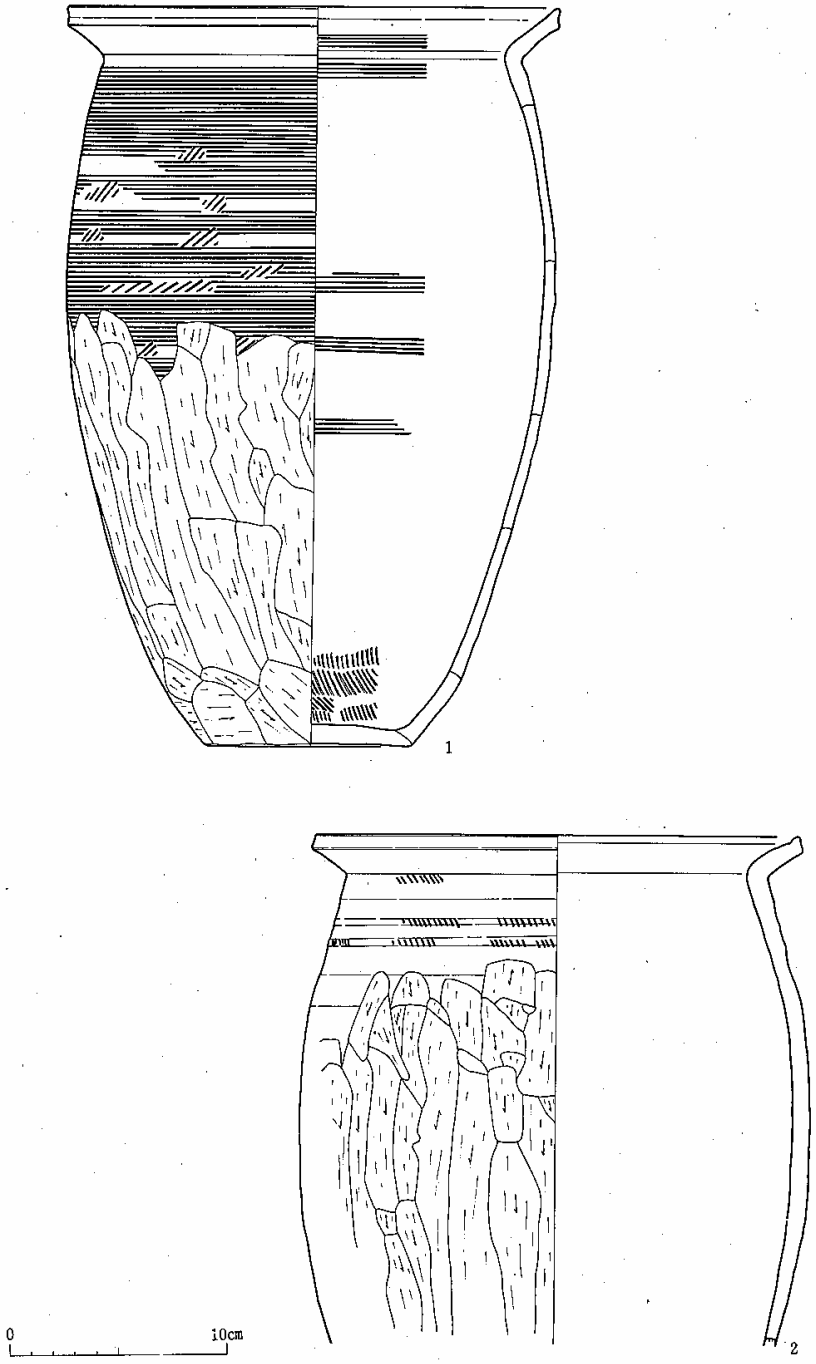
	ピット5	ピット6
深さ	45	33

No	土色	混入物等	備考	遺物とり上げ
1	暗かっ色土	地山粒ややまじる		1 層
2	黄かっ色土	地山土多量にまじる		〃
3	黒かっ色土	焼土・木炭がややまじる		2 層
4	暗かっ色土			2 層
5	黄かっ色土	よごれた地山土、所々に暗かっ色土も分布	住居据方埋土	

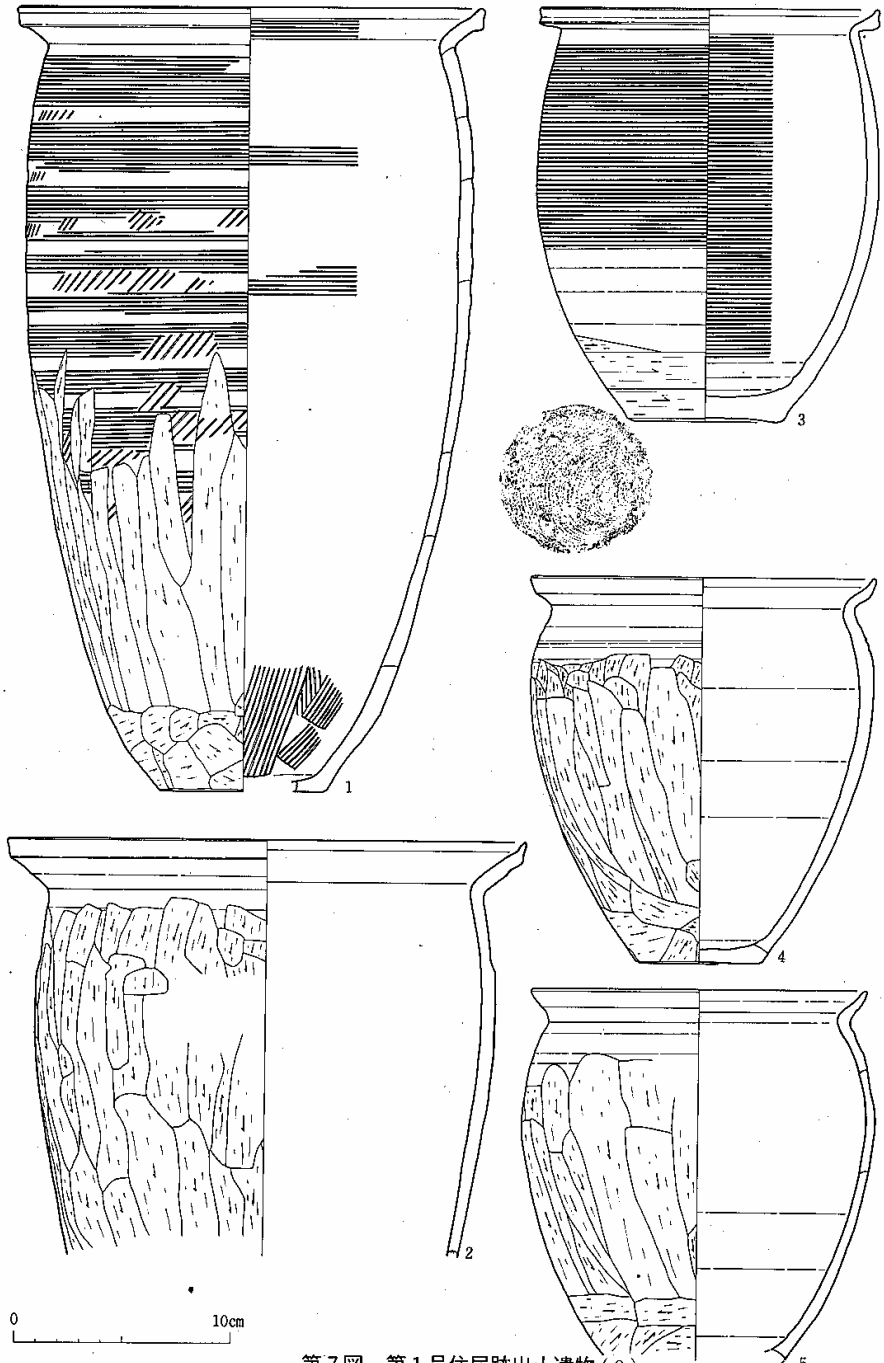
第4図　第1号住居跡



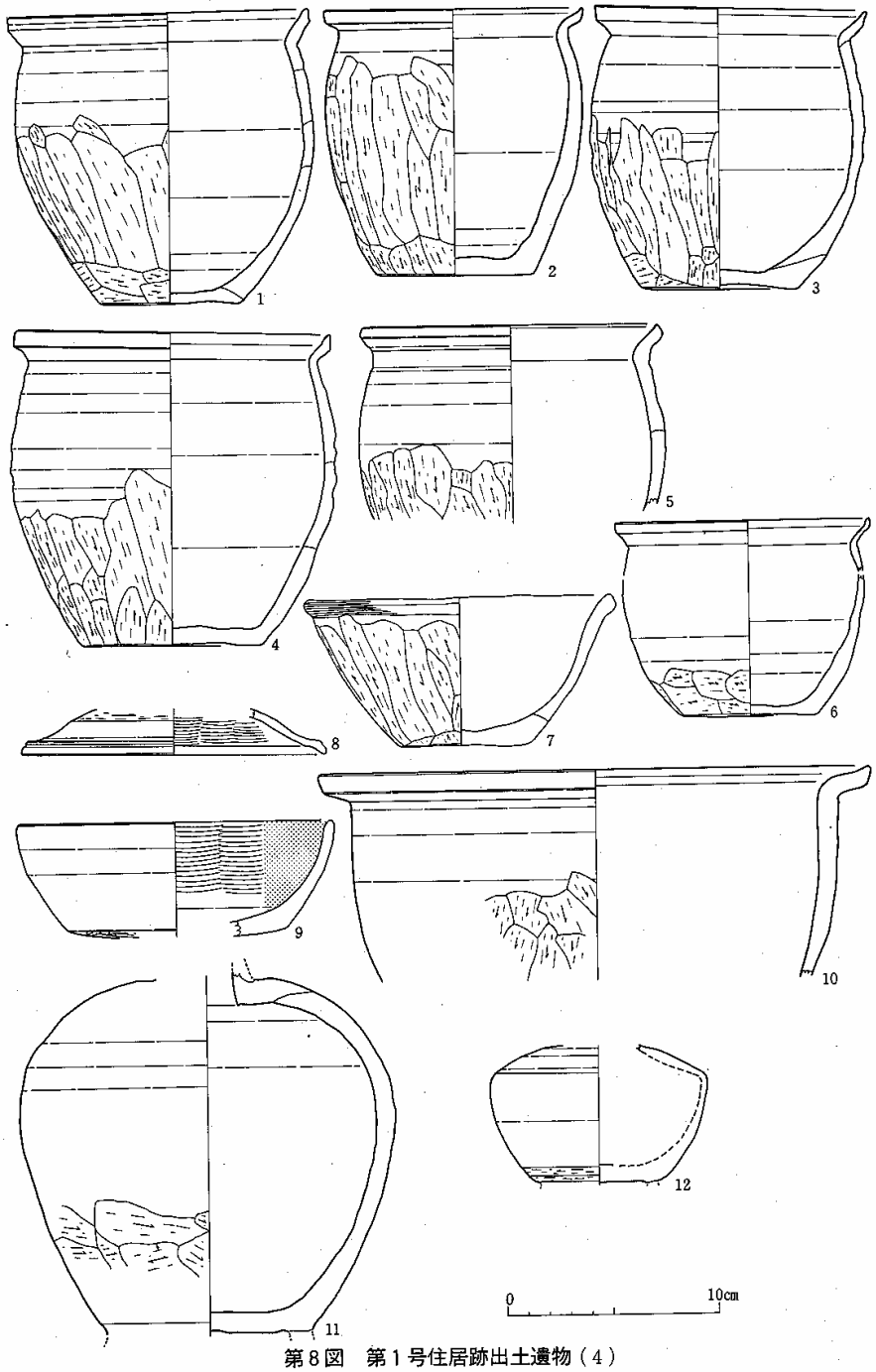
第5図　第1号住居跡出土遺物（1）



第６図　第１号住居跡出土遺物（２）



第７図　第１号住居跡出土遺物（３）



第８図　第１号住居跡出土遺物（４）

部以上の内外面にはヨコナデ、胴部外面にはヘラケズリ、底面には雑なナデが施されている。内面はナデ調整で仕上げられている。

坏（第8図9）

堆積土1層から出土した。内弯気味に立ち上がり器高の高いものである。外面にロクロ使用痕跡が明瞭である。破片のため明確ではないが、底部は丸底風に弯曲しておりやや安定性に欠ける。底外面には手持ヘラケズリによる調整が加えられている。

蓋（第8図8）

堆積土2層から出土した。ツマミ部分は欠損している。器高の高いものである。内面にわずかにヘラミガキと思われる痕跡はあるが、黒色化はなされておらず、あるいは後に述べる「赤褐色を呈する土器」の範囲に含まれるのかもしれない。

須恵器　鉢・壺・坏・高台付坏・高坏・高台付皿・蓋がある。

鉢（第8図10）

頸部でほぼ直角に屈曲し、口縁端部がわずかに上方に立つ。胴部は上端に最大径を有し、以下はやや弯曲しながら底部へ至るものである。外面胴下半にヘラケズリが施されている。

壺（第8図11、12）

二点出土している。高台のつく長頸瓶であるがいずれも高台部・頸部以上が欠損している。大小の別がある。大形のもの（11）は胴上部が球形に膨らんで底部へ至るものであり、小形のもの（12）は上部で大きく張って底部へ至るものである。前者では体下部に手持ヘラケズリ（ただしその後雑にナデ調整が加えられている）が、後者は下端に回転ヘラケズリが施されている。

坏（第9図、第10図1～3）

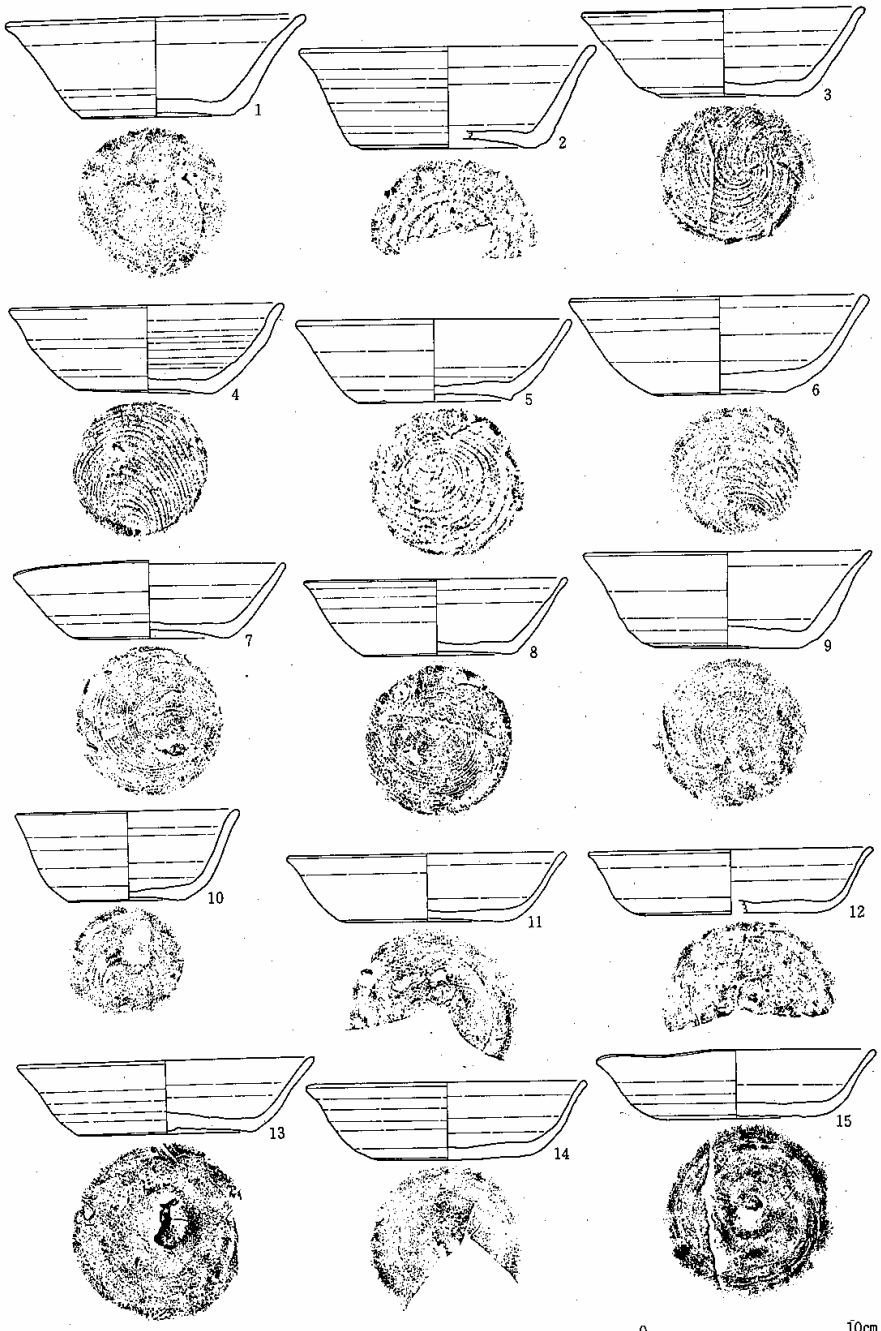
底部の切離しが、回転糸切技法によるもの（9図1～10）、ヘラ切技法によるもの（9図11～15、10図1、2）、手持ヘラケズリ再調整のため不明なもの（10図3）とがある。堆積土出土のものも多いがいずれの種類とも床面上もしくは床面上ピットからの出土がある。概してヘラ切り技法のものは器厚が薄くまた口縁部がわずかに開くのに対し、回転糸切技法のものは器厚が厚く体部から口縁部にかけては直線的に外傾する。手持ヘラケズリ調整のものは回転糸切技法のものに近い。

高台付坏（第10図4）

坏部は口縁部が外傾し底部は丸味をもつ器形である。高台は低い。坏部の切離し技法は高台接合時のナデ調整のために不明である。

高坏（第10図5）

坏部は、底部が丸味を帯びそれから胴部がほぼ水平近くにのびさらにその端が直角に折れまがって口縁部となるもので、皿に近い器形である。脚部は外反して開き先端に口縁部縁帯状に



第９図　第１号住居跡出土遺物（５）

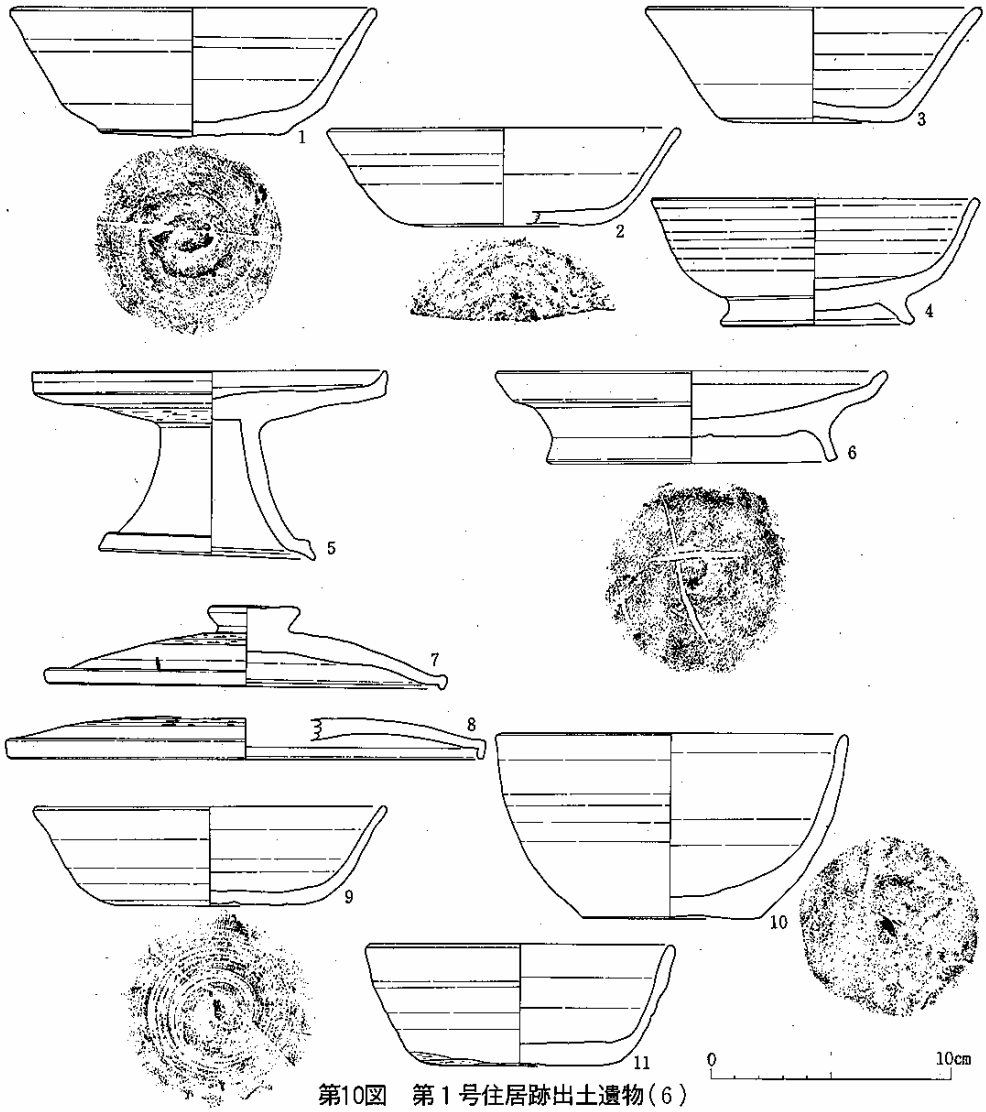
屈曲してつくり出された明瞭な裾部をもつ。

高台付皿（第10図6）

皿部の器形は前記高坏坏部とほぼ同様であるが口縁部がやや外傾する。高台は比較的高く均一の厚さ・傾きでのびている。皿部はヘラ切り技法によって切り離されたものである。底外面に「×」印のヘラ書きがある。

蓋（第10図7、8）

二点出土している。8はツマミ部分を欠くが、7は低い宝珠形のツマミがつけられている。いずれも天井部は水平に近い低平な器形で、口縁部は直角におりまげてつくられている。口縁



第10図　第１号住居跡出土遺物（６）

端部は丸くおさまる・

赤褐色を呈する土器（第10図9－11）

坏3点が出土している。10は、丈が高く埦に近いとも考えられるものである。内外面ともロクロ調整で、底部はヘラ切り技法によって切離されている。底部周縁にはわずかにナデ調整がみられる。

11は、須恵器坏に比し器厚の厚いものでまた器高も高く、器形的には土師器坏に近い。底全面に手持ヘラケズリ技法による再調整が加えられており再調整は一部胴部下端にも及ぶ。

9は、器厚が薄くまた底部は丸味をもつなど前二者とはやや様相を異にする。底部はヘラ切り技法によって切離され再調整はない。

鉄製刀子（図版24－7、8）

断片が三点出土している。いずれも床面上出土である。一点は身部、二点は茎部片で、茎部片はその外側に木質部が残存している。

1号住居跡遺物表

図版番号	出土層位	種類	器形	口径	器高	備考	登録番号	図版番号	出土層位	種類	器形	口径	器高	備考	登録番号
第5図1	掘り方	土師器	甕(鉢形)	25.7	15.0	内黒	1住17	第9図2	1層	須恵器	坏	14.0	4.8	回転糸切	1住26
2	カマド内	〃	〃(〃)	24.2	15.4	〃	18	3	床面	〃	〃	13.3	4.1	〃	35
3	〃	〃	〃(大)	19.7			4	4	ピット2	〃	〃	13.0	4.2	〃	34
4	〃	〃	〃 〃	21.1			7	5	カマド内	〃	〃	13.0	3.9	〃	31
5	床面	〃	〃 〃	21.4			3	6	床面	〃	〃	14.1	4.6	〃	42
第6図1	〃	〃	〃 〃	22.5	34.2		1	7	〃	〃	〃	12.8	3.7	〃	38
2	〃	〃	〃 〃	22.3			5	8	1層	〃	〃	12.4	3.6	〃	30
第7図1	〃	〃	〃 〃	21.6	36.5		2	9	床面	〃	〃	13.6	4.5	〃	41
2	カマド内	〃	〃 〃	24.0			6	10	〃	〃	〃	10.6	4.2	〃	37
3	床面	〃	甕(中)	15.7	19.1		15	11	1層	〃	〃	13.2	3.2	ヘラ切り	28
4	〃	〃	〃 〃	16.0	17.9		9	12	2層	〃	〃	13.4	3.0	〃	25
5	〃	〃	〃 〃	15.6	(17.3)		10	13	床面	〃	〃	14.0	3.5	〃	29
第8図1	〃	〃	〃 〃	14.2	13.9		12	14	1層	〃	〃	13.3	3.6	〃	27
2	〃	〃	〃 〃	12.2	12.7		13	15	床面	〃	〃	13.2	3.2	〃	36
3	〃	〃	〃 〃	12.8	13.6		39	第10図1	×	〃	〃	15.2	5.4	〃	43
4	〃	〃	〃 〃	14.9	15.0		14	2	床面	〃	〃	14.7	4.1	〃	37
5	掘り方	〃	〃 〃	14.3			8	3	ピット5	〃	〃	14.0	4.9	手持ケズリ	24
6	床面	〃	甕(小)	12.0	9.3		16	4	床面	〃	高台付坏	13.6	5.3		44
7	〃	〃	小形鉢	14.8	7.0		11	5	〃	〃	高坏	14.8	7.9		33
8	2層	〃	蓋	14.4		非黒色	18	6	〃	〃	高台付皿	16.4	3.8	ヘラ切り	45
9	1層	〃	坏	15.0	(5.4)	内黒・手持ケズリ	19	7	〃	〃	蓋	16.8	3.4		46
10	床面	須恵器	鉢	26.0			22	8	〃	〃	〃	20.0			23
11	〃	〃	蓋				20	9	〃	赤褐色を呈する土器	坏	14.8	4.1	ヘラ切り	48
12	掘り方	〃	〃				21	10	〃	〃	〃	14.7	7.7	〃	47
第9図1	床面	〃	坏	14.2	4.7	回転糸切	40	11	〃	〃	〃	13.0	5.0	手持ケズリ	32

1号住居跡破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面－内面	1層	2層	床面	カマド	掘方埋土	ピット 1	ピット 3	ピット 5	ピット 6	掘り方	×
土師器	坏	口縁	ロクロ 内黒	1	1		1	1						
			ロクロ ミガキ		1									
		胴部	ロクロ 内黒	1										
		底部	手持ケズリ	2										
			ヘラ切り	1										
			不明		2				1					
	甕	口縁	ロクロ ロクロ	9	12	11	9	5		2			4	
			ロクロ ナデ										1	
			ロクロ 内黒										1	
			ロクロ 回転ハケメ										1	
			ケズリ 回転ハケメ		1									
			回転ハケメ ナデ		1									
		胴部	ロクロ ロクロ							1				
			ロクロ ナデ	8	8	8	4	3					2	1
			ロクロ 回転ハケメ		1									
			ケズリ ナデ	41	56	26	40	34	10	6	3	2	24	9
			ケズリ ハケメ	3	6	11	4	1					1	
			ケズリ 回転ハケメ	4				2						
			ケズリ 不明	1										
			回転ケズリ ナデ			1	5						1	
			回転ハケメ ナデ					3						
			回転ハケメ→ケズリ ナデ								1			
			格子タタキ ナデ	3	2		4							
			平行タタキ ナデ	2			1	7						
			平行タタキ→ケズリ ナデ			1								
			平行タタキ 不明	5										
			不明 ナデ					5						
			不明 不明	2	22	7	9	6		3			2	
		底部	糸切り					1						
			ヘラ切り			1								
			ヘラ切－ケズリ					1						
			ケズリ	1		1							1	
			ケズリ ハケメ		1									
			ナデ	2		2	3	1					1	
			不明	4		1	1	2					2	
			ロクロ不使用		1									
	蓋	口縁	ロクロ 内黒		1									
			ミガキ 内黒			1								
須恵器	坏	口縁	ロクロ ロクロ	8	8	3		5					2	
		胴部	ロクロ ロクロ	3	4	1								
		底部	糸切り			1								
			ヘラ切り			1							1	
			手持ケズリ	1										
			不明	1				1	1				1	
	甕	胴部	ロクロ ナデ	1										
			ケズリ ナデ			1								
			平行タタキ ナデ	1	1									
	壺	胴部	ケズリ ナデ			1								
			不明	1										
	蓋	口縁	ロクロ ロクロ	4						1				
赤褐色を呈する土器	坏	口縁	ロクロ ロクロ	3		2	1	1					1	
		底部	ヘラ切り	2		1							1	
			ケズリ	1										
			不明	1										
	高台付坏	高台	ロクロ ロクロ		1									
	甕	胴部	平行オサエ										1	
	蓋	口縁	ロクロ		1	1		1						

第2号住居跡（第11図）

〔重複〕　土壙47・58と重複している。本住居は両土壙を切って構築されている。また住居内に堆積土上部から掘りこまれたピットが1ヶある（ピット3）。

〔平面形・規模〕　平面形は方形を基本とし、規模は一辺4.5m前後である。ただし、東辺と南辺はほぼ直角に接続しているものの、北辺のみが辺長4.0mと短いため南辺・西辺連結部が90°より小さく、逆に北辺と東西辺連結部が90°より大きくなり、ややゆがんだものとなっている。

〔堆積土〕　堆積土はいずれも自然流入によるものである。流入の過程は、比較的小単位で各壁際が埋まったのち、住居中央部床面まで達する層が各方向から互い違いに流入し、最後に凹みとなった住居跡に堆積するという大別して三段階が認められる。

〔壁〕　土壙と重複している部分を除いて地山を壁としている。残存壁高は20〜30㎝あり、比較的ゆるやかに立ち上がっている。

〔床面の状況〕　地山を床としている。面はほぼ平坦で、中央部が周縁部よりわずかに低い。床面上の遺構としては南東隅において検出された円形のピット（ピット1）がある。底面における規模は70×50㎝、床面からの深さは15㎝〜20㎝で壁の一部は住居壁を共有している。遺物等の出土もなくその性格は明らかでない。また南辺西部の壁沿いに幅15㎝深さ4〜10㎝の溝が約1mの長さで検出された。溝は一部分のみであり周溝とは呼び得ない。他に床面上から小ピット4個検出されたが、それは深さ・規模ともに一様ではなく、また配置も不規則で柱穴と考えられるものではない。

なお住居掘方は認められなかった。

〔その他の遺構〕　東辺南部の住居壁に接してカマド状遺構が検出された。白色粘土によって平面形U字形に構築したもので、現存する粘土の高さは10〜12㎝ある。U字状の内面の壁および底面は焼けて赤変しており、住居におけるカマドと同様の構造をもつものであると考えられる。しかし構築面は住居床面より8〜10㎝高い堆積土（層№10）上面であり、本住居跡と直接の関連はない。また遺構面に連続するような形での他の遺構等は確認されなかった。

ピット	1	2	3	4	5	6
深　さ	19	19	10	10	30	—

〔出土遺物〕　出土遺物は土師器・須恵器である。それらは破片が多く、また堆積土出土のものが大半で、床面上出土の土器は別表のように極めて少ない。図示可能な土器は5個体あるがすべて堆積土中から出土したものである。

土師器　甕・甑（？）がある。

甕（第11図1）

内面にヘラミガキ・黒色処理が加えられた鉢形に近いものである。体部上半以上の小片であ

り器面調整等は不明である。

甑（第11図2）

口縁部破片のみのため明確ではないが甑と考えられる。また小破片のため口径の推定は正確さを欠く。胴部から口縁部へかけて、わずかにくびれる部分もあるが、ほぼ垂直に立ち上がり、口縁・胴部の境は明瞭でない。口縁部上端は平坦で水平である。器面調整は内外ともロクロ調整である。

須恵器　甕・坏がある。

甕（第11図3）

頸部で「く」字状に外反し口縁端部は断面三角形に近い。胴下半部を欠損するため全体形については不明である。器面調整は、現存部分（胴上半以上）では内外ともロクロ調整で、胴部外面に前段階の平行タタキの痕跡が認められる。

坏（第11図4、5）

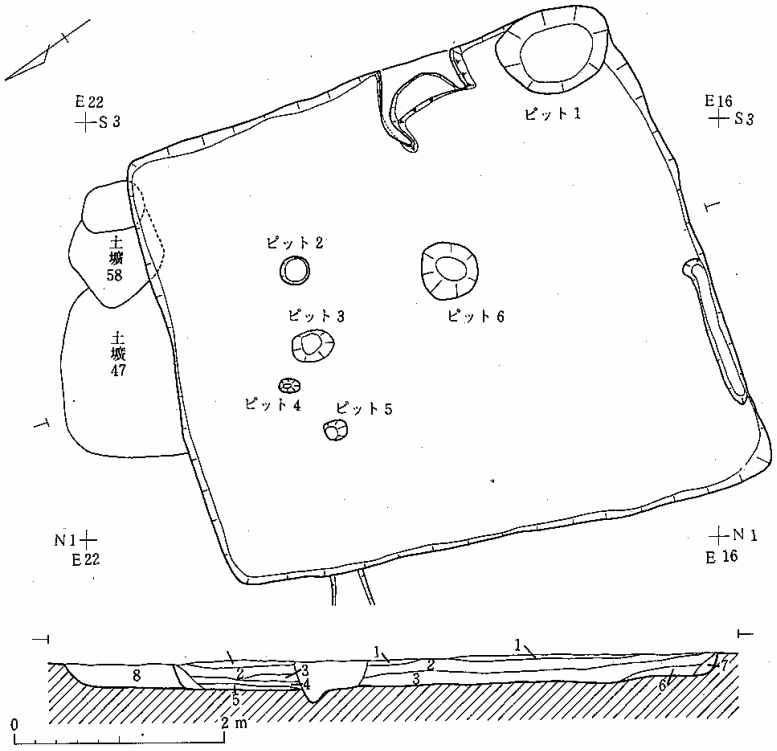
図示可能なものは2個体ある。底部切離し技法が回転糸切のもの（4）と、手持ヘラケズリ再調整が施されているため不明のもの（5）とである。

2号住居遺物表物表

図版番号	出土層位	種類	器形	口径	器高	備考	登録番号	図版番号	出土層位	種類	器形	口径	器高	備考	登録番号
第11図1	2・3層	土師器	甕(鉢形)	25.0		内黒	2住1	第11図4	5層	須恵器	坏	13.2	4.7	回転糸切	2住4
2	3層	〃	甑	23.3			2	5	3層	〃	〃	14.2	4.0	手持ケズリ	3
3	5層	須恵器	甕	15.5			5								

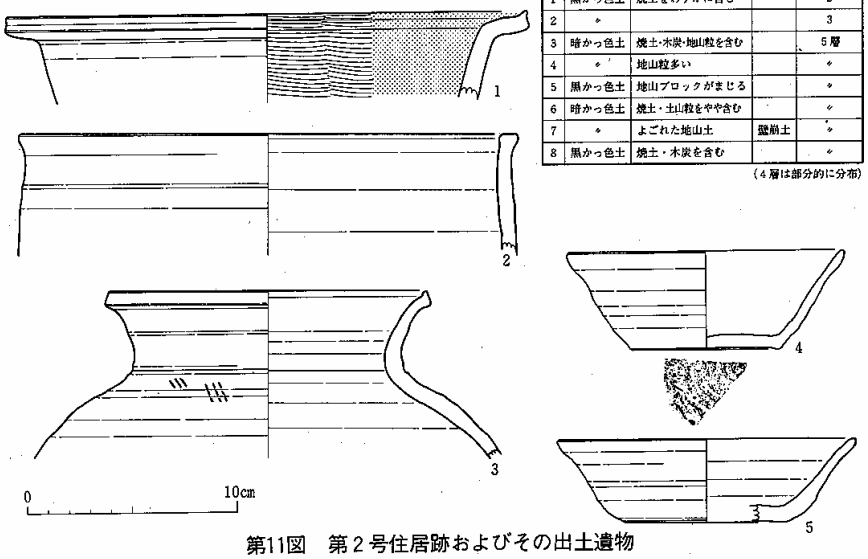
2号住居跡破片集計表

種別	土師器																										須恵器													赤褐色			
器形	坏							甕																			坏						高台付坏	甕			壺			坏		甕	蓋
部位	口縁	胴部			底部			口縁			胴部											底部					口縁	胴部	底部				高台	胴部		底部	頸部	胴部		口縁	胴部	胴部	
器面調整 外面	ロクロ	ロクロ	ケズリ	ミガキ(黒色)	糸切り	ケズリ	不明	ロクロ	ロクロ	平行タタキ→ナデ	ロクロ	ロクロ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	回転ケズリ	ハケメ	回転ハケメ	格子タタキ	平行タタキ	不明	ケズリ	ケズリ	ナデ	布目痕	不明	ロクロ	ロクロ	糸切り	ヘラ切り	ケズリ	不明	ロクロ	平行タタキ	平行タタキ	ナデ	ナデ	ナデ	回転ケズリ	ロクロ	ロクロ	平行タタキ	宝珠
器面調整 内面	内黒	内黒	内黒	内黒	内黒	内黒	内黒	ロクロ	内黒	ナデ	内黒	ナデ	内黒	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ			内黒				ロクロ	ロクロ					ロクロ	青海波	ナデ		ナデ	ナデ	ナデ	ロクロ	ロクロ	オサエ	
1層								2						3							7																						
2層								2					2	9	1						10						2					1										1	
3層	1	1	1		1	1		8	4		4	14	8	58	1			2	3	1	21		1	3		1	2	3	1	1	4		1	1		1	1		1			1	1
2・3層	1					1		3	1			6	4	34	2	1	1				10	2	2	2			3								1		1		1				
4層								1				2		2				1	1		6																						
5層						1	1	7		1	1	13	10	85	4			1	1	1	15	1				6	2	2					2		3					1			
床面						1						1		6					1		1		1	1																			
掘方埋土								1				6		29							7			2	1																		
ピット1												1										1																					
×	1	1		1							1		8										1				5	2			1						2	1		1	3		



No	土色	混入物等	備考	遺物とり上げ
1	黒かっ色土	焼土をわずかに含む		2
2	〃			3
3	暗かっ色土	焼土・木炭・地山粒を含む		5層
4	〃	地山粒多い		〃
5	黒かっ色土	地山ブロックがまじる		〃
6	暗かっ色土	焼土・土山粒をやや含む		〃
7	〃	よごれた地山土	壁崩土	〃
8	黒かっ色土	焼土・木炭を含む		〃

（4層は部分的に分布）



第11図　第2号住居跡およびその出土遺物

第3号住居跡（第12図）

〔遺構の確認〕　本住居跡は確認時において多くの土壙等と重複しており、また重機による攪乱も加えられていたために、明確な規模等の確認を行うことが困難であった。このため掘り下げと併行しながらその確認作業を行った。しかし、その間において、のちに住居床面で確認された多くの土壙・ピットと住居との関連の把握が不十分であったために、住居の構造その他について不明瞭となった部分がある。したがって以下の記述は最終掘り下げ状態をもとにして行うこととする。

〔重複・改築〕　住居壁部分において4個（3住ピット13、24、25、28）、住居内において1個（3住ピット2）以上の土壙によって切られている。また本住居跡は拡張が行なわれたと考えられる住居跡である。拡張以前の住居については後の「床面および床面下の状況」の項で詳述する。

〔平面形・規模〕　東西にやや長い方形であり、その規模は5.3×4.7～4.9mである。

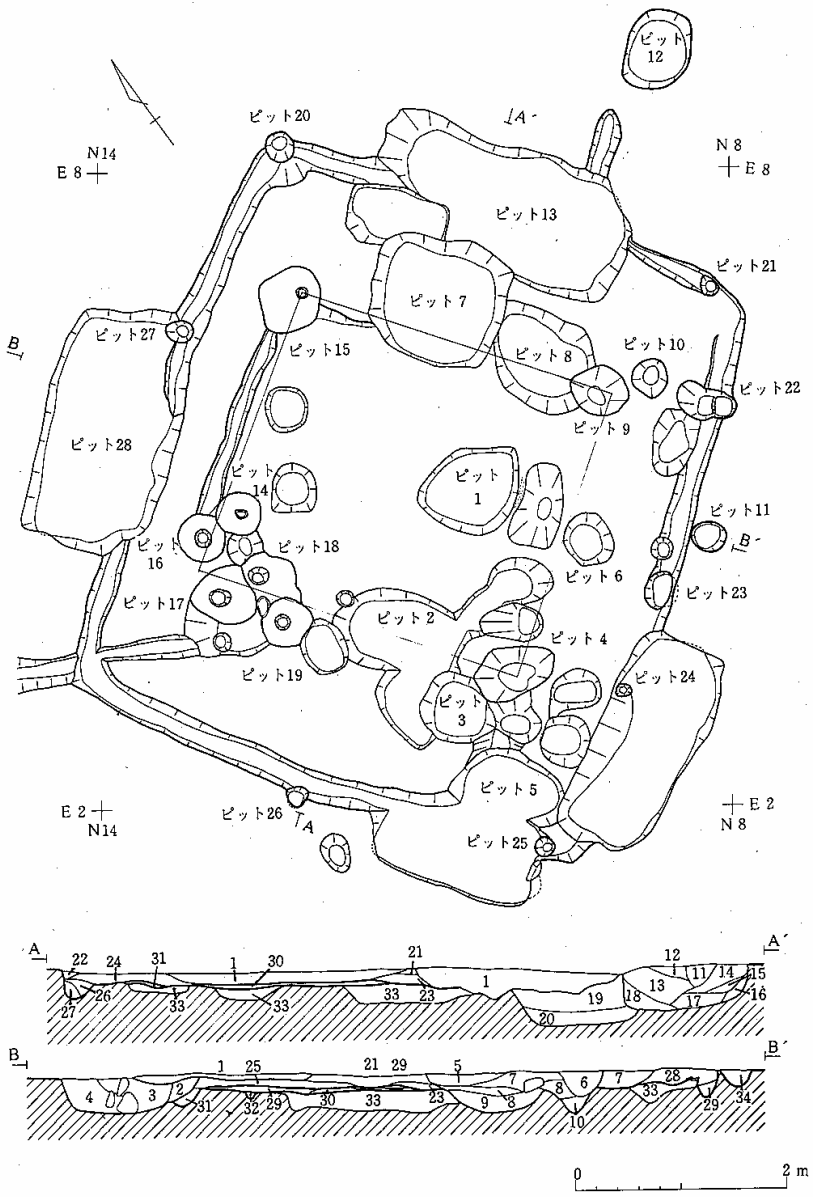
〔堆積土〕　住居内には後に掘りこまれ床面下に達する土壙・ピットや、重機による床面下までの攪乱部分が多い。このため住居全域の堆積土の状況を知り得る部分はほとんどないが部分

3号住　ピット

ピット	備　　考	深　さ
1	住居より新	—
2	拡張前	18
3	拡張前か後か不明	11
4	柱　穴	43
5	拡張前か後か不明	22
6	〃	22
7	住居より新（？）	—
8	拡張前か後か不明	24
9	柱　穴	69
10	拡張前か後か不明	44
11	拡張前煙出しか？	24
12	他の遺構か？	18
13	住居より新	—
14	拡張前か後か不明（柱穴）	50
15	柱　穴	43
16	拡張前か後か不明（柱穴）	34
17	〃	50
18	〃	50
19	〃	44
20	壁柱穴（拡張後）	28
21	〃	10
22	〃	43
23	〃	19
24	〃	24
25	〃	33
26	〃	30
27	〃	34
28	住居より新	—

層　　位

No	土　色	混　入　物　等	備　　考	遺物取上げ
1			攪　乱　土	
2	黄かっ色土	よごれた地山土	ピット28	
3	暗かっ色土	やわらかい		
4	黒かっ色土	やわらかい		
5	黄かっ色土	よごれた地山土		
6	黒かっ色土	焼土・木炭まじる		
7	暗かっ色土	焼土・木炭まじる		
8	〃	地山粒多くまじる		
9	暗かっ色土	黒色土・地山土がまだら状にまじる	ピット1	
10	黄かっ色土	よごれた地山土		
11	暗かっ色土	やわらかい		
12	〃	地山土多くまじる	ピット13	
13	〃	〃		
14	黒かっ色土			
15	黄かっ色土	よごれた地山土		
16	黒かっ色土			
17	〃			
18	黄かっ色土	よごれた地山土	ピット7	
19	暗かっ色土	地山土多くまじる		
20	暗かっ色土	焼土がまじる		
21	暗かっ色土		住居堆積土	1　層
22	黒　色　土			
23	暗かっ色土	地山ブロックまじる		
24	〃	焼土ややまじる		
25	〃	地山粒ややまじる		
26	〃	地山土多くまじる	周　溝	
27	黒かっ色土			
28	暗かっ色土		住居堆積土	1　層
29	黒　色　土	木炭まじる	生 活 層	床　面
30	暗かっ色土	地山土多い、かたい	貼　　床	床面下
31	〃	地山土まじる	周　　溝	
32	黒かっ色土	〃	〃	
33	暗かっ色土	地山土多い	掘方埋土	
34	〃	焼土・木炭まじる	煙 出 し	ピット11


ピット12
ピット20
N14
E 8
N 8
E 8
ピット13
ピット21
ピット7
ピット27
ピット15
ピット8
ピット10
ピット22
ピット9
ピット28
ピット14
ピット1
ピット11
ピット16
ピット18
ピット6
ピット23
ピット17
ピット2
ピット4
ピット19
ピット24
ピット3
ピット5
E 2
N14
ピット26
ピット25
E 2
N 8
0
2 m

第12図　第３号住居跡

的に残存する北および南辺沿いの状況からみると自然流入によって堆積したものと考えられる。
〔壁〕　地山を壁としている。残存壁高は10㎝前後である。
〔床面および床面下の状況〕　床面は、地山を床面としている部分と、貼り床の部分とがある。貼り床は地山土（ローム）を主体とする粘質の強い層によってなされており、厚さは1〜5㎝である。地山部分は住居の壁に沿った部分で幅0.3〜1.2mの範囲である。貼り床部分の範囲は必ずしも明確ではないが、地山部分の内側ー住居中央部に認められる。また地山部分はほぼ平坦であるが、貼床部分ではその厚さの違いによってやや凹凸がある。ただし凹んだ部分には生活層が厚く形成されているから、住居使用時においてはほぼ平坦であったと推定される。

ところで、北辺内側約60㎝のところで東西方向に北辺に平行する長さ1.8mほどの溝が確認された。深さ10㎝、幅15〜20㎝のものである。さらに床面下の掘り下げにおいて、溝ではないが、東辺内側約1.4mの部分で溝と直角の関係にある高さ5㎝ほどの段が南北方向に約50㎝の長さで認められた。両者の間にはピット15が存在するから直接的には連続しないが、両者ともそれ以後にはのびていないことから一連のものと考えられる。そしてこの溝の段を境として、外側は地山を床とする部分であり、内側には貼り床が認められる。内側で貼り床が分布しない部分においても地山を床とする部分よりも低くなっている。つまり、この区画は拡張以前の住居の区画であると考えられる。区画がある程度推定できる部分はこの北東隅部分のみであるが、貼り床の広がり（断面図参照）からみると東西方向は 4mほどと考えられる。南北方向については貼り床の分布が認められず不明である。ただしピット1東側に、それに切られてはいるもののわずかに地山が焼けて赤変している部分があり、さらにその 1.6m東に焼土のまじるピット11が存在している。この両者を一体のものとしてカマドの痕跡（焼焼部と煙出部）と考えると南北 3m前後の規模が推定できる。内部は後世の掘り込みによって失なわれているところが多いが、床面下に部分的に掘方と考えられる落ちこみも確認されている。なお、貼り床下から検出され拡張以前の住居に伴うと考えられるピットもあるが柱穴と推定できるものはない。

以上のように拡張前の住居は一辺 3〜4mの方形を基調とするもので東辺にカマドを付設し、一部に周溝が巡っていたことが想定される。床面は掘り方埋土上面を床としていたと考えられる。

拡張に際しては、以前の住居床面には貼り床を施して新たな床とし、ほぼ相似形に北へ 0.5m、東へ1.4m、南へ1.3m拡げている。西方向については、貼床の範囲をもとにすると0.3m、後にのべる柱穴の規則性を考慮すると 1.1m拡げている。そして拡張部分は地山をそのまま床としているところが多い。拡張によって得られた面積は9㎡前後であると考えられる。
〔柱穴〕　住居内において検出されたピットは多数あり、なかには柱痕跡の確認できたものもある。それらの配置状況や、深さ・規模等の比較によって、本住居には主柱が対角線上に4本

存在していたことが考えられる。その柱穴は、北東隅はピット 15、南西隅はピット 4 である。南東隅はピット 9・10 のいずれか、北西隅はピット 14・16・17・18・19 のいずれかと考えられ、配置の規則性を考慮すると、それぞれピット 9、ピット 16 の可能性が高い。その場合、各柱間隔はほぼ 3mとなる。なお、南東、北西隅では柱穴と考えられるピットが複数あるが北東、南西では、単一であり、拡張後においても基本的には柱の位置は移動していないと見られる。そうした場合、北東・南東隅の柱は拡張前住居の角にあたることになる。この規則性を考慮して拡張前住居の柱の配置は、住居角にあったと考えると、拡張前住居は一辺 3mほどになる。

また壁に重複して小規模なピットも検出されている（ピット 20〜27）。それらは住居各隅（北西隅は不明）と各辺に 1〜2 個認められ、なかには住居内側に傾斜しているものもある。壁柱穴としての性格をもつものであろう。

〔周溝〕　拡張後の住居には周溝が巡っている。後の掘り込みによって失われている部分もあるがほぼ全周していたと考えられる。底面幅 10〜15 ㎝、床面からの深さ 10〜15 ㎝のものである。

〔カマド〕　カマドは東辺南部に存在していたものと思われる。ただし焼焼部と考えられる部分は住居より新しい土壙（ピット 13）によって完全に失われており、煙道部のみが残存しているにすぎない。煙道部は住居壁から約 60 ㎝のびている。煙道部前方には径約 80 ㎝のピット（ピット 12）がある。堆積土中に焼土・木炭が多量にまじっているため、当初煙出し部とも考えたが、規模が大きすぎることから住居とは関係しない別の遺構の可能性もある。

〔出土遺物〕　出土した遺物は土師器・須恵器である。破片が多く作図可能なものは少ない。それらは住居床面上（拡張後）、堆積上および住居内ピットから出土したものである。ピットは拡張前、後、そのいずれともきめがたいものがあり、また堆積土を切って掘りこまれたものもある。したがってここで扱うことは不適なものもあるが、煩雑さを避けるためここで一括して述べその別を 68 ページ表に示す。

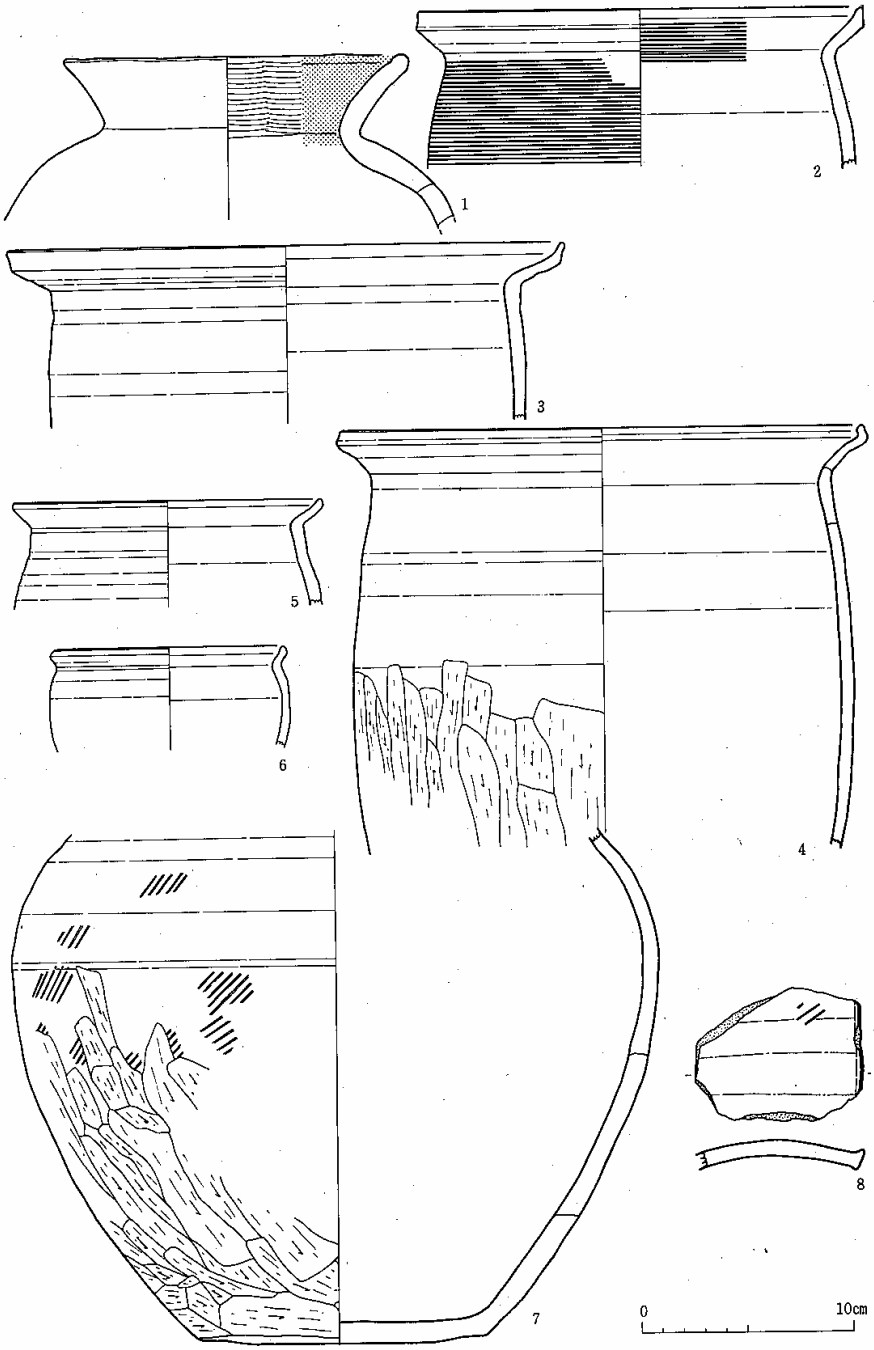
土師器　図示可能なものは甕五個体である。その他に器形不明のものがある。

甕（第 13 図 1〜6）

製作に際しロクロを使用しているものと使用しないものとがある。

前者（13 図 2〜6）ではさらに、大形で長胴形をなすもの（2〜4）と中・小形のもの（5・6）とがある。いずれも胴下半部が欠損しているため全体の器面調整は不明である。胴外面に回転刷毛目が施されるもの（2）がある。

後者（13 図 1）は胴部が球形に張り出し、壺形を呈すると思われるものである。内外面とも磨滅剥落が著しく器面調整は明確ではないが、頸部以上の内面にヘラミガキ・黒色化の痕跡が観察される。なお、ヘラミガキ・黒色化は胴部までは及ばないようである。



第13図　第３号住居跡出土遺物（１）

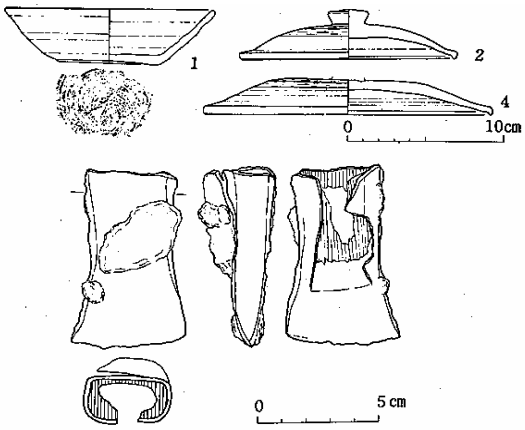
器形不明のもの（第13図8）

破片のため全体形が明らかでない。現状はややわん出した板状で側縁が面取られている。内外ともロクロ調整で凸面には前段階の平行タタキ目も観察され、その状況は長胴形甕の体部破片に似ている。

須恵器　甕・坏・蓋がある。

3号住居跡遺物表

図版番号	出土層位	種　類	器　形	口径	器高	備　考	登録番号
第13図1	ピット14	土師器	甕(壺形)	16.3		内黒、ロクロ不使用	3住2
2	×	〃	甕(大)	21.0			〃 3
3	ピット12	〃	〃	26.2			〃 4
4	〃	〃	〃	25.0			〃 1
5	床面下	〃	甕(中)	14.6			〃 6
6	〃	〃	甕(小)	11.2			〃 5
7	床　面	須恵器	甕				〃 7
8	1　層	土師器	不　明				
第14図1	〃	須恵器	坏	13.4	3.8	回転糸切	〃 8
2	1　層	〃	蓋	13.9	3.5		〃 10
3	床　面	〃	〃	18.4			〃 9
4		鉄　斧					



第14図　第3号住居跡出土遺物（2）

甕（第13図7）

胴部以下の破片である。外面は平行タタキののちロクロ調整が施され、その後下半部にヘラケズリが加えられている。ヘラケズリは底面にも施されている。内面はロクロを利用したナデ調整のみが観察される。

坏（第14図1）

回転糸切技法によって切離されたものである。胴部から口縁にかけて直線的に外傾している。

蓋（第14図2、3）

二点出土しているが、一点はツマミ部が欠損している。いずれもわずかに下方におりまげてつくり出した口縁部をもつものである。ツマミの明らかなものでは、それは低い宝珠形をなす。

鉄斧（第14図4）

長さ8.2㎝、刃部幅4.7㎝のものである。銎部は袋状になっており内部には木質部が残存している。銹化のため亀裂が生じているところもあるが、比較的保存はよい。

第4号住居跡（第15図）

〔重複〕　床面下において4個のピットが検出された。それらには住居廃棄時点には機能していないが、使用期間中には住居と伴ったと考えられるものを含んでいる。

3号住居跡破片集計表

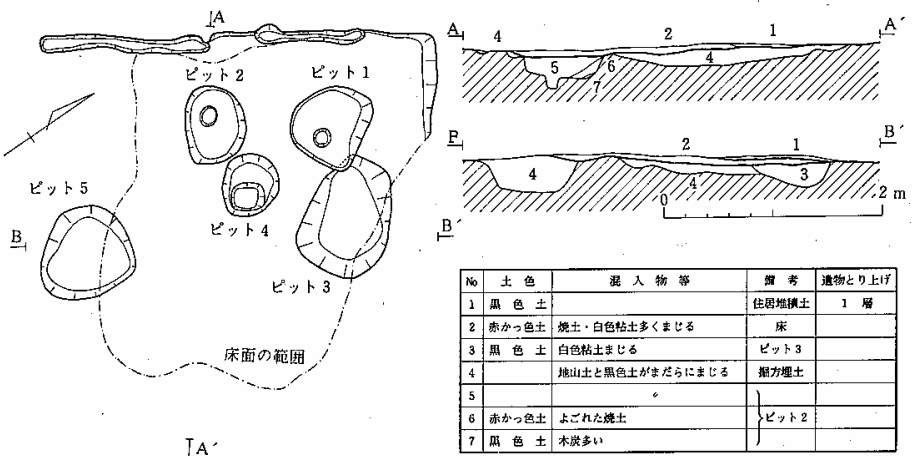
種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	1層	床面	床面下	掘方埋土	ピット 1	2	3	5	6	7	8	9	10	11	12	13	15	×
土師器	坏	口縁	ロクロ	内黒	2																	
		胴部	ロクロ	内黒	3	1														1		2
		底部	ケズリ	内黒	2																	
			不明	内黒																		1
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	20	18	10	34		8					6	3	3	1		2		
			ロクロ	内黒	1																	
		胴部	ロクロ	内黒	1																	
			ロクロ	ナデ	33	35	10	55	4	2		1		2	2	7	4		1	4		
			ケズリ	内黒										1						1		
			ケズリ	ナデ	76	141	16	182	19	23		1		10	17	8	8	1	5	5		
			ケズリ	ハケメ	1										1	1						
			ケズリ	回転ハケメ											1							
			ハケメ	ハケメ	1																	
			回転ハケメ	ナデ	10		1	26		4				1	1		1					
			回転ハケメ	ハケメ							1											
			回転ハケメ	回転ハケメ							3											
			格子タタキ → ナデ	ナデ		1																
			平行タタキ → ロクロ	ナデ													2					
			平行タタキ → ナデ	ナデ	1						1											
			平行タタキ→回転ハケメ	ハケメ											1							
			不明		143	219	13	120	6	11		3	2	8	7	8	4			15		
		底部	糸切り		1			2														
			ナデ		1	7	1	4	1										1	1		
			ケズリ																1			
			不明		5	5		4								1						
須恵器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ	2	2														1	1	3
		胴部	ロクロ	ロクロ	3	3																8
		底部	糸切り		3	1																
			ヘラ切り												1							1
			不明				1															1
	高台付坏	高台	ロクロ			1									1							
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ						1	1											1
		胴部	ナデ	ナデ	1	1																
			平行タタキ	青海波																		1
			平行タタキ	ナデ	3																	
赤褐色を呈する土器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ	2	1																2
		胴部	ロクロ	ロクロ	1																	
		底部	不明						1													
	蓋	口縁	ロクロ	ロクロ	1																	

〔平面形・規模〕　削平が著しく住居壁はまったく残存しない。また削平は床面にまで達している部分がある。このため平面形・規模の把握は困難であるが、西辺に幅10㎝、深さ5㎝ほどの周溝と考えられる溝が直線的に約3mのびており、またそれに連続して住居掘方の輪郭がさらに50㎝のびて直角に折れまがっていることから、平面形は方形を基調とし、規模は一辺3.5m以上と推定される。

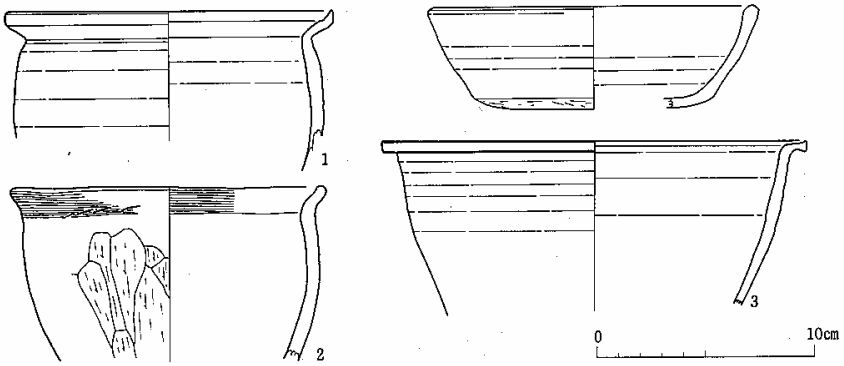
〔堆積土〕　周溝内と、床面上に部分的に1〜2㎝の厚さで残存するのみである。

〔床面の状況〕　床は白色粘土を主体とした貼床である。ただし貼床は住居全面に及ぶものではなく、周縁部では住居掘方上面を床としている部分もある。貼床は厚さ5〜8㎝に達するところもある。そして、確認時においてすでに貼床が露呈しておりその一部も削平されたと考えられることからかなり厚い貼床であったと思われる。

北　隅部で、貼床を切って径60㎝、深さ15㎝ほどの不整円形のピット(ピット1)が発見さ



No	土色	混入物等	備考	遺物とり上げ
1	黒色土		住居堆積土	1層
2	赤かっ色土	焼土・白色粘土多くまじる	床	
3	黒色土	白色粘土まじる	ピット3	
4		地山土と黒色土がまだらにまじる	掘方埋土	
5		〃	ピット2	
6	赤かっ色土	よごれた焼土		
7	黒色土	木炭多い		



4号住居跡遺物表

図版番号	出土層位	種類	器形	口径	器高	備考	登録番号
第14図1	ピット2	土師器	甕(中)	15.1			4住1
2	床面	〃	甕	14.5		ロクロ不使用	〃 2
3	ピット4	須恵器	鉢	19.6			〃 3
4	床面	赤かっ色を呈する土器	坏	15.2	4.7	手持ヘラケズリ	〃 4

4号住居跡破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	1層	床面	掘方土	ピット 1	ピット 2	ピット 3	ピット 4	×
土師器	坏	口縁	ロクロ	内黒			1		1			
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ		3	6	1	2	2		
			ロクロ	内黒						1	1	
		胴部	ロクロ	内黒	1				1			
			ロクロ	ナデ	1		1					
			ケズリ	内黒		1						1
			ケズリ	ナデ	2	15	9		2	1		
			格子タタキ	ナデ		1						
			平行タタキ	ナデ		1						
			不明				2					
		底部	ナデ	内黒		1			1			
			ナデ				1					
			不明				1					
須恵器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ		1						
		胴部	ロクロ	ロクロ								1
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	1							
		口縁	ロクロ	ロクロ	2							
		胴部	ロクロ	ロクロ	1							
赤褐色土器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ						1		
		胴部	ロクロ	ロクロ				1		1		
		底部	ヘラ切り							1		

第15図　第4号住居跡およびその出土遺物

れた。このピット部分ではその上部の住居堆積土が失われているために住居との新旧関係は不明である。

〔床面下の状況〕　貼床下面はかなりの凹凸がある。また部分的に住居掘方も認められた。貼り床下からは3個のピット（ピット2、3、4）が検出された。それらのうちピット3は住居掘方埋土を切っている。またいずれのピットからも遺物が出土しており、ピット2・4出土遺物は貼床（中）出土遺物との接合関係がある。このようなことから、貼床は第二次の住居床面としてつくられたものであり貼り床下のピットは第一次床面使用時に伴うものと考えられる。なお、ピット5はその堆積土が住居掘方埋土に近似しており掘り方に関連する掘りこみとみられる。また貼床上・下面いずれにおいても、柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

〔カマド〕　カマドは検出されなかった。ただし、貼床中に焼土がまじっており、またピット堆積土中にも焼土が層をなして流入していることなどからみて、カマドは構築されなかったのではなく後の削平によって失なわれてしまったものと考えられる。

〔出土遺物〕　出土遺物は土器類である。図示できるものは4個体ある。

土師器

甕（第15図1、2）

ロクロを使用したもの（1）とそうでないもの（2）とが各一点ずつある。いずれも中形のものであるがともに胴下半部を欠く。

前者は、頸部で強く屈曲し、口縁端部はやや上方に立つ器形で、器面調整は内外面ロクロ調整である。

後者は、頸部から丸味をもって外反し、口縁端部は丸くおさまるものである。器面調整は、口縁部は内外ともヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ、内面はナデ調整である。

須恵器

鉢（第15図3）

胴部上半以上の破片である。器厚は薄くロクロ目は鋭い。

赤褐色を呈する土器（第15図4）

坏一点がある。内外面ともロクロ調整である。口縁部の器厚が胴・底部より厚く、端部は丸くおさまる。底部はやや丸味を帯びており、底外面は手持ヘラケズリによる再調整が加えられている。

第5号住居跡（第16図）

〔重複〕　土壙（土壙20）によって壁の一部を切られている。また床面下には住居より古い土壙（土壙57）がある。

〔平面形・規模〕　各辺に若干の出入のある部分もあるが、平面形はほぼ隅丸方形を呈し、規模は軸長4.0×4.0mほどである。

〔堆積土〕　堆積土は基本的に二層に大別される。一つは床面上に厚く堆積している黒色土層であり、他はその上部をおおう暗褐色土層である。黒色土層は最も厚いところで20㎝にも達し焼土や多量の炭化材を含んでいる。炭化材には材木と考えられる太いものや、細い竹・カヤ状のものもあることから、本住居は火災によって廃屋となり黒色土層はその際生じた層であると考えられる。暗褐色土層はその後に自然流入したものである。

〔壁〕　地山を壁とし、やや傾斜をもって立ち上がっている。残存壁高は北西隅が最も低く3㎝ほど、他の部分では10㎝内外であることから、かなり削平されたものとみられる。

〔床面の状況〕　床面はほぼ平坦で、中央部に向ってわずかに低くなる。住居西半部では地山を、東半部では住居掘り方埋土に黄褐色粘土を貼って床としている。ただし貼床は部分的であり、掘方埋土上面をそのまま床としているところもある。住居中央部には炭化物を多く含む黒褐色の生活層が形成されている。

床面上からは、住居中央部において径40㎝、深さ90㎝ほどのピット（ピット1）、および住居北西部で径50㎝、深さ5〜9㎝のピットが2個認められたが柱穴と考えられるものは検出されなかった。

〔カマド〕　北辺中央部に付設されている。削平により天井部はすでに失われている。側壁は粘土によって構築されたもので、左側壁では現存高は5〜10㎝あり、基底幅50㎝、長さ60㎝とかなり幅広い。また前端には補強材として使用されたと思われる土師器甕破片が貼りついた状態で認められた。なお、右側壁部分には後世の攪乱が及んでおり、側壁は部分的に残存するのみである。燃焼部内の幅は50㎝前後と推定される。

〔床面下の状況〕　床面下においては住居掘り方、土壙および大小のピット等が検出された。

住居掘方は、住居東半部に東辺から南辺にかけて1.2〜1.7mの幅で認められた。底面はかなり凹凸があり、床面からの深さは10〜20㎝で一様ではない。すでに述べたように掘方埋土上面に貼り床を行って床としている部分がある。

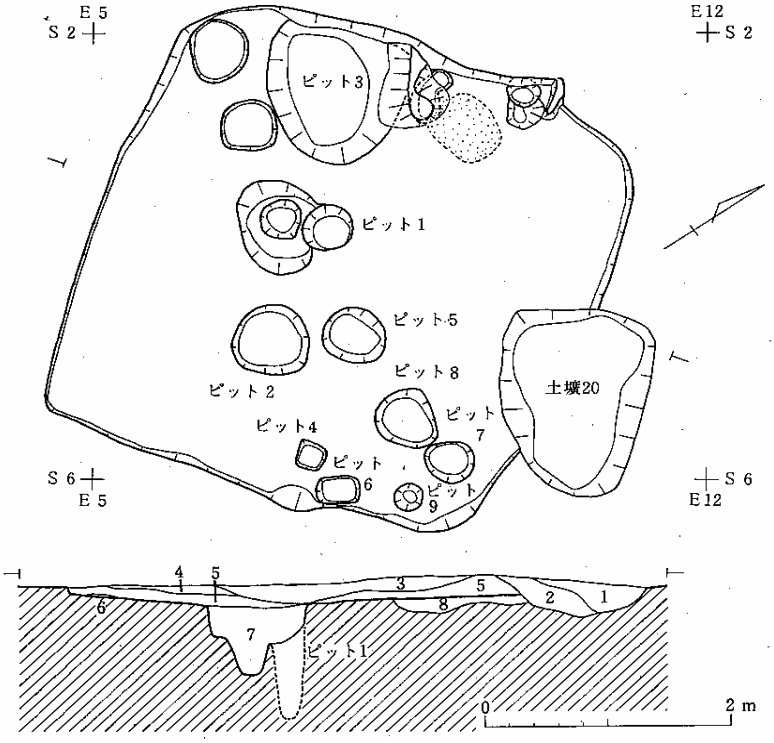
土壙（ピット57）は、住居より古いと考えられるものである。140×75㎝の長方形を呈し、深さ50㎝ほどで、底面中央に小ピットがある。堆積土上面には住居貼床がみられる。なお、この土壙については後の項においても述べる。

ピットは、貼り床下もしくは生活層下で確認されたものが多くそれらは、住居廃棄時にはすでに機能していなかったものである。ただし、住居掘方埋方を切っているもの（ピット5）もあり、住居使用時においては機能していたものを含んでいる。切り合い関係等によって住居との関係を示し得るものはピット5のみであるが、その堆積土や底面に焼土がみられるもの（ピ

ット9・6・2・8）や遺物を含んでいるもの（ピット2、6、5、9）もあることから、それらの多くは住居と関連をもつものと考えられる。これらのことから、本住居は複数回にわたる使用面があったことが推定される。

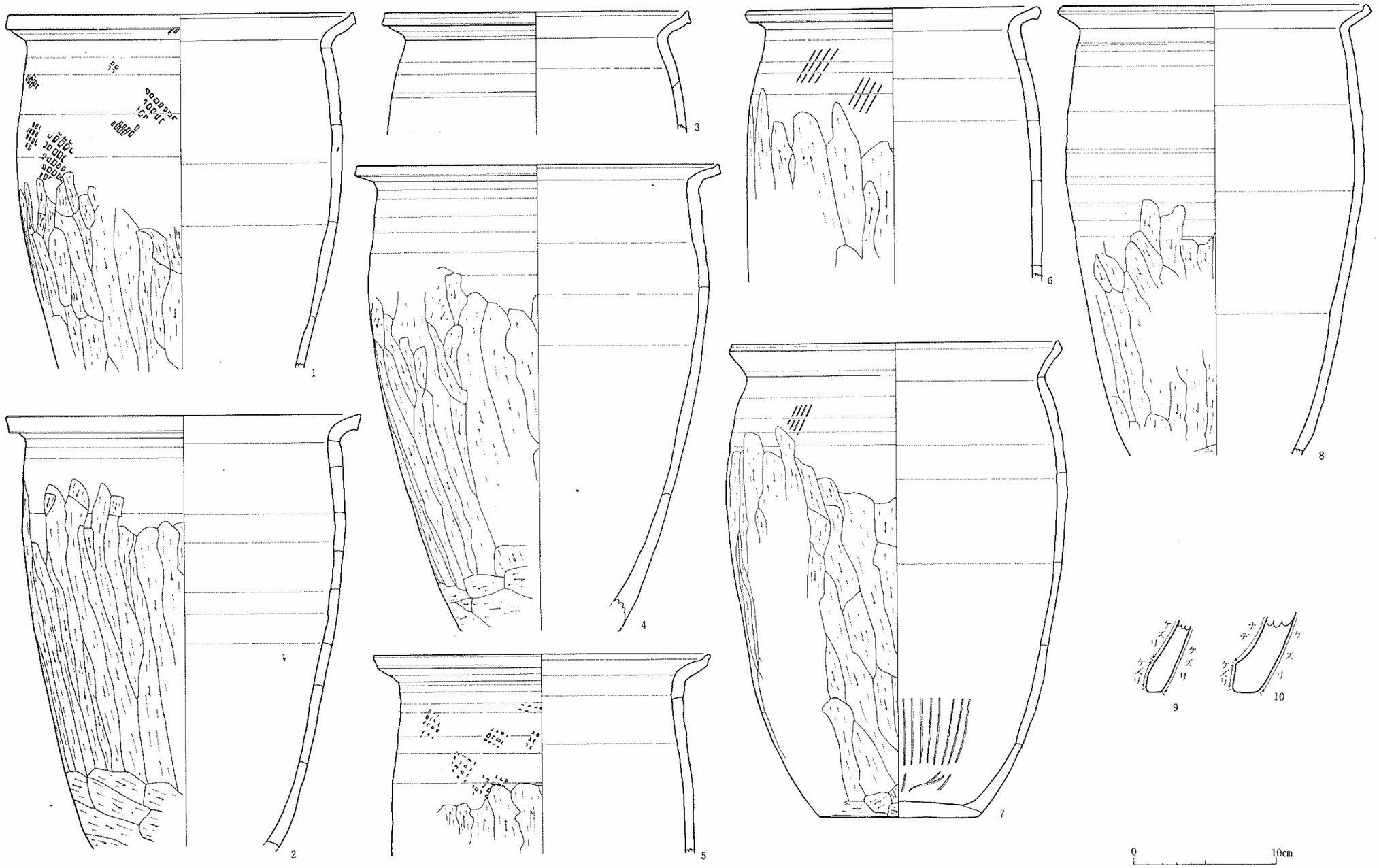
また、カマド側壁下には、側壁掘方（？）あるいは側壁芯のための掘方とも考えられるわずかな落ち込みも検出されている。

〔出土遺物〕　出土遺物には土器類の他に土鈴がある。多くは床面上および黒色土層中から出土したものであり、本住居の廃絶時の状況を考えるとそれらは一括遺物として理解することができる。



第16図　第5号住居跡

No	土　色	混　入　物　等	備　考	遺物取上げ
1	黄かっ色土	よごれた地山土	土壙20	
2	暗かっ色土			
3	暗かっ色土		住居堆積土	1　層
4	暗かっ色土		〃	1　層
5	黒　色　土	木炭塊・焼土多い	〃	2　層
6	暗かっ色土	焼土・木炭多い	生　活　層	3　層
7	黄かっ色土			
8	暗かっ色土	地山ブロックまじる	掘方埋土	



第17図　第５号住居跡出土遺物（１）

土師器

甕（第17図1－8、第18図1～4）

すべて製作に際しロクロを使用しているものである。大形で長胴形を呈するもの、（17 図）より小さい中形のもの（第18図1～3）鉢形（18図4）のものがある。

長胴形のものには口縁端部が厚くつくられたものが多く、上端または上下端がつまみ出されてせまい縁帯状となるもの（第17図1～3）や、中央部が稜をもってはり出すもの（6）がある。その他に端部に向うにしたがって薄くなるもの（5）や端部がやや上方に折りまげられているもの（8）などもある。器面調整はすべて、胴上半以上の外面にロクロ調整、下部はその後ヘラケズリが施されている。ただし、ロクロ調整前にタタキ技法が用いられているものがあり、タタキの痕跡には平行（6、7）、格子状（1、5）の二者がある。内面はロクロ調整である。なお、3は、カマド左側壁前端に貼りついていたものである。

中形のものにも、頸部で屈曲しそのままのびて端部が丸くおさまる口縁部のもの（第18図3）端部がややおりまげられたもの（1）、端部上端がつまみ出されたもの（2）など、口縁端部の形態は各種がある。器面調整は、ロクロ調整後胴下半にヘラケズリが施されている。

鉢形のものは、頸部で丸味をもって屈曲してのびる口縁部を有し、胴部上端に最大径があるものである。胴外面下部にヘラケズリが施される他は内外面ともにロクロ調整である。なお、本遺跡におけるこの種の器形の土師器はすべて内面はヘラミガキ黒色化されており、その点からみるとこの土器は土師器というよりはむしろ赤褐色を呈する土器として扱うのが適当なのかも知れない。

甑（第17図9－10）

2 点ある。いずれも底部片のため全体形は不明である。無底式のもので、器壁は厚く、また焼成は堅緻である。

須恵器　甕・壺・坏・稜埦がある。

甕（18図5）

口径 50 ㎝を越えると考えられる大形のものである。口縁端部は、断面三角形気味に下端がつまみ出されたものである。直下に波状文が一段描かれている。体部は外面に平行タタキ、内面青海波のアテメが認められる。この土器は床面上からまとまって出土したものであるが脆弱であるため剥落が著しく、口縁部と胴部とは接合しない。

長頸壺（第18図6）

口縁・頸部はやや太く、胴部はほぼ倒卵形を呈す。またわずかに外傾するだけの高台がつく。胴部外面には上半に平行タタキ目、下半に回転ヘラケズリ痕が観察されるが、両者ともその後のナデ調整によって消されており、その単位等は明瞭でない。底外面も高台接合時と考えられ

るナデ調整が観察されるのみである。

坏（第19図1、2）

二個体ある。いずれも回転糸切技法によって切り離されたものである。再調整はない。

稜碗（第19図3）

胴部以下の破片である。ヘラ切り技法によって切り離されたもので、胴下部の稜は鋭く明瞭である。底外面は平滑であり、黒痕ともみられるよごれがわずかながら認められることから、硯として転用された可能性のある土器である。（床面下ピット4出土。）

赤褐色を呈する土器（第19図4）

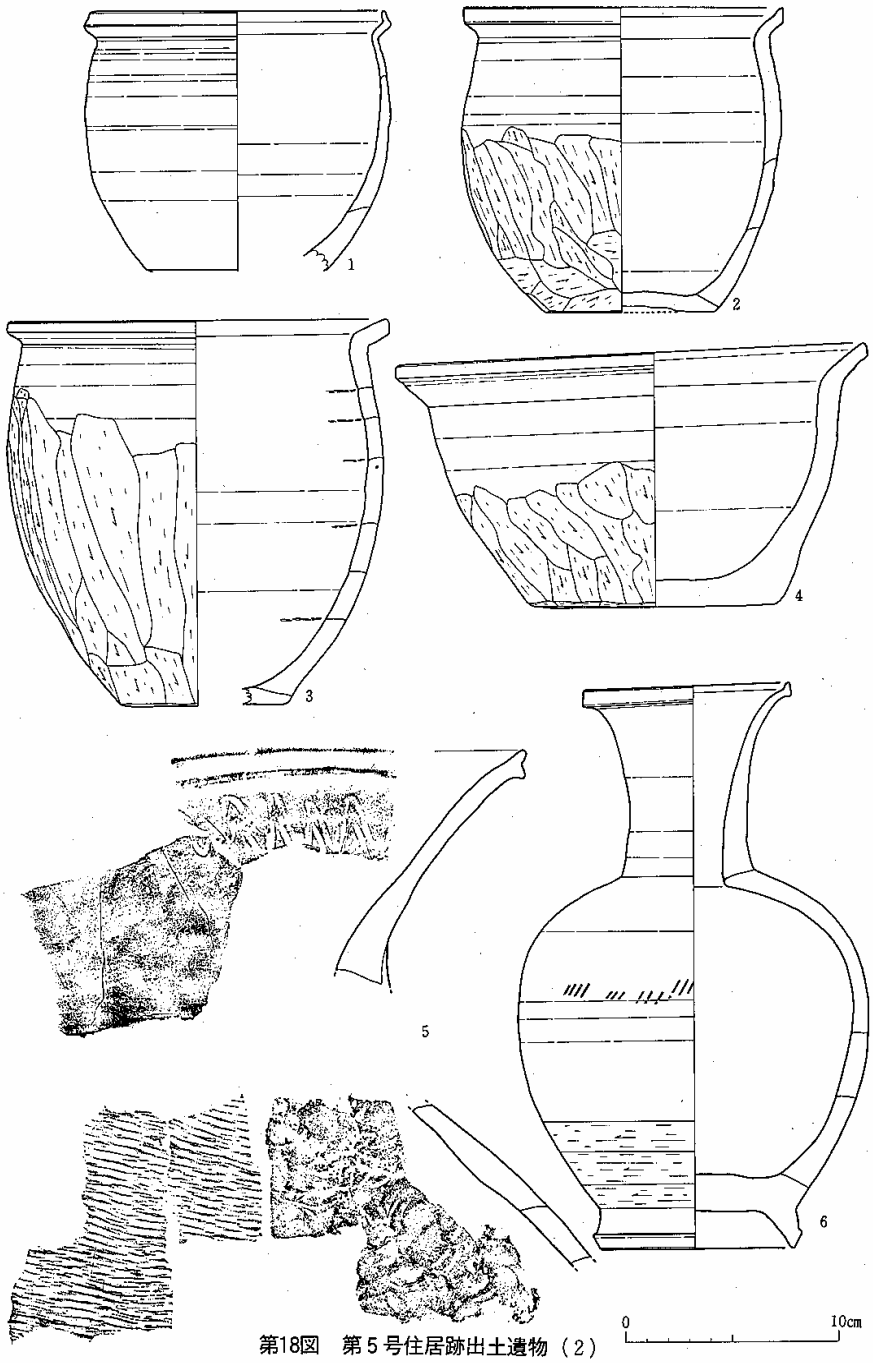
坏がある。器高の高いものである。内外面ともロクロ調整で底部は回転糸切技法によって切離されている。また外面胴下端には手持ヘラケズリの再調整が加えられている。

土鈴（第19図5）

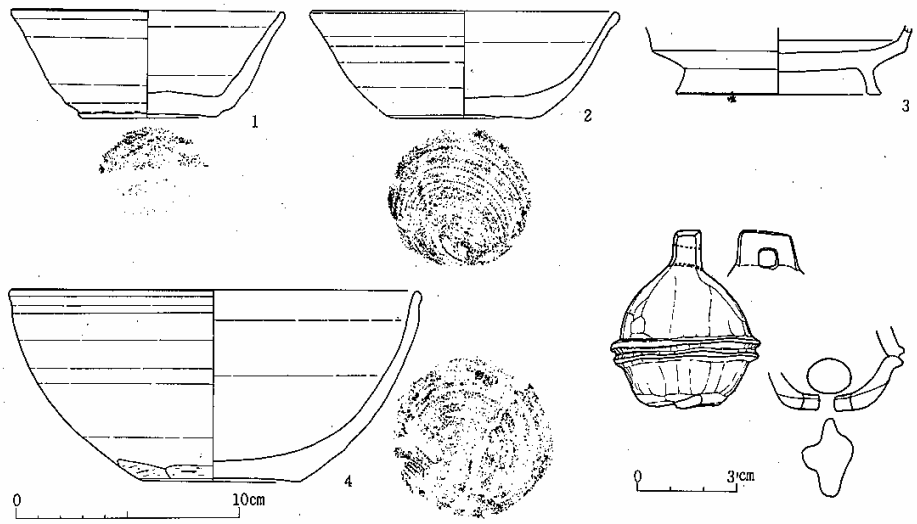
高さ5.4㎝で球体部の径は4㎝ある。方形の紐を有し、球体部には幅3㎜ほどの突帯が2条巡っている。断面や剥離面の観察によると、球体部は上下別々につくって接合し、また内部に丸を入れたのち球体下部に粘土を貼りつけて溝の整形を行っている。

5号住居跡遺物表

図版番号	出土層位	種類	器形	口径	器高	備考	登録番号
第17図 1	床面	土師器	甕(大)	24.5			5住5
2	2層	〃	〃	24.8	(30.5)		2
3	カマド	〃	〃	21.6			8
4	2層	〃	〃	25.6	(32.6)		3
5	床面	〃	〃	23.5			6
6	2層	〃	〃	20.6			4
7	〃	〃	〃	23.3	33.5		1
8	1．2層	〃	〃	22.0	(31.4)		7
9	1層	〃	甑				
10	2層	〃	〃				
第18図1	床面	〃	甕(中)	14.4	(12.1)		11
2	〃	〃	〃	15.0	14.2		12
3	〃	〃	〃	18.0	17.9		10
4	〃	〃	〃(鉢形)	22.1	12.2		9
5		須恵器	甕				
6	床面	〃	壺	9.7	26.4		16
第19図1	〃	須恵器	坏	12.3	4.8	回転糸切	14
2	〃	〃	〃	14.0	4.8		17
3	ピット4	〃	稜碗			ヘラ切り・転用硯？	15
4	床面	赤かっ色を呈する器	坏	18.5	8.6	回転糸切	13
5	〃	土鈴					



第18図　第５号住居跡出土遺物（２）



第19図　第５号住居跡出土遺物（３）

５号住居跡破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	1層	2層	1·2層	3層	床面	カマド	掘方埋土	ピット 2	ピット 5	ピット 6	ピット 7	ピット 8	ピット 9	攪乱	×
土師器	坏	底部	ケズリ	内黒	1														
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	3	2	15	3	3	2	4		1			1		3	
			ロクロ不使用								1			1				1	
		胴部	ロクロ	内黒	1			1											
			ロクロ	ナデ	3	3	14	2			4		2				1	2	
			ケズリ	内黒	1														
			ケズリ	ナデ	14	5	77	11	4	15	16		2			3	2	3	
			格子タタキ	ナデ		1						1		1					
			平行タタキ	ナデ			1								1				
			不明		3	11					2							3	
		底部	ナデ		2		1												
須恵器	蓋	口縁	ロクロ								1								
	坏	口縁	ロクロ	ロクロ	3	1				1	2								2
		胴部	ロクロ	ロクロ							1								
		底部	糸切り								1								2
			ヘラ切り		1	1													
			不明																1
	高台付坏	高台	ロクロ		1			1											
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	3														
		胴部	平行タタキ	ナデ				1			1			1					1
赤褐色を呈する土器	坏	底部	ヘラ切り																

第７号住居跡（第20図）

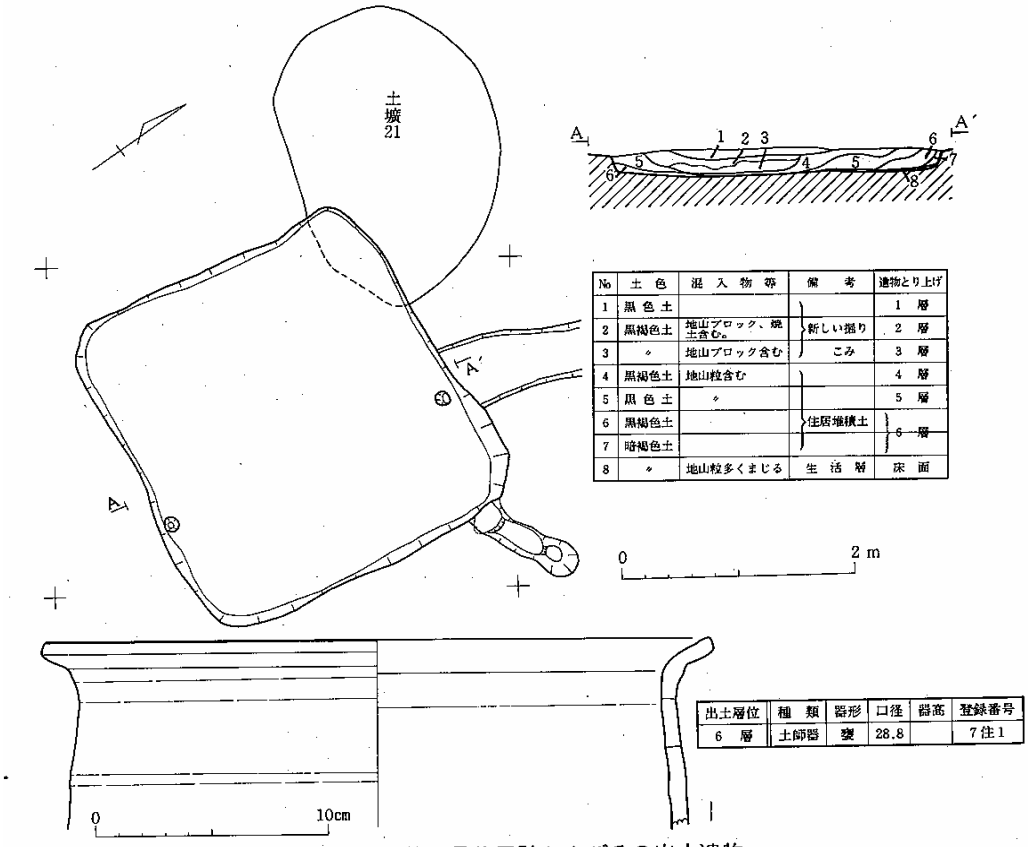
〔重複〕　北西隅で土壙（土横21）と重複しており、それを切って構築されている。また床面までは達しないが堆積土を掘りこんでいる落ちこみもある。

〔平面形・規模〕　いくぶん隅が丸いがほぼ方形を呈し、規模は南北2.7m、東西3.0mで南北方向に長い。

〔壁〕　土壙と重複する部分を除き地山を壁としている。壁の立ち上がりはややゆるやかで残存壁高は７cmほどである。

〔堆積土〕　堆積土はすべて自然流入によって生成されたものである。それらは黒・暗褐色土を主体としそれに地山粒が混入するものであるが、他の住居跡の堆積土と比較して焼土や炭化物の混入がほとんどみられないことが特徴的である。

〔床面および床面下の状況〕　住居内の大部分の範囲で地山を床としている。床面はほぼ平坦で、中央部へ向ってわずかに傾斜している。床面上からは、東西両壁に接して径10cm、深さ５～７cmのピットが２個検出されたのみである。床面下においても、北西隅および西部で住居掘



No	土色	混入物等	備考	遺物とり上げ
1	黒色土		新しい掘りこみ	1 層
2	黒褐色土	地山ブロック、焼土含む。		2 層
3	〃	地山ブロック含む		3 層
4	黒褐色土	地山粒含む	住居堆積土	4 層
5	黒色土	〃		5 層
6	黒褐色土			6 層
7	暗褐色土			
8	〃	地山粒多くまじる	生活層	床面

出土層位	種類	器形	口径	器高	登録番号
6 層	土師器	甕	28.8		7住1

第20図　第７号住居跡およびその出土遺物

方とも思われる不規則な落ちこみがみられたのみで柱穴等については不明である。

また、カマドと思われるような施設もなく、本住居は他の住居とはやや性格を異にしたものであることも考えられる。

〔出土遺物〕　出土遺物はすべて堆積土中から出土したものである。破片が多く図示できるのは土師器甕一個体のみである。

土師器

甕（第20図1）

堆積土6層から出土した。口縁部破片である。小片のため口径推定は正確ではない。長胴形を呈すると思われるもので、内外面ともロクロ調整である。

砥石

堆積土中から小破片が出土した。破損部分が多く全体形は不明であるが、側全面を磨面として使用しているものと思われるものである。

7号住居跡破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	1層	2層	3層	4層	5層	6層	底面	×
土師器	坏	胴部	ロクロ	内黒		1						
	高台付		ロクロ	内黒	1							
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	3	1	1	3			1	
		胴部	ロクロ	ナデ	1			1	1	1	3	
			ケズリ	ナデ					3			
			ケズリ	内黒							2	
			ケズリ	ナデ	19	5	5	6		6	2	5
			格子タタキ	ナデ	3							
			平行タタキ	ナデ			2					
			不明			4	1				1	1
		底部	ケズリ		1					1		
須恵器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ				1				
	甕	胴部	平行タタキ	青海波	1							
赤褐色を呈する土器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ	1							
	高台付坏	高台	ロクロ					1				
	椀	口縁						1				

第8号住居跡（第21図）

〔重複〕　直接他の遺構との重複関係はない。ただし新旧のカマドがあり、また床面上から土壙（8住土壙1）が掘りこまれ、その掘り込み時期を境とした前後などという点で、いくつかの住居使用時期が考えられる。

〔平面形・規模〕　平面形は方形を呈するが、東辺に比して相対する西辺が約50㎝長く、西に広がる形となる。規模は東辺長4.1、西辺長4.6mであり、西北辺はいずれも4.2mほどである。

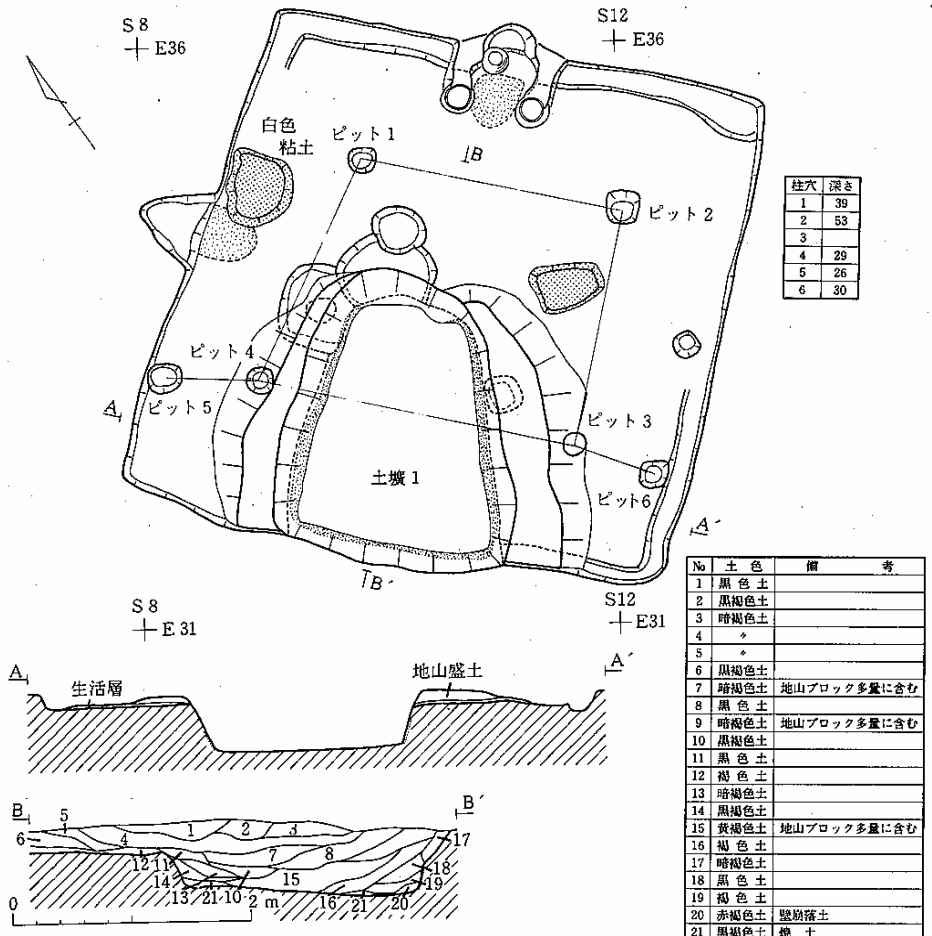
〔壁〕　地山を壁としている。比較的急角度に立ち上がるしっかりしたものであるが、残存壁高は8～10㎝程度しかなく、かなり削平されている。

〔カマド〕　東辺ほぼ中央に付設されている。側壁は粘土によって構築されており、左冶両側壁とも、幅20㎝、長さ60㎝ほどの規模である。前端には、土師器甕が倒立の状態でオサエとし

て使用されている。燃焼部は幅約 50 cmで、底面はわずかに凹んでおり床面より 2〜3 cm低い。奥壁は住居壁建長線に一致し高さ 3 cmほどの段として立ち上がったのち、さらに外側へ約 20 cm張り出している。燃焼部内左奥部分で支脚として使用されたと思われる土師器甕胴下半部が倒位の状態で発見された。

カマド跡は北辺中央においても検出された。側壁等はなくその詳細は不明であるがより古い時点に使用されたと思われるものである。住居壁から幅 50 cm、奥行 50 cmのU字形に掘り込まれており前面の床面には焼面が見られる。掘り込みと床面とは約 5 cmの段によって区画されている。

〔床面の状況〕　東辺沿いの幅約 1mの部分では住居掘方埋土上面を、他の部分では地山を床としている。面はほぼ平坦で中央部へ向ってわずかに傾斜している。床面上には黒褐色粘質土による生活層が形成されている部分が多い。



柱穴	深さ
1	39
2	53
3	
4	29
5	26
6	30

No	土 色	備　　考
1	黒 色 土	
2	黒褐色土	
3	暗褐色土	
4	〃	
5	〃	
6	黒褐色土	
7	暗褐色土	地山ブロック多量に含む
8	黒 色 土	
9	暗褐色土	地山ブロック多量に含む
10	黒褐色土	
11	黒 色 土	
12	褐 色 土	
13	暗褐色土	
14	黒褐色土	
15	黄褐色土	地山ブロック多量に含む
16	褐 色 土	
17	暗褐色土	
18	黒 色 土	
19	褐 色 土	
20	赤褐色土	壁崩落土
21	黒褐色土	焼　土

第21図　第 8 号住居跡

床面上において土壙や大小のピットが検出された。

土壙1は住居西部にある。東辺80、西辺110、東西軸長200㎝の西に扇形気味に開く隅丸長方形を呈するもので、西辺は住居西辺より若干張り出している。床面からの深さは35〜40㎝であるが、西北辺外側には土手状に幅約70㎝の地山土が5㎝ほどの高さで盛られている。土壙内部は、底面と、東を除く壁面の底面から20㎝ほどの高さまでの部分が火熱によって赤変している。また底面からは、非常に脆くなって細片化した土器の出土もみられた。土壙内へ堆積土は、底面近くが壁崩落による焼土や、木炭・焼土を含む流入土で、上部は住居堆積土と共通する黒褐色土であるが、その間に厚い地山土が西方から流入し東側床面上までおおっているのが特徴的である。この土壙の時期については、土手状高まりが住居生活層上にのっていること、また堆積土の状況から住居が埋まり始まる前に掘りこまれていることなどからみて、住居使用時またはその直後に掘りこまれたものと考えられる。そして、その際には住居は依然としてその形態を保っていたと思われる。

床面上から検出されたピットのうち、ピット1、2、3、4の4個がほぼ対角線上に位置し柱穴と考えられる。深さは20〜50㎝である。これらのピットのうち、北西のピット4と南西のピット3は土壙外側の土手部分にあり、ピット3はその上面で確認された。ピット4と土手との関係は明確になし得なかった。さらにこれらのピットの外側約60㎝にあるピット5、6もその規模や位置からみて柱穴の可能性がある。なお、ピット7、8は土手の下から確認されたものである。

周溝は、南西隅・東辺沿いに認められた。幅15〜20㎝、床面からの深さ10㎝前後のもので底面はU字形を呈している。周溝は西辺南部では土壙外側の土手下に、また東辺カマド下においても検出された。

以上のように本住居はその使用時点に応じて細部遺構も変化している。

当初の段階では北辺にカマドをもち、また周溝をめぐらしていたと考えられる。次の段階では、カマドは東辺にあらたに構築され、その時点では周溝は埋められている。そして土壙1が掘りこまれることになるが、その掘込みの時期と東辺カマドの存続期間とのかかわりあいについては明確ではない。また柱は当初の段階では4本柱であったと思われる。その後別に新たに2本が加わり6本柱となった、あるいは移行期が6本柱で、最終的には新たな柱と組み合って4本柱となったともみられる。いずれにしても新たな2本の増設は、土壙1の掘込に対応しているとみるのが、その配置から考えて自然である。

なお、住居中央部よりやや南に寄った床面上には、50×30㎝ほどの範囲で高さ10㎝前後の白色粘土の塊がみられた。

〔床面下の状況〕　床面下においては住居掘方が確認された。掘方は東辺に幅約1m、深さ5

～10 ㎝でみられた。底面はかなりの凹凸がある。

〔出土遺物〕　出土した遺物は土器類である。出土量が多く、図示可能なものは 42 個体（土師器 33、須恵器 6、赤褐色を呈する土器 3、）である。またそれらの大部分は床面やカマド内から出土し、住居に伴うと考えられるものである。

土師器　甕・坏・高台付坏・蓋がある。いずれも製作に際しロクロを使用したものである。

甕（第 22 図～27 図、28 図 1．2）

内面にヘラミガキ・黒色処理を加えたものとそうでないものとがある。

前者（第 22 図 1．2）は、胴部上端に最大径を有し、以下は丸味をもって大きな底部に至る鉢形に近いものである。口縁部は頸部で屈曲した短いもので端部は上方につまみ出されている。外面胴下半及び底面にはヘラケズリが施されている。

後者は器形に大・中・小の別がある。

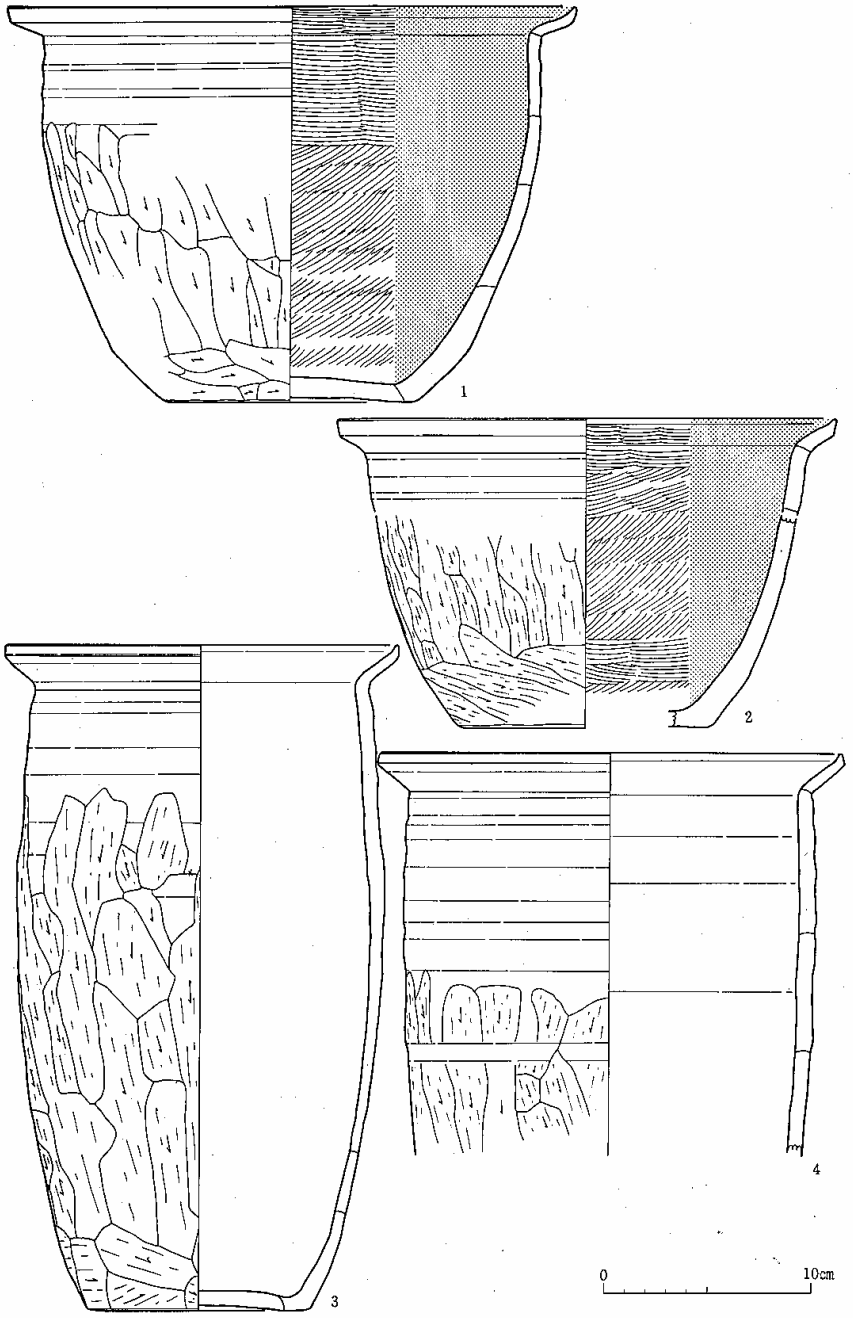
大形のもの（22 図 3．4、23 図～26 図）は長胴形のものである。さらに胴部が円筒形に近いもの（22 図－3）底部に向ってすぼまるもの（23 図 2）等若干の器形の違いもある。また口縁部形態についても、頸部でくびれたのち徐々に薄くなって外傾するもの（24 図 2 他）と・端部が直立もしくは内傾気味に屈曲して緑帯状をなすもの（23 図 1、24 図 1 他）とがあるが、後者が圧倒的に多い。器面調整はすべて胴外面上半以上はロクロ調整、下半部はヘラケズリで、ロクロ調整の前段階にタタキ技法を用いているもの（24 図、25 図 1）がある。内面はいずれもロクロ調整である。なお、23 図 3 はカマド右側壁前端に、22 図 4 は左側前端にオサエとして、25 図 4 は燃焼部内に支脚としてそれぞれ使用されていたものである。

中形のもの（27 図 1～6）は頸部でくびれたのち端部が上方に屈曲して口縁部となり、胴部は上半に最大径を有し底部へ向ってすぼまる器形のものである。調整はロクロ調整とヘラケズリによってなされている。法量等に若干の差異はあるものの、器形・調整等において強い斉一性がうかがわれる。

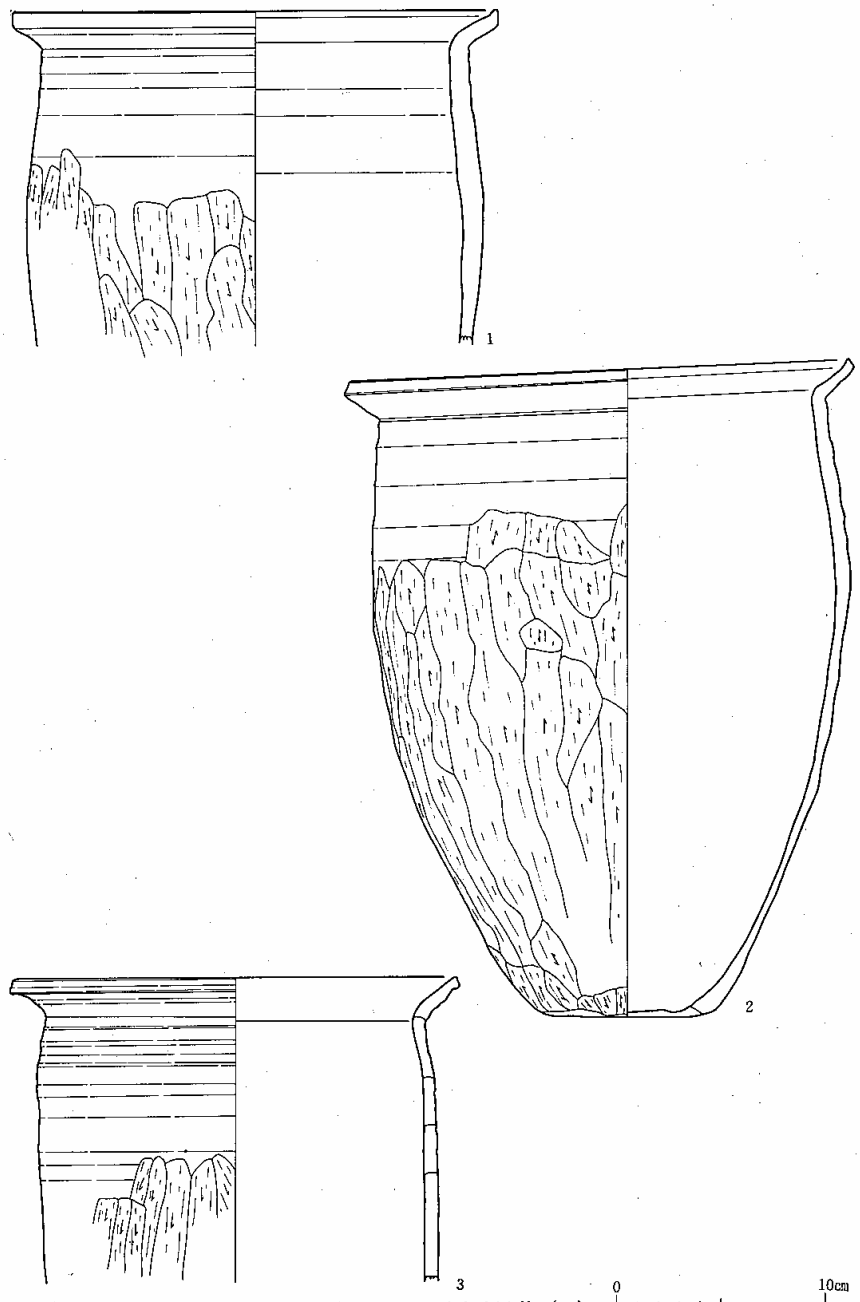
小形のもの（27 図 7～9、28 図 1．2）にも、頸部でくびれたのちそのまま短い口縁部となるもの（28 図）と、端部でいく分変化して口縁部を形づくるもの（27 図）とがある。胴部は球形に近く張るものが多い。器面調整は前二者に比してロクロ調整が調整の主体をなしており、回転ヘラケズリの施されるもの（27 図 7）もあるがその場合でも位置は体部下端である。底面は雑なナデ痕跡が認められるものが多い。

坏（第 28 図 3～7）

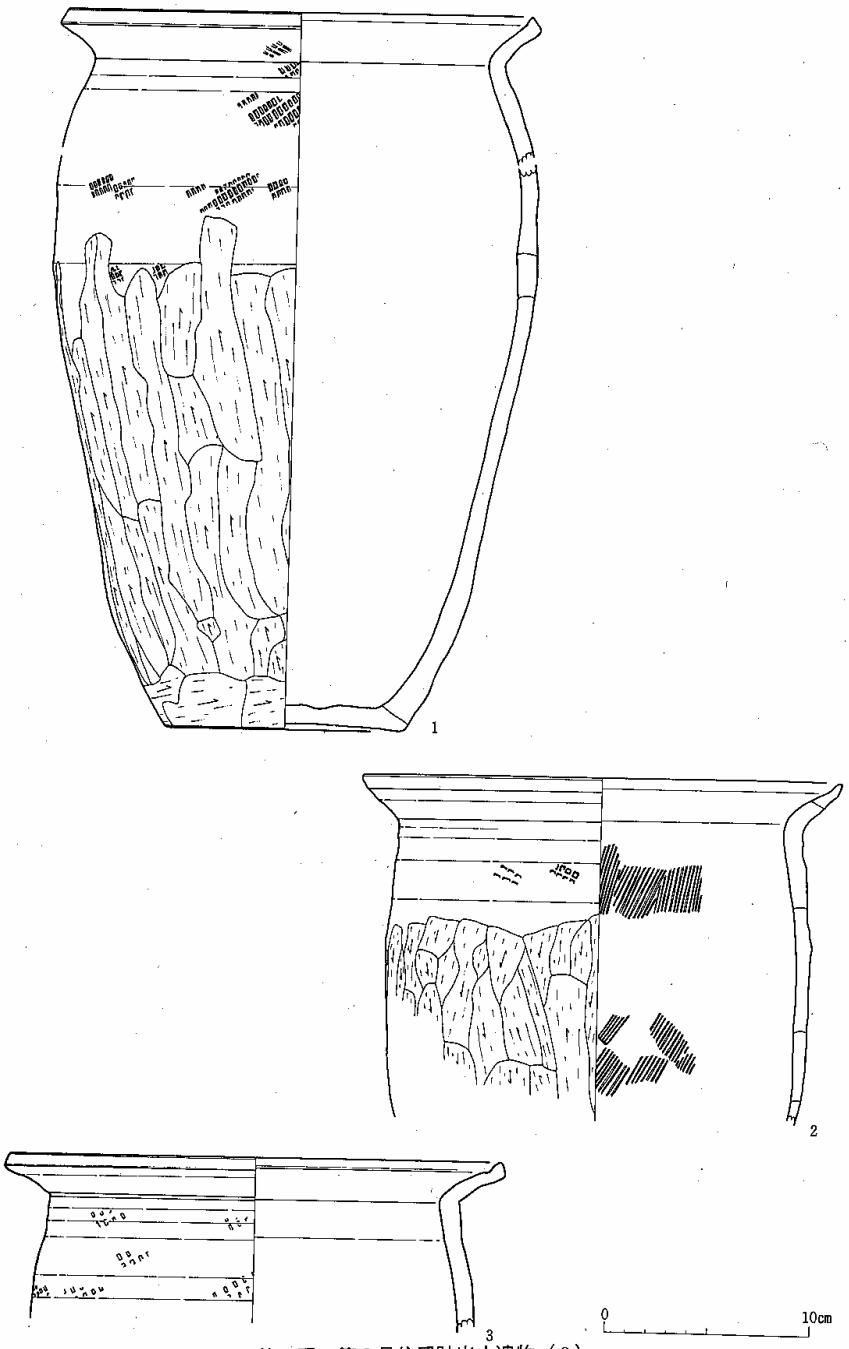
5 個体ある。いずれも胴部から口縁へかけて丸味をもって立ち上がる。埦に近く丈の高いもの（3．6）もある。5 も底部のみの破片であるが現存部の状況からみると丈の高いもののようである。底部の切離しはヘラ切り技法によるもの（3．5）、回転ヘラケズリ再調整が加えられ



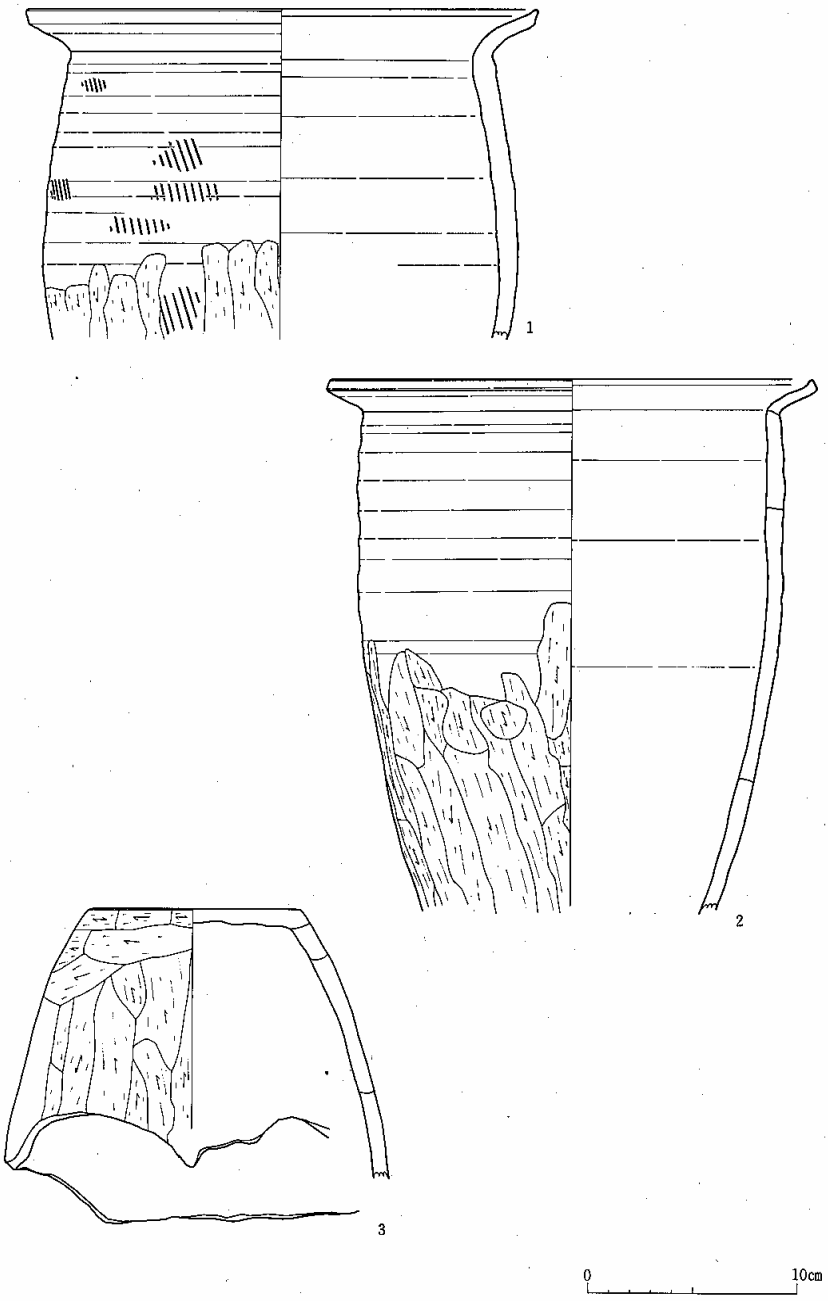
第22図　第８号住居跡出土遺物（１）



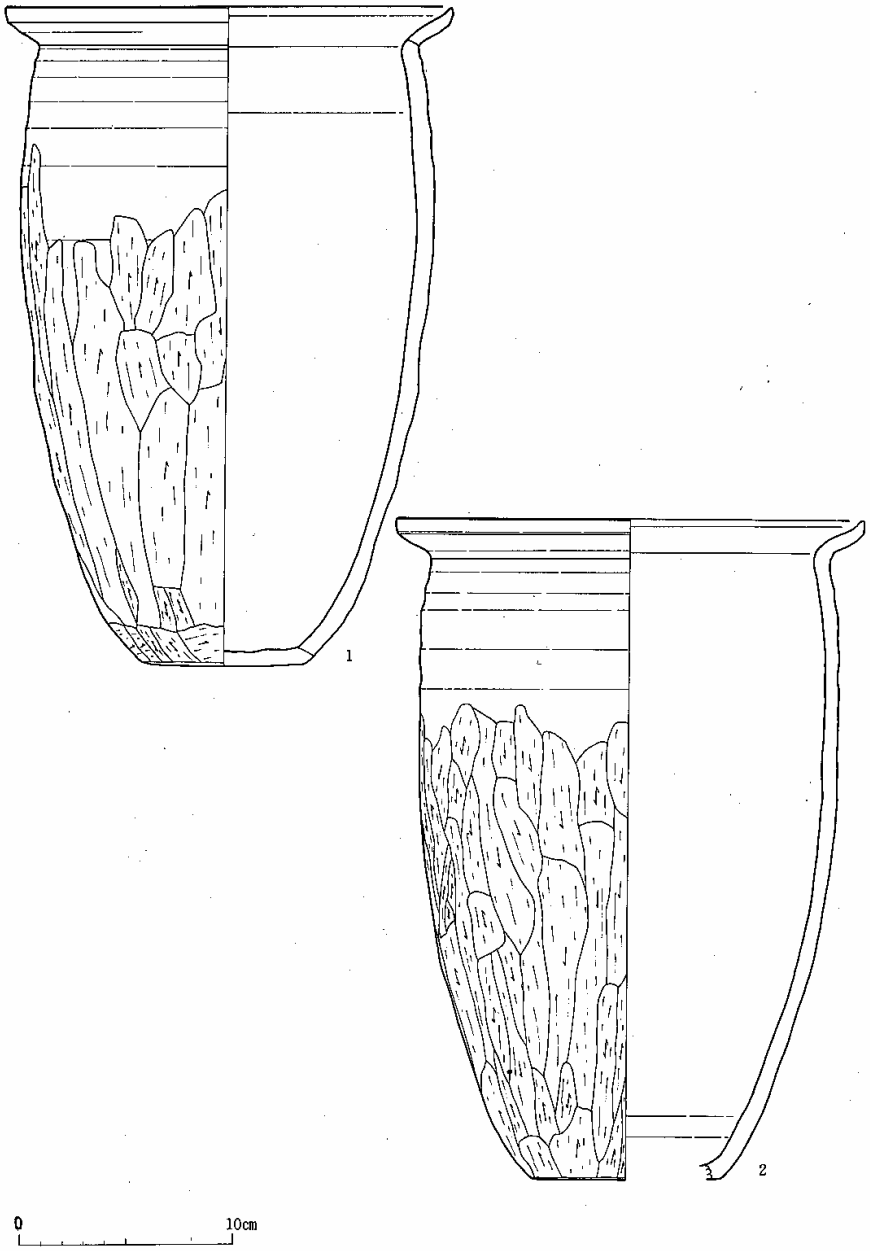
第23図　第８号住居跡出土遺物（２）



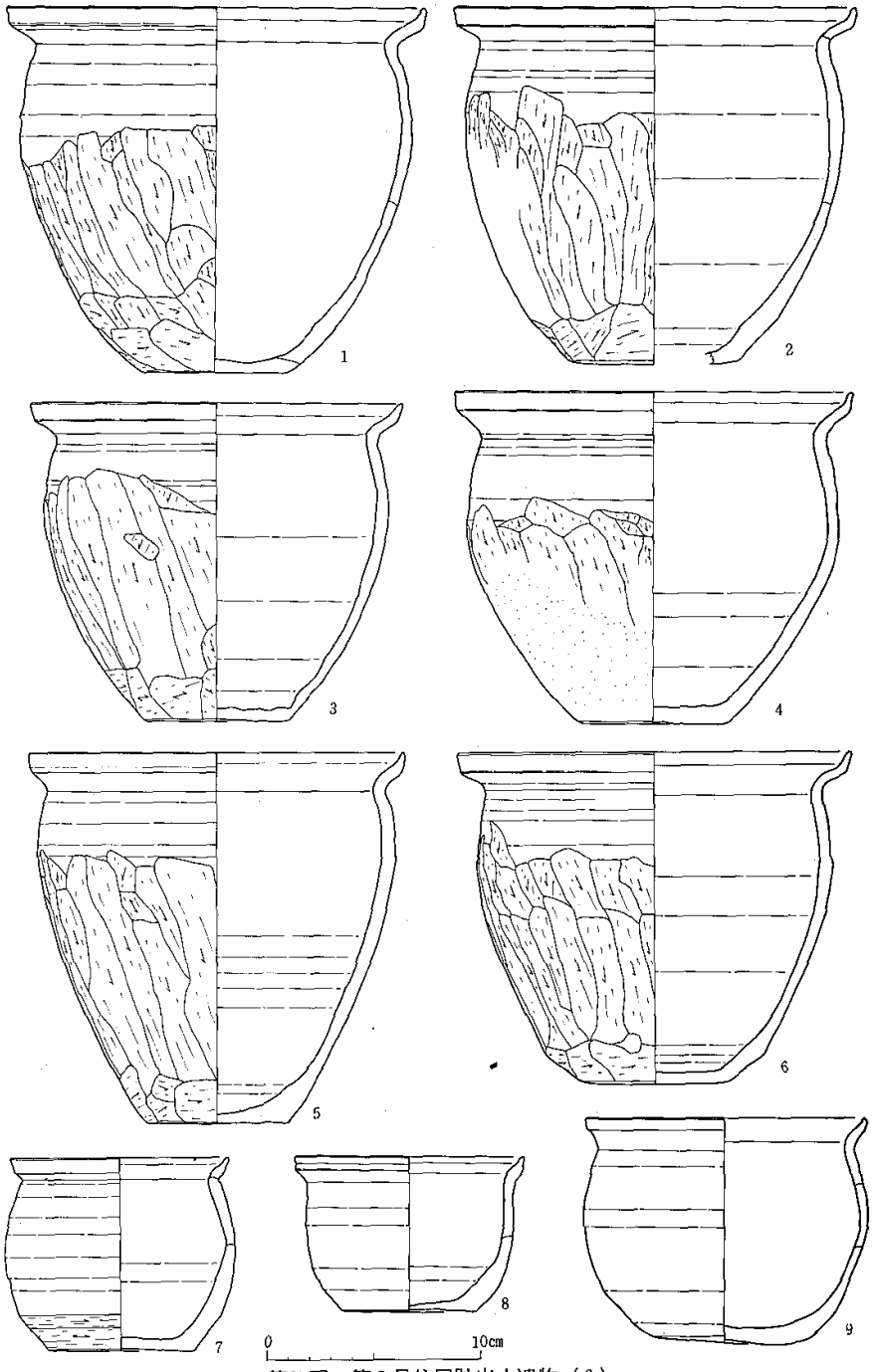
第24図　第８号住居跡出土遺物（３）



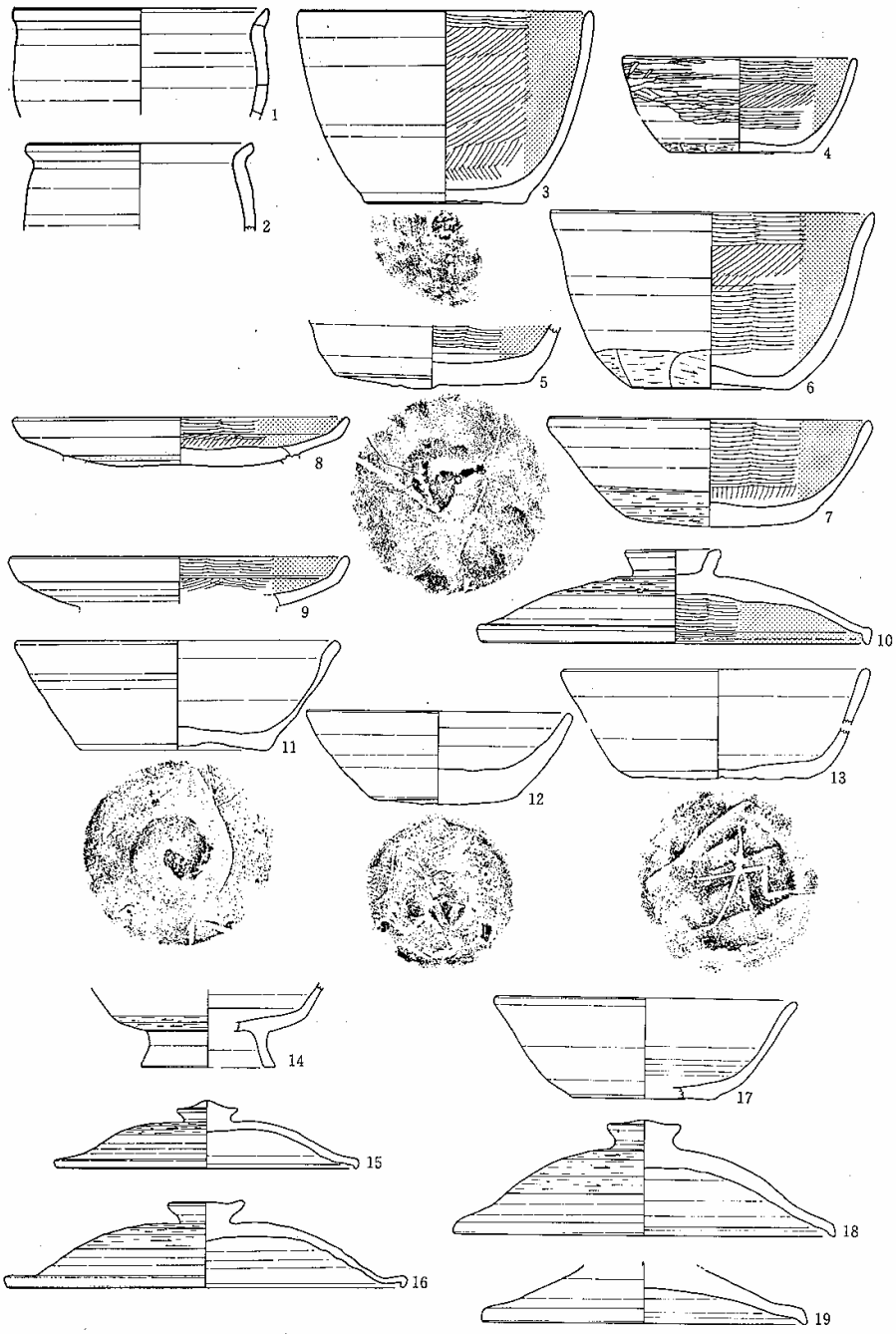
第25図　第８号住居跡出土遺物（４）



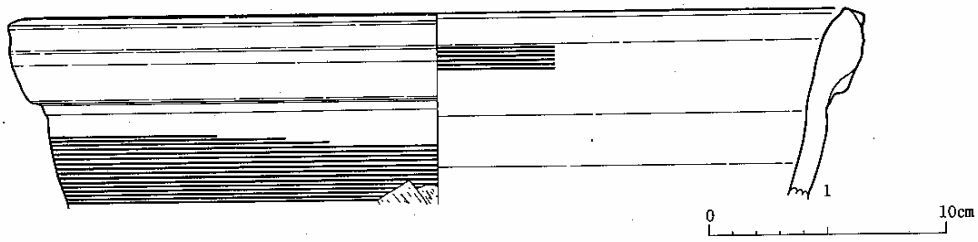
第26図　第８号住居跡出土遺物（５）



第27図　第８号住居跡出土遺物（６）



第28図　第８号住居跡出土遺物（７）



第29図　第８号住居跡出土遺物（８）

ているため不明のもの（7）、雑なナデによって不明のもの（4．6）とがある。また外面にも再調整が加えられているものがあり、再調整は回転ヘラケズリ（7）と手持ヘラケズリ（4．6）の二種がある。6は底面周縁にも手持ヘラケズリが施されている。内面ははいずれもヘラミガキ・黒色処理であるが4は外面上半にもヘラミガキが施されているものである。

高台付皿（第28図8．9）

2個体ある。台部は欠損している。いずれも皿部は低平なもので8では底部は丸味を帯びている。内面はヘラミガキ・黒色処理であり、外面にもヘラミガキが施されているがその単位・方向は明瞭ではない。また、8は高台部内側の外面に回転ヘラケズリが観察されるものである。

蓋（第28図10）

リング状のつまみを有するものである。口縁部はほぼ垂直におり曲げてつくり出されており内面はヘラミガキ・黒色処理が、外面にもヘラミガキが施されている。外面天井部にはヘラミガキ前の回転ヘラケズリも認められる。

須恵器　坏・稜埦・蓋がある。

坏（第28図11～13）

三個体ある。いずれも底部の切離しがヘラ切技法によるものであるが13は切離後底面中央部にのみ手持ヘラケズリが施され「九」のヘラ描きがなされている。

また、12は器高が厚く、さらに口縁部にたてに亀裂が入るなど稚拙なつくりのものである。

稜埦（第28図14）

底部のみの小破片である。底部切離し技法は高台部接合時のナデのため明らかでない。

蓋（第28図15．16）

宝珠形のつまみを有するものである。口縁部は垂直またはやや内傾気味におり曲げてつくり出されている。

赤褐色を呈する土器　鉢・坏・蓋がある。

鉢（第29図）

口縁部のみの破片のみであり全体形は不明である。口縁部には、端部をおり返しさらに粘土を貼りつけた幅4cmほどの凸体が巡っている。胴部外面上半には回転刷毛目、下半にはヘラケズリが施され、内面にも部分的に回転刷毛目が観察される。甑の可能性もあるが、口径は36cmを越えると思われ甑にしては大型すぎる点に疑問が残る。

坏（第29図17）

底部の切離しが手持ヘラケズリ再調整のため不明のものである。

蓋（第29図18．19）

二個体ある。口縁部はわずかにおり曲げてつくり出されており、つまみの明らかなものでは、それは宝珠系である。須恵器蓋に比して器高が高い。

第9号住居跡（第30図）

〔重複〕　住居内に堆積土中途から掘りこまれたピット（ピット1）がある。また木根かと思われる不規則な落ち込みに四手壁の一部が失われている。

〔平面形・規模〕　方形を基調としたもので東西に長い。東西3.4m、南北2.5mほどである。

8号住居跡遺物表

図版番号	出土層位	種類	器形	口径	器高	備考	登録番号	図版番号	出土層位	種類	器形	口径	器高	備考	登録番号
第22図1	床面	土師器	甕(鉢形)	27.4	19.1		8住1	第27図8	カマド内	土師器	甕(小)	10.8	7.2		8住22
2	〃	〃	〃(〃)	24.0	15.0		〃 2	9	床面	〃	〃	13.1	10.5		〃 23
3	〃	〃	甕(大)	18.9	32.2		〃 3	第28図1	〃	〃	〃	12.0			〃 24
4	カマド左側壁オサエ	〃	〃	22.6			〃 4	2	カマド内	〃	〃	10.7			〃 25
第23図1	床面下	〃	〃	23.1			〃 5	3	床面	〃	坏	14.0	9.0	ヘラ切	〃 26
2	床面	〃	〃	23.8	31.6		〃 6	4	〃	〃	〃	11.0	4.5		〃 27
3	カマド右側壁オサエ	〃	〃	21.5			〃 7	5	〃	〃	〃			ヘラ切	〃 28
第24図1	床面	〃	〃	22.6	34.3		〃 8	6	カマド内	〃	〃	15.2	8.2		〃 29
2	〃	〃	〃	23.4			〃 9	7	床面	〃	〃	15.2	5.0	回転ケズリ	〃 30
3	土壙1堆積土	〃	〃	24.4				8	4層	〃	高台付皿	15.8	2.2		〃 31
第25図1	床面	〃	〃	24.4			〃 10	9	床面	〃	〃	16.0			〃 32
2	カマド内	〃	〃	23.1			〃 11	10	〃	〃	蓋	18.5	4.4		〃 33
3	カマド支脚	〃	〃				〃 12	11	〃	須恵器	坏	15.2	5.1	ヘラ切り	〃 34
第26図1	床面	〃	〃	21.0	31.0		〃 13	12	4層	〃	〃	12.5	4.3	〃	〃 35
2	カマド内	〃	〃	22.0	31.0		〃 14	13	床面	〃	〃	14.5	(5.1)	「九」ヘラ書き	〃 36
第27図1	床面	〃	甕(中)	19.6	17.1		〃 15	14	4層	〃	綾塊				〃 37
2	〃	〃	〃	18.8	27.2		〃 16	15	床面	〃	蓋	14.3	3.2		〃 38
3	〃	〃	〃	17.4	14.8		〃 17	16	〃	〃	〃	18.9	4.0		〃 39
4	〃	〃	〃	18.6	15.5		〃 18	17	カマド内	赤かっ色を呈する土器	坏	14.2	4.7	手持ケズリ	〃 40
5	〃	〃	〃	17.6	17.3		〃 19	18	床面	〃	蓋	18.0	5.3		〃 41
6	〃	〃	〃	18.4	15.5		〃 20	19	4層	〃	〃	15.3			〃 42
7	〃	〃	甕(小)	10.2	9.0		〃 21	第29図1	土壙1堆積土	〃	鉢	(36.2)			

8 号住居跡破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	1層	2層	3層	4層	5層	6層	底面	底面下	カマド	ピット	土壙1 床面	土壙1 埋土	土壙1 ×
土師器	坏	口縁	ロクロ	内黒							1		1				
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	1		4	7	2		9		6	3	2	1	
		胴部	ロクロ	ナデ			1			1	2		3	2			
			ケズリ	内黒									1				1
			ケズリ	ナデ		1	2	10	1		21	4	14	22		1	
			ケズリ	ハケメ							1						
			ケズリ	回転ハケメ				1									
			ナデ	ナデ										1			
			平行タタキ	ナデ								1					
			不明				3	2			2						
		底部	糸切り								1	1					
			ケズリ											1			
			ケズリ	ナデ	1												
			ナデ		1			1			2			1			
			不明								2		1				
	蓋	口縁	ロクロ	内黒													1
須恵器	甕	口縁	ロクロ	ロクロ							1			1			
		胴部	ロクロ	ロクロ	2			1			1						
		底部	ヘラ切り											1			
	蓋	口縁	ロクロ	ロクロ							1						
赤褐色を呈する土器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ				3	1		3			1			
		胴部	ロクロ	ロクロ													1
		底部	不明					1									
	蓋	口縁	ロクロ	ロクロ									1				

また北東隅がやや張り出しておりその部分にカマドが設置されている。

〔堆積土〕　堆積土は各壁際から徐々に自然流入によって堆積したものである。

ピット 1 は堆積土が床面から約 15 cm堆積した時点に若いて掘り込まれたものである。規模は 60×40 cm、深さ 50 cmほどで、底面には木炭・焼土のまじり合った層が薄くみられ、また堆積土中からは土師器甕胴下半部（第 30 図 7）が直立の状態で出土している。なおピット内堆積土は一方向からのみの流入であり自然流入というよりは何らかの人為的作用が加えられていると考えられるがその性格については明らかでない。ピット 1 が埋まったのちさらに土砂の流入があり住居は完全に埋没した。なお住居が埋没したのちに掘りこまれた落ちこみもある。

〔壁〕　地山を壁としている。残存壁高は 20〜30 cmあり、立ち上がり角度は場所によって緩急がある。

〔カマド〕　北東隅に構築されている。天井部は失なわれている。燃焼部は側壁が地山削り出しによってつくられたものである。左側壁は幅 40・長さ 40 cmほどであるが右側壁は住居壁（東辺）をわずかに張り出させただけである。燃焼部内は床面より 2〜7 cm凹んでおりその規模は 70×70 cmほどである。奥壁は高さ 10 cmほどである。また幅約 20 cmの煙道が北東方向へのびているが、調査区外までのびるためその全容は把握できなかった。

〔床面の状況〕　床面は地山でありカマド方向へ向ってわずかに傾斜している。床面上には住居中央部を中心に厚さ 1〜2 cmの生活層が形成されている。床面上からは大小 4 個のピットが検出された。が、それらの配置・規模等に規則性はない、また北西部のピット 3 は径 40 cm、深

さ 40 cmで、その中央部から径 10 cmほどの柱痕跡が確認されているものであるが性格については明らかにできなかった。

〔出土遺物〕　出土した遺物は少量である。土師器・須恵器・赤褐色を呈する土器がある。

土師器　甕・稜埦がある。

甕（第 30 図 1～3）

大形で長胴形を呈するものとより小形のものがある。いずれもロクロ使用のものである。

前者（1．2）は胴部以上の破片で、1 では胴下半にヘラケズリがみられる。後者（3）も底部を欠くものである。

稜埦（第 30 図 4）

底部を欠くが現存破片の状況から推して台付のものであろう。外面はロクロ調整であり内面にはヘラミガキ・黒色処理が加えられている。ロクロ目は鋭く、稜のつくり出しも明瞭である。

須恵器

稜埦（第 30 図 5）

比較的小形のものである。胴下部の稜は明瞭につくり出されており稜以上はわずかに外反気味となる。高台部も外方にのびているがその張り出しはさほど顕著ではない。底部はヘラ切技法によって切離されている。なお坏部外面には横位に墨書があり「石背」と判読できる。

赤褐色を呈する土器

坏（第 30 図 6）

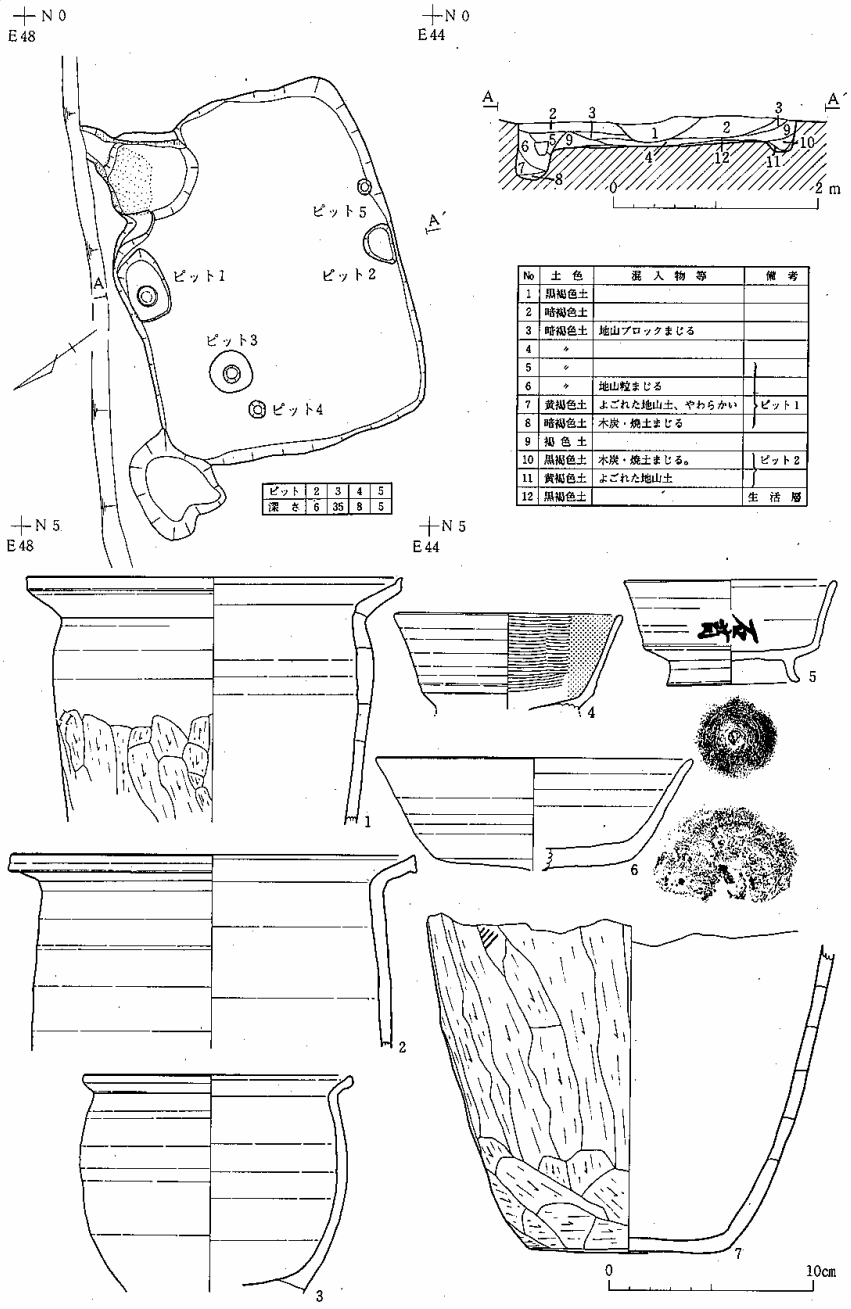
器厚はやや厚く黒褐色を呈す。内外ともにロクロ調整によるもので底部はヘラ切技法によって切離されている。再調整はない。

9 号住居跡遺物表

図版番号	出土層位	種　類	器　形	口径	器高	備考	登録番号
第30図1	カマド内	土師器	甕(大)	18.4			9住1
2	床　面	〃	〃	20.0			2
3	〃	〃	〃(小)	13.2	(10.6)		3
4	ピット2	〃	稜　埦	11.2		内黒	5
5	床　面	須恵器	稜　埦	10.4	5.1	ヘラ切り	7
6	〃	赤かっ色を呈する土器	坏	15.1	5.5	〃	6
7	ピット1	土師器	甕(大)				4

9 号住居跡破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	1層	2層	床面	カマド	ピット1	×
土師器	坏	口縁	ロクロ	内黒	1					1
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	12		2		1	
			ロクロ	内黒	1					
		胴部	ロクロ	ナデ	1			1		
			ケズリ	内黒	1					
			ケズリ	ナデ	22			5	1	
			格子タタキ	ナデ					1	
			平行タタキ	ナデ	3					
		底部	ケズリ		1					
			ケズリ	内黒	1					
須恵器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ	4					
		底部	ヘラ切り		2					
			不明		1					
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	2					
		胴部	平行タタキ	ナデ	3					



ピット	2	3	4	5
深　さ	6	35	8	5

No	土　色	混　入　物　等	備　考
1	黒褐色土		
2	暗褐色土		
3	暗褐色土	地山ブロックまじる	
4	〃		
5	〃		
6	〃	地山粒まじる	
7	黄褐色土	よごれた地山土、やわらかい	ピット1
8	暗褐色土	木炭・焼土まじる	
9	褐　色　土		
10	黒褐色土	木炭・焼土まじる。	ピット2
11	黄褐色土	よごれた地山土	
12	黒褐色土	〃	生　活　層

第30図　第９号住居跡およびその出土遺物

第10号住居跡（第31図）

〔重複〕　北辺で土壙（土壙50）と重複しており、それを切って構築されている。また後世の攪乱によって壁等が失なわれている部分がある。

〔平面形・規模〕　平面形はほぼ方形で、その規模は一辺約2.8mである。

〔堆積土〕　全体的に焼土・木炭・地山粒を含む黒褐色土であり、それらは壁際から徐々に自然流入したものである。

〔壁〕　地山を壁としている。残存壁高は12～22㎝で、ゆるやかに立ち上がる。

〔カマド〕　南辺西部に構築されている。天井部は失なわれている。燃焼部側壁は地山を削り出したもので、左右両側壁は幅10㎝前後で住居内へ約20㎝のびる。また奥壁は住居壁より約20㎝外側に張り出して掘りこまれ、燃焼部平面形はU字形である。奥壁は高さ約4㎝であり、これを境として煙道が約80㎝の長さでのびている。煙道部分には後世の攪乱が及んでおり詳細については不明な点が多いが、幅は15㎝前後で、先端部には煙道部底面より約10㎝低いピットが掘りこまれている。煙出部であろう。

なお、燃焼部内において、こぶし大の扁平な円礫を3個重ね、その上に土師坏が伏せられた施設が検出された。土師器坏は内黒のものであるが燃焼部前端側の半分は再酸化によって脱色していることからみて、カマド支脚としての施設であると考えられる。

また、左側壁前端部内側に径10㎝、長さ30㎝ほどの円柱上の石が立った状態で検出された。側壁の補強として使用されたのかもしれない。

〔床面の状況〕　土壙（土壙50）と重複する部分を除いて地山を床としている。面はほぼ平坦であるが住居中央部に向って傾斜しており、最も高い北西隅と中央部との比高は約10㎝ある。床面上においては何らの遺構は検出されなかった。

〔出土遺物〕　出土遺物は少ない。

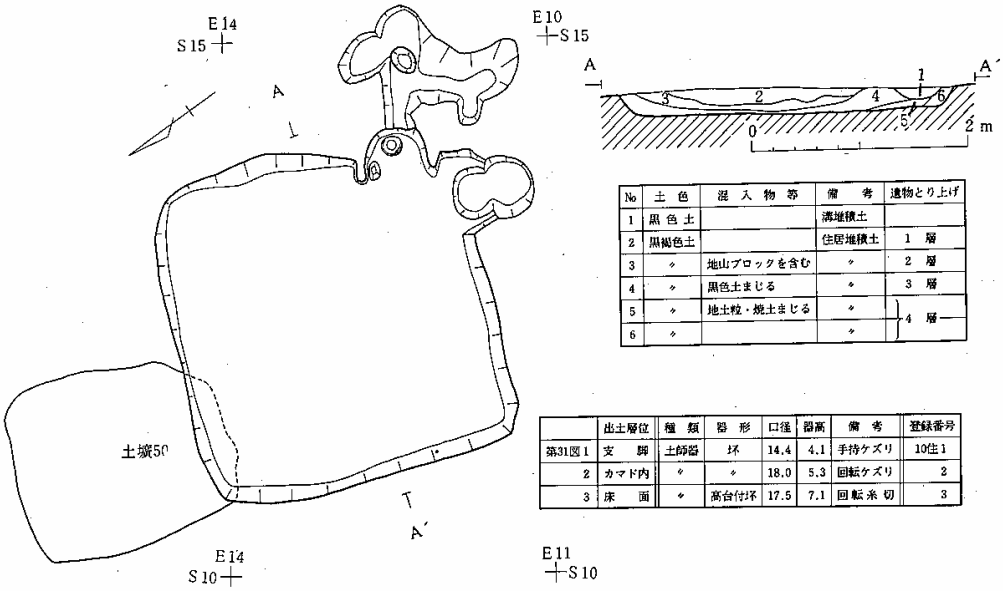
土師器　坏・高台付坏がある。いずれも製作に際しロクロを使用したものである。

坏（第31図1．2）

二点ある。両者とも胴部から口縁部へかけて直線的に外傾している。底部は手持ちヘラケズリ（1）、回転ヘラケズリ（2）の再調整が加えられており切離し技法は不明である。2は口径18㎝に達する大形のものである。また、1は支脚として使用されていたものである。

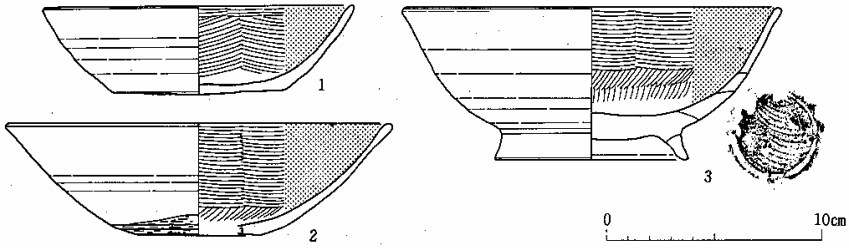
高台付坏（第31図3）

胴部で丸味をもち口縁部は外反気味に開く大形のもので、口径は17.5㎝ほどある。底部は回転糸切技法によって切離されている。



No	土色	混入物等	備考	遺物とり上げ
1	黒色土		溝堆積土	
2	黒褐色土		住居堆積土	1 層
3	〃	地山ブロックを含む	〃	2 層
4	〃	黒色土まじる	〃	3 層
5	〃	地土粒・焼土まじる	〃	4 層
6	〃		〃	

	出土層位	種類	器形	口径	器高	備考	登録番号
第31図1	支脚	土師器	坏	14.4	4.1	手持ケズリ	10住1
2	カマド内	〃	〃	18.0	5.3	回転ケズリ	2
3	床面	〃	高台付坏	17.5	7.1	回転糸切	3



10号住居跡破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面－内面	1 層	2 層	3 層	4 層	床面	溝	×
土師器	坏	口縁	ロクロ　内黒	1	1	1		1		1
		胴部	ロクロ　内黒			4			1	2
	高台付坏	高台	ロクロ	1						
	甕	口縁	ロクロ　ロクロ	6	1	4	1			
			ロクロ　内黒			1				
		胴部	ロクロ　内黒		1					1
			ロクロ　ナデ	8	1	2	7	1		
			ケズリ　ナデ	29	7	11	7	4	8	
			回転ハケメ　ナデ	6	2	2			3	
			格子タタキ　ナデ		1					
			平行タタキ　ナデ					1		
			不明	13		12		2		
		底部	ナデ						2	
			ケズリ				1			
須恵器	坏	口縁	ロクロ　ロクロ	1		1	1	2		1
		胴部	ロクロ　ロクロ			1	1		1	1
		底部	糸切り					1		
			ヘラ切り			1				
	甕	胴部	平行タタキ　ナデ						1	
			平行タタキ　青海波	2						
赤褐色	坏	底部	ヘラ切り			1				

第31図　第10号住居跡およびその出土遺物

土壙とその出土遺物

土壙は約60基検出された。それらは構造や性格の類似性によって次の5者にわけられる。なお、遺構番号は発見順に付したが、のちに木根等による攪乱と考えられたものを除外したため欠番となっているものがある。

1. 底面・壁面に焼面が認められるもの。

17基ある。それらは平面形態や規模の相違によってさらに類別することができる。

(1)　平面形態が長方形ないし隅丸長方形を基本とするが、短辺のうちどちらか一方が長くやや扇形気味に開く形となるものである。土壙17．30．31．32．39．47．49．50がこれにあたる。（第32・33図）第8号住居跡土壙1もこの類に含まれるものであるから計8基ある。なお、発掘調査時の実測図作成上の不備により焼面の範囲を明示できないものがいくつかある。

〔重複〕　重複関係の認められる土壙は31．32．47．50である。31・32は相互の重複であり32が古く、31が新しい。47・50はそれぞれ第2号住居跡、第10号住居跡と重複しておりいずれも住居跡によって切られている。また第8号住居跡土壙1は、住居跡の項で述べたように住居使用時かあるいはその直後に構築されたと考えられるものである。

〔形態・規模〕　形態についてはすでに述べた。規模は表に示した通りである。長軸長が2mを越えるものが多く、17のように2.8mに及ぶものもある。深さは49が約50㎝と最も深く39が10〜20㎝で最も浅い。しかし、遺構の確認が地山面でなされているために正しい深さは不明である。ただし第8号住居跡土壙1の場合は後の削平が及んでいないからその深さ（35〜40㎝）は他の土壙の深さの推定には参考となろう。

底面は平坦であり、ピット30を除いておおむね水平である。ピット30では扇形に開く側へ向って傾斜がみられその高低差は10㎝ほどある。また第8号住居跡土壙1もややその傾向がある。

壁面の状況は比較的よく残存しているピット31．49．第8号住居跡土壙1によると、底面からの移行部分はやや丸味をもって立ち上がるが壁面自体は急傾斜であり、部分的に垂直に近いところもある。

土 壙 1—(1) 一 覧

土 壙	長 軸	短 辺		深 さ	図 示 遺 物
		長	短		
17	280	180	150	10	土師器甕
30	160	120	70	15	
31	230	140	100	25	土師器甕・小形鉢
32	240	200	110	15	
39	260	190	115	13	赤褐色を呈する土器皿、支脚(？)
47				20	土師器坏
49	225	180	110	50	土師器甕
50	200	155	110	28	須恵器坏
8住土壙1	200	110	80	40	

(cm)

〔焼面の分布〕　焼面は底面および壁面に認められる。底面の焼面は土壙によってその範囲に違いはあるが中央部を中心としてかなり広く分布している。壁面の焼面はいずれも扇形に開く側の壁およびその左右の壁にみられ、基部の壁にはみられない。また左右壁の焼面の多くは基部壁にまでは達していない。そして底面から数cm上位からみられ、それは扇形に開く側の壁とそれに接する部分の左右壁において顕著である。

〔堆積土〕　いずれの土壙も底面上に厚さ3〜10 cmほどの水平な焼土や木炭層がみられる。その上部には自然流入によると思われる層が堆積している。

底面上の焼土・木炭層は、それが水平であることなどからみて土壙の使用に伴って生じたものと考えられる。

また、自然流入土の場合特徴的なことは、第8号住土壙1・土壙17・30・49にみられるように、地山土または地山ブロックを多量に含む層が多量に流入していることである。それらはわずかに焼土や木炭を含む場合もあるがほとんど均質で底面上の焼土・木炭層の直上に堆積していることが多い。

〔出土遺物〕　すべての土壙から遺物の出土がみられれそのうち図示可能なものは土壙 17・31・39・47・49・50にある。なお第8号住居跡土壙1出土遺物についてはすでに述べた。

土壙17 出土遺物：土師器甕がある。

土師器甕（第34図1）

長胴形のものである。胴下半部は欠損している。口縁部は頸部で外半したのち先端部がやや上半におりまげられた口縁部をもつ。器面調整は内外ともロクロ調整で、外面胴下半部にヘラケズリが施されている。

土壙31 出土遺物：土師器甕・小形鉢がある。

土師器甕（第34図2）

中形のものである。胴下半部を欠く。口縁部は短く端部は上下にわずかにつまみ出されて縁帯状をなす。器面調整は胴部内外面とも回転ハケメが施されている。

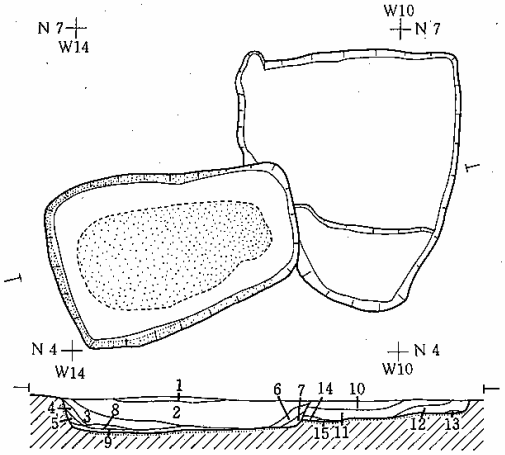
土師器小形鉢（第34図3）

製作に際しロクロ使用の痕跡は認められない。坏に近似する器形である。底部は丸底気味で、口縁部はわずかに外反気味となる。胴下半部にヘラケズリが施されている。底外面は雑なナデ調整である。内面もナデ調整であるが、前段階としての刷毛目も上半部に観察される。

土壙39 出土遺物：赤褐色を呈する土器皿、支脚（？）がある。

赤褐色を呈する土器皿（第34図4）

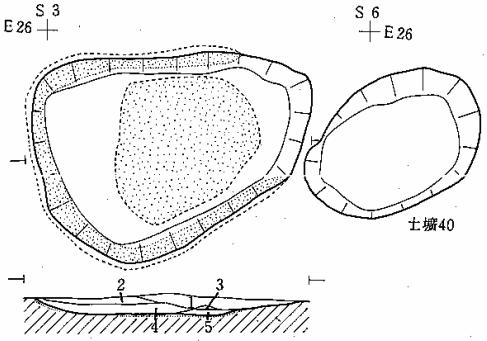
小片からの作図のため正確さを欠くが、口径10.5 cm、器高2.5 cm前後のものである。底部を欠く。胴部が外傾して立ち上がり強く外折する口縁部をもつ、内外面ともロクロ調整である。



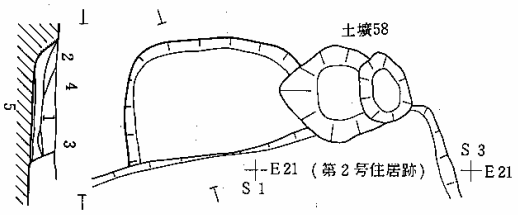
土壙31土壙32

No	土色	混入物等		遺物収上げ
1	黒褐色土	水田耕作土		1 層
2	〃		土壙31堆積土	2 層
3	黒色土			3 層
4	褐色土	地山土を多量に含む		
5	黒褐色土	焼土を多量に含む		
6	黒褐色土	焼土・木炭をわずかに含む		
7	〃			
8	暗赤褐色土	焼土・木炭多量に含む		4 層
9	〃	〃		5 層
10	褐色土		土壙32堆積土	1 層
11	黒色土			2 層
12	暗赤褐色土			3 層
13	赤褐色土	焼土多量に含む		4 層
14	暗赤褐色土			5層
15		焼土		

No	土色	混入物等	遺物とり上げ
1	赤褐色土		1 層
2	暗赤褐色土		
3		焼土	2 層
4	赤褐色土	焼土・木炭多い	
5	赤褐色	焼けて固い	

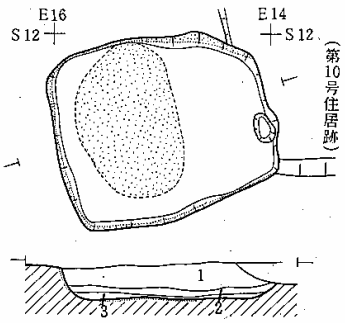


土壙39



土壙47

No	土色	混入物等	遺物とり上げ
1	暗褐色土	地山粒をやや含む	
2	〃	焼土・木炭混入	
3		地山ブロック	
4	暗褐色土	木炭・地山ブロックをやや含む	
5		木炭層	

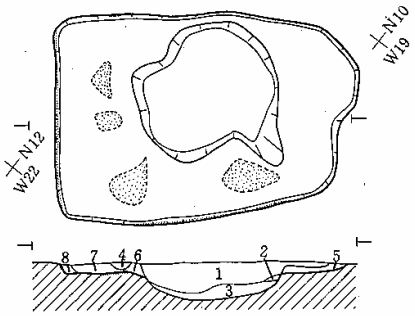


土壙50

No	土色	混入物等	遺物とり上げ
1	黒褐色土	焼土・木炭をわずかに含む	1 層
2	暗褐色土	焼土木炭をわずかに含む	2 層
3	黒色土	木炭を多量に含む	

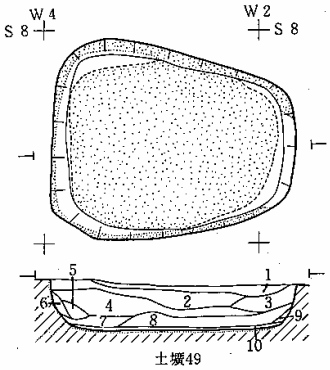
0 1 m

第32図　土壙１－（１）



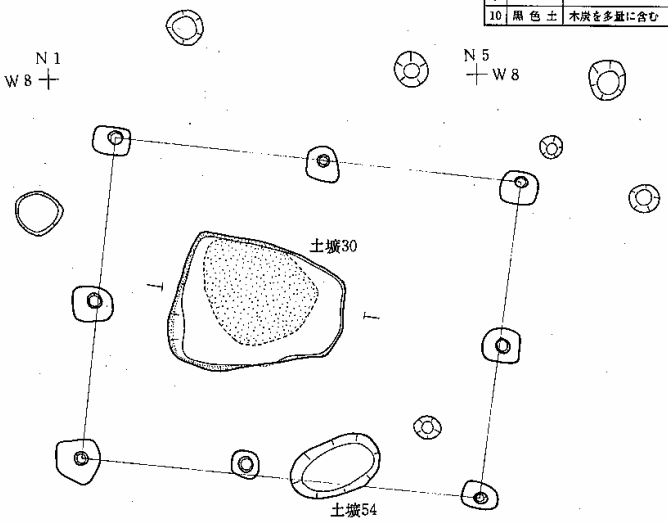
土壙17

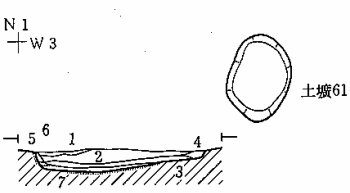
No	土　色	混入物等	備　考
1			
2			新しい
3			掘りこみ
4			
5	黄褐色土	よごれた地山土	
6	〃	〃	
7	暗褐色土	焼土まじる	
8	黄褐色土	よごれた地山土	

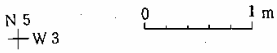


土壙49

No	土　色	混入物等
1	黒褐色土	
2	暗褐色土	地山土ブロックを多量に含む
3	〃	木炭・焼土を含む
4	暗褐色土	地山ブロックを含む
5	〃	地山土を多量に含む
6	〃	〃
7	褐　色　土	
8	暗褐色土	焼土・木炭を多量に含む
9	〃	
10	黒　色　土	木炭を多量に含む

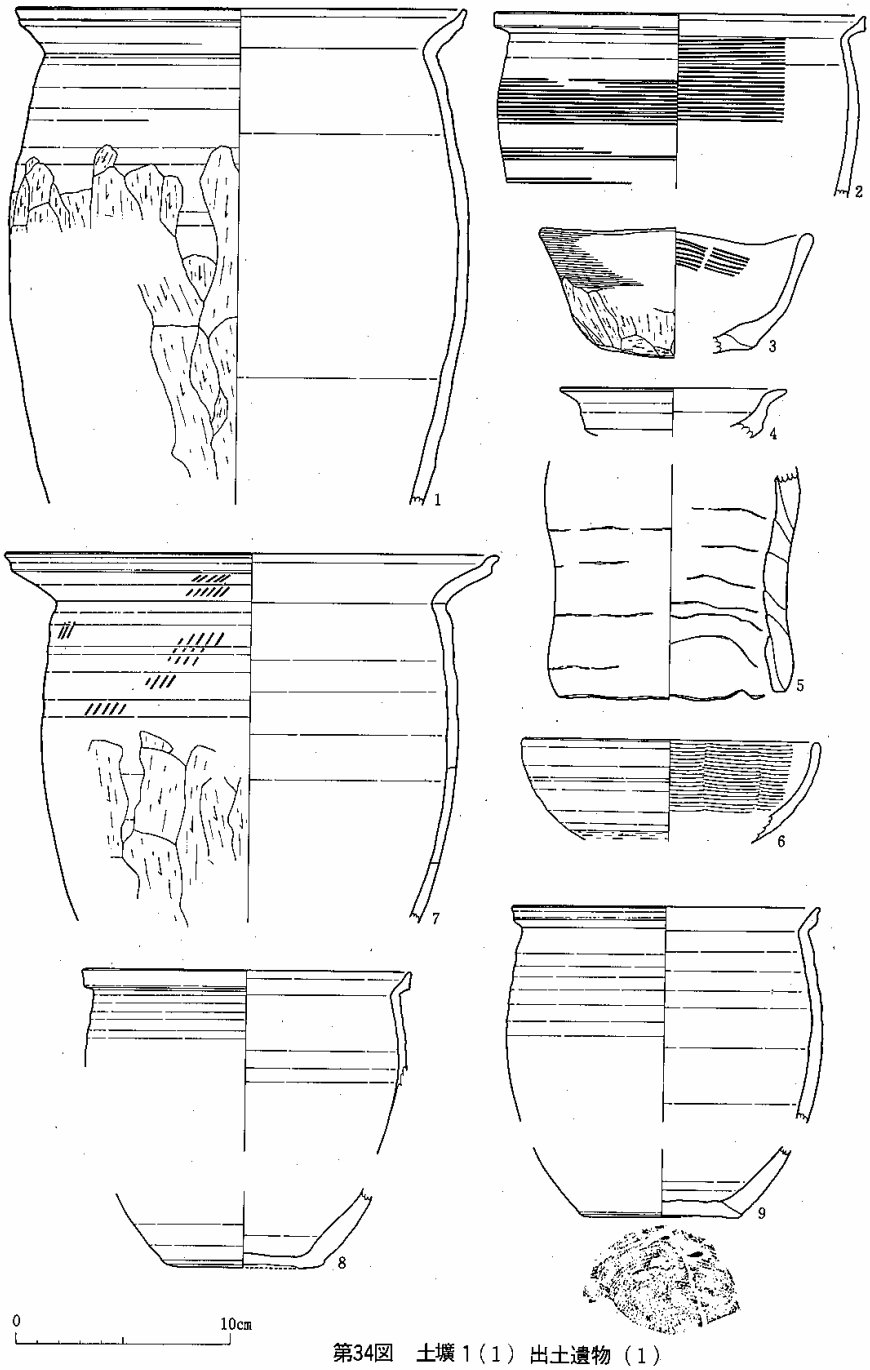




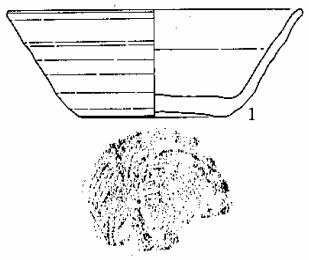


No	土　色	混入物等
1	褐　色　土	
2	〃	
3	黄 褐 色 土	よごれた地山土
4	暗 褐 色 土	
5	暗赤褐色土	焼土わずかに含む
6	〃	木炭を多量に含む
7		焼土・木炭層

第33図　土壙１（１）出土遺物（１）



第34図　土壙１（１）出土遺物（１）



支脚（第34図5）

径12㎝ほどのややくびれた円筒形のものである。破片のため器高は明らかでない。内外面は雑なナデが加えられており、積上痕跡が明瞭である。

土壙47 出土遺物：土師器坏がある。

土師器坏（第34図6）

内弯しながら立ち上がる丈の高いものである。底部は外損している。内面にヘラミガキが施されているが黒色処理は行なわれていない。外面はロクロ調整で胴部下端に回転ヘラケズリ再調整が加えられている。

土壙49 出土遺物：土師器甕がある。

土師器甕（第34図7～9）

長胴形をなすもの（7）と中形のもの（8・9）とがある。

前者は頸部で強く外反し、端部が外返気味につまみ出された口縁部を存するもので、外面には平行タタキのちロクロ調整で、その後胴下半にはヘラケズリが施されている。内面はロクロ調整である。

後者は、頸部で屈折した短い口縁部をもつもので口縁端部上端がやや上方に立つ、胴部は丸味をもって底部へ至り、底面には回転糸切痕が認められる。器面調整は内外ともロクロ調整である。なお、この土器は器壁の剥離が著しく胴部と底部とは接合しない。剥離の状況は明らかに熱作用がその原因であり、土壙の性格を考察する上で注目される。

土壙50 出土遺物：須恵器坏がある。

須恵器坏（第35図）

胴部から口縁部まで直線的に外傾する器形のもので、底部は回転糸切技法によって切離されている。

(2)　平面形態が円形もしくはだ円形を呈するもので、土壙40・48・53の3基がこれにあたる。（第32．36図）

〔重複〕　3基とも他遺構との重複はない。ただし、土壙53では焼面の数からみて少なくとも3段階の使用が確認された。

〔形態・規模〕　平面形は円形を基本とするが、3基それぞれ形態・規模に違いがある。

土壙1－（1）遺物表

図版番号	出土層位	種　類	器　形	備　考
第34図1	土壙17	土　師　器	甕（大）	
2	31	〃	〃（中）	
3	〃	〃	小形鉢	ロクロ不使用
4	39	赤褐色を呈する土器	皿	
5	〃	〃	支脚（？）	
6	47	土　師　器	坏	非黒色化
7	49	〃	甕（大）	
8	〃	〃	〃（中）	
9	〃	〃	〃（〃）	回転糸切
第35図1	50	須　恵　器	坏	回転糸切

土 壙 1―(1) 破 片 集 計 表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	17	30	31					32						5			47		50		49		
						2層	1層	2層	5層	底面	×	1層	2層	3層	5層	底面下	×	1層	底面	×	×	2層	1層	2層	3層	4層	×
土師器	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	3			3				1	3	1				8	4	2	5	1	6	3	1		2
			ヨコナデ	ミガキ	1																						
			ヨコナデ	内黒																	3	1					
		胴部	ロクロナデ					5				2	1	1				10	10	1	7	5	3	3	1		2
			ロクロ刷毛		2																			3			
			ロクロ内黒											1							2			1			
			ケズリナデ				3	8	1			3	1		4	2		41	18		30	6	22	22			2
			ケズリ刷毛		2	1																					
			ケズリ内黒															3				1	1	1			
			格子タタキナデ																1		4	1	2	1			
			平行ナデ					2																			
			不明					2	1			6	10	3	15			40	20		40	12	7				
			回転ハケメナデ																				2	2			
		底部	糸切		2		2		1			1	3		2									1		1	
			ケズリ		2			1											1								
			ケズリ内黒							1					1						1						
			ナデ										1					1			3	1					
		把手																1									
	坏	口縁	ロクロ内黒															1			2		1	3			
			ロクロミガキ										1														
		胴部	ロクロ内黒																		2			1			
			ロクロミガキ																								
		底部	糸切内黒																			1					
			回転ケズリ内黒																		1		1				
			手持ケズリ内黒																		1						
			不明内黒																		1						
			不明ミガキ									1															
須恵器	甕	胴部	平行ナデ						1												1						
		底部	ケズリ																					1			
	坏	口縁																2			9		5	2			
		胴部																			5		2	4			
		底部	糸切															1									
			ヘラ切																		4						
	蓋	口縁																1									
赤かっ色を呈する土器	坏	口縁					1	1			1	1					1	2		3				1			
		体部							1																		
		底部	糸切															1									
			ヘラ切																1								

土壙40　長軸1.70m、短軸1.20mのだ円形である。確認面からの深さは10cmほどしかなく詳細は不明であるが、壁面はゆるく立ち上がっている。底面は皿状を呈す。

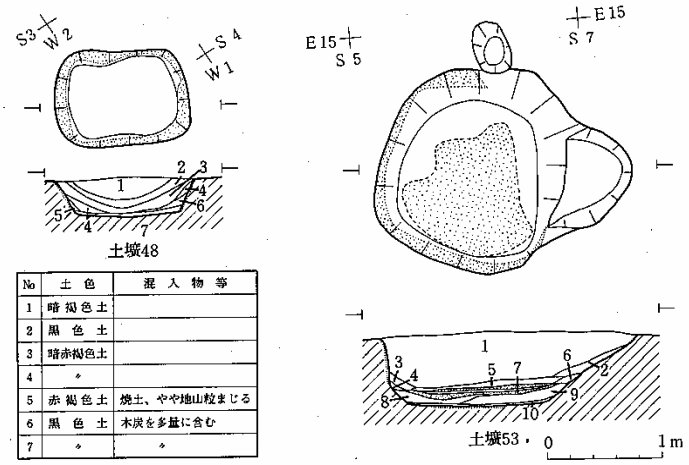
土壙48　長軸125cm、短軸85cmでむしろ隅丸長方形に近い。深さは約35cmで壁は外傾気味にたち上がる。また底面は水平に近く、断面形はやや逆台形を呈す。

土壙53　軸長1.6mほどの隅丸方形に近いが、そのうちの一辺（西辺）に長さ60cmほどの張り出し部がみられる形態のものである。張り出しをもつ辺のはゆるやかに立ち上がるが、他の部分では垂直に近い。確認面からの深さは約65cmあり底面はほぼ水平である。

土 壙 1―(2) 一 覧

(cm)

土壙	規模	深さ	図示遺物
	170×120	10	赤かっ色を呈する土器鉢・壺・坏・円面硯(?)
48	125× 85	35	赤かっ色を呈する土器甕・土師器坏
53	160×160 張り出しあり	65	土師器甕、赤褐色を呈する土器小皿（?）



No	土色	混入物等
1	暗褐色土	
2	黒色土	
3	暗赤褐色土	
4	〃	
5	赤褐色土	焼土、やや地山粒まじる
6	黒色土	木炭を多量に含む
7	〃	〃

No	土色	混入物等	遺物とり上げ
1	暗褐色土	焼土・木炭・地山ブロックまじる	1 層
2	〃	〃	〃
3		焼土	〃
4	暗褐色土	焼土・木炭まじる	〃
5	黒色土	焼土・木炭多量にまじる	2 層
6	暗褐色土	焼土まじる	〃
7	黒色土	木炭まじる	3 層
8	赤褐色土	焼土	〃
9	黄褐色土	よごれた地山土、焼土まじる	〃
10	黒色土	木炭まじる	〃

第36図　土　壙　1―(2)

〔焼面の分布〕　焼面の範囲も各様である。

土壙40　底面にのみ認められた。ただしこの土壙は壁ののこりが少なくかなり削平されているとみられる。他の多くの土壙の状況からみて、壁面にも焼面が存在した可能性が強い。

土壙48　底面はわずかであるが四壁全部に焼面がみられる。これは本遺跡では本土壙だけである。

土壙53　底面および張り出し部壁を除く3方に認められ、その状況は(1)の土壙に類似している。底面の焼面は3枚ある。最下位の焼面は土壙底面にあたる地山面にあり、それより14㎝、16㎝上位にもそれぞれ橙色を呈した焼面が認められた。その各々の上部には焼土・木炭層の堆積がみられるが各焼面間にはその他の流入土は認められない。このことは本土壙が継続的に少くとも3回にわたって使用されたことを示している。

〔堆積土〕　堆積土の状況は前記(1)の土壙と大差がない。すなわち底面の焼土・木炭層とその上部の自然流入土からなる。特に土壙53では最下の焼面上にロームブロックが流入している。

〔出土遺物〕　各土壙から遺物が出土している。その状況はそれぞれ特色あるものである。

土壙40出土遺物：赤褐色を呈する土器甕・鉢・壺・坏円面硯？がある。

甕（第37図1）

長胴形をなすと思われる。口縁部は、頸部で強く折れ曲がってほぼ小平にのび端部はやや上方に立つ。内外ロクロ調整であるが胴外面にヘラケズリが施されている。色調は赤かっ色を呈し焼成は堅緻で、須恵質である。次にのべる赤褐色を呈する土器に含めて考えるべきものかも知れない。

鉢（第37図2）

底部を欠く、頸部で外折した短い口縁部をもつ、端部はやや上方につまみ出されている。胴部はやや丸味をもって底部へ至ると思われる。内外面ともロクロ調整で胴外面には前段階の平行タタキ痕が観察される。

壷（第37図3）

頸部以上の破片である。広口のものと思われる。口縁端部は断面三角形気味につくられている。内外面ともロクロ調整である。

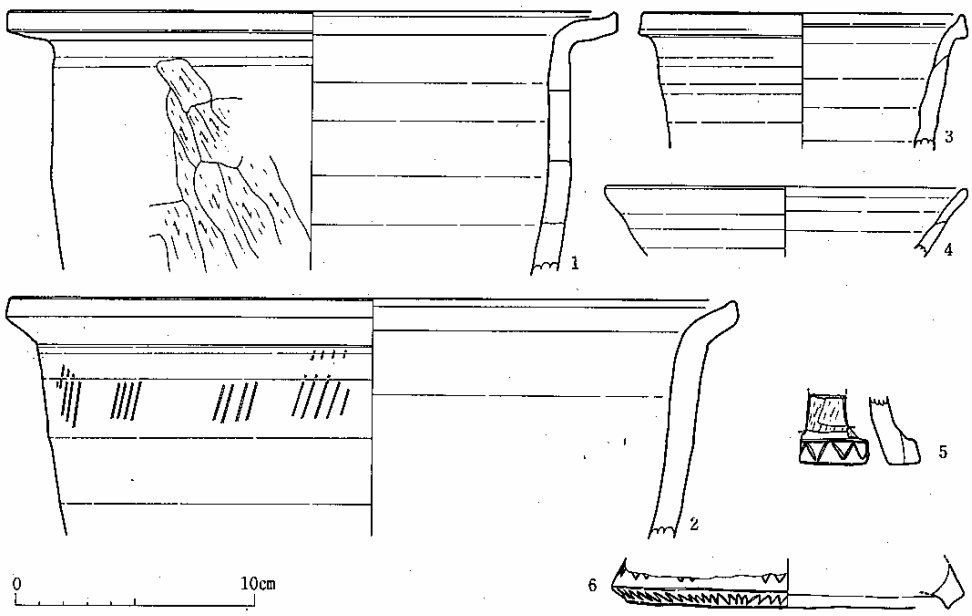
坏（第37図4）

胴部から直線的に外傾して口縁部に至る。底部は欠損しておりその状況は不明であるが、同一個体とも考えられる高台部も出土していることから高台付坏になる可能性もある。

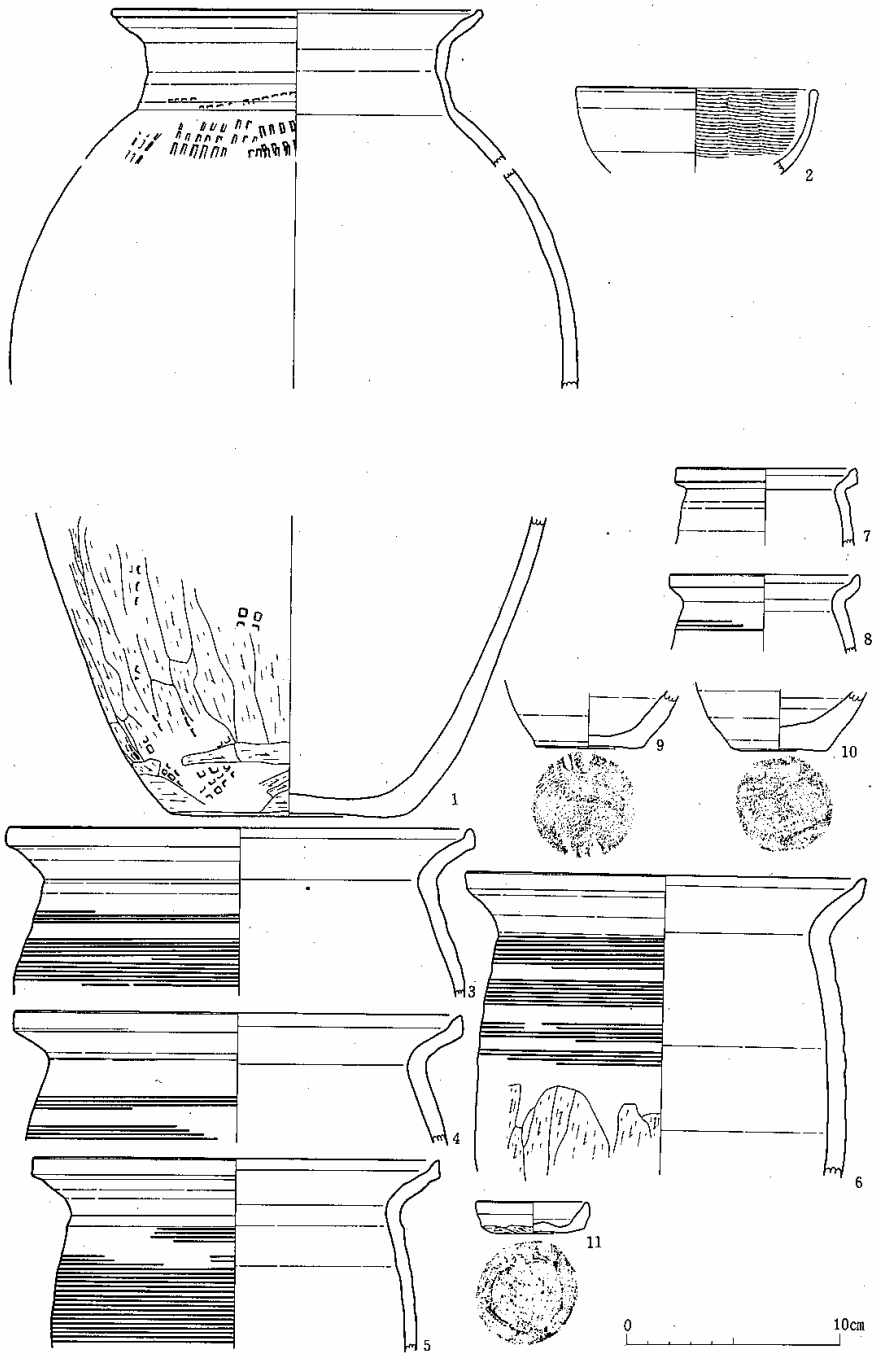
円面硯（?）　（第37図5・6）

2 点出土している。小破片のため推定の域をでないが、その形状からみて円面硯の可能性がある。いずれも脚部裾と思われる。5 は脚部には方形の窓が切られ、下縁に突帯を巡らして外面に沈線による鋸歯が描かれている。6 は径約 15 cmほどで裾部は断面三角形に形づくられ、外面、下面に鋸歯文が描かれている。いずれも焼成は堅緻である。

以上のように本土壙の出土遺物は土師器（破片）及び赤褐色を呈する土器のみで占められて



第37図　土壙(1)―(2)出土遺物(1)



第38図　土壙１―（２）出土遺物（２）

おり、土師器の中には焼成が極めて良好なものを含んでいる。またヘラミガキは施されているが黒色処理のない土師器甕（鉢形）片の出土も注目される。（破片集計表参照）

土壙48 出土遺物：土師器坏・赤褐色を呈する土器甕がある。

土師器坏（第38図2）

胴下部から内弯気味に立ち上がる丈の高い器形である。底部を欠く。外面はロクロ調整、内面にはヘラミガキが施されているが黒色化は行なわれていない。

赤褐色を呈する土器　甕がある。

甕（第38図1）

口縁ー頸部片、胴部片、底部片とにわかれ、それぞれは接合しないが同一個体である。図上復元によると、直立する長い頸部とそれから外傾する口縁部を有し頸部以上の形態は広口状のものである。胴部はなで形で倒卵形を呈す。底部は平底である。推定器高は約38㎝である。器面調整は胴外面上半は格子タタキ→ロクロ調整、下半は格子タタキ→ヘラケズリで内面はナデ調整である。なお内面胴上半にはナデ調整以前に布状の圧痕が認められる。外面のタタキ技法に対応する何らかの痕跡であると考えられる。底外面は雑なナデである。

土壙53 出土遺物：土師器甕がある。

土師器甕（第38図3～10）

長胴形をなすもの（3～6）と小形のもの（7～10）とがあるが、図示できるものはいずれも胴上半以上および胴下半の破片である。

前者はいずれも頚部で外反し口縁端部が上方に立つものである。また胴外面上部の器面調整は回転ハケメである。下半部の明らかなものではヘラケズリが施されている。内面はロクロ調整である。

後者についても口頚部形態は前者と同様である。器面調整はわずかに回転刷毛目痕がみられるものもあるが、その後のロクロ調整が最終調整である。また同一個体ではないが胴下半部の破片によると、ロクロ調整は胴部下端まで及び、底部は回転糸切技法によって切離されている。

このように本土壙出土の遺物は破片集計表からも明らかなように、土師器甕が主体で、特に長胴形のものはその器面調整に、回転刷毛目を施しているという点に強い特色を見出すことができる。

赤褐色を呈する土器小皿（？）　（第38図11）

完形品である。口径5.4㎝、器高1.5㎝の小皿形のもので、底部は回転糸切技法によって切離されたのち周縁部に手持ヘラケズリが加えられている。形態は蓋に付けられるツマミに似ている。

土壙１―(2)遺物表

図版番号	出土層位	種　類	器　形	口径	器高	備考
第37図１	土壙40	赤かっ色を呈する土器	カ　メ	25.7		
2	〃	〃	鉢	30.7		
3	〃	〃	盞	14		
4	〃	〃	坏	15.2		
5	〃	〃	円面硯？			
6	〃	〃	〃			
第38図１	土壙48	〃	甕	17.4	(38)	
2	〃	土師器	坏	11.5		非黒色
3	土壙53	〃	甕(大)	21.8		
4	〃	〃	〃	21		
5	〃	〃	〃	19		
6	〃	〃	〃	18.8		
7	〃	〃	甕(小)	8.5		
8	〃	〃	〃	9.5		
9	〃	〃	〃			
10	〃	〃	〃			
11	〃	赤かっ色を呈する土器	小皿(?)	5.4	1.5	

土壙１―(2)破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面――内面	土壙40	土壙48	土壙53 1層	2層	1・2層	3層
土師器	甕	口縁	ヨコナデ　ヨコナデ	10	1	33	4	27	10
			ヨコナデ　ハケメ	1					
		胴部	ロクロ　内黒		1				
			ロクロ　ナデ	9	9	47	2	25	12
			ロクロ　回転ハケメ			2		1	
			ケズリ　ミガキ	1					
			ケズリ　ナデ	16	16	171	7	124	35
			ケズリ　ハケメ			69	2	44	21
			ケズリ　回転ハケメ			3	1		
			平行タタキ　ナデ					1	1
			不明	40		50	5	95	12
		底部	糸切り					2	
			ケズリ		3			2	
			ナデ		3			18	2
			不明			3		3	
須恵器	坏	口縁	ロクロ　ロクロ		1	1			
	甕	胴部	ケズリ　ナデ			2			
			平行タタキ　オサエ		1				
			〃　ナデ			2		1	
赤褐色	坏	口縁	ロクロ　ロクロ	6		1		1	1
		胴部	ロクロ　ロクロ					1	1
		底部	不明						
	高台付坏		高台	1					
	盞	口縁	ロクロ　ロクロ						1

(3)　平面形が円形もしくはだ円形を呈するが小規模なものである。長軸長が40～80㎝程度であり、(2)の土壙とは規模の点において区分できる。土壙44・54・55・56（第39図）・61（第33図）がこれにあたる。なお、土壙44を除いて焼面そのものは確認されなかったが、堆積土中に多量の焼土がみられることからこの項に含めて取扱う。

土壙44　径50㎝前後の不整円形である。底面はほぼ水平で確認面からの深さは約5㎝ある。また底面下はさらに約10㎝掘方状に掘られている。焼面は底面と壁面にみられ壁面のそれは馬蹄状に巡っている。

土壙54・55・56・61　土壙55と56の間に重複関係がある。55が新らしく56の堆積土を切って構築されている。規模は、土壙54が90×50㎝で最も大きく、56が60×40㎝で最も小さい。いずれも底面に焼土や木炭の多量にまじる層の堆積が認められる。また土壙55では、土壙44と同様底面下に深さ5㎝ほどの浅い掘方状落ちこみがみられた。

〔出土遺物〕　遺物が出土したのは土壙54、土壙55・56（両者は重複関係にあるものであるが遺物のとり上げ時においてそれを区分できなかった。）である。いずれも土師器片であるが量は少なく図示できるのは土壙55・56出土の土師器甕のみである。

土壙１―(3)一覧

(㎝)

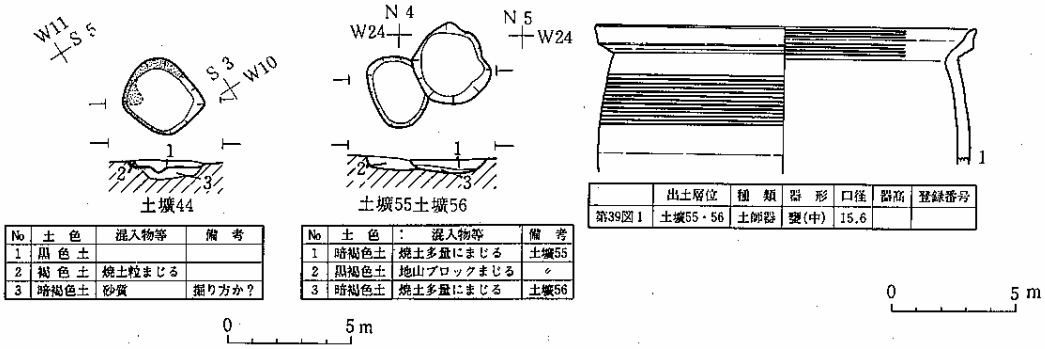
土　壙	規　模	深　さ
44	60 × 50	5
54	90 × 50	13
55	65 × 55	14
56	60 ×(40)	10
61	80 × 55	8

土壙55・56出土遺物

土師器甕（第39図1）

中形のものである。胴部上半以上の破片で、胴外面に回転刷毛目が施されている。回転刷毛目は口縁部内面にもみられ

る。他の部分はロクロ調整である。



No	土 色	混入物等	備 考
1	黒 色 土		
2	褐 色 土	焼土粒まじる	
3	暗褐色土	砂質	掘り方か？

No	土 色	混入物等	備 考
1	暗褐色土	焼土多量にまじる	土壙55
2	黒褐色土	地山ブロックまじる	〃
3	暗褐色土	焼土多量にまじる	土壙56

	出土層位	種 類	器 形	口径	器高	登録番号
第39図1	土壙55・56	土師器	甕(中)	15.6		

0 5 m

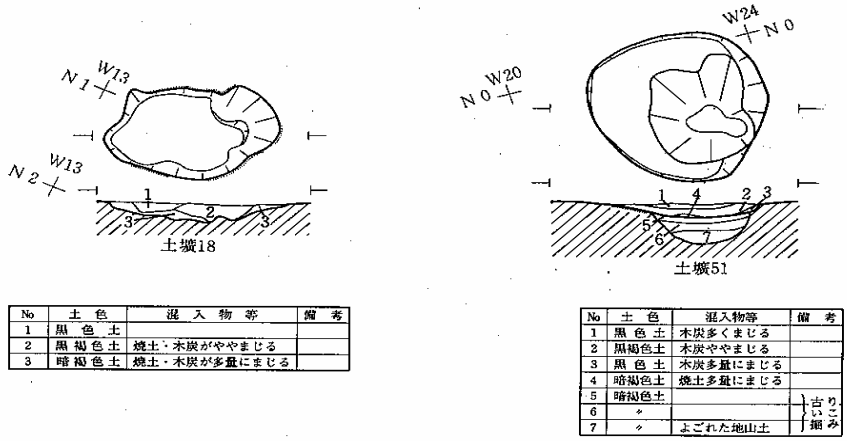
第39図　土壙 1－(3)およびその出土遺物

(4)　削平や攪乱等による変形のため旧状の形態が明瞭でないと考えられるものである。土壙18・51がこれにあたる。(第40図)

土壙18　長軸1.4m、短軸0.8mほどの不整だ円形である。底面は皿状を呈し、最深部は確認面から約 15 cmあるが凹凸が著しい。後世において木根等による攪乱を受けていると思われる。焼面は壁面にわずかに断続的にみられる。現存部の状況から推定すると馬蹄状に巡っていたと考えられる。

土壙51　径1.5mほどの円形を呈す。ただし削平によって壁が失なわれている部分もあり旧状は不明である。底面は一方に向ってゆるく傾斜しており、最深部における壁高は 10 cm ほどある。焼面は底面の一部に痕跡的に認められる程度であるが、底面上・壁沿いには焼土・木炭層の堆積が認められた。

〔出土遺物〕　両土壙から若干の土器が出土した。しかしいずれも小片であり図示できるものはない。



No	土 色	混 入 物 等	備 考
1	黒 色 土		
2	黒 褐 色 土	焼土・木炭がややまじる	
3	暗 褐 色 土	焼土・木炭が多量にまじる	

No	土 色	混入物等	備 考
1	黒 色 土	木炭多くまじる	
2	黒褐色土	木炭ややまじる	
3	黒 色 土	木炭多量にまじる	
4	暗褐色土	焼土多量にまじる	
5	暗褐色土		古いりこみ
6	〃		〃
7	〃	よごれた地山土	〃

第40図　土壙 1－(4)

土壙1—(3)(4)破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	土壙1—(3) 54	土壙1—(3) 55・56	土壙1—(4) 18	土壙1—(4) 51
土師器	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	3	1	2	1
		胴	ロクロ	ナデ	3		1	1
			ケズリ	ナデ	4	1		2
		底	回転糸切					1
			ナデ		1		2	
赤褐色を呈する土器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ				1
		体	ロクロ	ロクロ			1	

2. 底面のほぼ中央部に小ピットをもつもの。(第41．42図)

計17基が検出された。それらの分布状況は調査区北西側において密であり土壙5・6のように重複もしくは隣接状態にあるものもある。また調査区南東部にもまばらに分布している。土壙57のみが、第5号住居跡と重複しておりそれより古い。

各土壙の平面形・規模は下表に示した通りである。

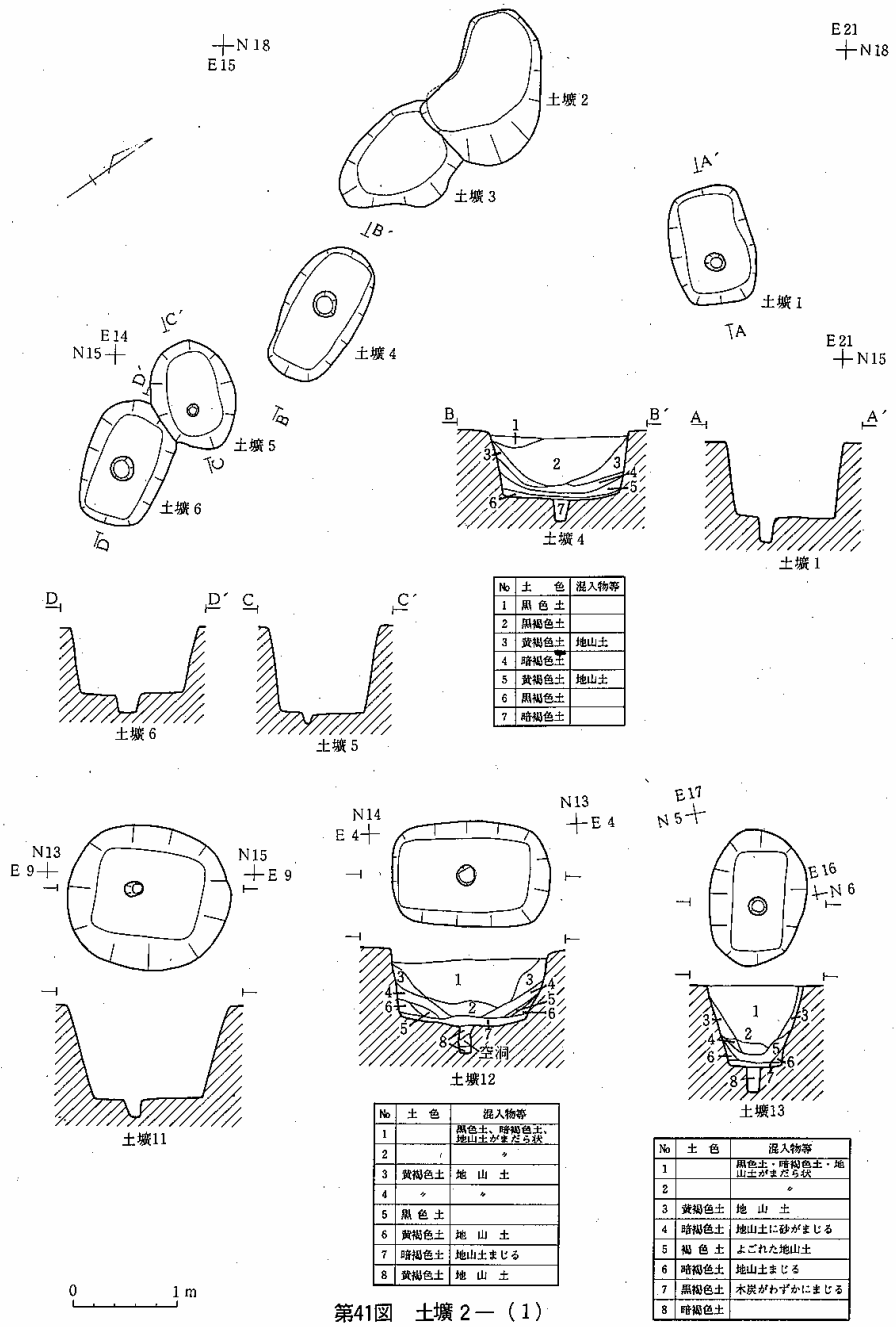
平面形は長方形・だ円形を基調とするものが多い。規模は長軸100 cm、短軸60 cm前後を中心としており、最大のものは145×95 cm（土壙14)、最小のものは75×65 cm（土壙37）である。壁はかなり急角度で直線的に立ち上がっている。深さは、確認面が地山であるため正しくは不明であるが、現状では土壙5が85 cmと最も深い。底面は平坦で、小ピットが1個みられる。その置はほぼ中央部にあたるものが多い。いくぶん扁している場合でも長軸方向の中心線上に位置している。小ピットは径15～20 cm前後のものが大多数であるが、深さは11～44 cmとややばらつきがある。

このように、これらの土壙は形態上きわめて近似しているものであるが、その傾向は堆積土の状況においても同様である。土壙13、57がその典型といえる。すなわち、底面に薄く木炭のまじる黒色土の水平層があり、その上部に壁沿いに地山土が「U」字形に堆積し、さらにその

土壙2一覧

(cm)

	平面形	規模	深さ	ピット径	ピット深さ	備考
1	不整長方形	95×55	70	20	33	
4	長方形	115×55	65	25	20	
5	不整長方形	80×50	85	11	10	
6	隅丸長方形	100×53	55	25	17	
11	〃	100×85	90	15	15	
12	長方形	125×70	63	20	27	
13	〃	95×50	77	16	24	土師器出土
14	不整長方形	145×69	60	20	27	
15	隅丸長方形	80×70	47	15	41	
16	長方形	95×50	69	15	39	
19	不整だ円形	100×80	30	25	10	
35	長方形	95×43	69	10	30	
36		100×75	60	17	33	
37		75×65	65	20	28	
41	不整長方形	130×80	65	24	26	
45	不整だ円形	128×76	68	15	28	
52	長方形	136×75	46	22	11	土師器・須恵器出土
57	〃	140×75	53	15	24	5住より古

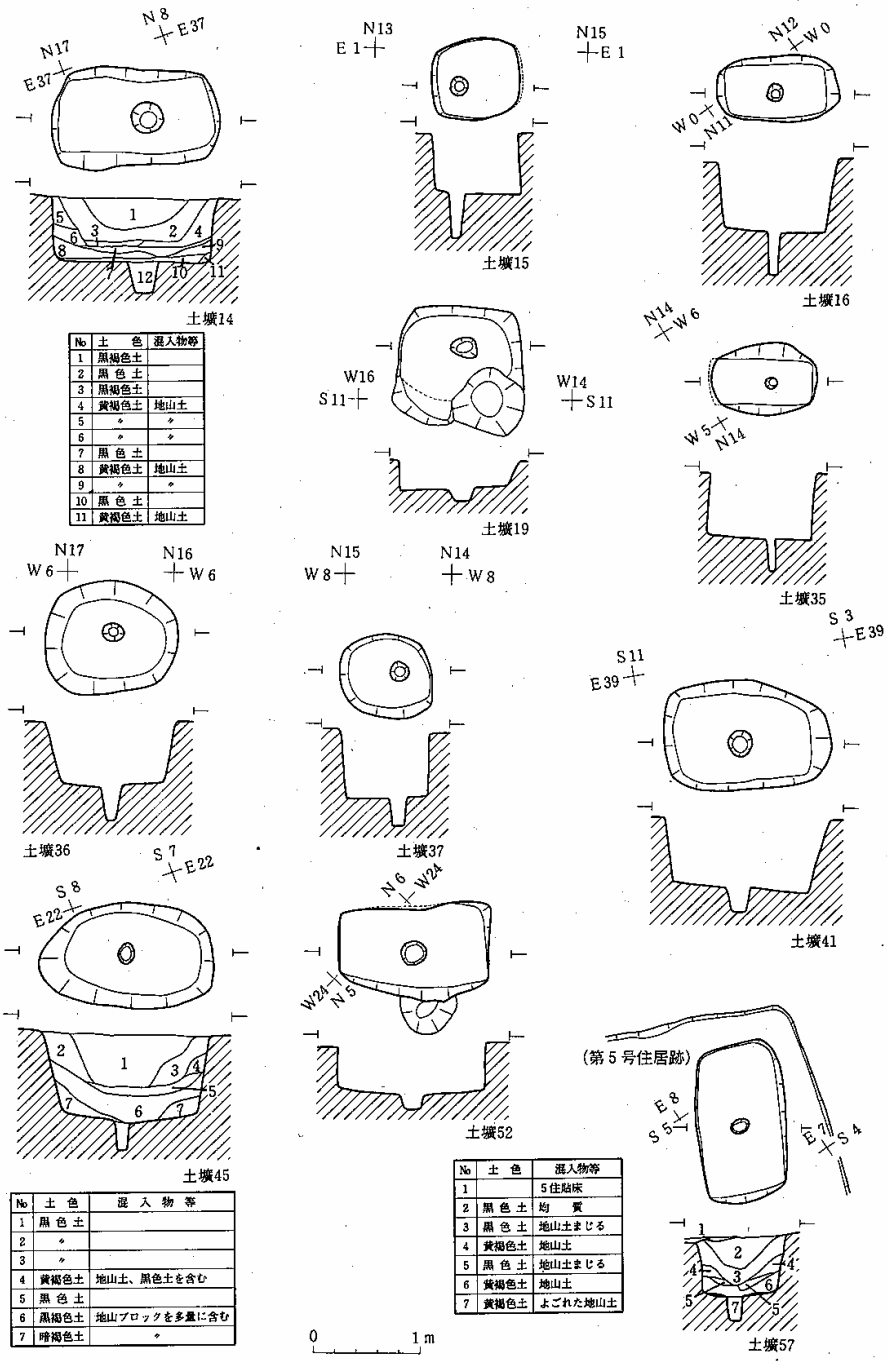


No	土　色	混入物等
1	黒 色 土	
2	黒褐色土	
3	黄褐色土	地山土
4	暗褐色土	
5	黄褐色土	地山土
6	黒褐色土	
7	暗褐色土	

No	土　色	混入物等
1		黒色土、暗褐色土、地山土がまだら状
2	〃	〃
3	黄褐色土	地　山　土
4	〃	〃
5	黒 色 土	
6	黄褐色土	地　山　土
7	暗褐色土	地山土まじる
8	黄褐色土	地　山　土

No	土　色	混入物等
1		黒色土・暗褐色土・地山土がまだら状
2		〃
3	黄褐色土	地　山　土
4	暗褐色土	地山土に砂がまじる
5	褐 色 土	よごれた地山土
6	暗褐色土	地山土まじる
7	黒褐色土	木炭がわずかにまじる
8	暗褐色土	

第41図　土壙２―（１）



No	土　色	混入物等
1	黒褐色土	
2	黒 色 土	
3	黒褐色土	
4	黄褐色土	地山土
5	〃	〃
6	〃	〃
7	黒 色 土	
8	黄褐色土	地山土
9	〃	〃
10	黒 色 土	
11	黄褐色土	地山土

No	土　色	混 入 物 等
1	黒 色 土	
2	〃	
3	〃	
4	黄褐色土	地山土、黒色土を含む
5	黒 色 土	
6	黒褐色土	地山ブロックを多量に含む
7	暗褐色土	〃

No	土　色	混入物等
1		５住貼床
2	黒 色 土	均　質
3	黒 色 土	地山土まじる
4	黄褐色土	地山土
5	黒 色 土	地山土まじる
6	黄褐色土	地山土
7	黄褐色土	よごれた地山土

第42図　土壙２－(2)

U字形の空間を埋めるように黒色土が堆積している。地山土はその内部において分層が可能で間層として黒色土の堆積がみられることもある。また、最上部の黒色土は、地山粒がまだら状に混じる場合と、あまり混入物がなく均質なものの場合とがある。小ピット内の堆積土はよごれた地山土である場合が多いが、土壙12のように空洞になっている例もみられた。

〔出土遺物〕　土壙13の最上部黒色土層から土師器甕口縁部片が一点出土した。内外面ロクロ調整のものである。また、土壙52からは、出土層位は明確でないが、土師器甕（口縁・胴・底部片）、須恵器坏（口縁・底部片）が出土した。他の土壙からの遺物の出土はない。

土壙2破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	土壙13	土壙52
土師器	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	1	2
		胴部	ケズリ	ナデ		1
		底部	ナデ			1
須恵器	坏	口縁	ロクロ			1
		底部	不明			1

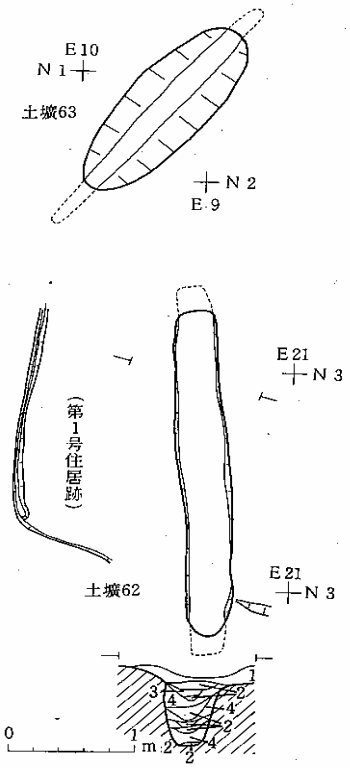
3. 溝状の形態をなす土壙（第43図）

土壙62．63の2基である。

62は第1号住居跡掘方下面において確認されたもので、同住居跡より古い。確認面における規模は長さ3m、幅45cmで、深さは50～55cmである。底はほぼ平坦で、幅は35～38cmであるが、長さは確認面の長さより両端に20cmほど張り出し、約3.4mである。土壙内堆積土は地山と黒色土が互層をなしており、その状況は土壙壁崩落と黒色土の堆積とくり返しの状況を示しているとみられる。

土壙63は、前者より規模が小さい。確認面の規模は長さ1.8m、幅65cmで長だ円形を呈し、深さは100cm前後である。底面は平坦で幅15～18cmであるが、土壙62と同様長軸方向両端に張り出しており255cmある。

両土壙とも出土遺物はない。



No	
1	1住掘方埋土
2	黒色土
3	暗褐色土と地山土まだら状
4	地山土

第43図　土壙3

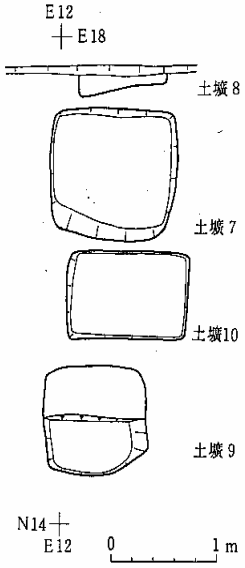
4. 墓壙（第44図）

調査区北西端において4基（土壙7～10）確認された。それらは方形もしくは長方形のもので北西―南東方向に一列に配列されている。規模は土壙7：110×90 cm、土壙9：80×80 cm、土壙10：105×65 cmである。現状における深さはそれぞれ30 cm 10 cm、50 cmである（土壙8は未掘）。

土壙7からキセル、古銭（寛永通宝6枚）、土壙9から人骨、土壙10から人骨[註]、キセル、古銭（寛永通宝19枚）が出土した。土壙10のキセルは渡金が施されたものである。

その他に土壙7・10の埋土中から若干の土師器等が出土した。

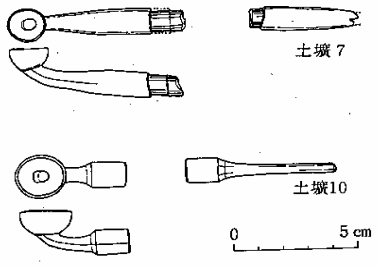
なお、墓壙は他に調査区南西部の列から多数確認された。それらの調査は行なわれなかった。



墓壙破片集計表

種　類	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	土壙7	土壙10
土師器	甕	胴部	ロクロ	ナデ		1
			ケズリ	ナデ		2
赤かっ色を呈する土器	坏	胴部	ロクロ	ロクロ	1	
					1	3

註）人骨はその後旧地権者によって改葬された。



第44図　墓壙およびその出土遺物

5. その他の土壙（第45図）

前記の各土壙のような類別の特徴を抽出できないものを一括した。計24基ある。それらの規模・形態は116ページ表のように多様である。

しかし、そのうち堆積土中や底面に焼土や木炭の分布がみられ、前項1の土壙に類別される可能性のあるものとして土壙34・64の2基がある。これらは削平のためもあって、焼土や木炭の量が極めて少ないために前項の土壙群に含める確証を欠くものである。

また、土壙22は、底面に小ピットはみられないものの堆積土や形態の類似性から前項2の土壙群に含まれる可能性がある。

なお、堆積土の状況等からみて、土壙20はごく最近掘り込まれた攪乱壙、25・28・46は木根によるものと考えられるものである。

以上述べたものを除く他の土壙については、形態的には、だ円形を基調としたやや大形のもの（21・23・38・65など）、長方形に近いもの（27・66・68）、円形気味のもの（29・59）などの

別はみられるが、他の点で類似性はほとんどなく、単に形態のみによって類別することには無理がある。

ただし、土壙の本来的機能・性格には関係しないが土壙が廃絶し埋没する過程において土壙23と38との間には共通した状況を見い出すことができる。それは、両者とも堆積土上部に多量の土器が含まれているという点であり、特に土壙38では作図可能なものだけでも38個体に達する量である。

同様に堆積土上部に土器を含むという点では土壙21も共通している。ただし量的には極めて少ない。

〔出土遺物〕　116ページ表に示したように13基の土壙から土器類が出土した。しかし、それらは小破片のみである場合もありそれらに図示可能な土器が含まれているのは土壙20、23、34、38、58、59の6基である。

土壙20出土遺物：土師器甕・須恵器稜埦がある。

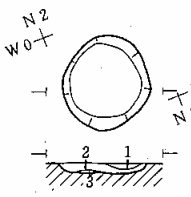
土師器甕（第46図1）

ロクロ使用痕跡は認められないものである。中または小形のものである胴下半部を欠く。磨滅のため器面調整については不明な点があるが、口縁部内外はヨコナデ、胴部内外はナデ調整と思われる。また胴外面にはナデ以前にヘラケズリが施されているようである。

須恵器稜埦（第46図2）

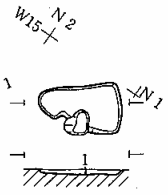
土 壙 5 一 覧

	平面形	規模	深さ	遺物	図示遺物	備考	類別の可能性
2	不整だ円形	130× 65	68	—			
3	〃	(85) × 65	53	—			
20	〃	155 × 100	27	有	有	最近の攪乱	
21	だ円形	200 × 105	125	有		7住より旧	
22	隅丸長方形	155 × 85	90	—			土壙 2
23	不整だ円形	190 × 90	100	有	有		
24	隅丸長方形	190× 75	79	有			
25	不定形					木根による攪乱	
26	隅丸長方形	140 × 70	61	有			
27	長方形	150 × 45	24				
28						木根による攪乱	
29	だ円形	120 × 95	23	有			
33	だ円形	110 × 70	23	有		2つの土壙が重複	
34	円形	75 × 70	11	有	有		土壙 1
38	だ円形	215 × 100	115	有	有		
42	不定形	90 × 80	48	有		2つの土壙が重複	
43	不整だ円形	90 × 20	8				
46						木根による攪乱	
58	だ円形	55 × (40)	29	有	有	2住より旧	
59	円形	25 × 25	11	有	有		
60						掘立柱建物跡（ピット60）	
64	扇（?）形	75 × 35	6				土壙 1
65	不整だ円形	290 × 170	57				
66	長方形	(105) × (65)	(100)			湧水のため調査不能	
67	不整だ円形	55 × 45	15				
68	長方形	185 × 55	30	有			



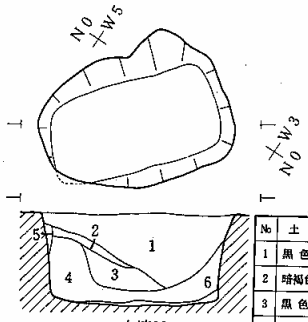
土壙34

No	土　色	混入物等
1	暗赤褐色土	地山土まじる
2	にぶい赤褐色土	地山土、焼土まじる
3		焼　土



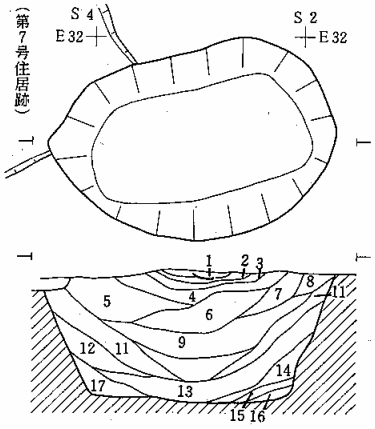
土壙64

No	土　色	混入物等
1	黒色土	木炭多い



土壙22

No	土　色	混入物等
1	黒色土	混入物ない
2	暗褐色土	よごれた地山土まじる
3	黒色土	やや地山土まじる
4		地山土と黒色土互層
5	黄褐色土	よごれた地山土
6	暗オリーブ褐色土	木炭ややまじる

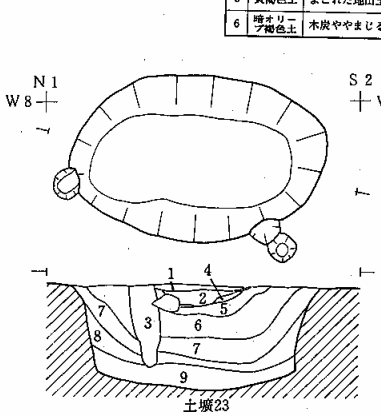


土壙21

No	土　色	混入物等	遺物とり上げ
1	黒褐色土	焼土・木炭ややまじる	1 層
2	〃	〃	
3	黄褐色粘土		
4	黒褐色土	焼土・木炭ややまじる	
5	褐色土	木炭ややまじる	遺物無
6	〃	〃	
7	黒色土		
8	暗褐色土		
9	黄褐色粘土	地山土	
10	暗褐色土		

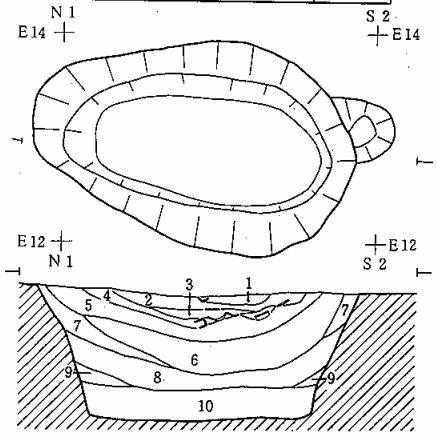
No	土　色	混入物等	遺物とり上げ
1	暗褐色土	焼土まじる、土器を含む	1 層
2	黄白色粘土		
3	黒色土		
4	黒褐色土		
5	暗褐色土		遺物無
6	〃		
7	褐色土		
8	黒色土		
9	褐色土		
10	黒色土		
11	〃		
12	褐色土		
13	暗褐色土		
14	褐色土		
15	暗褐土		
16	褐色土		
17	褐色土		

0　1m



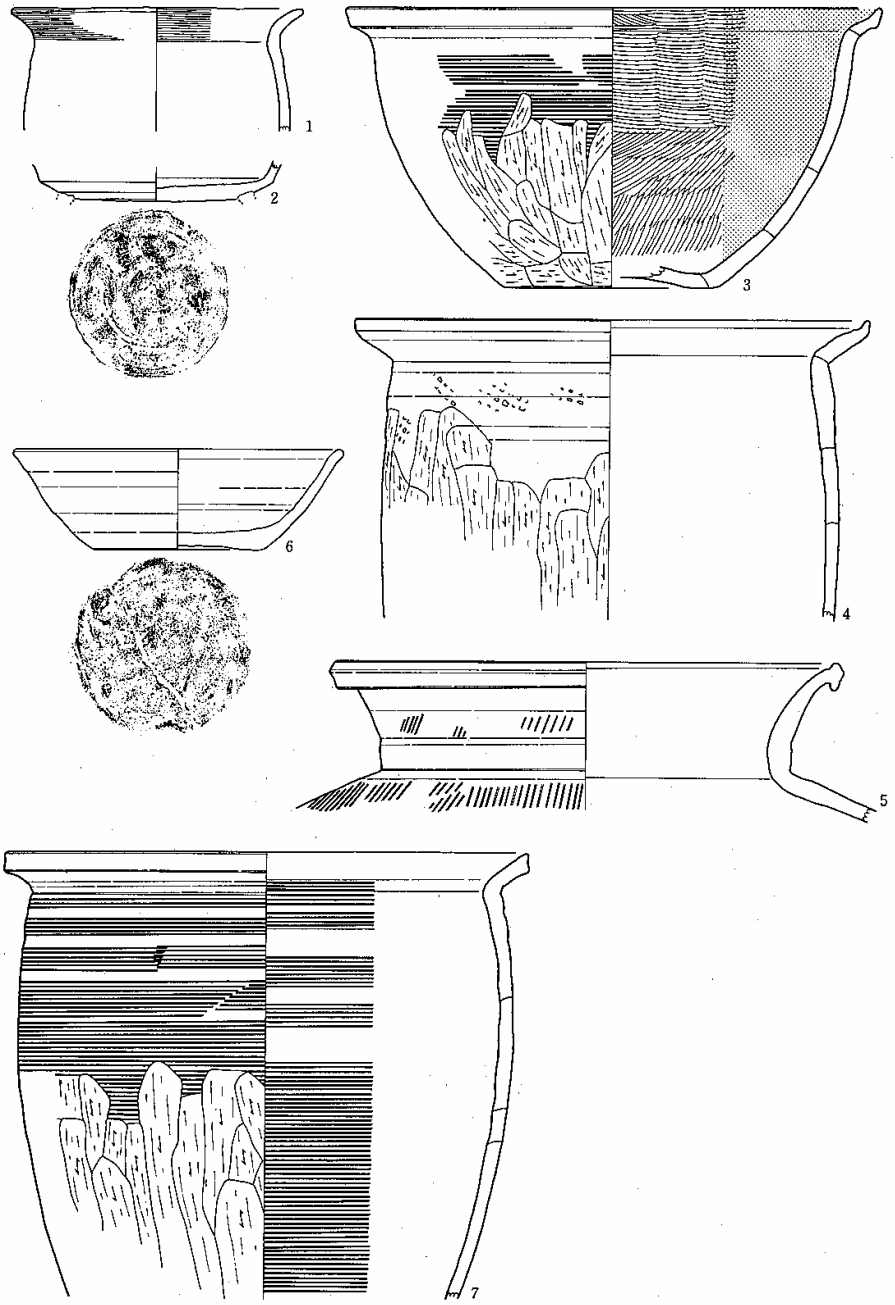
土壙23

No	土　色	混入物等	遺物とり上げ
1	オリーブ褐色粘土		1 層
3	暗褐色土	焼土多量にまじる	2 層
3	黒褐色土	木炭を含む	
4	黄褐色粘土		遺物無
5	暗褐色粘土		
6	〃		
7	黒色土		
8		地山と黒色土の互層	
9	暗褐色土		



土壙38

第45図　土壙 5



第46図　土壙５出土遺物（１）0　10cm

底部のみの破片である。底部はヘラ切り技法によって切り離されたもので胴下部の稜は明瞭である。

土壙 23 出土遺物：すでに述べたように堆積土上部（1・2 層）から多くの土器が出土した。以下には、7 層、土壙底面まで約 70 ㎝の厚さの堆積土があるが、その部分からの遺物の出土はない。図示可能な土器には土師器甕・須恵器甕・赤褐色を呈する土器坏がある。

土師器甕（第 46 図 3．4）

内面にヘラミガキ・黒色処理を施したもの(3) と、長胴形をなすもの(4) とがある。いずれもロクロ使用のものである。器面調整は、前者は胴部上半に回転ハケ目、下半にヘラケズリが施され、底面はナデもしくはヘラケズリである。後者は、胴上半は平格行タタキのちロクロ調整・下半はヘラケズリである。両者とも口縁部はロクロ調整である。

須恵器甕（第 46 図 5）

肩部以上の破片である。口縁部は、その上下端がそれぞれのびて縁帯状となるもので中央部は稜をもって張り出している。全体に磨滅が著るしいが、頸部外面には平行タタキ→ロクロ調整、胴部外面には平行タタキ目が観察される。色調は赤褐色を呈し焼成は悪い。

赤かっ色を呈する土器坏（第 46 図 6）

回転糸切技法によって切り離されたものである。器壁はやや厚く、口縁部がわずかに外返する器形である。再調整はない。

土器 34 出土遺物：図示可能なものとして土師器甕がある。

土師器甕（第 46 図 7）

長胴形のものである。胴部内外に回転刷毛目が施され、胴部外面下半にはその後ヘラケズリが加えられている。口縁部内外はロクロ調整である。

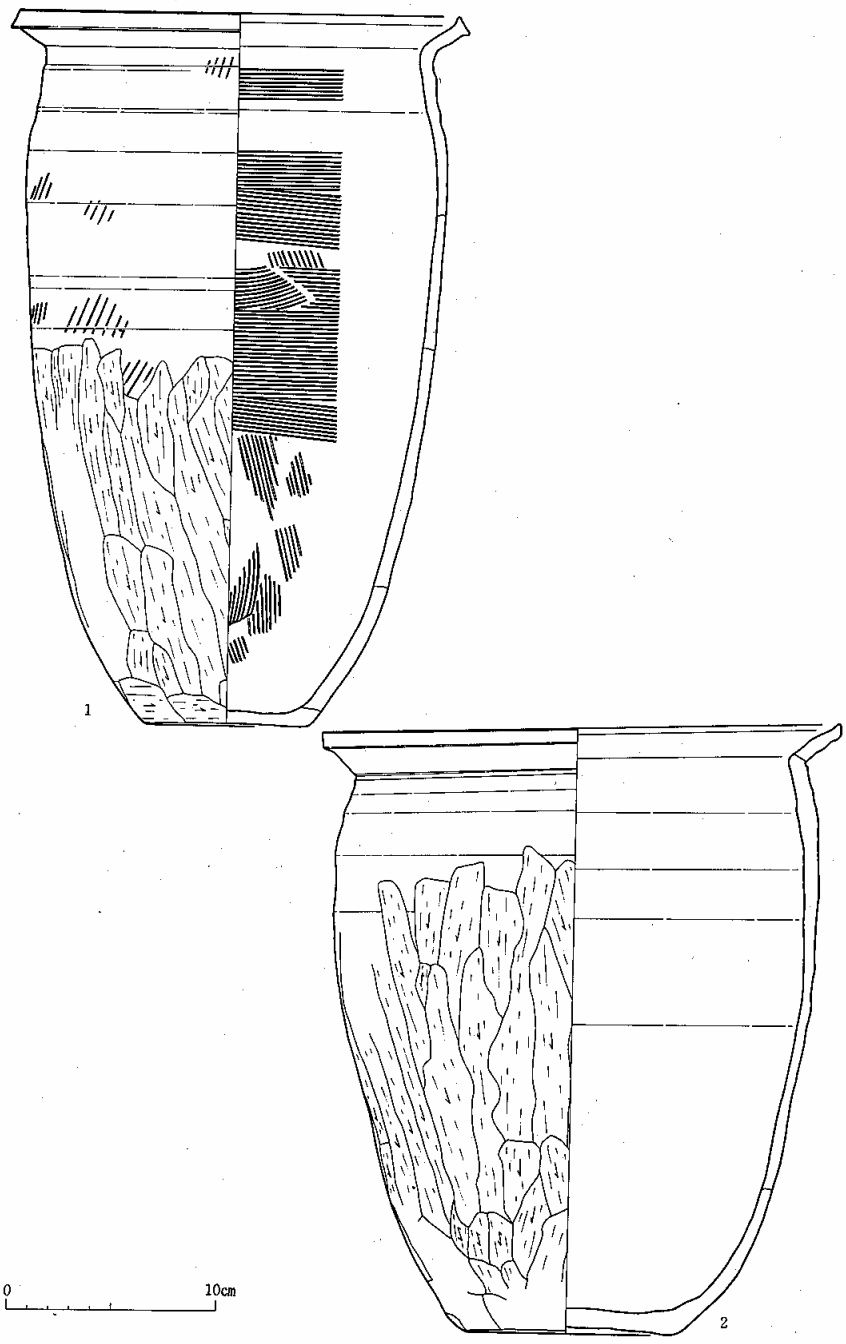
土壙 38 出土遺物：土壙 23 と同様、深さ 120 ㎝ある土壙の上部 40 ㎝（1〜4 層）間にのみ土器が含まれている。図示可能な遺物には土師器、須恵器、赤褐色を呈する土器がある。

土師器　甕がある。

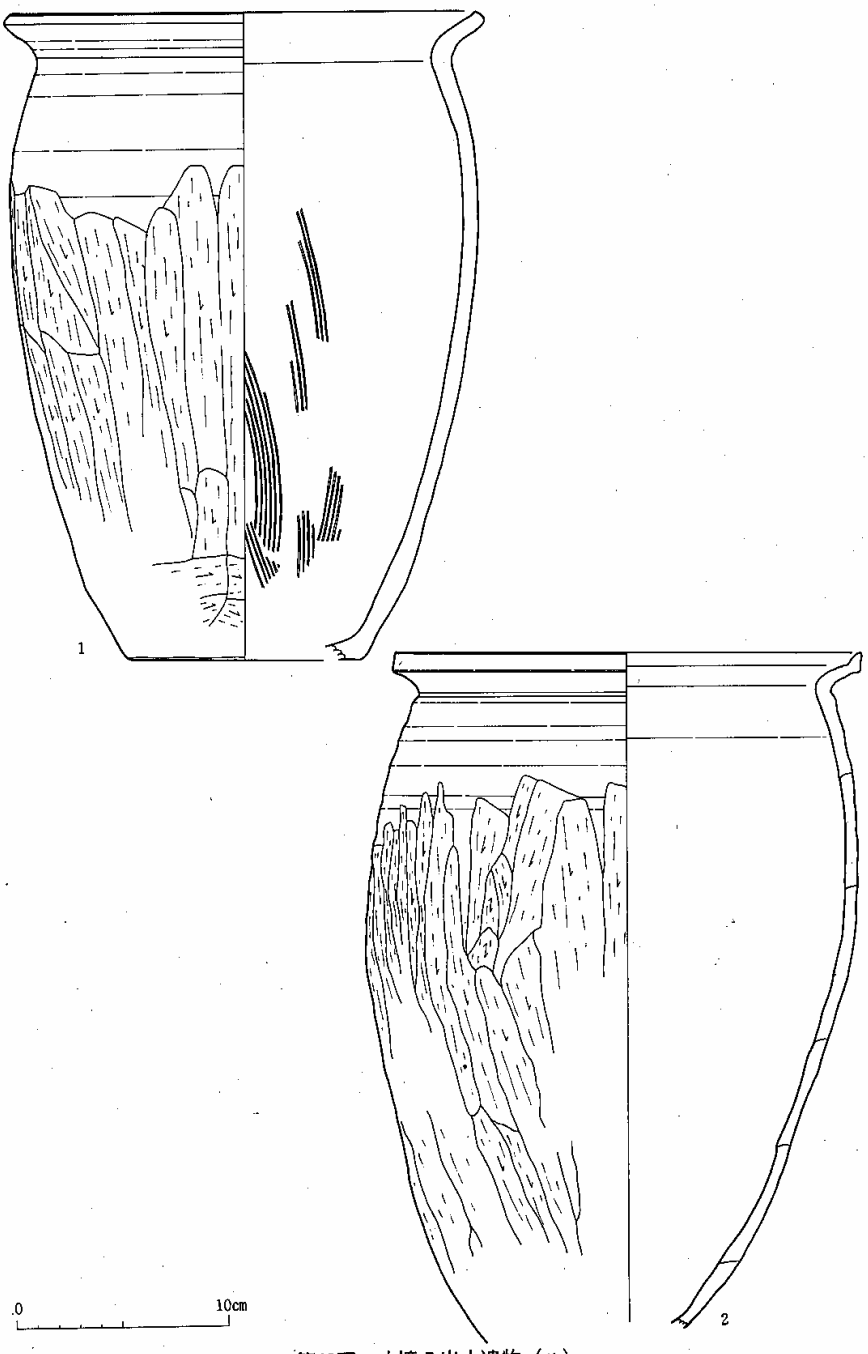
甕（第 47〜50 図、51 図 1〜3）

計 12 個体である。いずれもロクロを使用したもので大・中の別がある。

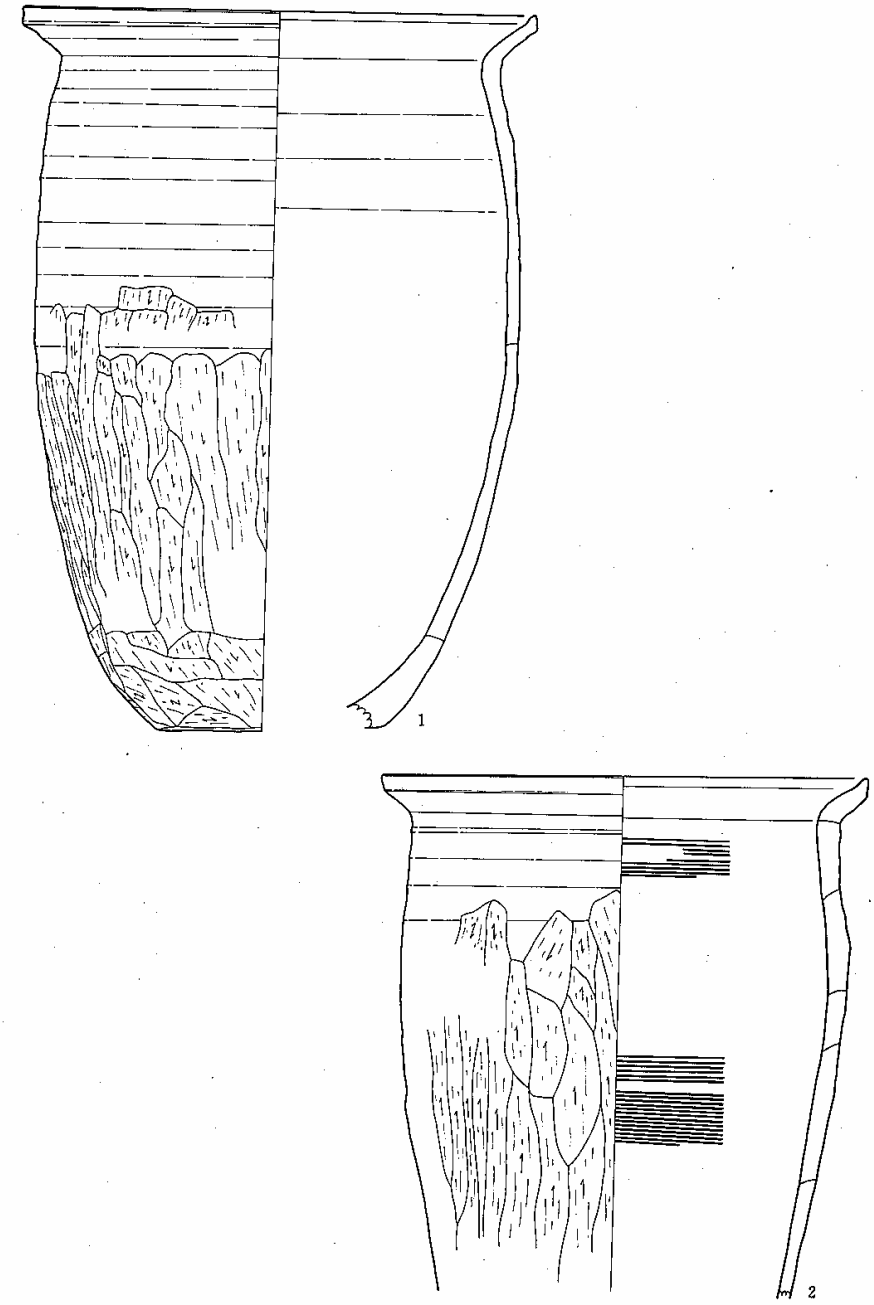
大形のものは、長胴形をなすもので、頸部で外反したのち、口縁部が縁帯状を呈するものやそのままおさまるもの（48 図 1）がある。縁帯状をなすものにも、端部がわずかに屈折して立つだけのもの（47 図 1）や、断面三角形状を呈するもの（47 図 1）などがあり、口縁部形態は各種である。器面調整は、口縁部内外はロクロ調整で、胴外面下半にはすべてヘラケズリが施されている。上半はロクロ調整のものが大半であるが他に回転刷毛目のもの (50 図 1) があり、またロクロ調整前に平行タタキ技法の用いられているもの（47 図 1）もある。内面調整もロク



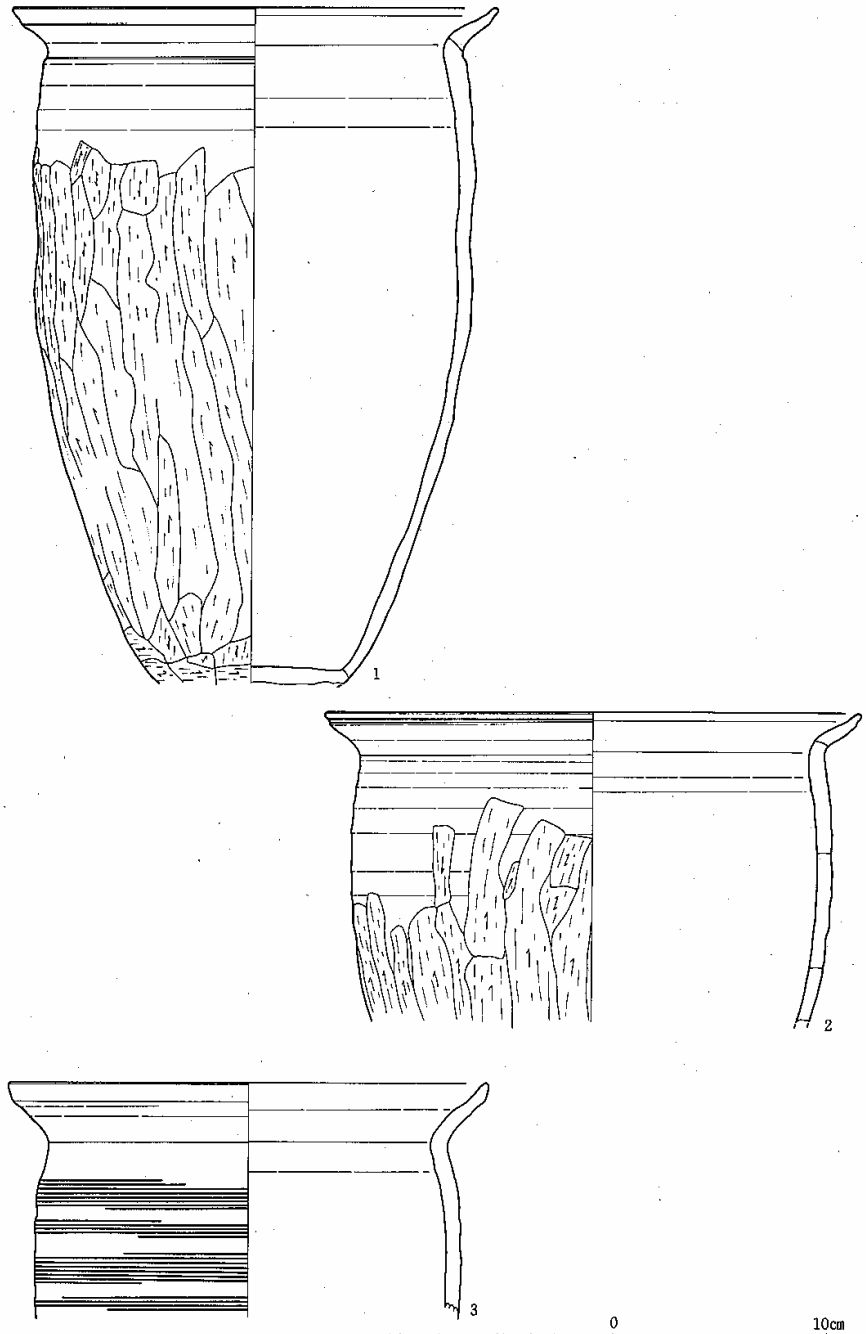
第47図　土壙５出土遺物（２）



第48図　土壙５出土遺物（３）



第49図　土壙５出土遺物（４）



第50図　土壙５出土遺物（５）

ロ調整が主体で他に刷毛目（48 図 1)、回転刷毛目のもの（47 図 1）もみられる。

中形のもの（51 図 1―3）もまた胴外面下半にヘラケズリを施し他の部分はロクロ調整のものである。

須恵器　甕・鉢・壺・坏・高台付坏・蓋がある。

甕（第 51 図 4、52 図 1）

頚部から外反し、外弯気味の長い頚、口縁部を有するもの（51 図 4）と頚部で外反しただけで短い口縁部を有するもの（52 図 1）とがある。前者は、口縁端部上端が外傾気味に上方にのびせまい縁帯状を呈し、また、胴中央部で張り出し底部が大きいもので、広口の壺ともいえそうな器形である。胴外面下部にヘラケズリが施されているが、他の部分はロクロ調整であり、胴部内面はロクロ回転を利用したヘラナデである。

後者は、器形的には鉢に近似するが、丈が高く、また胴部最大径が中央部に位置しているため、甕として取り扱った。胴外面全面に平行タタキが施され、他の部分はロクロ調整である。またロクロ調整は一部胴上端付近にも及んでいる。

鉢（第 52 図 2．3）2 個体ある。

頚部でゆるく外反し短い口縁部がつく。器形的には 2 は胴部が丸味をもってすぼまりながら底部に至り、3 はやや円筒状に近いなど若干の差異がある。2 が胴外面下半に平行タタキ、3 が胴下端にヘラケズリが施され、他の部分では両者ともロクロ調整である。

壺（第 52 図 4、第 53 図 1）

52 図 4 は短頚壺である。焼ゆがみが著しい。口縁部は短く直立し、端部は平坦でその中央はやや凹んでいる。胴外面下部に格子タタキ→ヘラケズリが施される他はロクロ調整である。

53 図 1 は胴上半以上が欠損している。甕になる可能性もある。胴部外面に回転刷毛目が施され下半にはその後ヘラケズリが加えられている。内面はロクロ調整である。

坏（第 53 図 2～8）

底部の切離しが回転糸切のもの（2～4)、ヘラ切のもの（5～7）とがあり、また、ヘラ切りののち底面に手持ヘラケズリ再調整が加えられているもの(8) もある。

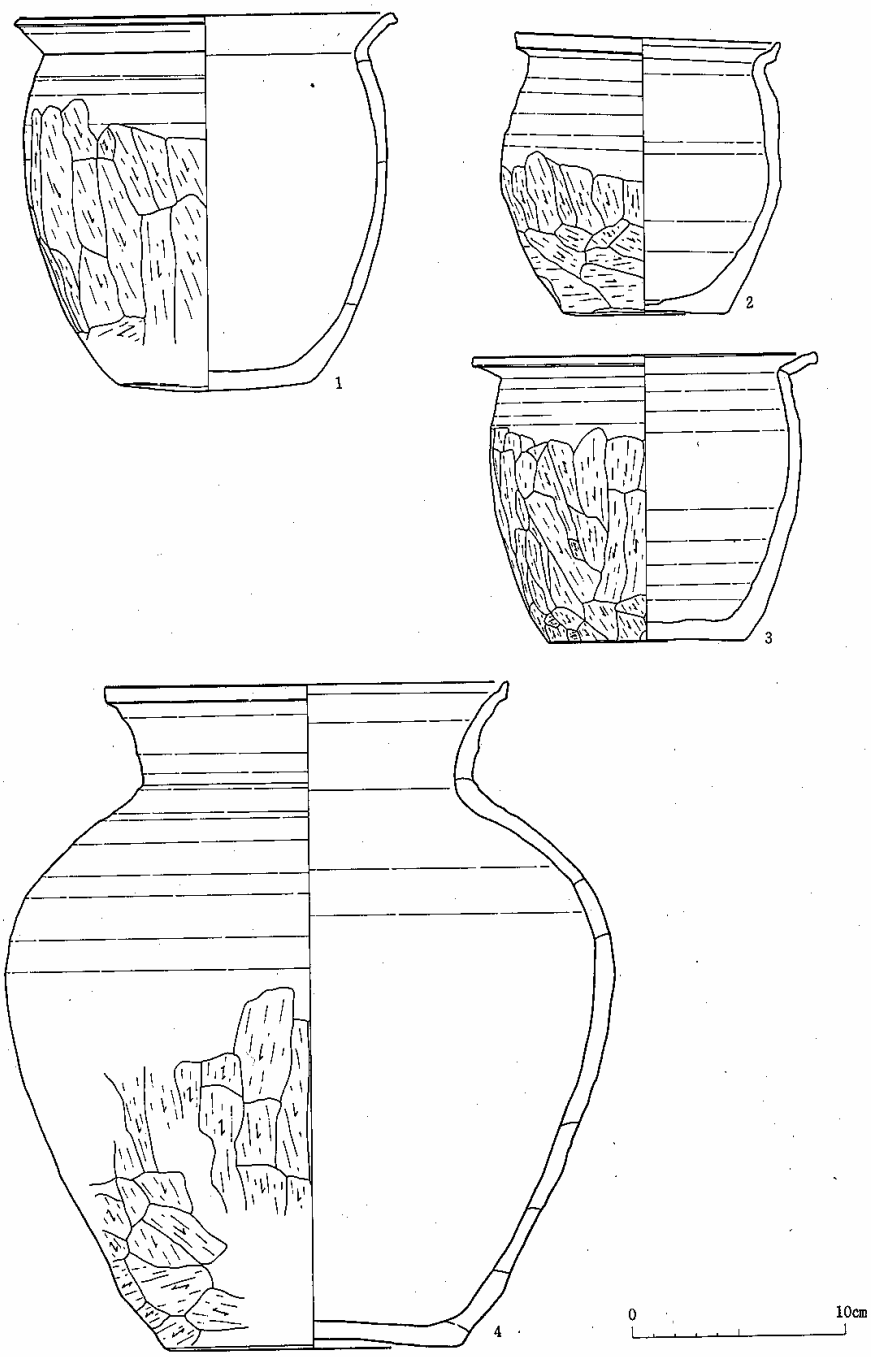
高台付坏（第 53 図 9～13）

いずれも欠損品で全容の知れるものは少ない。底部はヘラ切技法によって切離されている。

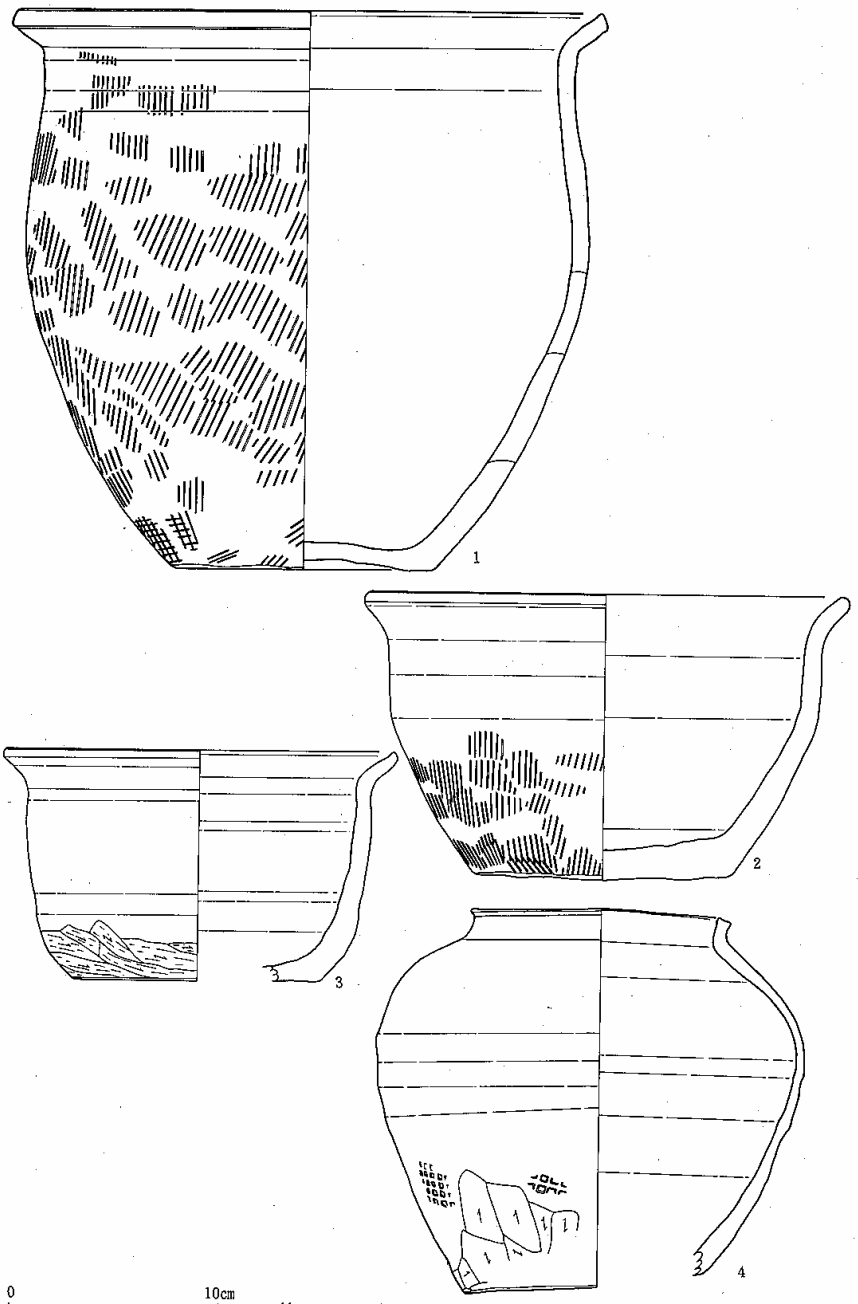
稜埦（第 53 図 14．15）

口縁部が外反し器高が高いものと、直線的に外傾し器高の低いものとがある。いずれも胴下部の稜は明瞭につくり出されている。両者とも小破片のため底部の切離し技法は明らかでないが　ではわずかにヘラ切りかとも思われる痕跡が認められる。

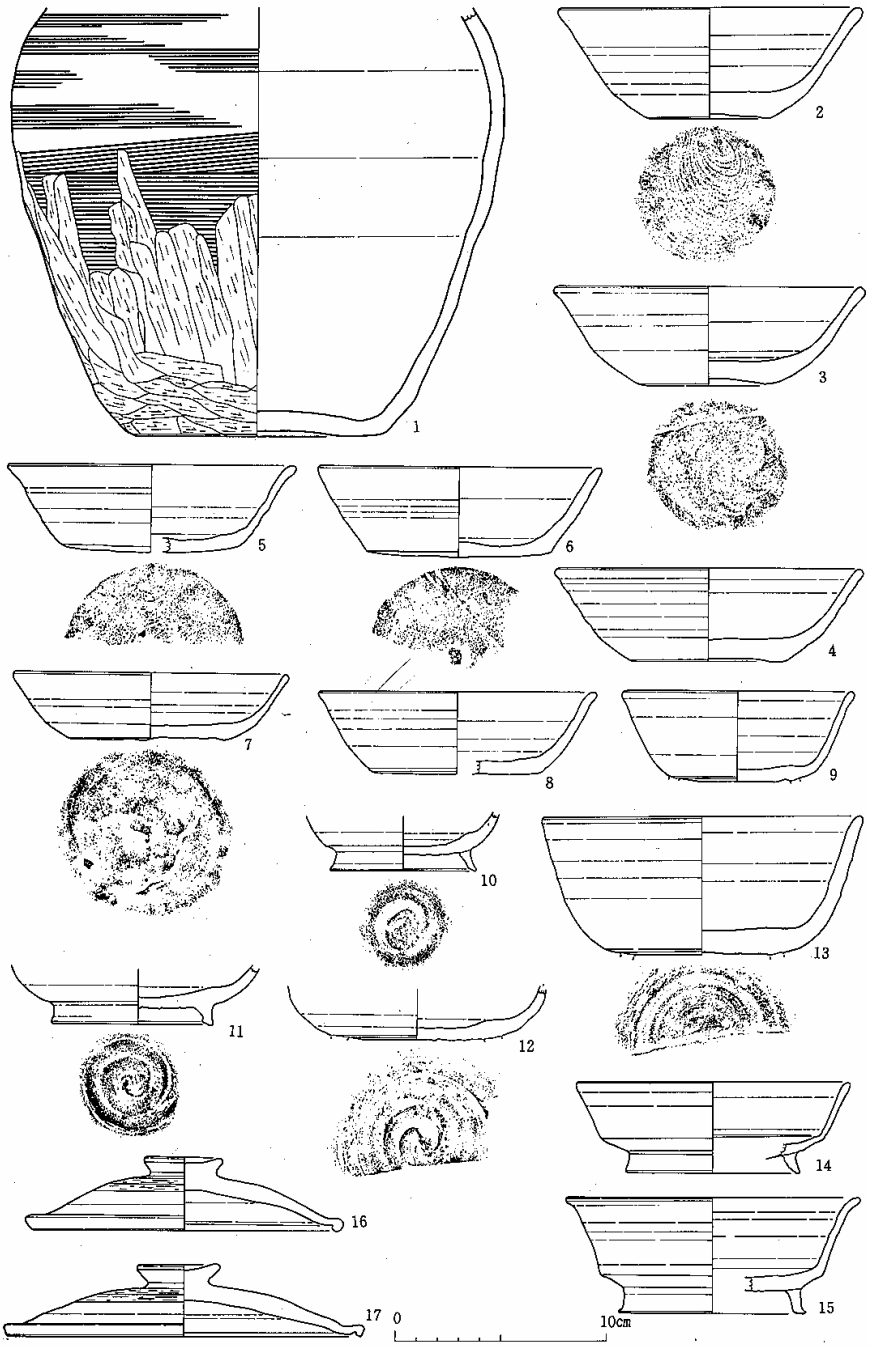
蓋（第 53 図 16・17）



第51図　土壙５出土遺物（６）



第52図　土壙５出土遺物（７）



第53図　土壙５出土遺物（８）

2 個体ある。両者ともにつまみは、その中央部がなだらかに凹む形態のものである。口縁部は下方に折りまげられてつくられており、器厚はやや厚い。

赤褐色を呈する土器　坏・高台付坏がある。

坏（第 54 図 1～3）

1 は胴部から口縁へかけて直線的に外傾する器形で、底部は回転糸切技法で切離されている。また胴部下端に手持ヘラケズリ再調整が加えられている。2、3 は口縁部を欠く。3 はヘラ切技法によって切離されたものである。

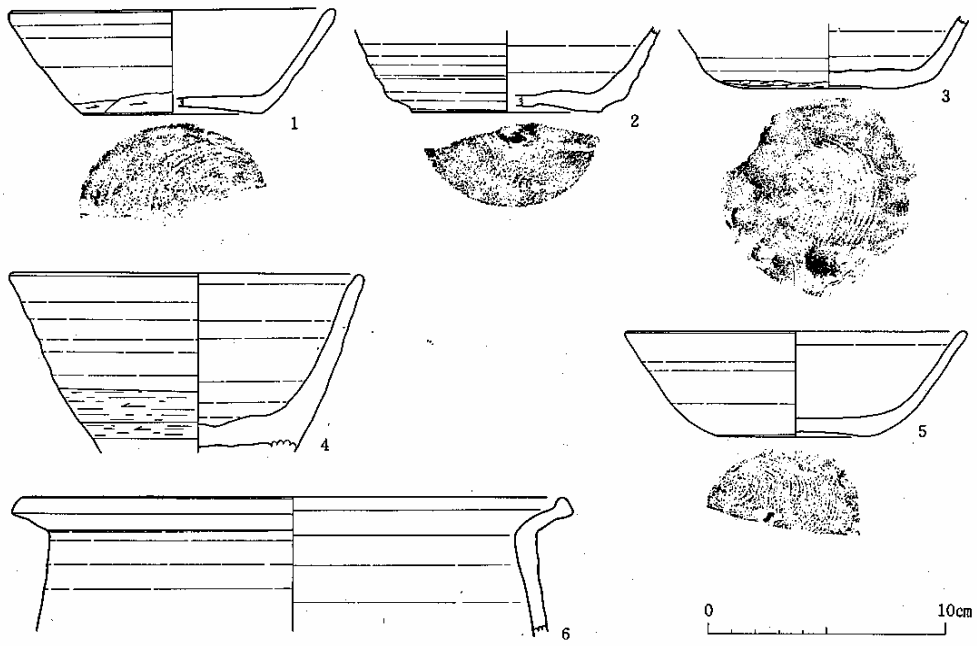
高台付坏（第 54 図 4）

高台部は欠損している。胴部から口縁部まで直線的に外傾するものであるが器高が高く、坏というよりはむしろ鉢というべきかも知れない。磨滅か著しく器面調整は不明瞭であるが胴外面下部には回転ヘラケズリの痕跡が認められる。また底部はヘラ切技法によって切離されているようである。

土壙 52 出土遺物：須恵器坏 1 個体がある。

須恵器坏（第 54 図 5）

底部から胴部下端にかけては丸味を帯び、以上は直線的に外傾する器形である。底部は回転糸切技法によって切離されている。



第54図　土壙 5 出土遺物（9）

土壙59 出土遺物：土師器甕1個体がある。

土師器甕（第54図6）

口縁部のみの破片である。口縁部上端は上方に三角形状に分厚くのびている。現存部内外面

土 壙 5 破 片 集 計 表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	20 1層	20 3層	21 1層	23 1層	23 2層	23 ×	24	26	29	33 1層	33 ×	34 1層	34 2層	38	42	58	59	68
土師器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ	1				1	1												
			ロクロ	内黒														1				
		底部	糸切り	内黒														1				
			ケズリ	内黒									1									
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ	1	3	1	6	10		2			2		2	3	56		1	2	3
			ロクロ	内黒														1				
		胴部	ロクロ	内黒				1										2				
			ロクロ	ナデ				1	7		1								3	3	1	
			ロクロ	ハケメ							1			1				5				
			ロクロ	回転ハケメ					1													
			ケズリ	内黒										1	1			10	2			
			ケズリ	ナデ	2	14	2	10	17		16		6		4	3	1	132	7		1	6
			ケズリ	ハケメ	1				2					3		1		14				1
			ケズリ	回転ハケメ			1											3	2			
			ケズリ	ミガキ											1							
			回転ハケメ	回転ハケメ										1				8				
			回転ハケメ	ナデ					4							1	2	10	1			
			格子タタキ	ナデ											2			9				
			平行タタキ	回転ハケメ		1												2				
			平行タタキ	かナデ				1	1				1					7				
			ミガキ	ミガキ														1				
			ナデ											1								
			不明	内黒														1				
			不明	不明	1			15	21						20			206	5	1		1
		底部	糸切り											1	1			4				
			ケズリ						3									4				
			ケズリ	内黒														1				
			ナデ								2		1		1			7		1		
			不明						1									8				
	高台付坏	高台	ヘラ切り	内黒					1													
須恵器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ			1		1				1					16		4		2
		胴部	ロクロ	ロクロ				1			1											
		底部	糸切り						1									2				
			ヘラ切り			1			1									11		1		
			ケズリ										1									
			不明															1				
	高台付坏	高台	ロクロ	ロクロ														1				
	甕	口縁	ロクロ	ロクロ		1												2				
		胴部	ロクロ	ロクロ	1																	
			ロクロ	ナデ														12				
			ケズリ	ナデ														4				
			平行タタキ	回転ハケメ								1										
			平行タタキ	青海波										1								
			平行タタキ	ナデ					2									3				
	鉢	口縁	ロクロ	ロクロ					1													
	蓋	口縁	ロクロ	ロクロ														1				
		胴部	ロクロ	ロクロ														1				
赤褐色	坏	口縁	ロクロ	ロクロ				2									1	7		1		
		胴部	ロクロ	ロクロ						1								1				
		底部	糸切り												1			1				
			ヘラ切り												2			3				1
			不明						1							1						
	高台付坏	高台	ロクロ	ロクロ														1				
	甕	胴部	平行タタキ	ナデ														1				
		底部	ナデ														1					
	蓋	口縁	ロクロ	ロクロ														1				

はロクロ調整である。

土 壙 5 遺 物 表

図版番号	出土層位	種 類	器 形	口径	器高	備 考	登録番号	図版番号	出土層位	種 類	器 形	口径	器高	備 考	登録番号
第46図1	土 壙 20	土 師 器	甕	13.6		ロクロ不使用	土壙20-1	第53図1	土 壙 38	須 恵 器	壺				土壙38-38
2	〃	須 恵 器	椀 碗			ヘラ切り	〃 2	2	〃	〃	坏	14.4	5.3	回転糸切	〃 8
3	土 壙 23	土 師 器	甕(鉢形)	24.8	13.1	内 黒	土壙23-2	3	〃	〃	〃	14.7	4.8	〃	土壙38-4
4	〃		〃 (大)	23.8			〃 1	4	〃	〃	〃	14.5	4.4	〃	〃 13
5	〃	須 恵 器	甕	23.4			土壙23-3	5	〃	〃	〃	13.1	4.1	ヘラ切り	〃 5
6	〃	赤かっ色を呈する土器	坏	15.4	4.7	回転糸切	〃 4	6	〃	〃	〃	13.4	4.3	〃	〃 6
7	土 壙 34	土 師 器	甕 (大)	24.3			土壙34-1	7	〃	〃	〃	13.0	3.2	〃	〃 14
第47図1	土 壙 38	〃	〃	21.0	24.3		土壙38-21	8	〃	〃	〃	13.2	3.9		〃 7
2	〃	〃	〃	24.6	29.4		〃 22	9	〃	〃	高台付坏	11.0	(4.3)		〃 3
第48図1	〃	〃	〃	21.8	30.6		〃 23	10	土壙38-1	〃	〃				〃 15
2	土壙38-1	〃	〃	21.9	(32.1)		〃 24	11	〃	〃	〃				〃 16
第49図1	〃	〃	〃	23.5	33.5		〃 25	12	〃	〃	〃				〃 17
2	土 壙 38	〃	〃	22.4			〃 26	13	土 壙 38	〃	高台付坏	15.2	(6.4)		〃 12
第50図1	土壙38-1	〃	〃	22.5	31.6		〃 27	14	〃	〃	椀 碗	13.0	4.3		〃 9
2	土 壙 38	〃	〃	25.0			〃 28	15	〃	〃	〃	14.0	5.6		〃 10
3	〃	〃	〃	22.4			〃 29	16	〃	〃	〃	14.4	3.5		〃 1
第51図1	〃	〃	甕 (中)	17.4	17.7		〃 30	17	〃	〃	〃	16.8	3.4		〃 2
2	〃	〃	〃	12.5	13.3		〃 31	第54図1	〃	赤かっ色を呈する土器	〃	13.8	4.6	回転糸切	〃 11
3	〃	〃	〃	16.2	13.5		〃 32	2	土壙38-1	〃	〃			ヘラ切り	〃 18
4	土壙38-1	須 恵 器	甕	19.0	31.5		〃 33	3	〃	〃	〃			回転糸切	〃 19
第52図1	土 壙 38	〃	〃	28.1	26.9		〃 34	4	土 壙 38	〃	高台付坏	15.0	(8.0)		〃 20
2	土壙38-1	〃	鉢	23.2	13.7		〃 35	5	土 壙 42	須 恵 器	坏	14.4	4.7		土壙42-1
3	〃	〃	〃	18.8	11.1		〃 36	6	土 壙 59	土 師 器	甕 (大)	22.8			土壙59-1
4	土 壙 38	〃	壺	12.5	(18.5)		〃 37								

30

掘立柱建物跡とその出土遺物

北西―南東方向が長い長方形を呈している 2 間×2 間の建物跡である。柱間は、長辺は 3.8 m（1.85＋1.95）、短辺は 3.0m（1.45＋1.55）ほどである。各柱穴は一辺 20～30 cmの方形気味の掘り方を有するもので、いずれの柱穴からも柱痕跡が確認された。柱痕跡は径 10 cmほどの円形である。柱は土壙 30 を囲むような配置である。

南東辺中央の柱穴掘方埋土から土器が出土した（ピット 60）。土師器甕・須恵器甕があるが、いずれも破片で全容の知れるものはない。

			外 面	内 面	
土師器	甕	胴部	ロ ク ロ	ナ デ	1
			ケ ズ リ	刷 毛 目	1
須恵器	甕	胴部	平 行	ナ デ	1

なお、この建物跡の周辺を中心として、ピットが若干検出されている。形態的にみて柱穴の可能性があるが、柱痕跡の確認されたものはなく、また配置に規則性も認められない。

表土および出土地点不明の遺物（第55．56図）

多くは土器破片である。すでに述べたように、それらの中には本来的には遺構に伴うものである可能性のあるものがある。図示可能なものとしては、土師器甕・坏・蓋・須恵器坏・赤褐色を呈する土器皿がある。

また他に、フイゴ羽口、縄文土器、石器、砥石、擂鉢、和鏡等がある。以下それぞれについて述べる。なお、石器は住居内堆積土から出土したものであるが、住居との関連性はないので、この項で述べる。

土師器

甕（第55図1〜3）

図示できるのは3個体である。いずれも長胴形を呈するもので、頚部で外反したのち端部が上方にのびた口縁部をもつ。器面調整は、胴下半にヘラケズリを施し、他の部分はロクロ調整である。胴上部に格子タタキ痕の認められるもの(1)もある。

坏（第55図4）

底部を回転糸切によって切離され、胴部から口縁部へかけて丸味をもって立ち上がる器形のものである。内面はヘラミガキ・黒色処理、外面はロクロ調整である。外面胴下端部にはわずかに砂粒が移動した痕跡がみられるが、その後の雑なナデ（？）により再調整の有無は明らかでない。

蓋（第55図5．6）

2個体ある。5はリング状のツマミを有し、6は周縁よりは低いが中央部がやや盛り上がった擬宝珠状のツマミを用するものである。前者の口縁部は欠損しているが、後者のそれは下方に折り反されて丸くおさめられた肉厚のものである。またいずれも内面はヘラミガキ・黒色処理が施され、後者のヘラミガキはロクロ回転を利用している。

須恵器

坏（第55図7〜10）

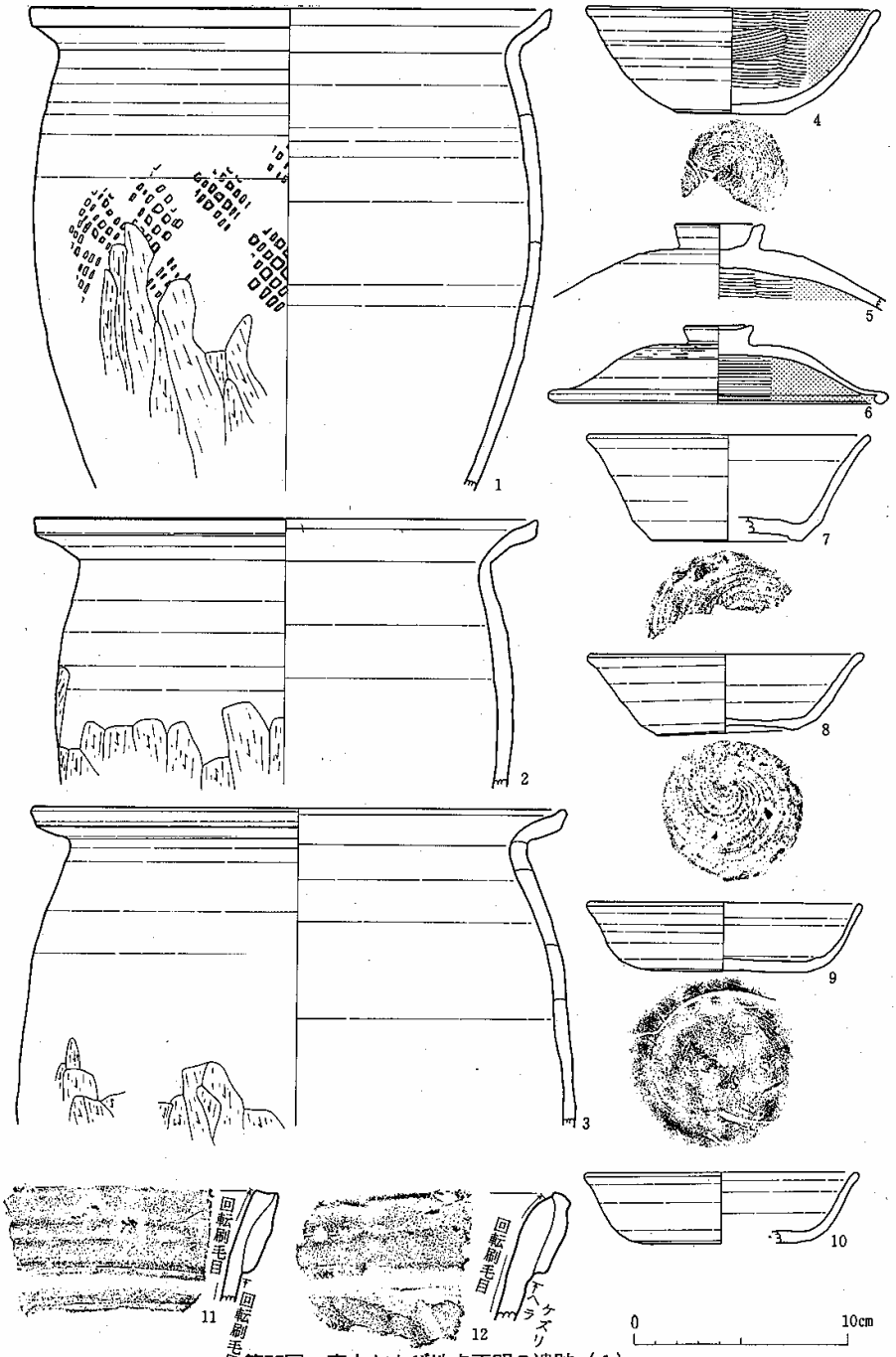
4個体ある。底部の切離しが回転糸切のもの（7．8）と、ヘラ切りのもの（9．10）とがある。前者に比して後者は低平で、胴部と底部の境は丸味をもつ。

赤褐色を呈する土器

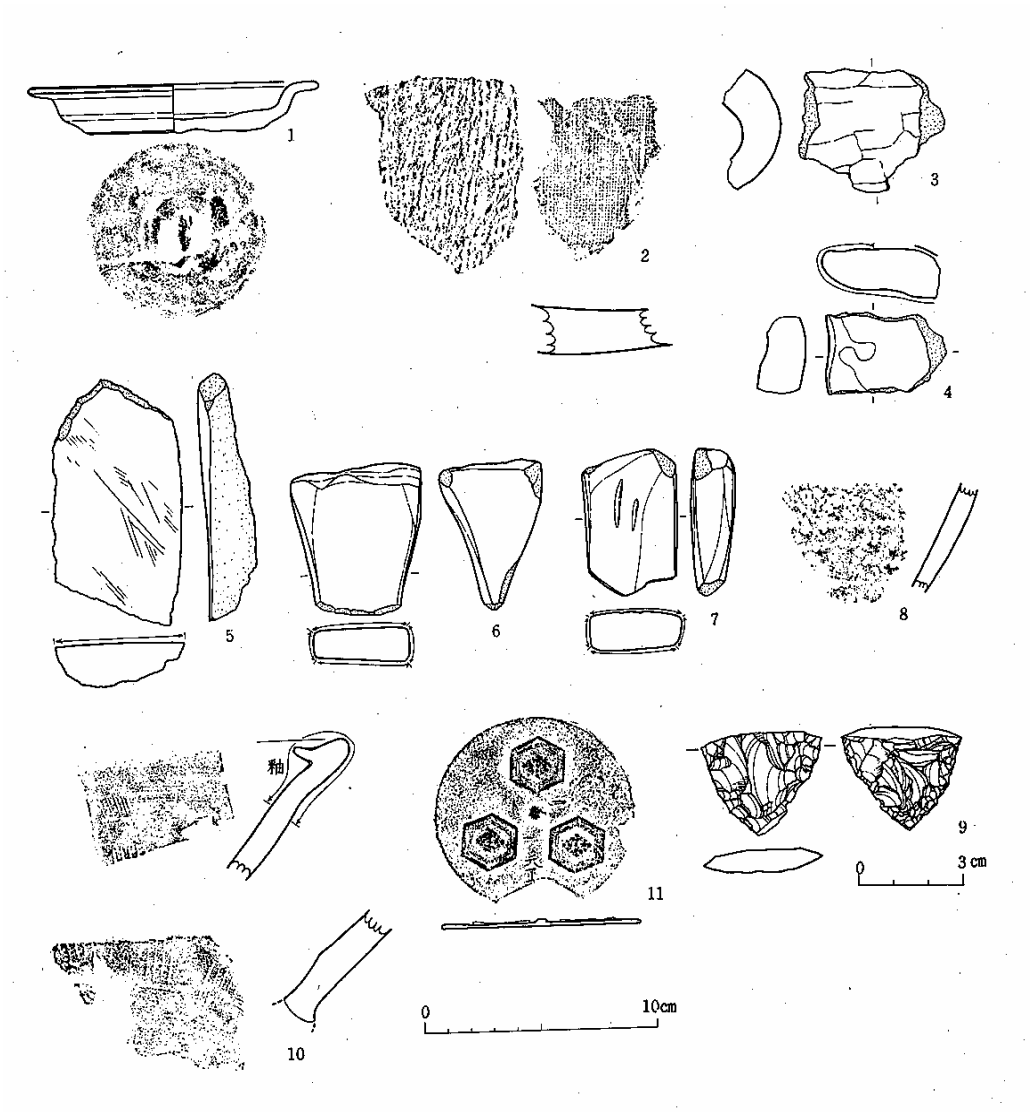
皿（第56図1）

完形である。口径12.5㎝、底径8㎝、器高2㎝ほどの低平な器形で、外方にほぼ水平に折り曲げられた口縁部をもつ。底部はヘラ切技法によって切離されている。内外面ともロクロ調整である。

鉢（第55図11．12）



第55図　表土および地点不明の遺跡（1）



第56図　表土および地点不明の遺物（2）

口縁部に、貼りつけによる幅広い凸帯をめぐらしているもので、胴部はやや弯曲しながら底部へ至ると思われる。凸帯部分はロクロナデで、胴部外面にはヘラケズリ(12)、回転刷毛目(11)が施されている。両者ともに内面は回転刷毛目である.

瓦（第56図2）

平瓦片が1点出土している。凸面には縄叩き目、凹面には布目がみられる。

フイゴ羽口（第56図3．4）

いずれも小破片である。4は端部の破片で、火熱によるガラス質の付着物が認められる。

縄文土器（第56図8）

胴下部と思われる破片が1点出土している。外面に縄文が施されているものであるが、磨滅が著るしく詳細は明らかでない。

石器（第56図9）

尖頭器の基部破片と思われる。調整剥離は両面に認められるが剥離はやや粗い。

砥石（第56図5～7）

自然礫の一面のみを磨面としたもの（5）、礫をある程度整形してほぼ全面を使用したもの（6・7）とがある。特に7は、側面の状況からみて短冊形または小判形に整形されたものと思われる。

擂鉢（第56図10）

口縁部・胴下部片がある。接合はしないが同一個体と考えられる。口縁部内側には鍔状の凸帯がめぐっており、内面には5条一単位の筋目が粗く刻まれている。また口縁部内外にのみに緑灰色の釉がかけられている。口縁部形態が特徴的で、同様のものは築館町八沢要害遺跡から出土している（小井川：1980）。近世に属すると思われるものであるが、より以上細かな年代は不明である。

和鏡（第56図11）

破損しているが柄鏡と思われる。径は8.5㎝で中央部に低い紐がある。縁・界圏はない。文様は魚子を地とし、紐を中心に三個の亀甲文を配しその内部には菊文（？）をもつ。また、「天下㊀」の銘がある。

墓壙が密集して検出されたＡＴ－20区から出土したものであることから、墓に関係した遺物と考えられる。

表土および地点不明の遺物表

	出土層位	種　類	器形	口径	器高	備　考	登録番号
第54図1	ＢＴ26-1	土師器	甕(大)	24.4			
2	ＢＤ14-1	〃	〃	23.6			
3	ＢＲ28-1	〃	〃	25.1			
4	ＣＰ22-1	〃	坏	13.7	5.1	回転糸切	
5	表　採	〃	蓋				
6	ＢＰ26-1	〃	〃	16.0	3.7		
7	×	須恵器	坏	13.4	5.0	回転糸切	
8	ＣＢ30-1		〃	13	3.7	〃	
9	×	〃	〃	13	3.2	ヘラ切り	
10	×	〃	〃	13	3.3	〃	
11	ＣＩ23-1	赤褐色を呈する土器	鉢				
12	ＢＴ24-1		〃				

	出土層位	種　類	器形	口径	器高	備　考	登録番号
第55図1	×	赤褐色を呈する土器	皿	12.5	2.0	ヘラ切り	
2	ＣＨ28-1	瓦					
3	ＢＲ23-1	羽　口					
4	表　採	〃					
5	表　採	砥　石					
6	〃	〃					
7	ＢＰ15-1	〃					
8	ＣＢ20-1	縄文土器					
9	2住－3	石　器					
10	ＢＴ25-1	陶　器	擂鉢				
11	ＡＴ20-1	和　鏡					

V．考　　察

出土土器の種類と器形

図示した土器は計 230 個体ほどである。それらには土師器・須恵器・赤褐色を呈する土器があり、そのおのおのに各種の器形がある。

土師器

土師器には甕・坏・稜埦・高台付皿・高台付坏・蓋・甑がある。製作に際しロクロを使用したものが大半であるが、わずかにロクロ不使用のものもある。

〔甕〕　ロクロ不使用のものとがある。

1．ロクロ不使用のもの

2 個体ある。いずれも肩部以上の破片であり、比較的大形のものと、小さなものとがある。大形のものは口縁部が外傾し、体部が地形に張り出す壺形に近いもので、内外面とも磨滅が著るしく器面調整については不明な点が多いが、口縁部内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている（第 3 住）。

2．ロクロ使用のもの

内面がヘラミガキ・黒色処理が施されたもの（A）と、そうでないもの（B）とがある。

A．内面にヘラミガキ・黒色処理されたものは、いずれも胴部上端に最大径を有し、わずかに弯曲しながら大きな底部へ向って至る鉢形のものである。口縁部は、頚部で屈曲したのち外傾して、端部はやや上方につまみ出された縁帯状をなす。器外面はロクロ調整であるが、胴部の大半および底部にはその後ヘラケズリが加えられている。

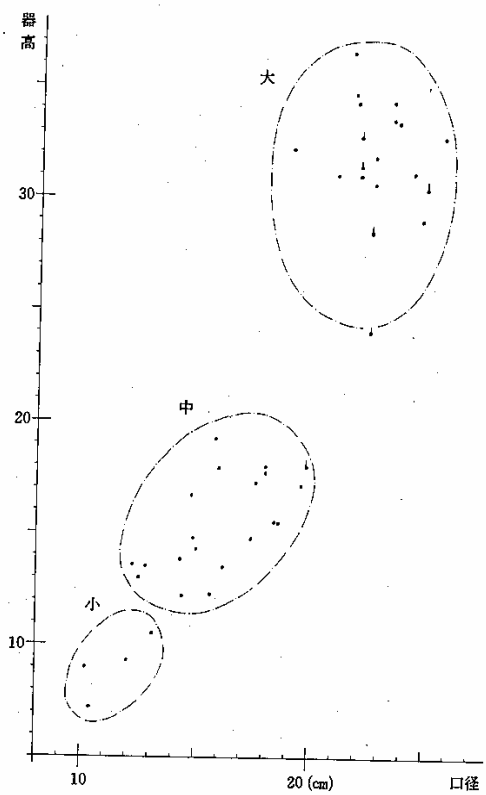
B．ヘラミガキ・黒色処理のみられない甕である。器形的に大・中・小の別がある。法量推定の可能なものについて、その口径・器高について比較したのが第 136 ページ左図である。大形のものは口径 19〜26 ㎝、器高 25〜36 ㎝ほどの範囲に含まれるもので、中形は、口径 12〜19 ㎝、器高 12〜19 ㎝、小形は、口径 10〜13 ㎝、器高 7〜11 ㎝ほどである。中・小形の間では近接したものもみられるが、本遺跡の場合は、特に器高においてその頻度にはまとまりがあり明瞭に区分することができる。

大形のものはいわゆる長胴形のものである。口縁部は頚部で外反したのち、端部上端がつまみ出されて縁帯状となるものが多い。器面調整は、外面ではロクロ調整後、胴部にヘラケズリが施されるものが主体を占めるが、ロクロ調整前にタタキ技法の認められるものや、ヘラケズリ前に回転刷毛目が施されるものが比較的多いのが特徴的である。タタキ目には平行・格子の二者がある。内面もロクロによるナデが圧倒的であるが、回転刷毛目、刷毛目が施されるものがわずかにありそれらは、外面にも刷毛目が施されている場合が多い。

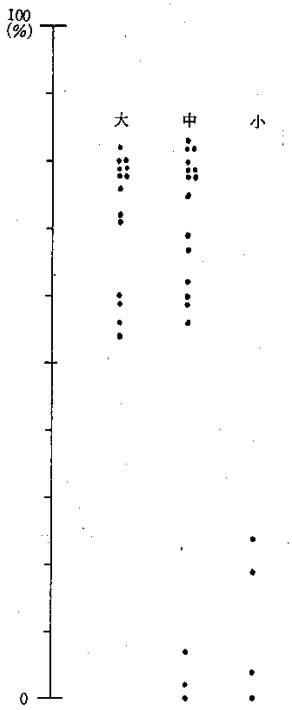
中形のものにも、口縁部が頚部で外反したのち端部が縁帯状になるものがあり、その他に、そのままのびて丸くまたは角ばっておさまるもの、端部がわずかに上方へ傾いて口縁部を形づくり、先端部はうすくなってのびるものとがある。縁帯状になるものは前記した長胴形のものが小型化したもので、器面調整もそれに共通している。ただし量は少ない。後二者が量的にも中形のものの主体で、器面調整は、ロクロ調整後胴下部にヘラケズリが施されている。特に後一者は、法量等において若干の相違はあるものの、器形・調整等において強い斉一性がうかがわれるもので、第8号住居跡からまとまって出土し、他に第1号住居跡等からも出土している。

小形のものは量的に少ない。全容の知れるものは計4個体あるが、それによると、頚部からなだらかに屈曲した短い口縁部をもち端部はそのままおさまる。器高が小さいために胴部はやや丸味をもった感じになる。器面調整は、わずかに回転刷毛目が施されるものもあるが、内外面ともロクロ調整で胴下部にヘラケズリが加えられている。また全く再調整が施されないものもある。

このように、甕はロクロ調整とヘラケズリが主要な器面調整であるといえるのであるが、へ



甕の法量



ヘラケズリ再周整の範囲

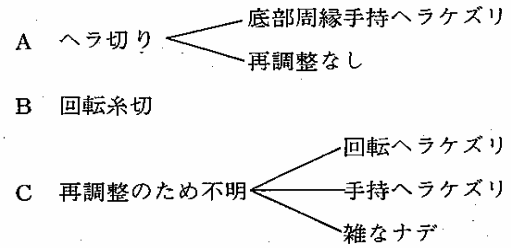
ラケズリ再調整の加えられる位置・範囲についてみると、器形の法量の相違によってそれぞれ違いが認められる。

第136ページ右図は、器高を100として、ヘラケズリの範囲を百分比によって比較したものである。それによると、大形のものでは器高の 80%前後部分にヘラケズリが加えられている。また中形では大形同様、7〜80%を占めるものと、40%以下のものとがあり、全く施されないものもある。この傾向は小形のものになるとより顕著で、すべて40%以下であり全く施されないものも多くなる。小形のものは量的に少なく不明な点があるが、破片のため比較資料に加えなかった胴下部以下の破片にも再調整のないものが多く認められ、この傾向は裏付けられる。そして、中・小形のものの中には少量ではあるが、回転糸切技法によって切離されたものが含まれている。

このような法量と再調整の関係は、器形が小形化するに伴って、一回の工程で器形の大要を製作でき再調整を加える必要が少なくなるという、土器製作上の技術的特徴を示しているのであろう。

〔小形体〕　1 例認められる。ロクロ不使用のもので、頚部でくびれて外傾する短い口縁部をもつものである（第1住)。

〔坏〕　ある程度全容の知れるものは計9個体で例は少ないが、底部の切り離し技法・再調整の種類によっていくつかにわけられる。その組み合せは次の通りである。



A．ヘラ切技法によって切り離されているものには、その後胴下部、底部周縁に手持ヘラケズリ調整が加えられているものもある。器形は丈が高く埦に近いものが多い。

B．糸切技法のものは、口縁部から体部へかけて丸味をもって立ち上がるものである。遺構からの出土はない。

C．再調整の施されるものでは、再調整の種類には回転・手持ヘラケズリの二者があり、他に雑なナデ痕のものがある。

前二者は、底部が丸底気味に弯曲している器形である。後一者は、底部が大きく小形のもので、外面の上部にもヘラミガキが施されている。

以上述べた坏は、いずれも内面はヘラミガキ・黒色処理が加えられたものであるが、他にヘラミガキのみで黒色化のみられない坏が2点ある。それらは土壙47．48から出土したものであ

るが、底部を欠損しているため、上記のような類別に加えることはできない。
〔稜埦〕　第9号住居跡から出土した1例のみである。胴下部の稜は明確につくり出されている。底部が欠損しており、切り離し技法は明らかでない。内面はヘラミガキ・黒色処理が加えられ外面のロクロ目はシャープである。
〔高台付皿〕　二例認められる。いずれも第8号住居跡からの出土であるが、両者ともに台部を欠損している。皿部は底部が丸味をもち、回転ヘラケズリ再調整が加えられるものもある。内外面ともヘラミガキが施され、内面は黒色化されている。
〔高台付坏〕
1例のみ出土している（第10住）。坏底部は回転糸切技法によって切離されている。
〔蓋〕　つまみ部の明らかなものは3例ある。つまみの種類はリング状のものと、低平な擬宝珠状のものとの二者がある。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施され、また外面にもヘラミガキが及ぶものとがある。口縁端部は下方に折り曲げられて、丸くおさまり断面は球形に肥厚する。
なお、口縁部小破片であるが、内面がヘラミガキのみで黒色処理の加えられないものも1例みられる。口縁部は外傾気味に折り曲げられてつくり出されている。（第1住出土）。
〔甑〕　3例ある。（第2．5住）いずれも小破片のため全体形は明らかでないが無底式のものである。第2住出土のものは同一個体と思われる口縁部片もあり、それは胴部から円筒形に連続するものである。第5住出土の二例は、前者に比して器壁は厚くまた焼成も堅緻なものである。
須恵器
甕・鉢・壺・坏・高台付坏・高坏・稜埦・高台付皿・蓋があるが、坏・高台付坏、蓋などの小形品が多く、大形のものは少ない。
〔甕〕　全体形の明らかなものとしては、土壙38から出土した2例がある。ただしそれらは、頚部が長く直立気味の広口壺ともいえそうなもの（第51図4）と、頚部で折れ曲って短い口縁をもつ鉢形に近いもの（第52図1）とで、甕の器形としては一般的なものではない。また第3号住居跡からも肩部以上の破片が出土している。いずれも須恵器の甕としては小形である。
大形のものは、第5号住居跡（第18図2）、土壙23（第46図5）から出土している。両者とも胴部以下を欠損しているが、頚部で外反するもので、口縁端部は上下にのび縁帯状をなし、さらにその中央は稜をもって張り出している。胴部外面には平行タタキ目がみられ、前者では頚部に波状文が施されている。
〔鉢〕　形態の明らかなものはいずれも口径20㎝前後のものである。胴部外面にタタキ目などを施した器厚の厚いものと、ロクロ調整で仕上げた薄手のものとがある。
〔壺〕　短頚壺・長形壺がある。短頚壺は土壙38から出土した1例のみで、胴部外面に格子タタキ目が施され、その後ヘラケズリによって仕上げられているものであるが、焼けゆがみが著し

く、胴部から底部にかけて大きな亀裂が生じている。

長頸壺も全体が知れるのは第5号住居跡出土の1例である。胴部はなで肩で倒卵形をなし、わずかに外傾する高台がつく。他に胴上部が球形にふくらむもの、胴部以下の破片として肩部が強く張る小形のもの（第1住）などがある。

〔坏〕　出土量は多い。底部の切り離し技法や再調整の有無・種類によっていくつかに区分できる。種類は次の通りである。

A．ヘラ切り　　手持ヘラケズリ再調整 ─ 底部全面 / 中央部（「九」のヘラ書き）

　　再調整なし

B．回転糸切

C．再調整のため不明　　手持ヘラケズリ

A．ヘラ切りのものにも、底部に手持ヘラケズリ再調整が加えられているものが2例である。それは、底全面に施されるものと、底中央部にのみ施されるものである。ただし後者は、その部分に「九」のヘラ書きがみられるもので、ヘラ描きするために加えられたものと考えられる。

器形的には胴部から口縁部へかけて直線的に外傾するものと、胴部から底部へかけて丸味をもちまた口縁部はわずかに開く器高の低いものとがあり、後者が多い。

B．回転糸切のものは、胴部が直線的に外傾する器形が多い。

C．再調整の種類は手持ヘラケズリのみである。それは底面に施されている。器形は、直線的に外傾するものが多い。

〔高台付坏〕　坏底部は丸味をもち、わずかに外傾する高台をもつ。出土点数は多いが、底部だけの破片が多く全体形は明瞭ではない。底部の切離し技法は、高台部接合時のナデのために不明なものもあるが、それが明らかなものはすべてヘラ切技法である。

〔高坏〕　第1号住居跡から出土した1例のみである。坏部は、底部はやや丸味をもつが、ほぼ水平にのびて口縁部が上方に折り曲げられた器形であり、盤状のものである。

〔稜碗〕　いずれも胴下部の稜は明瞭につくり出されており、胴部から口縁部へかけてやや外反するものと、直線的に外傾するものとがある。また器形に大小がある。第9号住居跡から出土した稜埦には、胴部外面に「石背」の墨書がある。なお、高台部内面を硯として転用しているものが1例ある（第5住）。

〔高台付皿〕　第1号住居跡から出土した1例のみである。皿底部は丸味をもち、口縁部はやや外傾する。底部はヘラ切り技法によって切離され外面に「X」印のヘラ書きがある。

〔蓋〕　8個体ある。つまみはいずれも宝珠形のものであるが、中にはつまみ中央部が周縁より低くなっているものもある。口縁部は下方に折り曲げてつくり出されており、端部断面は球形

に肥厚する。

赤褐色を呈する土器

甕・鉢・壺・坏・高台付坏・蓋・皿・小皿(？)、円面硯(？)、支脚がある。

本書において「赤褐色を呈する土器」としたものは、文字通り赤褐色の色調をもつ、つまり酸化炎焼成のものである。その意味では土師器と同様であるが、器面調整・器形などの点で土師器と異なるものがあり、それらをとり出して便宜的にこの名称を冠した。

坏・皿・蓋類では内面にヘラミガキがみられないこと、他のものでは器形・焼成的に土師器または須恵器の範囲としてとり扱いにくいことなどが抽出した一応の基準である。むろん須恵器にもまた赤褐色を呈するものがあり、坏類では個々の土器について赤褐色を呈した須恵器と区別する明確な根拠はないし、また特に器形による区別の場合は多分に恣意的で区別の基準がかなり不明瞭である。しかし、本遺跡の場合、検出された遺構との関連において須恵器とは別のものとしてそれが存在することを推定することが可能である。そして、後述するように、そのような区別のあいまいさを備えているという点が逆に「赤褐色を呈する土器」のもつひとつの性格でもある。

〔甕〕　2個体ある。いずれも焼面を伴う土壙（土壙40、48）から出土した。

土壙 40 出土のものは、胴部最大径が上端にありそれから外方に屈折した短い口縁部をもつ鉢形のものである。器面調整は内外ともロクロ調整で、胴部外面には前段階に平行タタキが施されている。

土壙 48 出土のものは、広口の壺ともいえるもので、倒卵形の胴部にやや長く直立する頚部と外傾する口縁部がつく。胴部外面には、ほぼ全面に格子タタキが施され、その後下部にヘラケズリが加えられている。また胴上部内面には布目痕が観察される。

〔鉢〕　遺構内からの出土は第8号住居跡、土壙40からの二例のみであるが、他に表土中から数点出土している。

第 8 号住居跡のものは口縁部に巾広い突帯を巡らし、推定口径は約 36 ㎝に達する大形のものである。胴部はやや弯曲しながら底部へ至るものと思われる。器面調整には回転刷毛目が多く用いられ、胴外面にはその後ヘラケズリが加えられている。

〔壺〕　口頚部の破片が1点ある（土壙40出土)。

頚部は頚約 14 ㎝でほぼ直立し、口縁部でわずかに外反する。口縁端部は縁帯状に上下にのびたものである。

〔坏〕　図示可能なものは12個体あり、赤褐色を呈する土器の中では最も多い。

器形には丈が高い埦形のものと、器高が低い通常の坏形のものとがある。後者にはさらに、胴下部から底部にかけて丸味をもって連続するものと、明瞭な角度をもって移行するものとが

あるが、いずれも底部が大きく安定感がある。

底部の切離し技法が明らかなものは11個体あり、ヘラ切りのもの(4)、回転糸切のもの(4)、再調整のため不明なもの(3)、の各種がある。なお再調整はいずれも手持ヘラケズリである。

〔高台付坏〕　土壙38から出土した一例のみである。

高台部を欠く。坏部は直線的に外傾する器高の高い器形である。磨滅が著るしく、底部の切離し技法は明らかでない。

〔蓋〕　第8号住居跡から2個体出土した。

いずれも破片である。つまみは宝珠形をなし、口縁部はやや外方に折り曲げられて作り出されている。須恵器・土師器蓋に比べて器高が高い。内外ともロクロ調整で天井部外面には回転ヘラケズリ再調整が加えられている。

〔皿〕　土壙39および表土出土の2例ある。表土出土のものは完形である。

胴部がほぼ直立し、それから外方に水平に近く屈折する口縁部をもつもので低平な器形である。切り離し技法の明らかなものはヘラ切りである。

〔小皿？〕　1例ある。

口径5.4㎝、器高1.5㎝の小形低平なもので、回転糸切技法で切り離されたのち底部周縁に手持ヘラケズリ再調整が加えられている。

〔円面硯？〕　土壙40から2個体出土した。

脚部のみの破片で全体の器形は明らかでない。いずれも鋸歯文が描かれているもので、脚部に方形の窓が切られているものがある。

〔支脚〕　土壙39から1例出土している。径12㎝ほどの円筒形に近いものと思われるが、破片のため全容は明らかでない。

住居跡における土器組成とその年代

土器の遺構ごとの出土状況を142ページ表に示した。そのうち住居跡からの状況によってその共供関係、組成を検討することにする。

出土量は住居によってかなりの違いがあるが、第1、8号住居跡が多く、第1号住居跡では、41点、8号住居跡では38点ある（堆積土出土のものを除く）。両住居跡からの出土状況によって明らかなように、土師器・須恵器・赤褐色を呈する土器は共伴関係にある。しかし、第1号住居跡では須恵器が多量、豊富であるのに対し、第8号住居跡では、土師器が多く須恵器が少ない。このためそれぞれの器形については、共伴関係を確認できないものがある。ただし、それらは坏を除けば高台付皿（土師器・須恵器）、高坏（須恵器）などのいわば特殊な器形で、必ずしも

普遍的な住居ごとの組成を構成する要素たり得ないものが多い。また坏についても、全住居跡における土師器・須恵器坏の出土状況からうかがえるように、土師器坏が須恵器坏に比べて極めて少なく、そのことが本遺跡の一つの特徴でもある。図示可能な土師器坏がみられるのは第8・10号住居跡の2軒にすぎない。そして、土師器坏の欠如を補填するかのように、赤褐色を呈する土器の坏が供伴して存在している。したがって、両住居における坏類の種類の相違、出土

図示土器集計表（住居跡）

種類	器形		1住	2住	3住	4住	5住	7住	8住	9住	10住	小計	計
土師器	甕	鉢形（内黒）	2	2					2			4 2	
		〃（非黒色）					1					1	
		壺（内黒）			1							1	
		大（長胴形）	7		3		8	1	12	2		29 4	
		中	8		1	2	3		6			20	
		小	1		1				5	1		8	
	小形鉢		1									1	
	坏		1						5		2	7 1	
	高台付坏										1	1	
	稜塊									1		1	
	高台付皿								1 1			1 1	
	蓋		1						1			1 1	
	甑			1			2					3	75 12
須恵器	甕			1	1		1					2 1	
	鉢		1			1						2	
	壺		2				1					3	
	坏		11 7	2	1		2		2 1			16 10	
	高台付坏		1									1	
	高坏		1									1	
	稜塊						1（転用硯）		1	1（墨書）		2 1	
	高台付皿		1									1	
	蓋		2		1 1				2			5 1	33 13
赤褐色を呈する土器	坏		3			1	1		1	1		7	
	蓋								1 1			1 1	8 1
小計			41 9	6	6 4	4	18 2	1	38 4	6	3	1	116 26
計			50	6	10	4	20	1	42	6	3		142

図示土器集計表（土壙他）

種類	器形		土壙1											土壙5							表土	小計	計
			17	31	39	47	49	50	8住土壙1	40	48	53	55・56	20	23	34	38	42	59	9住ピット1			
土師器	甕	鉢形（内黒）													1							1	
		〃（非黒色）		1										1								2	
		大（長胴形）	1				1		1	1		4			1	1	9		1	1	3	24	
		中		1			2						1				3					7	
		小										4										4	
	坏					1					1										1	3	
	蓋																				2	2	43
須恵器	甕														1		2					3	
	鉢																2					2	
	壺																2					2	
	坏							1									7	1			4	13	
	高台付坏																5					5	
	稜塊													1			2					3	
	蓋																2					2	30
赤褐色を呈する土器	甕									1	1											2	
	鉢								1												2	3	
	壺									1												1	
	坏									1					1		3					5	
	高台付坏																1					1	
	皿				1																1	2	
	小皿											1										1	
	円面硯									2												2	
	天脚				1																	1	18
																							91

量の多寡もまた、必ずしも土器組成上の決定的な要件である必要はないと考えられる。

一方、土師器甕類についてみると、第 1・8 号住居跡の出土状態はよく似ている。それは器形の種類および量比ともにいえることであり、さらに各器形の細部形態、器面調整等で共通する点が多い。特に中形の甕では規格品がと考えられるほどその類似性が著しい。

以上のような点を考慮すると、両住居跡の土器組成はむしろ共通しているといえるのでありさらにその共通性と土師器甕（中型）の斉一性からみて、両住居跡は同時存在がまたはそれに近い関係にあったことが考えられる。つまり、双方を一体化することによって土器組成はより充実して具体化するのであり、両住居跡土器は、組成上互に補完の関係にあることになる。

代表的な器形によって概観すると、土器組成は土師器甕、多量の須恵器坏、少量の土師器坏および赤褐色を呈する土器坏によって構成されており、その特徴は、火災によって一括遺物が遺存した第 5 号住居跡の組成によっても裏付けられている。

第 1・5・8 号住居跡の出土土器によって各器形の内容をみると、土師器甕には内黒で鉢形のもの、大形のもの（長胴形）、中形のもの、小形のもの（量は少ない）などがあり、大形のものではタタキ（平行・格子）や回転刷毛目といった須恵器的技法が多用されている点が注目される。須恵器坏には、ヘラ切り、回転糸切、手持ヘラケズリ再調整が、また土師器坏では、ヘラ切り、回転ヘラケズリ再調整、ナデ調整、赤褐色を呈する土器坏では、ヘラ切り、回転糸切、手持ヘラケズリ再調整のものが組みあっている。

上記の住居跡の他に、遺構に伴う土器が出土しているのは、第 3・4・9 号住居跡である。それらの住居跡では出土土器の量に極端な差があり、前記のような土器組成のありかたが共通するのかどうかの比較はできない。だが、各器形・土器については、共通する要素を見い出すことができる。特に第 9 号住居跡出土の土師器稜埦は、土師器の器形としては稀であり、須恵器的技法・器形の強い影響のもとに製作されたものであることは明らかである。その点で、土師器甕の器面調整技法に代表されるように、須恵器的技法の影響下に成立した本遺跡の土器の範囲の中に含まれるものとして理解できる。第 3・4 号住居跡の土器についても種々の類似性を認めることができる。

第 2・7 号住居跡には、遺構に伴うと考えられる土器はほとんどない。このことは両者とも、カマドが設けられていない住居跡であり（第 2 号住居跡にはカマド状遺構は認められるが、それは堆積土中に付設されたもので、本来的に遺構に伴うものではない）、遺構の性格にもかかわるものとも考えられる。したがって、強いて“土器組成”という点で考慮する必要はない、が堆積土出土の土器についてみるならば、それらの特徴は他の住居跡の土器との差は認められず両遺跡とも時期的に大きく隔たるものではないと考えられる。

一方、第 10 号住居跡では、回転糸切技法によって切離された土師器高台付坏が出土している

点で若干様相を異にしている。土師器坏類の回転糸切技法は、他の住居跡においては全く認められず、この一例のみである。もっとも高台付坏であるという点で坏とは違う特殊性もあるが、技法的にみた時期差についても検討が必要である。このことについては後に詳述することとしたい。

以上のように、本遺跡における土器組成は、第1・5・8号住居跡によって代表され、その組成の共通性、各土器の器形や技法の類似性からみて、10 号住居跡を除く各住居出土の土器は、同時または極めて近接した時期のものとして一括できると考えられる。

次にこれらの土器の年代について検討してみたい。出土した土器は土師器・須恵器・赤褐色を呈する土器の三種類であるが、それらのうちで、現在のところ系統的に編年大系が明らかにされているのは土師器である。本遺跡から出土した土師器は、大多数が製作に際してロクロを使用したもので、その特徴からみてそれらは、いわゆる表杉ノ入式＝第7型式（氏家：1957）に属するものである。若干のロクロ不使用の土器もあるが、それらは住居において共伴するものであり、また県内各地の集落跡の調査によって少量のロクロ不使用の土器が、表杉ノ入式に存在することが確められており矛盾するものではない。

表杉ノ入式土器にはさらにいくつかの段階が存在することが明らかにされつつある。それは主に坏に加えられる技法的面からの視点によってなされたものであり、原則的には再調整のあるものから再調整のない回転糸切のものへと変化するとされる（阿部：1968、桑原：1969 他）。

坏は第8号住居跡から5点、第10 号住居跡で2点出土しているが、第8号住居跡では、再調整のあるものとないものが共存しており、さらに無調整のものがヘラ切技法であるという点で単純にこの推移をよりどころとすることはできない。

	第8号住居跡	第10号住居跡
ヘラ切	2	
回転ヘラケズリ	1	1
手持ヘラケズリ		1
ナ　デ	2	

しかし、ヘラ切技法の坏は、県内では類例は多いとはいえず、住居跡の例としては大河原町台の山遺跡（千葉・阿部：1980）、白石市青木遺跡（小川：1980）などがあげられるにすぎない。そして、それらは再調整のある坏と共存し、また回転糸切無調整の坏とも共存している。県内には回転糸切無調整のみで構成される坏の組成の類例が多数確認されていることを考えると、前記二遺跡の組み合せはより古いとみられるのであり、青木遺跡では「平安時代前半頃」ととらえている。本遺跡第8号住居跡の場合は、さらに回転糸切技法を伴っていないという点でそれよりさらに遡る可能性が考えられる。この他にも第8号住居跡の坏が、表杉ノ入式の中でも

古い段階と考えられる要素はいくつか認められる。一つは、回転ヘラケズリを加えられた坏が丸底状を呈するという点である。いうまでもなく丸底はロクロ技術採用以前の坏の一つの特徴で、いわゆる表杉ノ入式の坏ではほとんどみられない。もっともこの土器は“丸底„を意識したものではなく技法の関係によって生じたものと考えられる（おそらくヘラ切技法によって切離され、その後回転ヘラケズリを加えられたもの）が、そのような技法自体がより古い段階の須恵器坏や稜埦等にみられるもので、表杉ノ入式の坏に一般的なものではない。

また、すでに再三述べたようにこの坏を含めて、本遺跡の土師器には須恵器製作技術の影響が強くみられるという点である。具体的には稜埦の存在、タタキ技法の多用などがあげられる。ただし、須恵器技術との交流は、製作者集団との“特別„な関連があればいつの時点でも生じ得る現象であり、そのことだけで年代的に古いという根拠にはならない。しかし、本遺跡の場合は、前述したように土師器そのものとしても古い段階に位置付けられること、県内で発見されている多くの表杉ノ入式期の集落の中に本遺跡のような例が見当たらないこと、さらに後に述べるように須恵器に8世紀段階のものに近似する器形のものが含まれていることなどから、須恵器技術（ロクロ技術）の土師器への導入期における現象として理解したい。つまり表杉ノ入式の初期の段階のものと考えられる。

もっとも、初期の段階の土器組成として、本遺跡のあり方が普遍性のあるものと考えるものではない。“技術”に対する関係の緊密度に加えて、技術取得時期の違いもあり、ロクロ土師器が確立するまではある程度の時間幅が存在したはずであり、その間にはそれぞれの地域によって土器の様相が異なっていたことが想定されるからである。たとえば、白石市御所内遺跡1・2号住居跡のように坏はすべて回転ヘラケズリ技法のものである例もある（太田：1980）。そして再調整のあるものからないものへという推移によれば、むしろ本遺跡の場合が特殊であるともみられる。

このような土器のあり方から考えると、第10号住居跡から出土した回転糸切技法の高台付坏についても、特に異質なものとする必要はないのかもしれない。回転糸切技法そのものは土師器甕には認められる（第1号住居跡）、また第10号住居跡で共伴した2点の坏にはいづれも再調整が施されている。したがって仮に年代差が存在したとしても、本遺跡の土器群の年代幅内におさまるものと考えられる。また、赤褐色を呈する土器も共伴している（破片である）ことから他の住居跡と同様の土器組成であったことが考えられる。

ところで、表杉ノ入式土器は平安時代に属するものとして考えられているが、上限については9世紀後半とする見解（岡田・桑原：1974）もある。この見解は、主に多賀城跡の瓦を焼成した窯跡における瓦と須恵器坏との共伴関係から須恵器坏の年代を推定し、さらに集落跡における須恵器坏との共伴関係から導き出されたものである。しかし、窯跡の調査例が少ないことも

あって、少数の窯跡における共伴関係で多賀城跡の各変遷期間の組成を網羅し、かつ他の須恵器にまで普遍化するにはやや資料不足の感がある。現在のところ瓦窯跡における共伴関係は、時間的幅の中のいわば“点„であり、その意味では「9 世紀後半」はなお流動的である。上限をより遡るものとする考えも多い（阿部：1968 他）。

本遺跡においても、第 1 号住居跡から出土した須恵器高台付皿は「8 世紀後半〜9 世紀頃に操業をみたもの」とされる栃木県三通窯跡（大川：1976）等に類例を見い出すことができる。他地域の土器の年代を援用することには多くの危険を伴なうが、管見による限り、宮城・福島県では現在のところ類例をみない特殊な器形であり、本遺跡の土器群が平安期でもより遡った時期のものである可能性を示す資料として提示するとともに今後の類例の増加に注目したい。

土壙群の性格とその出土土器

土壙群には、構造や性格が共通する四者がある（土壙 5 は、共通性の認められないものを一括した）。そのうち、土壙 4 は近世の墓である。

〔土壙 1〕

焼面を伴うという特徴をもつ土壙群である。形態や規模によって、さらに数種のグループがあるが、いずれも焼面を伴うという点でその性格は同一のものであろう。多くの土壙から土器が出土しており、そのうち、確実に遺構に伴うと考えられるものがいくつかある。第 8 号住居跡土壙 1 では、底面に密着した状態で土師器甕（図版 5−3、この土器はもろくくずれており図示することはできなかった。中形の甕と考えられる）が出土した。土壙 53 では、底面に少なくとも 3 回の使用面が確認され、その間（3 層）から土師器甕（大・小形）片が多数出土した。また、土壙 40 は、残存する深さが 10 ㎝程度しかないが、その中から、いいかえれば底面に近い部分から土師器甕（大形のもの、鉢形でヘラミガキのもの）、赤褐色を呈する土器（鉢・壺・坏・円面硯？）が出土した。このようなことから、土壙 1 は、土師器および赤褐色を呈する土器を焼成した施設であると考えられる。この他にも、土壙 49 では、明らかに熱作用によって器壁が剥離した土師器甕（中形）が出土しているし、さらに、土壙 1 から出土している土器は、全体的に土師器・赤褐色を呈する土器がその主体を占めている。なお、出土土器の中には須恵器もみられる。しかし、後に述べるように土壙 1 は酸化炎焼成のための施設で、還元炎焼成の須恵器は焼成できない。後の混入であろう。

土壙 1 には、焼面の状況からみて二つのタイプがある。一つは、土壙 31・49 などに代表されるような壁面の焼面の範囲が、一方のみを残して馬蹄形に巡るもの（A型）であり、他の一つは、土壙 48 にみられるように全面に及ぶもの（B型）である。本遺跡では、壁の焼面の状況を観察できるものの中ではA型が圧倒的で、B型は一基のみである。

いうまでもなくA型は、焚口部（送風部）を備えた構造であることが想定される。そして、当然のことながら炎を引くための煙出、および上部構造（天井部）が存在しなければ、このような焼面の状況は生じ得ない。これを裏付けるように、第8号住居跡土壙1では、土壙の周囲に土手状の盛土があった。また、内部に天井部崩落土とみられる地山ブロックが堆積していた土壙も多い。つまり、A型は住居跡におけるカマドを大型化したもの、あるいは窖窯を小形化したような構造であったことが考えられる。ただし、窖窯のように焼成の段階において、酸素の供給を遮断することを行ってはいない。このことは、やはり焼面の状況から推定されることであり、また、土壙内部が還元されたことを示す徴証もない。

A型には、覆屋的な構造物を伴っていたと思われるものもある。第8号住居跡土壙1は、住居を一定期間使用したのち、その床面に土壙を掘りこんでいるが、土壙構築後も住居の上屋構造は存続しており、覆屋的機能を果にしていた。この例からみて、土壙30を囲むように柱穴が配置される掘立柱建物跡も土壙に伴う覆屋であった可能性が強い。

B型の土壙は天井部構造をもたないもので、いわゆる野ガマであると考えられる。

以上のような土器製作址は、全国的にも類例が増加しており、その主要なものについての紹介も示されている（塩野：1977）。また、県内各地にも検出例があり、たとえば「焼土遺構」として報告されているものが該当すると思われる。類例としては、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡3基（加藤・白鳥他：1974）、金成町佐野遺跡7基（平沢・手塚：1980）、高清水町五輪C遺跡9基（小野寺：1979）、下折木遺跡1基（高橋：1980）、古川市藤屋敷遺跡2基（加藤：1980）、宮沢遺跡1基（斉藤・真山：1980）、丸森町中平遺跡1基（太田：1979）、村田町西原遺跡2基（熊谷：1980）など多くがある。

さらに近年調査が行なわれた仙台市羽黒堂遺跡（野崎ほか：1980）では、「土師器平窯」として報告されている。

（ただし、「焼土遺構」の中には、丸森町石神遺跡（土岐山：1980）、柴田町葉坂戸ノ内遺跡（佐々木：1980）のように内部から焼けた人骨が検出された例もあり、必ずしもすべてが土器焼成施設であるとはいえない。）しかし、各遺跡によっては保存状況が不良なものもあり、焼面の状況が明確でないものもある。また、遺物の出土している例が少なく、年代についても不明なものが多いが、宮沢遺跡、佐野遺跡の1例が国分寺下層式期であるほかは、表杉ノ入式期に属すると思われるものが多い（岩切鴻ノ巣、五輪C、藤屋敷、中平遺跡）。

このようなことから、国分寺下層式から表杉ノ入式期の集落には、かなり普遍的に存在していると考えられる。しかし、それらは本遺跡のように群集することは少ないようである。

各遺跡の焼土遺構の中には、その構造を示すものとして注目すべき例が2、3ある。中平遺跡では、100×60㎝の長方形の土壙の長軸方向に浅い円形のくぼみがのびている。土壙底面より

約25㎝高い。おそらく煙出しの施設であろう。

岩切鴻ノ巣遺跡第1号焼土遺構は、焚口部を伴う「コ」字形の掘りこみであるが、底面に凝灰岩の切石が敷かれている。これは、地下からの水分を遮断して遺構内の温度を高めるために極めて有効な施設であるとのことで（陶芸家早坂正治氏教示）、同様の目的と考えられる例は、岩手県瀬谷子遺跡（草間・伊藤ほか：1971）においても認められる。同遺跡では底面に土器片をしきつめている。

藤屋敷遺跡の例は、住居内に掘りこまれたものである。その掘りこみ時期は住居廃絶直後で、焼土遺構の使用期間中は住居内にあたる「空間は、火を使用したそばで何らかの用途に利用されていた」ことも考えられており、その在り方は、本遺跡第8号住居跡とよく似ている。

国分寺下層式期の2例はいずれもＢ型であり、表杉ノ入式期にはＡ・Ｂ型の両者がある。
この時期とタイプの関係から、Ｂ型がいわゆる野ガマとして伝統的に存在し、土師器製作に須恵器技術（ロクロ技術）を導入した時点で、須恵器窯に近いＡ型もまた導入されたと考えることもできる。ただし、地域は異なるが、埼玉県水深遺跡（栗原ほか：1972）では、真間式期にすでにＡ型に類似するものがあり、さらに、大分県雄域台、羽田遺跡（富来：1964）では、弥生中、後期に「火ぐち」、「煙道」を備えた「土器窯」も確認されており、その出現年代はかなり遡る。したがって、このことについては類例の増加をまって検討を加える必要がある。

土壙1で焼成した土器は、土師器および赤褐色を呈する土器であることはすでに述べた。両者は別々に焼成されたものではなく、同一の土壙で焼成されている。したがって土師器と須恵器との区分が焼成方法によってなされている以上、赤褐色を呈する土器は土師器の範ちゅうに含まれるもので、両者を特に区分する理由はない。本書では、これまで使用してきた「赤焼土器」との比較や、遺跡の性格の検討のうえで必要なために別に取り扱っている。すでに述べたように、土師器との区分は器面調整・器形等の点で行なったが、それは、実際は坏類においてのみ可能で、その他の器形ではあいまいなものである。
赤褐色を呈する土器にはいわゆる「赤焼土器」も含まれている。
「赤焼土器」は内面にヘラミガキ・黒色処理を行なわず、回転糸切技法によって切り離されたヘラケズリ再調整のない土器を指し、当初は土師器として分類したが（藤沼：1971、白鳥：1972など）、その後「赤焼土器」として分離し、1975 年頃から使用してきた名称である（佐野・藤屋敷・手取・西手取・糠塚遺跡等）。また、はじめは坏類に限っていたが、後には前記のような基準にもとずき、ヘラケズリ再調整の加えられない回転糸切の甕にも及ぼすようになった。

しかし、甕におけるヘラケズリ再調整の有無は、土器製作の際の器形ごとの手順の違いによるものであり、先に検討したように、小形の器形では再調整を行なう必要がない場合が多い。また、同様に小形のものであっても、再調整が加えられるものとそうでないものとがあり、製

作技術にかかわる偶然性が大きな要因であるともみられる。

坏については、回転糸切・無調整という「赤焼土器」の基準に該当するものは、土壙 23 から 1 例出土しているが、遺構に伴うものはない。多くはヘラ切・無調整、手持ヘラケズリのものである。しかし、第 5 号住居跡では回転糸切、胴部下端手持ヘラケズリ再調整のものが出土しており、回転糸切技法によって切り離されたものが存在することは明らかである。つまり、赤褐色を呈する土器の坏には、回転糸切およびヘラ切の切離技法、再調整技法が伴っているのであり、それらの中から、回転糸切・無調整のもののみを「赤焼土器」として抽出し、別個に取り扱うことは適当ではない。

以上のような本遺跡の知見にもとずくならば、先に示した基準の「赤焼土器」の設定は誤りであったと考えざるを得ない。「赤焼土器」は土師器・須恵器と鼎立するものではなく、本来的に土師器に含まれるものである。この点で「赤焼土器」は存在しないのであるが、いわゆる内黒坏などと区別する意味で仮にこの名称を用いるとすれば、それは内面にヘラミガキ技法を伴わない坏・蓋類のみに限られ、特殊な場合を除いてその他の器形までを含めることには無理がある（以下、本書では「赤焼土器」をそのような意味付けによって使用する。“特殊„な場合の具体例として、土壙 48 から出土した円面硯や甕がその好例であろう。もっとも、本遺跡においても遺跡の性格を知る資料として意図的に分離しており、本来土師器の中で扱うべきであることに変わりはない）。

そして重要なことは、この種の坏は、土師器製作に須恵器技術（ロクロ技術）が導入された時点において、すでにヘラミガキが施される坏類と併存しているという点である。さらに本遺跡の場合は、ヘラケズリ再調整が加えられるものが多く、一方県内各地では回転糸切・無調整のものの出土例が多いことからみて、須恵器・土師器と同様変遷していることが考えられる。その変遷過程については、資料が十分ではなく明らかではないが、本遺跡の例からすると、須恵器・土師器のいずれともやや様相を異にしているようであり、また明確な糸切技法の存在からみると、比較的早い段階に回転糸切・無調整のものが主体を占めるようになったことも予想される。

このように表杉ノ入式の初期から赤焼土器が存在し、それが独自の変化をもちながら推移していったと考えられる以上、赤焼土器の有無によって遺構の年代を推定することは、現段階では極めて危険であることはいうまでもない。赤焼土器を伴わない集落が存在する可能性もあり（たとえば御所内遺跡 1・2 号住居跡では赤焼土器は出土していない）、また、同一集落内の住居跡間の存否は、単なる組合せ上の欠落である可能性も考えられるからである。今後の類例の増加とともにその実体や変遷過程の究明が必要であろう。

赤焼土器が、回転糸切・無調整の段階になった例の一つとして、岩手県江刺市瀬谷子遺跡が

考えられる。同遺跡では15基の「平窯跡」が発見され多数の赤焼土器（報告書では土師器として取り扱っている）が出土した。同遺跡では他にも須恵器・内黒土師器[註1]といった「平窯跡」では焼成し得ない土器も出土していることから、必ずしも出土した土器すべてが遺構に伴うものではないと考えられる。しかし須恵器・内黒土師器の量は僅少であり、また焼面を伴うという遺構の状況等から推して、この遺構は赤焼土器焼成のための施設であり、須恵器等は混入であろうと理解できる。

報告書によれば、遺構は径1〜2m前後の円または楕円形を呈し、底部が熱によって焼けて赤変したもので、報告者は周囲に土を盛り上げて囲をし、焚口と煙道を備えた構造を推定している。この推定が正しいとすれば、本遺跡におけるA型にあたるが、具体的な遺構としては検出されておらず、その実態は明確ではない。しかし、その構造が焚口・煙道を備えたもの（A型）、あるいは、野ガマ的なもの（B型）のいずれであろうとも、遺構としては本遺跡のものと変わるものではなく、そこで焼成した土器もまた赤焼土器の範囲で把えることができる。

ところで、このように赤焼土器に変遷が存在すると考えられることについて、秋田城跡において注目すべき報告例がある。

秋田城跡第17次調査では地表下約2.5mまで掘り下げたが12層にわけられた各層から須恵器・土師器・赤褐色土器[註2]が出土した。（小松ほか：1976）

赤褐色土器にはA：二次調整を施さないもの、B：体部下端および底部回転、手持ヘラケズリを施したものの二者がある。両者とも最下層ではほぼ同数存在し、以後増加するが、「第8・9層段階で増減が反比例」し、Aが増加し、Bが減少するという興味深い現象が報告されている。この現象については、土器の供給体制という点をも考慮する必要があり、直ちにそれが変遷を示しているものと断定するにはなお多くの検証が必要であるが、出現当初からA・Bの二者が存在し、再調整の加えられるものから加えられないものへと量比が転換しているという事実は、これまで述べた赤焼土器の発生・変遷という点の考察のうえで、有力な事例と考えられる。

また近年、本堂寿一氏は、北上市極楽寺跡発掘調査報告に際し、同寺跡および北上川流域出土の「赤焼き土器」を検討し、赤焼土器を前期・後期に区別して概念規定を行った（本堂：1980）。「前期赤焼き土器」は、「坏の生産にロクロ技術を導入して以来、須恵器坏や内黒坏と生産され続けた酸化炎焼成の粗製の坏」であり、「後期赤焼き土器」は、「須恵器坏生産の減退傾向に対し、増加傾向を示すと考えられる内黒以外の酸化炎焼成の坏」である。そして、「前期赤焼き土器は……各地の出土内容に差異があり、後期への変革時の線引は困難であるが、移行時の便宜上の目安としては……白色火山灰（火山灰十和田ａか）の降下後、まもない頃と考えられる。地域は異なるが、その年代としては……多賀城跡で須恵系土器を10世紀後半とする点に同意できる」と述べている。

しかし、報告者自身が述べているように、赤焼土器の背景には、土器の需要、供給の関係や生産集団の問題等、いいかえれば須恵器・土師器をも含めた土器生産体制の解明が横たわっている。赤焼土器自体の変遷が明らかでないばかりでなく、またそのあり方、転換は地域によってそれぞれ様相を異にしていると考えられ、現段階においてこの前期・後期の時期の区分が、その背景となるべき社会体制をも示し得ているのかどうかについて、なお多くの課題を残している。しかし、前・後期の区分は、赤焼土器のもつ意味を端的に示しているものと考える。つまり、赤焼土器は、ロクロ技術導入とともに出現するが、その当初は、まだ需給体制が確立していた須恵器（坏）の代用品として存在した。その後、徐々に須恵器生産の停滞、減少とともにその比重を増していったと考えられ、ともに代用品ではあるが、初期と末期とではそのもつ意味に本質的な違いがあったものと考えられる。

次に、いわゆる「須恵系土器」について述べたい。

須恵系土器は、多賀城跡内城から一括して出土した赤褐色の坏・皿について付せられたもので、1. ロクロ水挽であること、2. 内・外面ともに再調整が全くみられないこと、3. 焼成温度が土師器に比して高く 1000℃に近い高火度で焼成したものと考えられ、堅さ・色調とも土師器と異なることなどの特徴から、土師器の一型式と見做すことはできないとされた。それは「従来の還元炎焼成の須恵器が、酸化炎焼成の土器に転化したために出来上がったもの」で、（須恵器）「生産体制の衰えが……質の変化をもたらした」ことがその出現の理由であると説明されている（宮城県多賀城跡調査研究所 : 1971）。そしてその上限は 11 世紀、また下限は 12 世紀末頃と考えられている（桑原 : 1976）。設定者は、その類例の一つとして前記した瀬谷子遺跡の土器をあげている。もっとも、土師器とはみずに、また遺構についても「須恵系土器の焼成施設のある段階の遺構ともみなし得る」（桑原 : 1976）として、須恵系土器は窯中で焼成されたものとして理解しているようである。しかし、氏の想定する須恵系土器の具体的な焼成窯は、まだ明らかにされてはいない。ただし窯については、「あかやき土器[註3]の焼成窯の構造は、須恵器と同じのぼり窯でも、いわゆる平窯でもよいし、あるいは地上に天井を被覆しただけの簡略化した平窯でも充分たりうる」（小笠原 : 1976）との指適もある。この点からすれば仮に須恵系土器窯跡が発見されたとしても土器そのもので“須恵系土器„を区別することは困難であると思われる。

ところで、本書では瀬谷子遺跡出土の土器を赤焼土器の範囲として理解した。それは、一言でいえば本遺跡における土器焼成施設とに連続性を見い出し得ると判断したからである。したがって同一の土器について相反する理解が生じていることになる。このことの解明ついては、問題となる 11 世紀以降の土器生産の実態の究明が必要である。しかし、現段階においては、結論的には須恵系土器は「赤焼土器」の範囲としてとらえられるものであり、その意味において

は土師器の範ちゅうに含まれるものであると考えている。その理由はすでに各所で述べた事項で明らかである。

つまり、須恵系土器は製作技法上ロクロ技術導入という須恵器の系統を引くものであることは明らかであるが、それは同様に内黒土師器についてもいえることであり、それのみで土師器と区別することはできない。焼成上では、窯で焼成したものと考えられているが、本遺跡の場合は、土師器と同じ土器施設で焼成されており[注4]その施設は瀬谷子遺跡においても共通している。また、焼成温度が須恵系土器の一つの根拠ともされているが、本遺跡のA型施設においては温度を 1000℃前後まで高めることは可能であり、むしろ容易であるという（早坂氏教示）。このことについては具体的に製作実験を行ったわけではない。しかし、小笠原氏は数回の実験結果をふまえたうえで、前記のような「あかやき土器」の窯跡の推定を行っている。

このように土器製作上、須恵系土器はロクロ土師器と何ら区別する理由は見い出されないことになる。

土師器か須恵器かについて「その呼称にとどまるならあまり意味のあることとは思えない」とする意見（小笠原：1976）もあるが、「須恵系」という名称には多様な問題点を含んでいる。名称のみで述べるならば、中世陶器の一類型としての「須恵器系陶器」との混乱を生ずる恐れがある。もっとも、律令体制の崩壊に伴う須恵器生産の減少という全国的なすう勢をもとに、須恵器から須恵系土器へ、さらに中世陶器へと転換したとする考えも示されたこともあるが、少なくとも当地域で酸化炎焼成の須恵系土器から還元炎焼成の「須恵器系陶器」への流れを理解することはできず、また、他の「瓷器系陶器」との間にも断絶がある。

このことについては、畿内を中心とするいわば土器製作先進地においては、ついに土師器製作にロクロ技術を導入することがなかったという基本的な差異についても考察が必要であろう。いずれにせよ「須恵系土器」については、その名称の適否を含めてなお検討すべき課題が残されていると考える。

同様に赤焼土器についても残された問題が多い。それは、これまでに述べた理解が、1. 本遺跡のあり方が個々の土器は別として、須恵器技術導入段階の例としては特殊なものではないこと、2. 具体的根拠がないが県内各地の「焼土遺構」の中に、土器焼成施設も含まれているという二つの大きな仮定に成り立っている点にある。

あわせて今後の検討課題としたい。

註 1）内面黒色化の方法についてはまだ十分解明されているとはいえないが、各種の実験や民俗例により（小笠原：1971 に比較的まとまって紹介されている）少なくとも土器焼成と同時に黒色化することはできないと考えられている。したがって「平窯跡」から出土した場合でも、それは窯本来の焼成方

法によって生じたものではないとみられ他の赤焼土師器とは伴わないものと考えられる。同称に内黒土師器が出土している例として中平遺跡（太田：1979）、羽黒堂遺跡（野崎ほか：1980）がある。

註2）赤褐色土器：「いわゆる酸化炎焼成を目的としたもので、色調は明褐色、灰褐色、茶褐色等を呈する」土器で、名称は異なるが、本書でいう赤焼土器であると考えられる。

註3）あかやき土器：小笠原氏が仮称として使用したもので、その内容は須恵系土器と同様であると思われる。

註4）桑原氏は、秋田城跡や岩手県相去遺跡において、9世紀の段階に、還元炎焼成の須恵器と窯中で酸化炎焼成したとみなされる土器が存在することから、「おそらく、東北地方北部では、須恵器生産技術が導入された当初に、本来の還元炎焼成と、焼成の最終段階のくすべ焼を省略したかたちの酸化炎焼成の両様が行なわれる」という「技術的混乱が一部に存在した可能性」を述べている（桑原：1976）が、本遺跡赤焼土器は明らかに土師器と同一の窯で焼成したのであり、そのような特殊例にはあたらない。

〔土壙2〕

土壙2は底面に1ヶの小ピットをもつものである。規模・形態のみならず堆積土の状況でも共通性がある。堆積土の概略を述べると、底面に木炭をまじえる薄い層があり、その上部によごれた地山土、さらにその上部に黒色土が堆積している。黒色土は、それに地山ブロックが多く含まれる場合と混入物を含まない均質な場合とがある。また、遺物が出土した土壙が2基ある。いずれも土師器片で最上部から出土している。最上部出土という点でやや疑問は残るが、土器は出土した土師器の所属時期にはまだ埋まり切っておらず、したがって土壙の時期も一般的にはその時期以前で、さほど隔たるものではないと考えられる。

この土壙は、形態的には神奈川県霧ヶ丘遺跡、（霧ヶ丘遺跡調査団：1973）多摩ニュータウン地区遺跡等で多数検出され、おとし穴として考えられているものに類似している。（霧ヶ丘遺跡の場合は、底面のピット内に棒を立てたような痕跡がみられるもの本遺跡の場合とはやや異なっているが、堆積土の状況は近似している。）それらは縄文早期末から前期初め頃に属するものが多い。しかし、本遺跡の場合は、出土する土師器の時期（小片のため明確ではないが平安時代。ただし第5号住居跡との重複関係ではそれより古い）のものであり、また近時調査が行なわれた仙台市山田上の台遺跡では、縄文中期末ないし後期に属すると考えられる検出例がある。

このようなことから、この形態の土壙はかなり長期間にわたって存在しているようであり、その性格も一様ではないと考えられる。いずれにしても遺物が出土しないことが多いため、具体的な性格については不明な点が多い。

本遺跡の場合では、堆積土の状況からは、土壙がある一定期間空洞状態にあったことが推定される。このことは、よごれた地山土は土壙壁の崩落土と考えられ、その上部の黒色土がU字形に堆積していることによる。その点では、「おとし穴」として理解することもできる。しかし、一例のみではあるが内部の小ピットにも空洞になっているものがみられ、このピットが杭（棒）

のためのものと考える点ではやや不都合である。このように、土壙もピットも空洞であり、また底面に木炭を含む薄い堆積層が存在することからみて、基壙としての不能性も考えられる。つまり、最下層堆積層は遺骸およびそれに伴なうものの痕跡であり、上部の層は遺骸腐朽にともなって、陥没した結果生じたとみられるのである。上部に黒色土中に地山ブロックが多数まじる場合が多いことが、その一つの根拠である。その場合、小ピットは水抜きのための施設と考えられる。基壙底面に水抜きのためのピットや溝を巡らす習慣は、宮城県栗原郡地方ではつい最近まで行なわれていた。ただし、墓として考えた場合も、同一地域内にある近世の基壙には同様な施設がないこと、黒色土が均質な場合もあること、副葬品と思われるものがないことなどの十分説明でいない点がある。

結論としては、おとし穴とも墓ともあるいは他の性格のものとも決め難い。

〔土壙3〕

溝状をなす土壙である。2基検出された。第1号住居跡より古いものが1基あるが、いずれの土壙からも遺物が出土せず、年代は明らかでない。この土壙もいわゆるＴ－ピットと近似しており、おとし穴と考えられているものの一種である。しかし、本遺跡の場合、その性格について考察する資料は認められなかった。

〔土壙5〕

土壙5は、その特徴によって類別できないものを一括したものであり、形態等は多様である。また年代も特定できないものが多く、性格についても不明である。

そのうちで、堆積土上部から多くの遺物が出土した土壙23・38について若干述べる。

両土壙は、堆積土はいずれも自然堆積のものであるが、その最上部に多量の土器が含まれている。土器の出土状況からみて、まとめて投棄したと考えられる。土器には、完形の状態に復元できるものは少ないが、比較的大形の破片が多く含まれている。またその中には多くの須恵器が含まれており、土器焼成の際に生じた破損品の廃棄の場とは考えられない。このような一時的な大量の土器の一括廃棄の要因としては、住居あるいは集落の廃棄（移動）といった行動が考えられる。つまり、まだ埋まり切らずに凹みとなっていた土壙を、転居等のために不要となった器物の捨て場として利用したものと思われる。ただし土壙の本来の性格については明らかでない。

なお、同様な例は、瀬谷子遺跡においても認められる。瀬谷子遺跡の場合は、そばに「坏形土器を口を合わせた12組の土器」を伴う祭祀的遺構も検出されている。

遺跡の性格

今回の調査で発見された遺構は、住居跡9軒と多数の土壙群である。それらの配置状況からみて、遺跡の範囲は、花川右岸沿いにさらに北西方向へ拡がるものとみられる。また、検出された遺構相互には重複関係にあるものもみられ、すべて同時に存在したものではないことは明らかである。さらに、表土出土の土器の中には、底部が回転糸切技法によって切り離され、器形的にも、住居跡出土土器よりは時期的に下降すると考えられる土師器坏（第55図4）もあり、遺跡自体としては、ある程度の年代幅をもっているとも考えられる。しかし、今回発見された遺構に限っては、すでに述べたようにその出土遺物からみて、表杉ノ入式初期という比較的限定された年代のものと思われる（土壙の中には年代を特定できないものも多い）。ここでは、そのもつ性格について若干の考察を行いたい。

本遺跡を特徴づけるものとして、土器焼成施設の検出がある。そこでは土師器（赤焼土器を含む）が焼成されている。このように集落内において、日常生活用の土師器が焼成されているということは、従来想定されていたことではあるが、具体的に明らかにされた例としては、稀なものの一つである。焼成施設の他に、第1・8号住居内には、白色粘土塊等が検出され、住居内において土器が製作されていたことが考えられる。ただし、両住居跡とも、カマドにつくり替えがみられ、また、第8号住居跡では、住居を一定期間使用後に焼成施設を掘り込んでいることなどからみて、住居跡そのものが当初から工房であったとするよりは、のちにその性格を帯びてきたのではないかと思われる。カマドをもたない第2・7号住居跡があるいは専用の工房的なものであった可能性もある。

なお、関連施設として、第1号住居跡において検出されたピット4・5に類似するものについて、「土器を設置する際の工具を設置するためにつくられたもの」（瀬谷子遺跡）、あるいは「ロクロ軸受け」（北上市高前田遺跡）とする考えもあるが、本遺跡では、その性格を推定する知見は得られなかった。

そして出土した土師器の様相が、さらに特徴的であり、本遺跡の性格を暗示しているとみられる。それは、土師器に須恵器技術が強く反映されている点である。器形の点でみると、土師器の伝統からは生じ得ない稜埦や、円面硯（？）という特殊なものがあり、技法的には甕にタタキ技法が多用されている。また、土器組成上、坏は須恵器および土師器で構成されており、このことは、他の一般的な集落と変わりはないが、内容的には伝統的な内黒土師器よりも“新技術„によって焼成された赤焼土器や、集落内で焼成できない須恵器が全体の半数以上も占めているという点に特色がある。これらのことは、この土師器の製作集団が須恵器技術と非常に緊密な関係にあったことを示しており、あるいは須恵器工人そのものであったともみられる。

そういったことからみると、須恵器坏や壺には、焼けがゆみが著るしく、大きな亀裂を生じ

たものや稚拙なつくりものが多く含まれている点も興味深い。

工人であったかどうかは別として、このような須恵器との密接な関係は、この集落が一般的な農業集落とするよりも、むしろ須恵器製作に何らかのつながりをもった。いいかえれば行政機構に直接的に組みこまれた集団によって構成されていたことを示していると考えられる。その意味で、初めに述べたように、色麻群衙等の官衙との関連性が考えられる。しかし、より具体的な点の究明については、単に本遺跡のみではなし得えない部分が多く、今後の周辺遺跡の調査にまつところが大きい。

ところで、現在のところ周辺地域で、本遺跡と同時代と考えられる集落の調査例はほとんどなく、本遺跡において生産された土器、特に赤焼土器がどのような形で消費されたかについては明らかでない。しかし、需給体制が確立している須恵器に対して、集落内で生産、消費されていたと考えられる土師器とともに焼成されていることからみて、やはり、自給のためのものであったと思われる。群をなして焼成施設があるという点からみて、同一集落内、あるいは若干近隣集落にも及んでいたとも考えられるが、その範囲はごく限られたものであったと推定される。

なお、「石背」の墨書のある須恵器稜腕が出土している。「石背」は「磐瀬」に通じるものと考えられる。磐瀬は人名に冠して用いられている例もあるが、地名として用いられている場合が多く、例として磐瀬郡があげられよう。

一方、和名類聚抄によれば、現在の宮城県内にあたる各郡には磐城・白川・安蘇・会津等の福島県以南の郡名をもつ郷名が多く記されている。それらは、奈良時代を中心とする移住によるものと考えられる。そして、本遺跡に近接する賀美郡にも磐瀬郷の記載がある。文献上は、賀美郡磐瀬郷の初見は平安末期といわれる和名類聚抄高山寺本であるが、賀美郡の初見は天平九（730）年であるから、磐瀬郷の存在もより遡るものと考えられる。

ただし、本遺跡部分は一般的には色麻郡域内に含まれると考えられており墨書と賀美郡磐瀬郷との関連性については不明である。なお、磐瀬郷については本遺跡から西方５㎞の小栗山地方に比定する考えがある（色麻町：1979）。

いずれにせよ、一点のみの検出であり、そのもつ性格について十分検討を加えることはできなかった。

表土および地点不明の遺物破片集計表

種別	器形	部位	器面調整	1	5	8	B	D	BF	BH				BL					BM			BN								BP					BQ		BR				BT									CB				CC		CD					CE			CF						CG			CH				CI		CK	CL	CP		X	表採
			外面－内面	住	住	住	18	19	70	16	19	20	28	17	19	20	24	26	19	20	23	16	19	20	24	25	26	28	30	15	16	19	22	26	19	20	20	22	23	28	15	17	19	22	23	24	25	26	30	16	20	23	28	17	25	21	22	23	26	29	21	22	24	16	19	20	21	22	24	17	20	21	18	19	20	21	18	23	22	26	22	26		
土師器	坏	口縁	ロクロ－ロクロ			1														1					4																					1																								1										1	1		1	2
			ロクロ－内黒	1																																																																																
			ミガキ（黒色）－ミガキ（黒色）	1																																																																																
		胴部	ロクロ																																																																																1
			ケズリ－内黒																		1																																																														
			ケズリ																																																											1																					
			回転ケズリ																																																														1																		
		底部	糸切り																																															1																																	
			ケズリ																																															1												1						1					1										
			回転ケズリ																																																																								1					1			
	高台付坏	高台																																																																																	1
	甕	口縁	ロクロ－ロクロ	7	3								1			1	3		1	3			3				6	1	3	2					1		2			1			1	7	2	1	1		3	1	1			2	2	3	1	3			6	3	5						5					1		4	1	5	2	2	2	1	12	27
			ロクロ－内黒			1																																						1																1											1								1			2	1
		胴部	ロクロ－ロクロ																																	1	1												1		1																																
			ロクロ－内黒																					1				1														1	1																											1	2		1			1		1					3
			ロクロ－ナデ	2	2	4				1		2	1	3			1		2	1	3			1	10		4		3	2		5		1					1	1		1		9	1	1		2			2			4	3	3	2	1	4		12	2	7						4		2	2	2	4	1			4	1	2		1	6	43
			ロクロ－ハケメ																			1																																																								1					
			ロクロ－回転ハケメ																																1																																	1															2
			ケズリ－内黒							1																1												1					1						1										2										1		1			2		1	1	1	1			4
			ケズリ－ナデ	24	21	1		2	2		2	1	1	4	1	1	1	3	7	3	4	1	12	2	8	3	20	3	4	2	1	2	1	1		3		3	2	3		1	2	14	2	11			6	1	5	1		5	2	12	3	6	13	5	19	6	11	1	1	3	1			1	8	5	1	2	2	12	2	7	4	3	3		30	101
			ケズリ－ハケメ	3	1												1					1										1													1		1							1		1				3								12						2			1						11
			ケズリ－回転ハケメ	1																							1																																												1												2	
			回転ハケメ－ハケメ																															1																																											1						1
			回転ハケメ－回転ハケメ										2								1																1											1					1		1					2													1									2	2
			回転ハケメ－ナデ	3	1										1		2		1			1						1		1					1				1				2					1		2			2		1	1	1				2	3						1					1			1						1	9
			格子タタキ－ナデ	1																1							2							1												1										1					2								1		1	1							1			1		8
			平行タタキ－回転ハケメ																																								1																																							
			平行タタキ－ナデ	1																											1																												1																									1
			不明	5			1		1				6		4		3	3	3	3	1	15		10		10	4	7			2			1	4		1			2			3		4	4		10				2	9		10	1	10	3	5	32	3	16			2		1	5	2	10				2	20		5		3		3	11	99
		底部	糸切り																															1					1				1																																							3
			ケズリ																																																																								1		1						
			ケズリ－内黒																																																																														1		
			ナデ	3	1												1	1					1			3											1		2	1			1					1												3		2				1		1		1	1		1		2		1		2			3	3
			ナデ－内黒																																																																										1					1	2
			不明－内黒																																																		1																														
			不明		1																		2													1								3					1				2							1																						1	6
	把手																																																																																		1
須恵器	坏	口縁	ロクロ－ロクロ	4						1										1					1		1				1							1		1			1	1											2	1		1	1		3						1				2	1	1		1	1		2					1	2
		胴部	ロクロ－ロクロ																	1						2																								1										1								1														1	4
		底部	糸切り															1																																								1	1			1																				4	1
			ヘラ切り																																			1				1																											1														3
			不持ケズリ	1																																																																																
			不明	1					1															1			1																																		1		1										1											2
	高台付坏	高台	ロクロ－ロクロ																																																																				1												
	甕	口縁	ロクロ－ロクロ														1																																											2																							1
		胴部	ロクロ－ロクロ																																			1																	1					2							1	1															3
			ロクロ－ナデ	1			1																			2			1																					1			2					1																					1				
			ケズリ－ナデ																										2										1														2							1															1								1
			格子タタキ－ナデ																																																																									1							
			平行タタキ－平行タタキ																	1																																																															
			平行タタキ－青海波												1				1																																																										1						2
			平行タタキ－ナデ					1		1																			2																									1							1						1													1			2	1
			波状沈線－ナデ																																				1																																												
		底部	ナデ																																																																																2
	壺	頸部	ロクロ－ロクロ																																																																			1			1										
		胴部	ケズリ－ナデ	5																																																																																
	蓋	口縁	ロクロ－ロクロ	1																															1																											1																						1
		ツマミ																																1																																																	
赤褐色を呈する土器	坏	口縁	ロクロ－ロクロ	1		1													1						1																			1											1					2		1															1						1
		胴部	ロクロ－ロクロ																					1																																																								1			1
		底部	糸切り														1																																																																		1
			ヘラ切り																																															1																																	
			不明	1																							1			1																					1																																	
	高台付坏	高台																																																																															1		1
		底部	糸切り																																																						3																										1
			回転ケズリ																																																						1																										
			不明																																																																																2
	甕	口縁	ロクロ－ロクロ																																																											1																					
		胴部	ロクロ－ナデ																				1																																																													
	蓋	ツマミ																																																										1																							

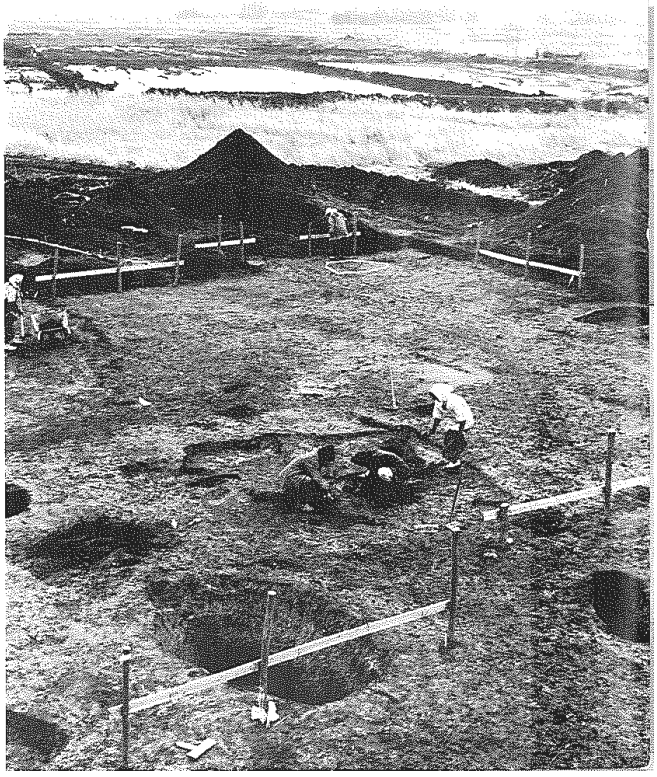
〔引用・参考文献〕

阿部恵（1979）:「色麻古墳群」宮城県文化財調査報告書第58集
阿部義平（1968）:「東国の土師器と須恵器―多賀城外出土土器をめぐって」帝塚山考古学1
阿部博志・千葉宗久（1980）:「台の山遺跡」宮城県文化財調査報告書第65集
氏家和典（1957）:「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14集
大川清（1976）:「下野の古代窯業遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第18集
太田昭夫（1979）:「中平遺跡」宮城県文化財調査報告書第57集
（1980）:「御所内遺跡」宮城県文化財調査報告書第63集
小笠原好彦（1971）:「丹塗土器師器と黒色土師器」考古学研究18巻2・3号
（1976）:「東北地方における平安時代の土器についての二、三の考察」東北考古学の諸問題
岡田茂弘・桑原滋郎（1974）:「多賀城周辺における古代坏形土器の書遷」研究紀要1宮城県多賀城跡調査研究所
小野寺祥一郎（1979）:「五輪C遺跡」宮城県文化財調査報告書第61集
小川淳一（1980）:「青木遺跡」宮城県文化財調査報告書第71集
加藤道男・佐藤好一（1980）:「藤屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第63集
霧ヶ丘遺跡調査団（1973）:「霧ヶ丘」
草間俊一・伊藤鉄夫ほか（1971）:「瀬谷子遺跡」
工藤雅樹・桑原滋郎（1972）:「東北地方における古代土器生産の展開」考古学雑誌57巻3号
熊谷幹男（1980）:「西原遺跡」宮城県文化財調査報告書第61集
桑原滋郎（1969）:「ロクロ土師器坏について」歴史第39集
桑原滋郎（1976）:「須恵系土器について」東北考古学の諸問題
小井川和夫・手塚均（1978）:「糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集
小井川和夫（1980）:「八沢要害遺跡」宮城県文化財調査報告書第72集
小松正夫ほか（1976）:「昭和50年度秋田城跡発掘調査概報」
斉藤吉広・真山悟（1980）:「宮沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第69集
栗原文蔵ほか（1972）:「水深」埼玉県遺跡調査会報告第13集
佐々木安彦（1980）:「葉坂戸の内遺跡」宮城県文化財調査報告書第65集
色麻町（1979）:「色麻町史」
塩野博（1977）:「土器（土師器）製作遺跡について－その主要遺跡概観－」月刊文化財昭和52年8月号
白鳥良一・加藤道男（1974）:「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集
白鳥良一（1972）:「明神脇遺跡」宮城県文化財調査報告書第25集
高橋守克（1980）:「下折木遺跡」宮城県文化財調査報告書第65集
土岐山武（1980）:「石神遺跡」宮城県文化財調査報告書第64集
野崎準ほか（1980）:「仙台市羽黒堂遺跡発掘調査報告」羽黒堂遺跡発掘調査団
早坂春一・阿部恵（1980）:「手取・西手取遺跡」宮城県文化財調査報告書第63集
平沢英二郎・手塚均（1980）:「佐野遺跡」　〃　〃
藤沼邦彦（1971）:「下原田遺跡」宮城県文化財調査報告書第24集
富東隆（1964）:「弥生式「土器窯」址について（予報）」考古学雑誌50巻3号
本堂寿一（1980）:「極楽寺伝座主坊跡緊急発掘調査報告一付、寺院跡出土土器の再整理とその考察―」北上市立博物館研究報告第3号
宮城県教育委員会（1977）:「一の関遺跡」宮城県文化財調査報告書第48集
宮城県多賀城跡調査研究所（1971）:「宮城県多賀城跡調査研究所年報1970」

写　真　図　版

図版1

1．調査状況

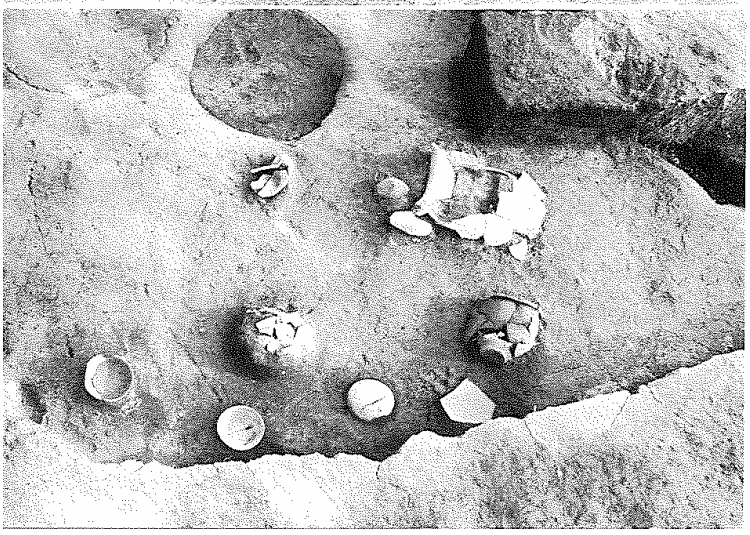


2．同上

図版 2

1．第 1 号住居遺物出土状況

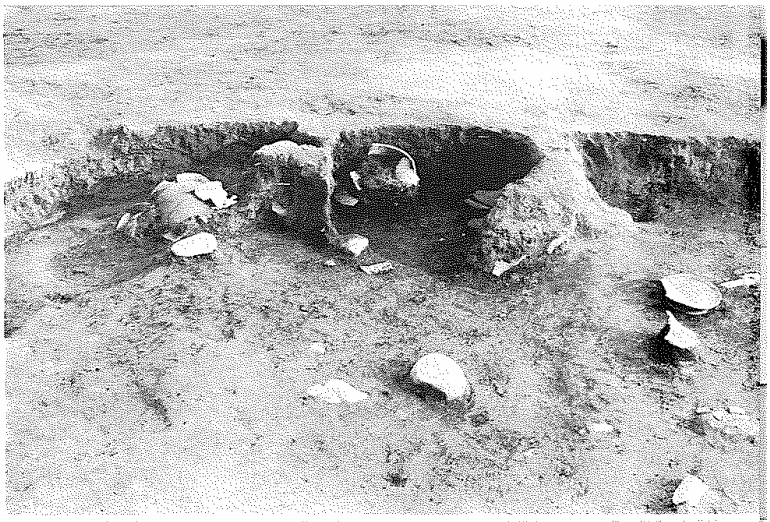
2．同　上



3．同　上

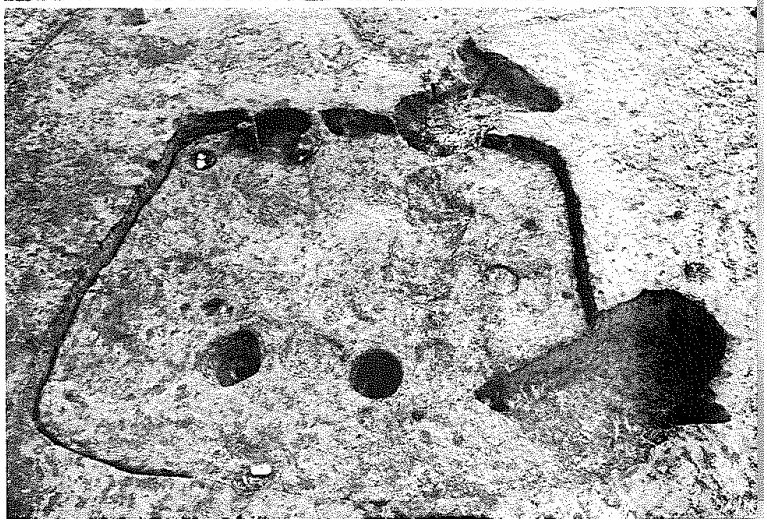
図版 3

1．第 1 号住居跡
遺物出土状況

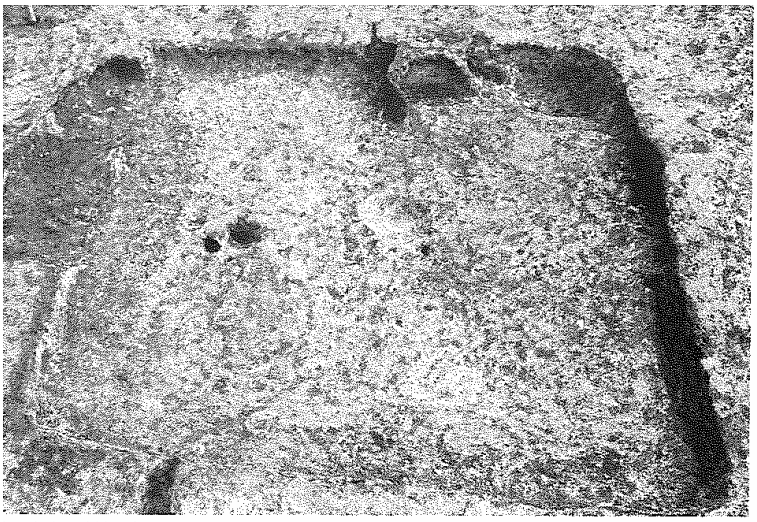


2．同　上
カマド

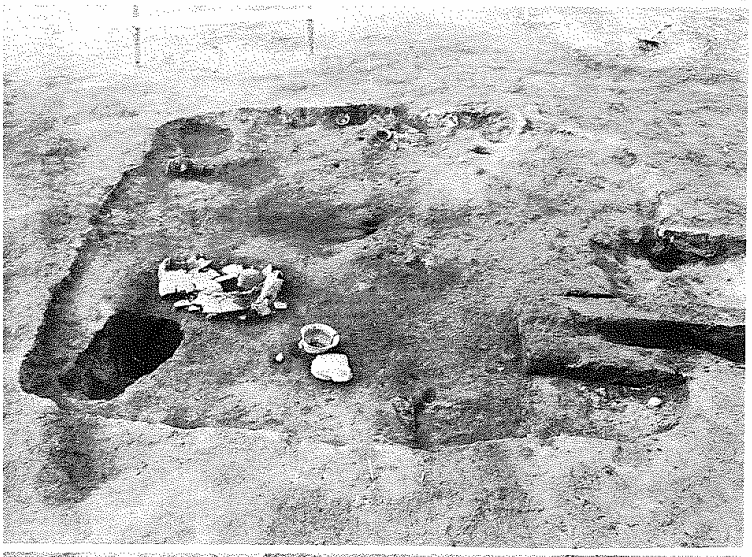
3．第 1 号住居跡



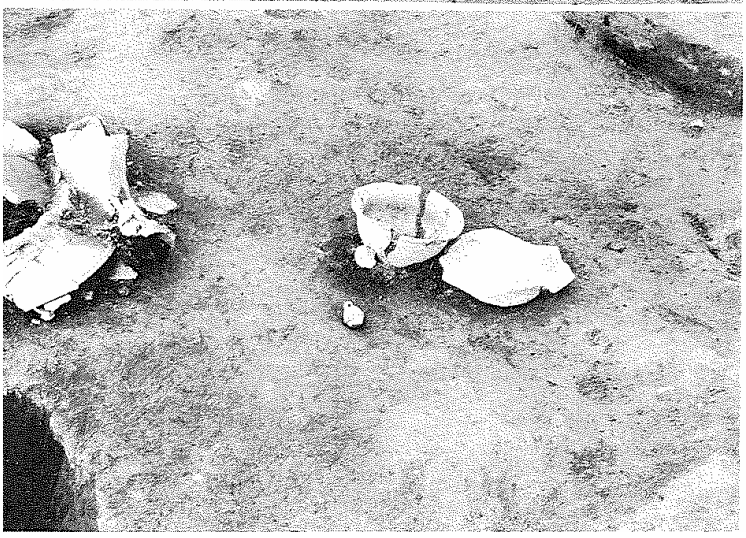
図版 4



1．第 2 号住居跡



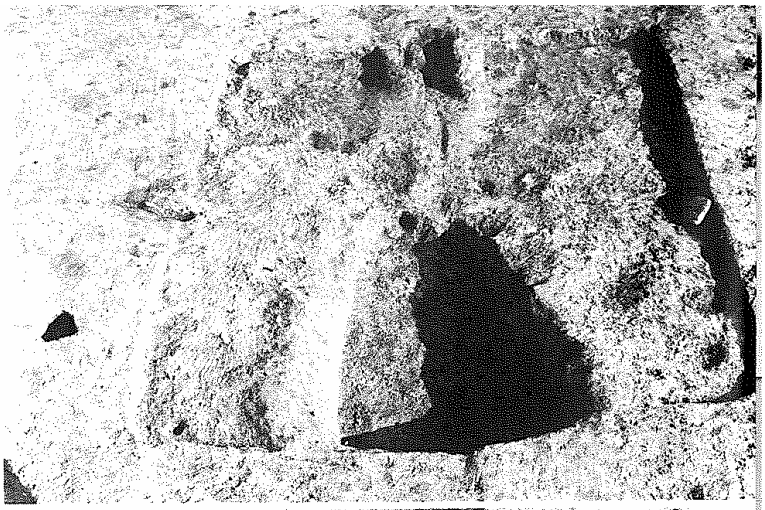
2．第 5 号住居跡



3．同　上
遺物出土状況

図版５

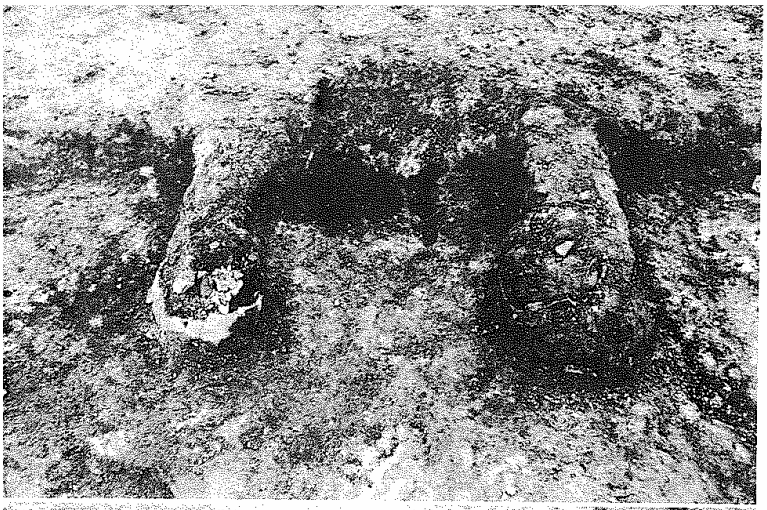
１．第８号住居跡



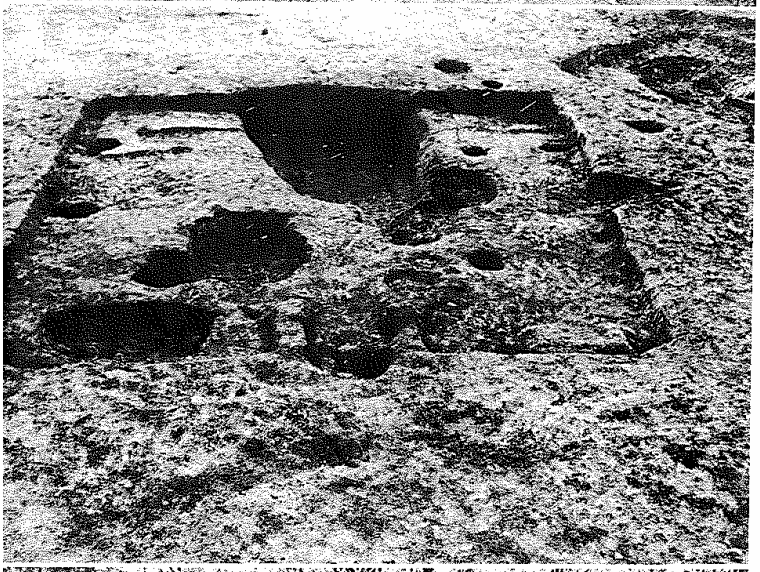
２．同　上
　　壙１堆積土の状況

３．同　上
　　底面の状況
（細片化した土器がある）

図版 6



1．第 8 号住居跡
カマド

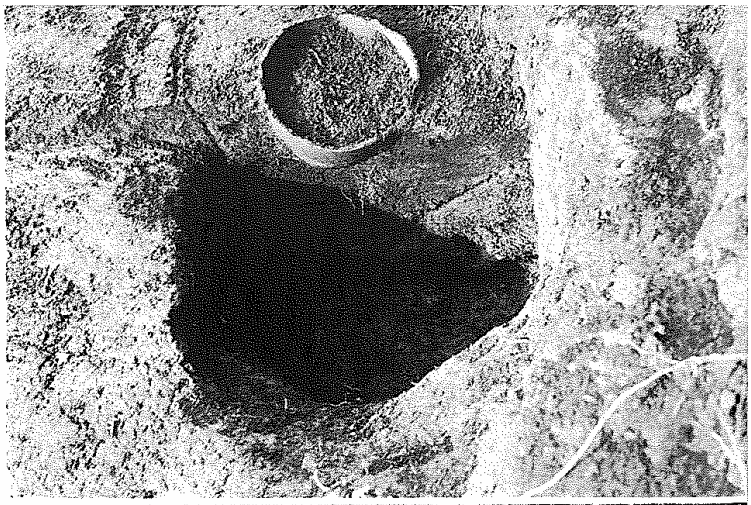


2．同　上
掘り上げ状態

3．第 9 号住居跡

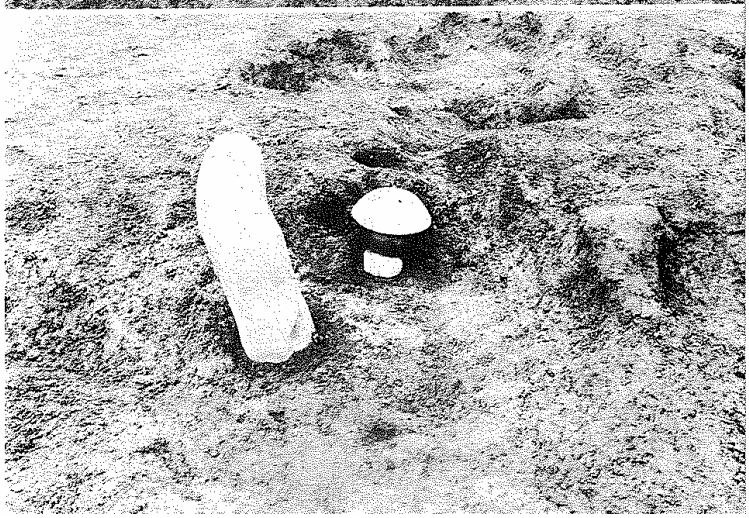
図版７

１．第９号住居跡
　　ピット１



２．第10号住居跡

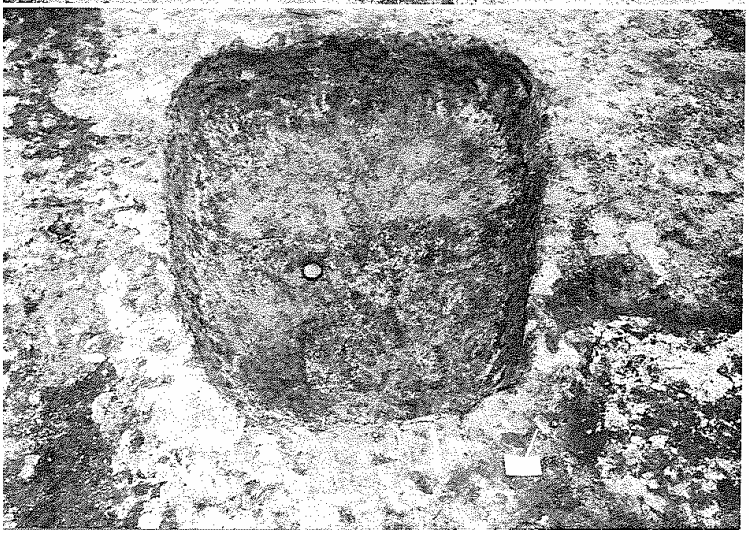
３．同　上　カマド



図版 8

1．土　壙　30

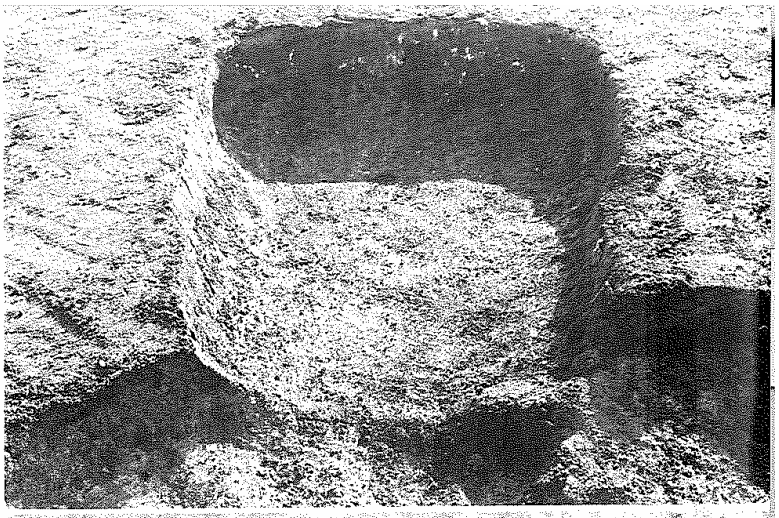
2．土　壙　39



3．土　壙　49

図版 9

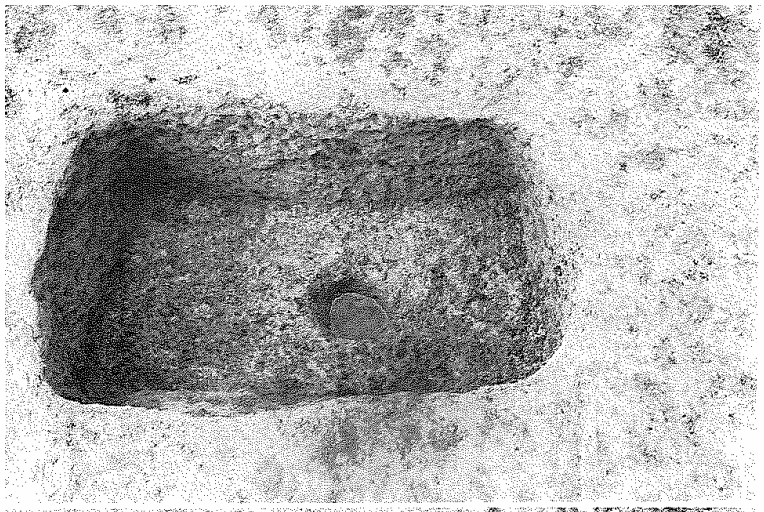
1．土　壙　50



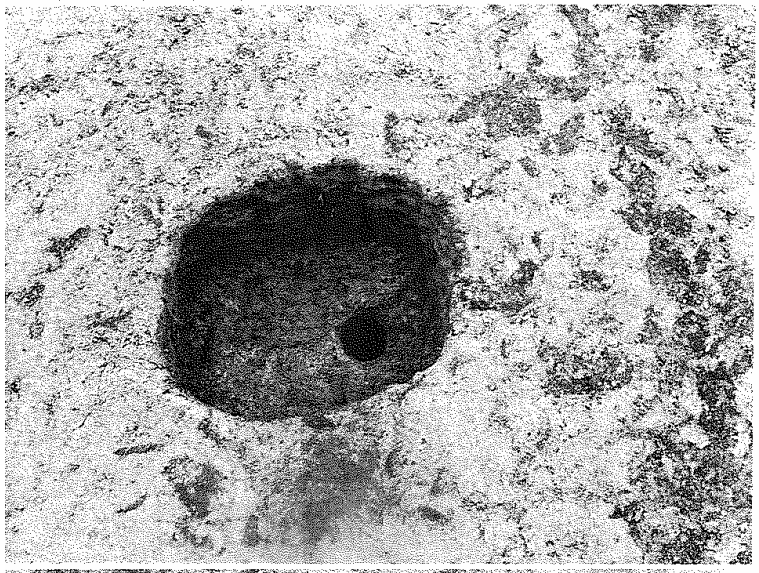
2．土　壙　53

3．土壙 2～5、
7～9

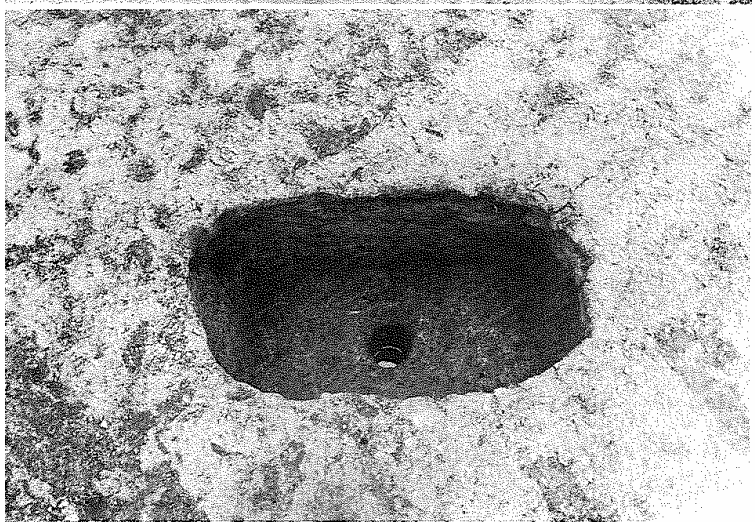
図版10



1．土　壙　14



2．土壙15

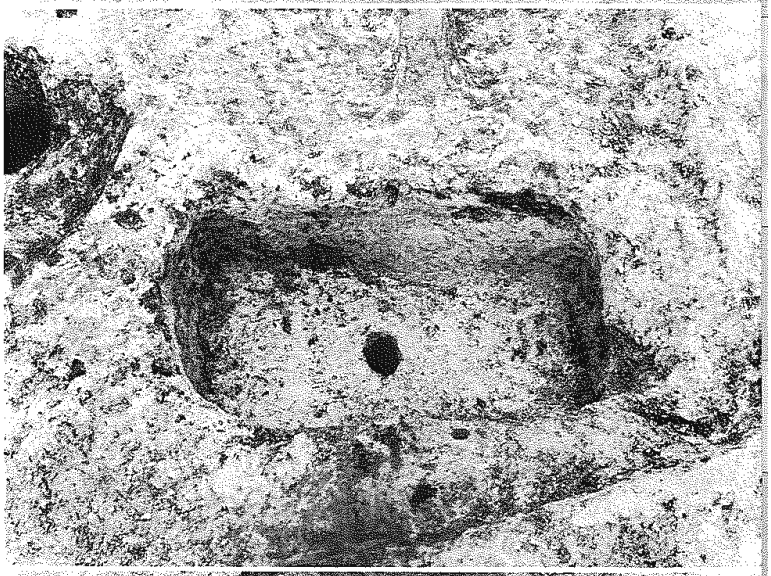


3．土　壙　16

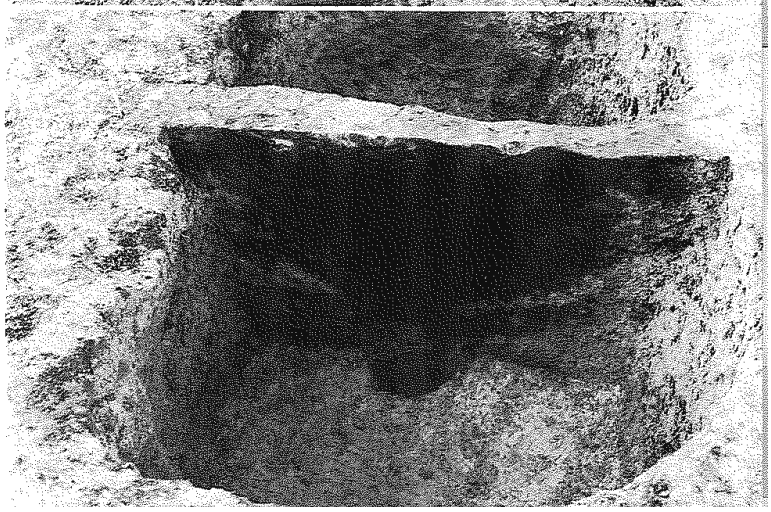
図版11

1．土　壙　41

2．土　壙　57

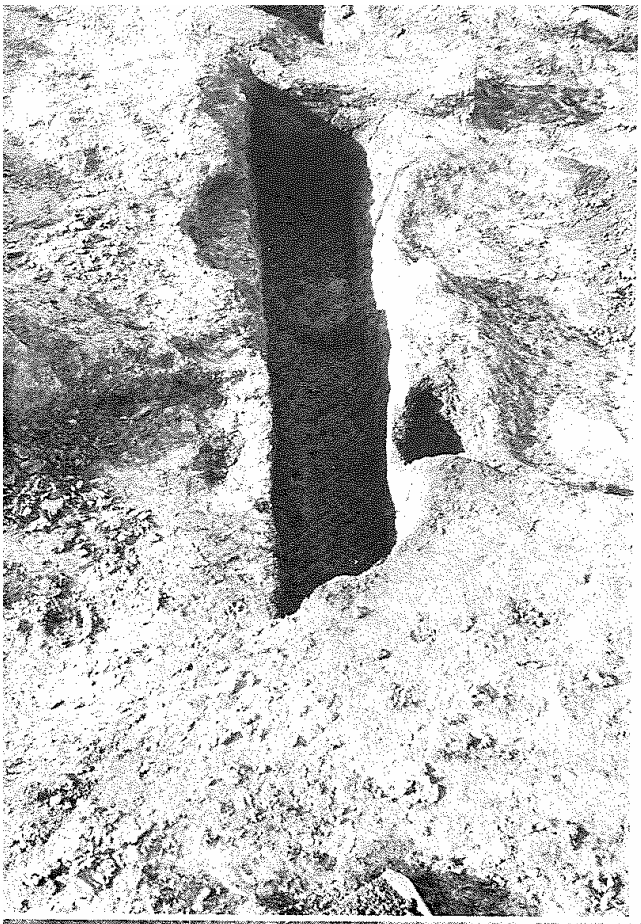


3．同　上
堆積土の状況

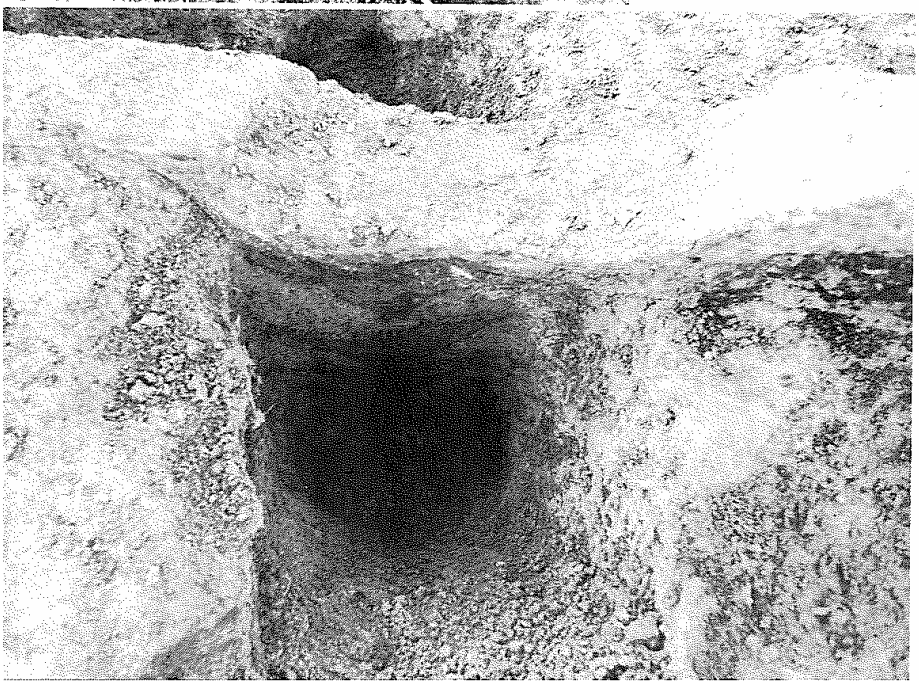


図版12

1．土　壙　62



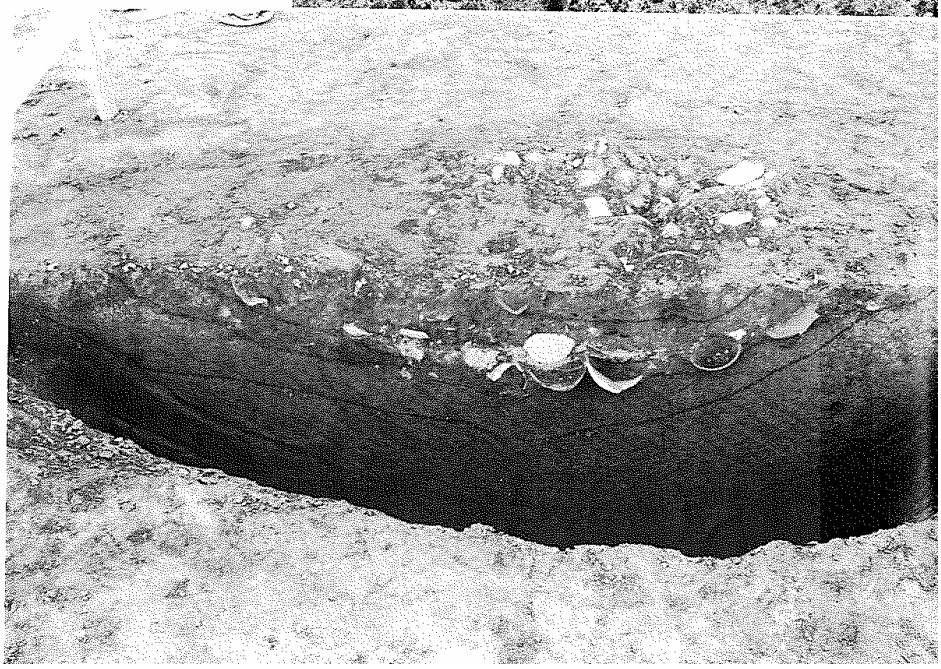
2．同　上
堆積土の状況



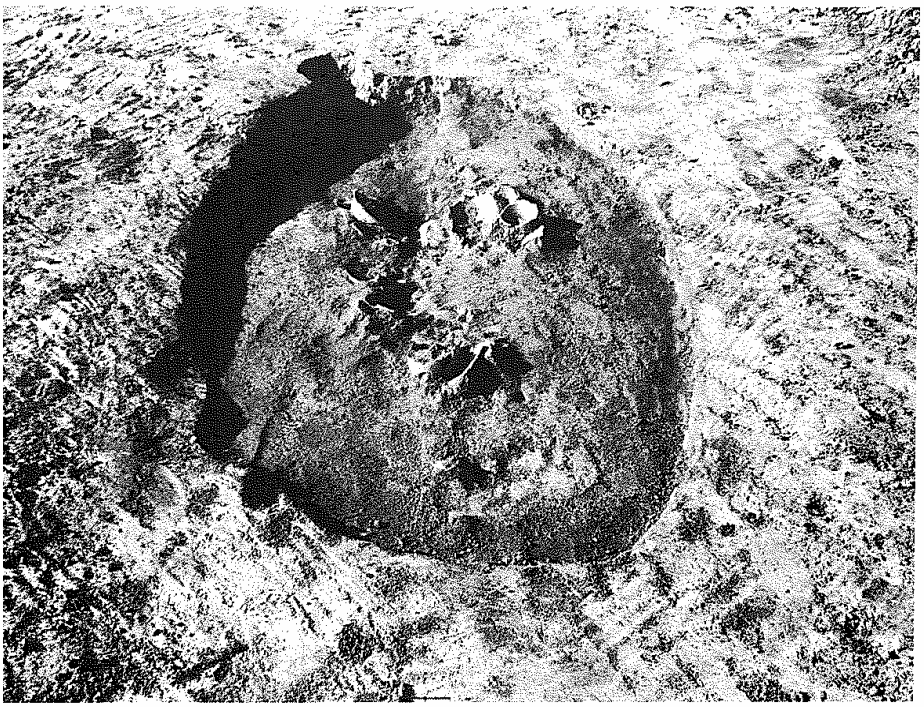
図版13

1．土壙38

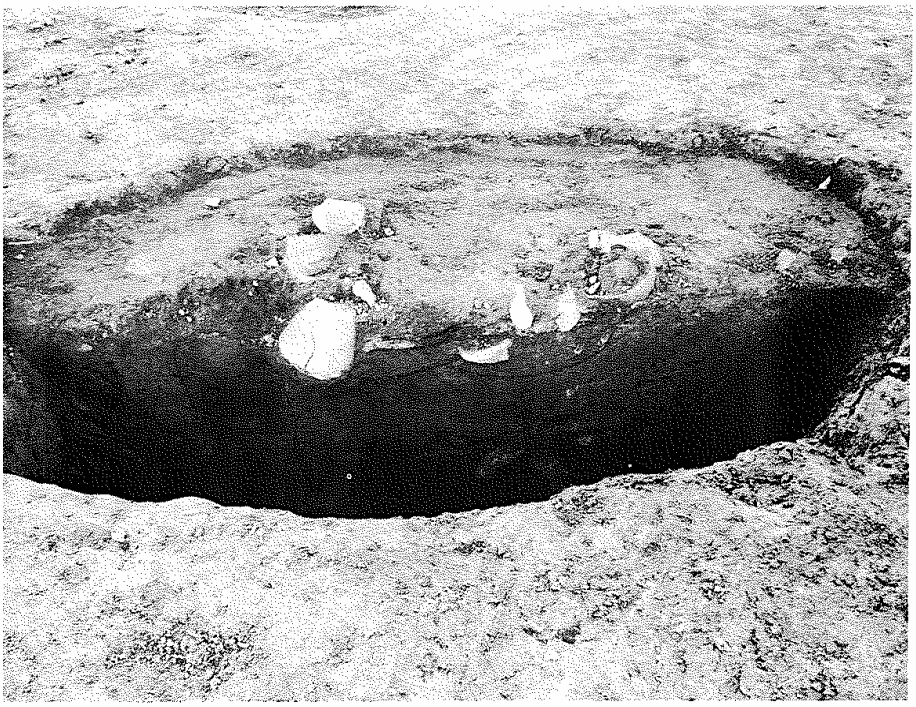
2．同上堆積土の状況



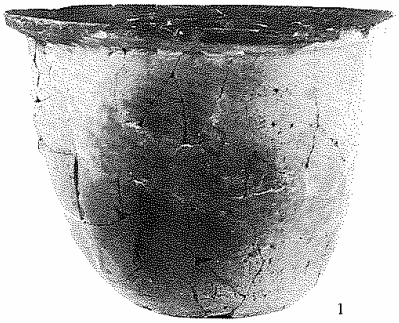
図版14

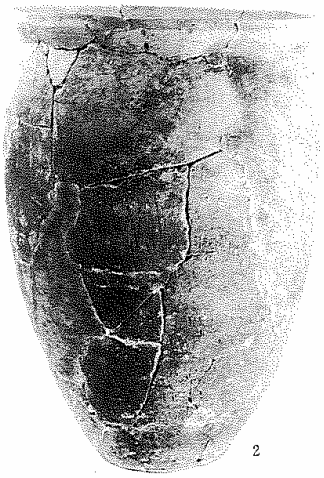


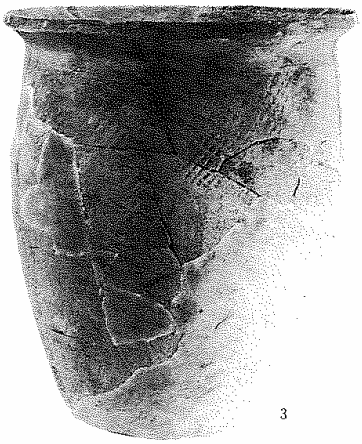
1．土　壙　23



2．同　上
堆積土の状況


1


2

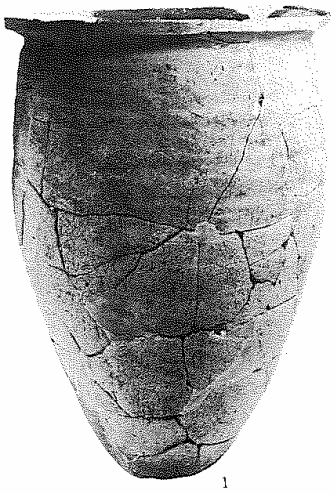

3

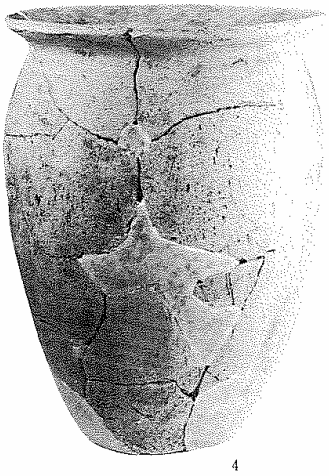
4

5

1．第22図1
2．第17図7
3．第17図1
4．第7図1
5．第6図1

図版16





1．第47図2　　3．第48図1
2．第46図1　　4．第47図1

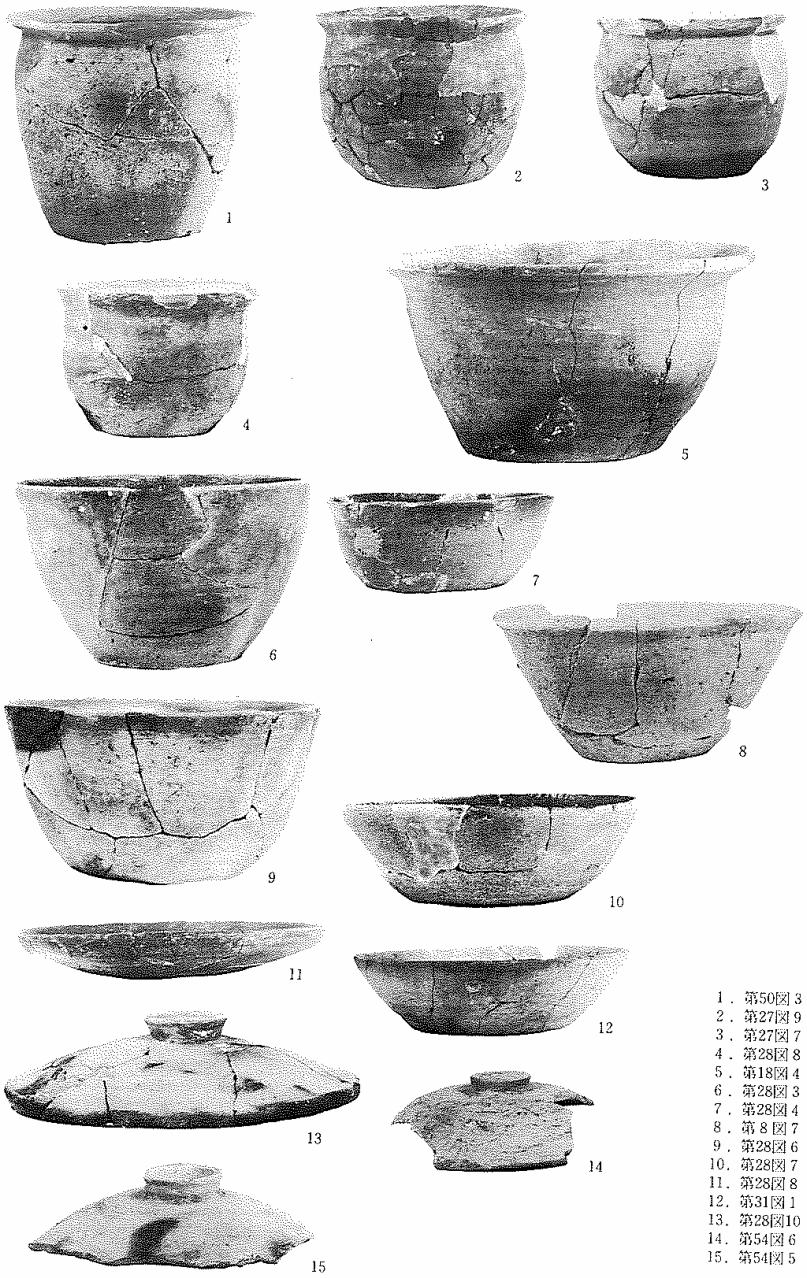
1．第26図1
2．第23図1
3．第46図2
4．第22図3
5．第54図1

図版18

1．第49図1
2．第7図3
3．第7図4
4．第7図5
5．第8図4
6．第8図3
7．第8図1
8．第8図2

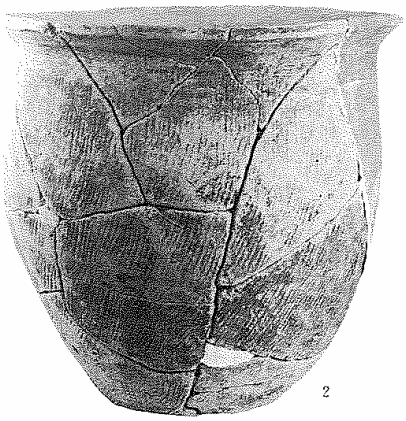
1．第18図3
2．第18図2
3．第18図1
4．第27図4
5．第27図1
6．第27図5
7．第27図2
8．第27図6
9．第50図1

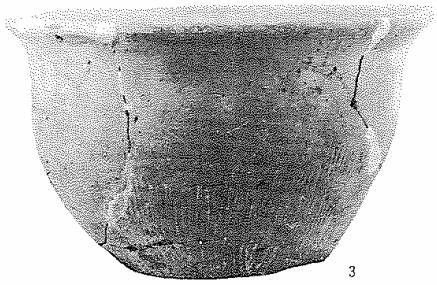
図版20

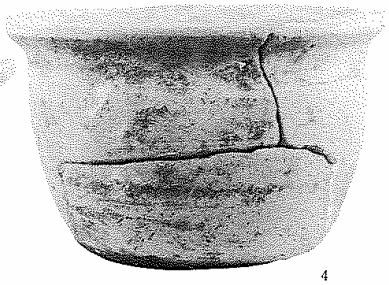


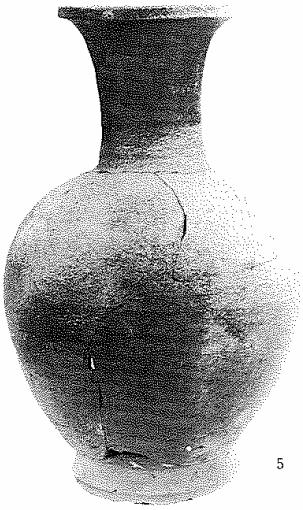
1．第50図3
2．第27図9
3．第27図7
4．第28図8
5．第18図4
6．第28図3
7．第28図4
8．第8図7
9．第28図6
10．第28図7
11．第28図8
12．第31図1
13．第28図10
14．第54図6
15．第54図5

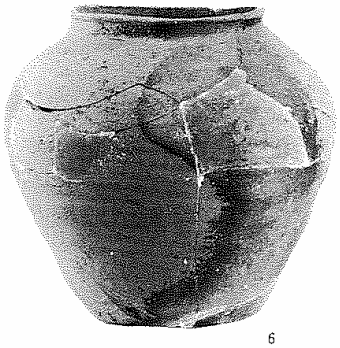
1


2


3

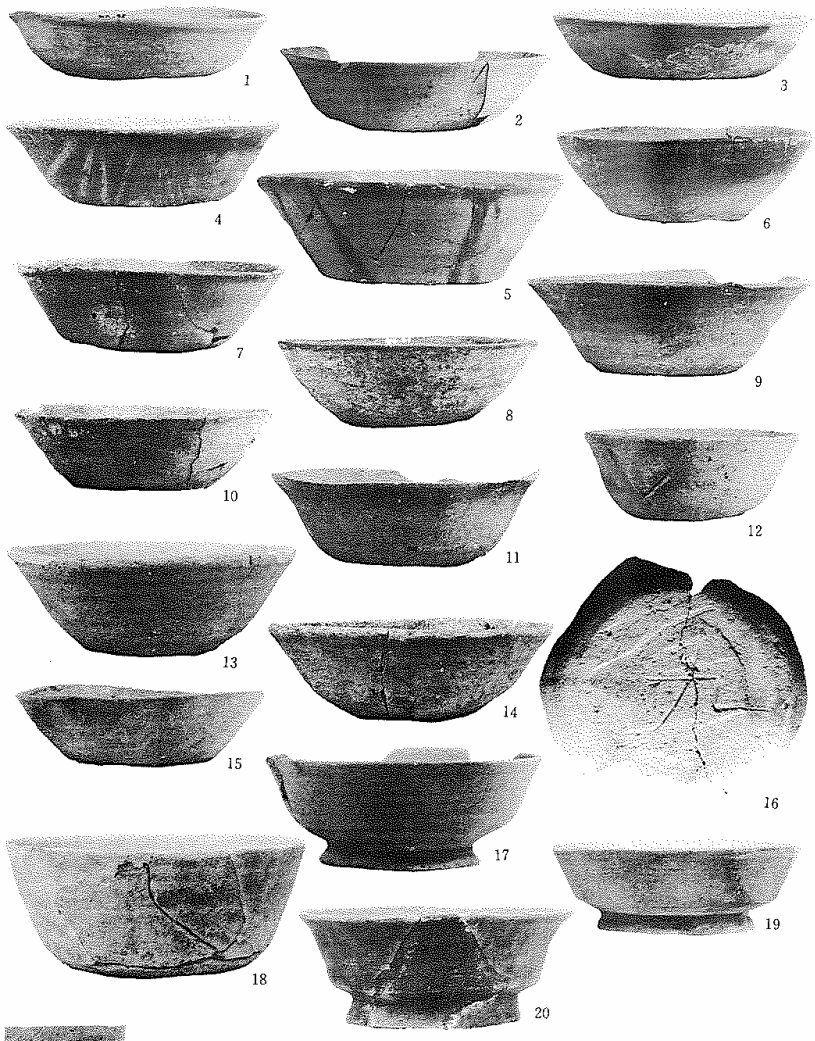

4

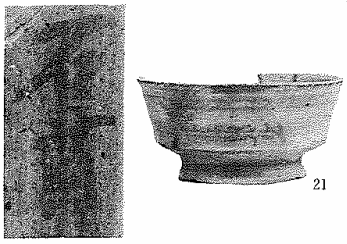

5


6

1．第50図4
2．第51図1
3．第51図2
4．第51図3
5．第51図4
6．第18図6

図版22

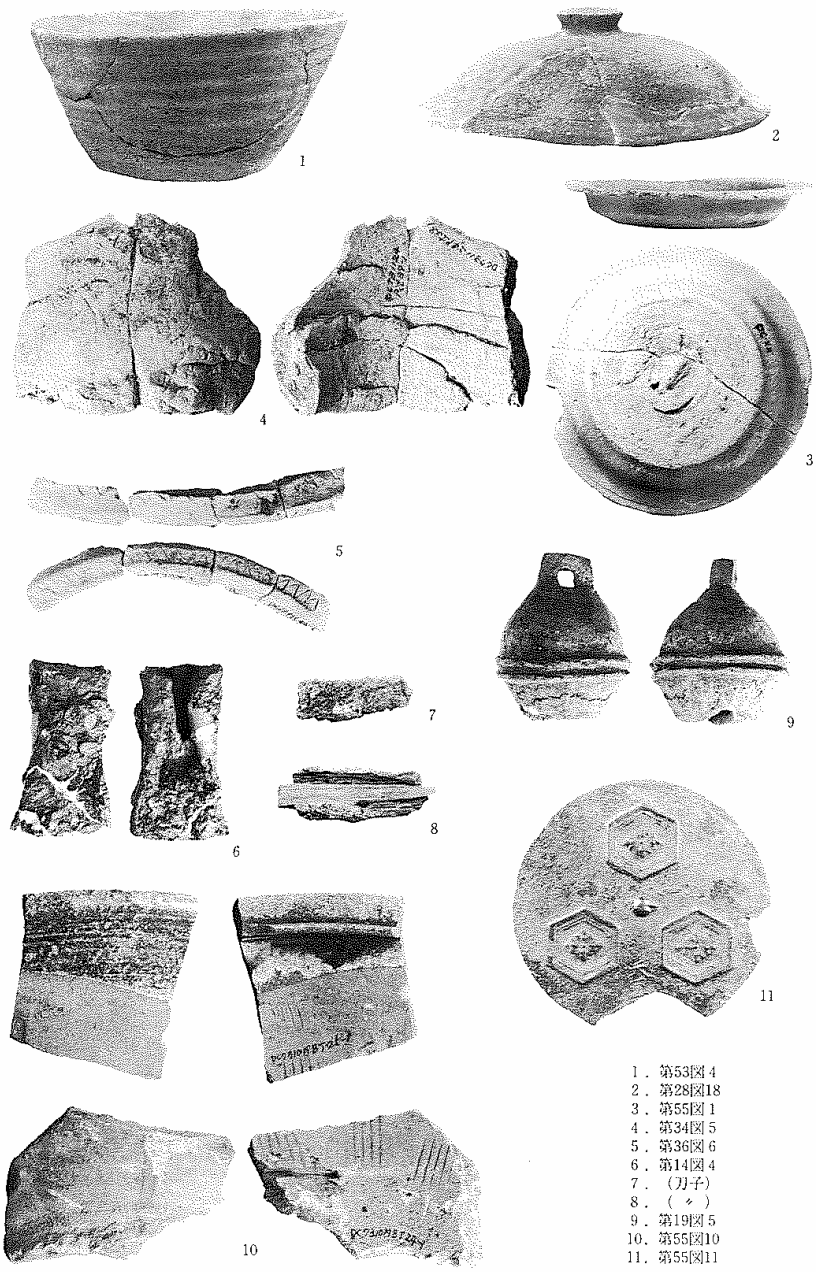




1．第9図5
2．第9図14
3．第12図7
4．第12図5
5．第28図11
6．第28図12
7．第9図3
8．第9図4
9．第9図1
10．第9図5
11．第9図9
12．第9図10
13．第52図2
14．第52図3
15．第52図4
16．第28図13
17．第10図4
18．第52図3
19．第52図14
20．第52図15
21．第30図5

1．第10図5
2．第10図6
3．第10図7
4．第28図15
5．第28図16
6．第52図16
7．第52図17
8．第37図1
9．第29図8
10．第10図10
11．第19図4
12．第28図17
13．第45図6
14．第53図1

図版24



1．第53図4
2．第28図18
3．第55図1
4．第34図5
5．第36図6
6．第14図4
7．（刀子）
8．（〃）
9．第19図5
10．第55図10
11．第55図11

昭和55年度発掘届一覧

（昭和56年2月21日現在）

•宮城県文化財調査報告書第67集（1980）に収録洩れのあった昭和55年2月22日以降のものを含む

（1）文化財保護法第57条の1による届出（調査のための発掘に関する届出）

昭和55年度

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格
100	中央一丁目古墳	多賀城市	57条の1	東北学院大学教授	加藤孝	学術調査	古墳
118	宮古里浜貝塚	鳴瀬町	57条の1	東北歴史資料館	松田文人	学術調査	貝塚

（2）文化財保護法第57条の2，3による届出（土木工事等のための発掘に関する届出）

昭和54年度

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格
204	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	細谷郁雄		宅地造成	集落跡
206	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	佐々木久		宅地造成	集落跡
207	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	歌書春雄		宅地造成	集落跡
208	新田遺跡	多賀城市	57条の2	柳原馳三		宅地造成	集落跡
209	田母神遺跡	仙台市	57条の3	遠藤喜信		用水工事に伴う地質調査	集落跡
210	岩切城跡	仙台市	57条の2	柏葉一郎	宮城県仙南・仙塩広域水道建設事務所	宅地造成	城館跡
211	仙台東郊条里跡	仙台市	57条の2	専徒洋		農作業用倉庫の建築	条理跡
214	保呂羽館跡	登米町	57条の2	山内暁		宅地造成	館跡
215	小島城跡	登米町	57条の2	小松幸一		宅地造成	館跡
216	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	佐伯時男		宅地造成	集落跡
217	安久東遺跡	仙台市	57条の2	西上正好	東北ハイツ㈱	宅地造成	集落跡
218	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	沢田広		宅地造成	集落跡
219	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	飯川俊幸	東光ハウス工業㈱	宅地造成	集落跡
220	市川橋遺跡	多賀城市	57条の2	大江富一郎	加瀬沼土地改良事業共同施行委員会		
221	郡山遺跡	仙台市	57条の2	才津巧			
222	山王遺跡	多賀城市	57条の2	賀川邦雄			
223	小鶴城跡	仙台市	57条の2	木曽田十三男			

昭和55年度

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格
4	田道町遺跡	石巻市	57条の2	和泉守夫		住宅建設	包含地
5	燕沢遺跡	仙台市	57条の2	日野はつね		宅地造成	包含地
8	下原田遺跡	蔵王町	57条の3	宮城県公営企業管理者		送水管理設工事	包含地
9	宮城跡	蔵王町	57条の3	〃		〃	館跡・集落跡
10	寡老内・明神脇遺跡	白石市	57条の3	〃		〃	集落跡
11	市川橋遺跡	多賀城市	57条の2	菊地あさよ		宅地造成	集落跡
13	市川橋遺跡	多賀城市	57条の2	渡辺岩男		住宅建設	集落跡
14	砂押遺跡	仙台市	57条の2	長里憲		〃	包含地
15	押口遺跡	仙台市	57条の2	堀江重勝		〃	包含地
16	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	石川徳郎		〃	集落跡
19	天神社古墳	名取市	57条の2	岩沼土地開発㈱		宅地造成	古墳
20	中新田城跡	中新田町	57条の2	宗教法人長興寺		仏像造立	館跡

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格
23	櫟下遺跡	白石市	57条の3	岩沼土地開発㈱		送水管埋設	包含地
24	平遺跡	丸森町	57条の3	丸森町長		農道改良工事	包含地
25	小鶴城遺跡	仙台市	57条の2	瀧澤修		住宅建設	館跡
26	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	中針寫士		〃	集落跡
27	柳津館山館跡（高森城）	津山町	57条の3	東北地方建設局長		バイパス建設	館跡
28	山田上ノ台遺跡	仙台市	57条の2	木丹野寅之助		住宅建設	集落跡，旧石器時代包含地
29	上野山古墳群	村田町	57条の3	東北地方建設局長		バイパス建設	古墳跡
30	仙台東郊桑里跡	仙台市	57条の2	阿部欽一		住宅建設	桑里跡
31	市川橋遺跡	多賀城市	57条の2	岩渕武		〃	集落跡
32	高石遺跡	仙台市	57条の2	東北ハイム㈱		〃	
35	鶴巻Ⅱ遺跡	仙台市	57条の2	新潟通信機㈱		事務所建設	包含地
36	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	斎藤昭雄		住宅建設	集落跡
38	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	小熊英一		〃	集落跡
39	鍛冶屋敷A遺跡	仙台市	57条の2	富田土地改良事業共同施行委員長		土地区画整理事業	包含地
40	留沼遺跡	古川市	57条の3	日本国有鉄道		バスターミナル建設	集落跡
41	地蔵浦遺跡	仙台市	57条の2	遠藤兵一		倉庫事務所建設	包含地
42	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市	57条の2	浅野弘		住宅建設	包含地
43	鶴巻遺跡	仙台市	57条の2	浅野弘		〃	包含地
46	北屋敷遺跡	仙台市	57条の2	遠藤忠夫		倉庫建設	包含地
47	鶴城跡	田尻町	57条の2	横元千代志		土地改良	館跡
48	新田遺跡	多賀城市	57条の2	遠藤憲治		住宅建設	集落跡
49	新田遺跡	多賀城市	57条の2	佐藤忠吉		〃	集落跡
50	六郎館跡	涌谷町	57条の3	東北地方建設局北上川下流工事事務所		河川改修	館跡
51	安久東遺跡	仙台市	57条の2	矢戸正吉		宅地造成	集落跡
52	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	石田文岐		〃	集落跡
53	朝日古墳群	岩沼市	57条の2	伊藤新之助		都市計画街路建設	古墳群
55	安久東遺跡	仙台市	57条の2	矢戸正吉		住宅建設	集落跡
57	横穴古墳群19号墳	名取市	57条の2	大久長市		〃	古墳群
59	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市	57条の2	浅野和夫		〃	包含地
60	七尾城跡	河北町	57条の3	宮城県知事		交通安全施設設置	館跡
61	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	中島邦子		住宅建設	集落跡
64	御所内遺跡	白石市	57条の3	宮城県公営企業管理者		送水管埋設工事	包含地
67	若宮前遺跡	仙台市	57条の3	宮城県知事		下水管理設工事	包含地
70	善応寺横穴古墳群	仙台市	57条の2	星恵光		住宅建設	古墳群（横穴古墳）
71	中田畑中遺跡	仙台市	57条の3	宮城県警察本部長		駐在所建築工事	包含地
72	下館城跡	南方町	57条の2	鈴木啓志		畑地造成	館跡
73	長者原貝塚	南方町	57条の2	小野寺博子		宅地造成	貝塚
74	内の脇2号貝塚	気仙沼市	57条の3	気仙沼市長		道路の拡幅改良工事	貝塚
75	明屋敷遺跡	仙台市	57条の2	佐々木鉄雄		工場建設	包含地
76	鶴丸館	栗駒町	57条の3	栗駒町長	都市公園整備事業	都市公園整備事業	館跡
78	保呂羽館跡	登米町	57条の2	大苗代伸成	供養碑建設	供養碑建設	館跡
79	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	吉田隆	解体新築	解体新築	集落跡
80	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	狭間正美枝子	住宅建設	住宅建設	集落跡
82	仙台城跡	仙台市	57条の2	宮城県酒造組合会長	記念碑及び沿辺環境整備	記念碑及び沿辺環境整備	館跡

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格
83	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の2	宮城県酒造組合会長		事務所建設	古代城柵官衙跡
84	仙台東郊条里跡	仙台市	57条の2	仙台市農協組合長		宅地造成	条里跡
85	市川橋遺跡	多賀城市	57条の2	畿田真吉		住宅建設	集落跡
86	砂押遺跡	仙台市	57条の2	鈴木茂		〃	包含地
87	市川橋遺跡	多賀城市	57条の2	佐藤昭七		〃	集落跡
88	鶴子坂館跡	石巻市	57条の2	阿部秀雄		畑地造成	館跡
89	七郎館跡	河北町	57条の2	我妻六郎		住宅建設	館跡
91	鶴丸Ⅰ遺跡	仙台市	57条の2	浅理利道		〃	包含地
92	砂押遺跡	仙台市	57条の2	佐藤賢一		〃	包含地
93	佐沼城跡	迫町	57条の3	迫町長		近隣公園整備事業	館跡
94	押口遺跡	仙台市	57条の2	鬼川達男		住宅建設	包含地
95	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	小島達夫		〃	集落跡
96	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の3	仙台市長		下水道埋設工事	古代城柵官衙跡
97	押口遺跡	仙台市	57条の2	鬼川達男		住宅建設	包含地
98	押口遺跡	仙台市	57条の2	小沢誠一郎		〃	包含地
99	山田上ノ台竹の内前船渡前遺跡	仙台市	57条の3	仙台市長		下水埋設工事	集落跡
102	押口遺跡	仙台市	57条の2	岩間新八		住宅建設	包含地
103	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	五十嵐武夫		〃	集落跡
105	長岫遺跡	泉市	57条の2	東部開発㈱		〃	包含地
106	中新田城跡	中新田町	57条の3	宮城県知事		都市計画街路建設	館跡
1,7	福岡館跡	泉市	57条の3	泉市長		上水場建設	館跡
109	押口遺跡	仙台市	57条の2	鈴木功		住宅建設	包含地
110	保呂羽館跡	登米町	57条の2	首藤直一郎		顕彰碑建設	館跡
111	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市	57条の2	浅野喜英		住宅建設	包含地
112	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	佐伯敏		〃	集落跡
113	砂押遺跡	仙台市	57条の2	小野禎一		〃	包含地
114	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	水谷美津子		〃	集落跡
116	高田遺跡	仙台市	57条の2	高橋久道		〃	包含地
117	南小泉遺跡	仙台市	57条の3	仙台市長		都市計画道路建設	集落跡
119	亘理城跡	亘理町	57条の2	山田慶子	〃	ショッピングセンター建設	館跡
120	五輪遺跡	高清水町	57条の3	高清水町長		集会施設並びに広場施設	集落跡
121	裏方遺跡	気仙沼市	57条の2	ミヤシン工業㈱		都市ガス本管敷(発掘)	包含地
123	亘理城跡	亘理町	57条の2	亘理町教育委員会		ショッピングセンター事前調査	館跡
124	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の3	仙台市ガス事業管理者		ガス管埋設工事	古代城柵官衙跡
126	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の2	庄子勇		倉庫建設	古代城柵官衙跡
127	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	沢野陽子		住宅建設	集落跡
128	赤岩館跡	気仙沼市	57条の3	東北地方建設局		国道45号改築に伴う工事	館跡経塚
129	鶴丸館跡	栗駒町	57条の3	栗駒長町		記念碑建立	館跡
130	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	川村邦男		住宅建設	集落跡
131	栗遺跡	中田町	57条の2	関谷武彦		〃	集落跡
132	仙台東郊条里跡	仙台市	57条の2	阿部欽一		〃	条里跡
133	菖蒲沢遺跡	仙台市	57条の2	沼田重之		〃	集落跡
134	七郎館跡	河北町	57条の3	宮城県知事		急傾斜地防止工事	館跡
135	大嶺山遺跡	田尻町	57条の2	千葉幸男		住宅建設	経塚

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格
136	鶴城跡	田尻町	57条の2	安住勝義		住宅建設	館跡
137	沖野城跡	仙台市	57条の2	丹野久作		〃	館跡
138	旭岡遺跡	本吉町	57条の2	東北住宅興業㈱		〃	包含地
139	台町古墳群	丸森町	57条の3	宮城県知事		交通安全施設工事	古墳群
140	市川橋高崎山王遺跡	多賀城市	57条の2	東北電気通信局長		公衆電気通信線路設置	集落跡
142	高森城跡	仙台市	57条の3	建設省国土地理院長		標識建設	館跡
143	燕沢遺跡	仙台市	57条の2	池田敏夫		住宅建設	集落跡
144	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の2	佐々木利夫		〃	古代城柵官衙跡
145	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	ナショナル住宅建材(株)		〃	集落跡
146	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市	57条の2	早坂繁		〃	集落跡
147	燕沢遺跡	仙台市	57条の2	斎藤惇夫		〃	集落跡
148	仙台東郊里跡跡	仙台市	57条の2	片平文次		〃	条里跡
149	高畑遺跡	丸森町	57条の3	大河原農林事務所長		予防治山工事	包含地
150	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市	57条の2	加藤光明		宅地造成	包含地
151	中沢遺跡	川崎町	57条の3	川崎町長		町道改修	集落跡
152	六反田遺跡	仙台市	57条の3	仙台市ガス事業管理者		ガス管埋設	集落跡
153	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	五十嵐武夫		住宅建設	集落跡
154	矢越遺跡	白石市	57条の2	半沢良吾		〃	包含地
155	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の2	赤井沢久治		〃	古代城柵官衙跡
156	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	及川新一郎		〃	集落跡
157	山口遺跡	仙台市	57条の2	庄子吉之助		〃	集落跡
158	六反田遺跡	仙台市	57条の2	湯目新次，信邦		〃	集落跡
159	西台畑遺跡	仙台市	57条の3	仙台市東北電気通信局長		配管埋設工事	集落跡
161	国分寺館跡	仙台市	57条の2	㈱地産		分譲マンション建設	館跡
162	天神館跡	岩出山町	57条の3	宮城県知事		河川改修	館跡
163	安久遺跡	仙台市	57条の2	東北ハイム㈱		宅地造成	集落跡
164	仙台東郊条里跡	仙台市	57条の3	仙台市長		小学校校舎建設	条里跡
165	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の2	㈱井筒工務店		住宅建設	古代城柵官衙跡
166	小鶴城跡	仙台市	57条の2	松浦秀広		〃	館跡
168	八谷館	大和町	57条の3	大和町長		公園整備	館跡
169	土ヵ崎及び朝日古墳群	岩沼市	57条の2	岩沼市武隈土地区画整理組合理事長		土地区画整理事業	古墳群
171	佐沼城	迫町	57条の3	迫町長		近隣公園整理	館跡
172	山王遺跡	多賀城市	57条の2	岩井昭一		住宅建設	集落跡
173	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の2	佐藤登		車庫建築	古代城柵官衙跡
174	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の3	仙台市長		道路・水路の整備	〃
175	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	大和ハウス工業㈱		住宅建設	集落跡
176	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の3	仙台市ガス事業管理者		ガス管埋設工事	古代城柵官衙跡
177	市川橋遺跡	多賀城市	57条の3	多賀城市長		水路整備	集落跡
178	長嶋遺跡	色麻町	57条の3	宮城県知事		道路拡幅改良	包含地
179	鶴巻Ⅰ遺跡	仙台市	57条の2	大畑銘，孝子		住宅建設	包含地
180	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	五十嵐敬太郎		〃	集落跡
181	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	小野老産業㈱	宅地造成	〃	集落跡
182	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	小野老産業㈱	〃	〃	集落跡
183	中沢目貝塚	田尻町	57条の2	小野寺亮夫	住宅建設	〃	包含地

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格
184	仙台市郡山遺跡	仙台市	57条の2	佐々木　功		住宅増築	古代城柵官衙跡
185	安久東遺跡	仙台市	57条の2	岩井克彦		住宅建設	集落跡
186	安久東遺跡	仙台市	57条の2	山下勝司		〃	集落跡
188	観音崎遺跡	白石市	57条の2	渡辺　剛		土地区画整理事業	集落跡
189	北目城跡	仙台市	57条の3	仙台市水道事業管理者		水道管配管	中世城館
191	藤浜貝塚	唐桑町	57条の2	鈴木輝雄		宅地造成	貝塚
193	上野遺跡	仙台市	57条の2	本間則夫		〃	集落跡
195	中新田城	中新田町	57条の3	中新田町長			
196	鬼田遺跡	大和町	57条の3	宮城県知事		林道開設	包含地
197	砂押遺跡	仙台市	57条の2	丹期久作		住宅建設	〃
198	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	小野重夫		〃	〃
199	国分鞭館跡	仙台市	57条の2	松下正治		社屋建設	中世城館？
200	〃	〃	57条の2	森　幸一		住宅建設	〃
201	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	小野重夫		〃	集落跡
202	今泉城跡	仙台市	57条の2	今武工務店		〃	中世城館
203	明屋敷遺跡	仙台市	57条の2	阿部勝敏		〃	包含地
204	上川名貝塚	柴田町	57条の3	柴田町町長		道路改良	貝塚
205	釜西古墳	石巻市	57条の2	斎藤敬一		宅地造成	古墳
206	岩石遺跡	瀬峰町	57条の3	宮城県知事		道路改良	包含地
207	小野横穴古墳群	古川市	57条の2	木村幸男		急傾斜地危険防止対策	横穴古墳
208	郡山遺跡	仙台市	57条の2	菊池重雄		住宅建設	官衙・集落跡
209	南小泉遺跡	仙台市	57条の2	菅井新一		〃	集落跡
210	市川橋遺跡	多賀城市	57条の2	佐藤基		〃	集落跡・官衙館
211	上蟹沢遺跡	白石市	57条の2	山田信一		農路建設	古墳
212	鍛冶沢遺跡	蔵王町	57条の3	蔵王町長		〃	包含地
213	天神上遺跡	〃	57条の3	〃		〃	包含地

（3）文化財保護法第57条の６による届出（遺跡の発見）

昭和54年度

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格
212	石神遺跡	丸森町	57条の6	伊藤輝男	丸森町教育委員会		集落跡
213	卯月沢遺跡	丸森町	57条の6	伊藤輝男	丸森町教育委員会		包含地

昭和55年度

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格
6	石甲遺跡	気仙沼市	57条の6	清原正之			貝・塚
37	坂下遺跡	宮崎町	57条の6	今生卯一	山本善次郎		包含地
58	坂下古墳	村田町	57条の6	村田町教育委員会			古墳群
68	磯岸遺跡	仙台市	57条の6	仙台市教育委員会			包含地
77	無番地古墳	多賀城市	57条の6	多賀城市教育委員会			古墳
192	物見遺跡Ａ・Ｂ	気仙沼市	57条の6	気仙沼市教育委員会	気仙沼市教育委員会		包含地

（4）文化財保護法第98条の２による届出

和和54年度

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格	関連届出
205	中屋敷前遺跡	大河原町	98条の2	小笠原　清一	大河原教育委員会	〃	古代城柵官衙	54年度 204

昭和55年度

整理番号	遺跡名	所在地	届・通知の別	調査主体者	調査担当者	原因	遺跡の性格	関連届出
1	桜小路古墳群	亘理町	98条の2	亘理町教育委員会	志間泰治	宅造に伴う事前調査	古墳群	
2	寄塚古墳	古川市	98条の2	古川市教育委員会	文化財保護課	詳細分布調査	高塚古墳	
3	下原田遺跡	蔵王町	98条の2	宮城県教育委員会	文化財保護課	水道管埋設に伴う事前調査	包含地	55年度 8
7	鴻ノ巣遺跡	仙台市	98条の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	宅地造成	集落跡	
12	神明社窯跡	仙台市	98条の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	宅地造成に伴う事前調査	窯跡	
17	色麻古墳群上郷支群	色麻町	98条の2	宮城県教育委員会	文化財保護課	県営圃場整備事業に伴う事前調査	〃 古墳群	
18	梨野遺跡	仙台市	98条の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	団地造成に伴う事前調査	集落跡	
21	城生柵跡	中新田町	98条の2	中新田町教育委員会	中新田町教育委員会	緊急発掘調査	古代城柵官衙跡	
22	天神社古墳	名取市	98条の2	名取市教育委員会	名取市教育委員会	宅造に伴う事前調査	古墳	55年度 19
33	御殿館跡	宮城町	98条の2	宮城町長	宮城町教委	〃	館跡	
34	上野山遺跡	村田町	98条の2	宮城県教育委員会	文化財保護課	バイパス建設に伴う事前調査	古墳群	55年度 29
44	根岸遺跡	岩出山町	98条の2	宮城県教育委員会	文化財保護課	圃場整備に伴う事前調査	集落跡	
45	館山館跡	津山町	98条の2	宮城県教育委員会	文化財保護課	バイパス建設に伴う事前調査	館跡	55年度 27
54	山田上ノ台遺跡	仙台市	98条の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	宅造に伴う事前調査	集落跡（縄文）包含地（旧石器）	55年度 28
56	朝日古墳群	岩沼市	98条の2	岩沼市教育委員会	岩沼市教育委員会	土地区画整理事業に伴う事前調査	古墳群	55年度169
62	磯窪古墳第19号墳	名取市	98条の2	名取市教育委員会		宅地造成に伴う事前調査	古墳群	55年度 57
63	御所内遺跡	白石市	98条の2	宮城県教育委員会	文化財保護課	送水管埋設に伴う事前調査	包含地	55年度 64
65	坂下古墳群	村田町	98条の2	村田町教育委員会	村田町教育委員会	資材置場造成に伴う事前調査	古墳群	55年度 58
66	谷津川遺跡	白石市	98条の2	白石市教育委員会	白石市教育委員会	区画整理事業に伴う詳細分布調査	集落跡	
69	次橋窯跡	松山町	98条の2	松山町教育委員会	松山町教育委員会	詳細分布調査	窯跡	
81	内の脇２号貝塚	気仙沼市	98条の2	気仙沼市教育委員会	気仙沼市教育委員会	市道拡幅改良工事	貝塚	55年度 74
90	名生館遺跡	古川市	98条の2	宮城県教育委員会	多賀城跡調査研究所	多賀城関連遺跡発掘調査	古代城柵官衙跡	
101	仙台市郡山遺跡	仙台市	98条の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	詳細分布調査	古代城柵官衙跡	
104	赤岩館跡・赤岩経塚	気仙沼市	98条の2	宮城県教育委員会	文化財保護課	バイパス建設	館跡・経塚	55年度128
108	長岫遺跡	泉市	98条の2	泉市教育委員会	泉市教育委員会	宅造に伴う事前調査	包含地	55年度105
115	中新田城跡	中新田町	98条の2	中新田町教育委員会	中新田町教育委員会	都市計画街道建設	館跡	55年度106
122	市川橋遺跡	多賀城市	98条の2	宮城県教育委員会	多賀城跡調査研究所	多賀城関連遺跡調査	古代城柵官衙跡	
125	留沼遺跡	古川市	98条の2	宮城県教育委員会	文化財保護課	バスターミナルに伴う事前調査	集落跡	55年度 40
141	千貫田三・代河原遺跡	丸森町	98条の2	宮城県教育委員会	文化財保護課	県圃場整備事業に伴う事前調査	包含地	
160	上鳥居原遺跡	泉市	98条の2	泉市教育委員会	泉市教育委員会	圃場整備事業に伴う事前調査	集落跡	
167	鶴丸館・跡	栗駒町	98条の2	栗駒町教育委員会	文化財保護課	記念碑建設に伴う事前調査	館跡	
170	土ヶ崎横穴古墳群	岩沼市	98条の2	岩沼市教育委員会	岩沼市教育委員会	土地区画整理事業に伴う事前調査	館跡	55年度169
187	中沢目貝塚	田尻町	98条の2	田尻町教育委員会	文化財保護課	住宅建設に伴う事前調査	包含地	55年度183
190	白石条里制跡推定地	白石市	98条の2	白石市教育委員会	白石市教育委員会	工業団地遺構確認調査	条里跡	
194	藤浜貝塚	唐桑町	98条の2	唐桑町教育委員会	唐桑町教育委員会	造築に伴う事前調査	貝塚	55年度191

宮城県文化財調査報告書一覧

刊行年月日	報告書名
1954 (昭和29年3月)	宮城県文化財調査報告書第1集「仙台東照宮・遠見塚・かめ塚古墳」
1956 (昭和31年3月)	宮城県文化財調査報告書第2集「菜切谷廃寺跡」
1958 (昭和33年3月)	宮城県文化財調査報告書第3集「高蔵寺阿弥陀堂・高蔵寺の仏像」
1958 (昭和33年3月)	「陸奥国分寺跡発掘調査報告書」
1962 (昭和37年3月)	「昭和36年度多賀城発掘調査概報」
1963 (昭和38年3月)	「昭和37年度多賀城発掘調査概報」
1964 (昭和39年3月)	「昭和38年度多賀城跡発掘調査概報」
1965 (昭和40年3月)	宮城県文化財調査報告書第8集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報 (崎山囲洞窟・様塚古墳調査概報・田町裏遺跡・敷味遺跡・合戦原古墳群)」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第9集「宮城県遺跡地名表」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第10集「宮城の民俗(民俗資料緊急調査報告)」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第11集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書(宇ノ崎古墳)」
1967 (昭和42年3月)	宮城県文化財調査報告書第12集「埋蔵文化財発掘調査報告書 (桝形横穴古墳群・鷹の巣古墳群・松崎古墳)」
1967 (昭和42年3月)	宮城県文化財調査報告書第13集「(新産業都市指定地区) 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 (西ノ浜貝塚・三十三間堂)」
1967 (昭和42年12月)	宮城県文化財調査報告書第14集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 陸奥国分寺跡東北部発掘調査報告」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第15集「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第16集「埋蔵文化財第二次緊急発掘調査概報(西ノ浜貝塚)」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第17集「埋蔵文化財緊急調査概報 (東北縦貫自動車道遺跡地名表・同試掘調査略報)」
1968 (昭和43年3月)	「蔵王山麓民俗図誌(釜房ダム水没地区)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第18集「埋蔵文化財緊急調査概報 東北縦貫自動車道遺跡地名表・湯ノ倉館試掘調査概報」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第19集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報(長根貝塚)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第20集「埋蔵文化財第四次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第21集「蔵王山麓の社会と民俗」
1970 (昭和45年3月)	宮城県文化財調査報告書第22集「日の出山窯跡群」
1970 (昭和45年3月)	宮城県文化財調査報告書第23集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 (下原田遺跡・二屋敷遺跡・持長地遺跡)」
1971 (昭和46年3月)	宮城県文化財調査報告書第24集 「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(刈田郡蔵王町地区)」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第25集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 (白石市:柴田郡村田町地区)」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第26集「宮城県指定天然記念物球状斑れい岩調査報告」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第27集「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書 (地名表・試掘調査概報〈白石・高清水地区〉」

１９７３ （昭和48年３月）	宮城県文化財報告書第28集「宮城県遺跡地名表」
１９７３ （昭和48年３月）	宮城県文化財調査報告書第29集「菅生田遺跡調査概報」
１９７３ （昭和48年３月）	宮城県文化財調査報告書第30集「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報」
１９７３ （昭和48年３月）	宮城県文化財調査報告書第31集「東北自動車道関係遺跡発掘調査略報 （白石市・仙台市～大和町地区）」
１９７３ （昭和48年３月）	宮城県文化財調査報告書第32集「山畑装飾横穴古墳群発掘調査概報」
１９７３ （昭和48年３月）	宮城県文化財調査報告書第33集「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」
１９７４ （昭和49年３月）	宮城県文化財調査報告書第34集「山中七ヶ宿の民俗」
１９７４ （昭和49年３月）	宮城県文化財調査報告書第35集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ（荒屋敷横穴古墳群・山下横穴古墳群・北沢遺跡・西野田遺跡・岩切鴻ノ巣遺跡・中ノ茎Ａ遺跡）」
１９７４ （昭和49年３月）	「宮城県の古民家」（宮城県民家緊急調査報告書）
	第37集　欠　番
１９７５ （昭和50年３月）	宮城県文化財調査報告書第38集「宮前遺跡」
１９７５ （昭和50年３月）	宮城県文化財調査報告書第39集「土平遺跡発掘調査概報」
１９７５ （昭和50年３月）	宮城県文化財調査報告書第40集「宮城県文化財発掘調査略報（昭和48・49年度分）」
１９７５ （昭和50年３月）	宮城県文化財調査報告書第41集「天然記念物ヨコグラノキ北限地帯調査報告書」
１９７６ （昭和51年３月）	宮城県文化財調査報告書第42集「宮城県文化財発掘調査略報（昭和50年度分）」
１９７６ （昭和51年３月）	宮城県文化財調査報告書第43集「貞山堀運河」
１９７６ （昭和51年３月）	宮城県文化財調査報告書第44集「砂山横穴古墳群調査報告書」
１９７６ （昭和51年３月）	宮城県文化財調査報告書第45集「特別名勝松島（保存管理計画策定書）」
１９７６ （昭和51年10月）	宮城県文化財調査報告書第46集「宮城県遺跡地名表」
１９７６ （昭和51年10月）	宮城県文化財調査報告書第47集「宮城県遺跡地図」
１９７７ （昭和52年３月）	宮城県文化財調査報告書第48集「宮城県文化財発掘調査略報（昭和51年度分）」
１９７７ （昭和52年３月）	宮城県文化財調査報告書第49集「清太原西遺跡・船渡前遺跡」
１９７７ （昭和52年３月）	宮城県文化財調査報告書第50集「清水側遺跡」
１９７７ （昭和52年10月）	宮城県文化財調査報告書第51集「宮城県民俗分布図」緊急民俗資料分布調査報告書
１９７８ （昭和53年３月）	宮城県文化財調査報告書第52集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅰ（上深沢遺跡）」
１９７８ （昭和53年３月）	宮城県文化財調査報告書第53集「宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）」
１９７８ （昭和53年３月）	宮城県文化財調査報告書第54集「湯ノ坪遺跡」
１９７８ （昭和53年３月）	宮城県文化財調査報告書第55集「歴史の道調査結果略報」
１９７８ （昭和53年３月）	宮城県文化財調査報告書第56集「北沢遺跡」

1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第57集「宮城県文化財発掘調査略報（昭和53年度分）」
1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第58集「ほ場整備関連遺跡詳細分布調査報告書」
1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第59集「宇南遺跡」
1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第60集「歴史の道調査結果略報」
1979 (昭和54年8月)	宮城県文化財調査報告書第61集「五輪C遺跡」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第62集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第63集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅱ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第64集「ほ場整備関連遺跡詳細分布調査報告書」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第65集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第66集「歴史の道調査報告書」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第67集「金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎一号墳他」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第68集「玉造遺跡」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第69集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅲ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第70集「金取遺跡」
1980 (昭和55年9月)	宮城県文化財調査報告書第71集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅳ」
1980 (昭和55年9月)	宮城県文化財調査報告書第72集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第73集「宮城県遺跡地名表」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第74集「宮城県遺跡地図」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第75集「宮城県営ほ場整備関連遺跡調査報告書」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第76集「東北地建バイパス関連遺跡調査報告書」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第77集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第78集「長者原貝塚・上新田遺跡」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第79集「仙南仙塩広域水道関係遺跡調査報告書」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第80集「歴史の道調査報告書」
未　刊	宮城県文化財調査報告書第81集「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」
1981 (昭和56年3月)	宮城県文化財調査報告書第82集「宮城県の民俗芸能」